

オリ主が再びIS世界でいろいろ  
と頑張る話だけど・・・「本編完結」

どこかのシャルロット党

沢山の人達に助けられ大切な者を失いながらも

純粹種としての覚醒を果たし、愛する者達や

守る力も手に入れた綾崎翔真。翔真は一夏達と

共に元の世界へと4年の月日を得て帰還する。だが

IS世界ではあの戦いから2年が経過していた。

再び戦火に包まれようとする中で二人の少年と

怒れる瞳の少女は何を思い戦うのか？

オリ主がIS世界でいろいろと頑張る話だけど・・・

第二期！始まります！

タグ追加

多重クロス（キャラのみ）

蒼穹のファフナー（機体能力のみ）

Gレコ、鉄血のオルフェンズ（機体のみ）

ガンダムキャラ

魔法少女リリカルなのは Vivid

Gジェネレーションオーバーワールド



# 目次

プロローグ 1	1
プロローグ 2 「運命の扉」	10
プロローグ 3 「集う仲間、そして・・・」	17
機体解説	30
PHASE 00 「真剣で私達のチョコを食べなさい！」	38
PHASE 00・1 「問題児達がお返しを作るそうですよ？」	47
第一章 怒れる瞳の少女	59
PHASE 01 「怒れる瞳の少女」	59
PHASE 02 「戦いを呼ぶもの」	71
PHASE 03 「アームローワン崩壊」	78
PHASE 04 「EXODUS―長い旅の始まり―」	85

PHASE 05	「ファーストコンタクト」	92
PHASE 06	「妖気と微笑み」	100
PHASE 07	「蒼き騎士」	108
PHASE 08	「激突」	117
PHASE 09	「やはり翔真のスケベは直らない、あとファースト ミッション」	126
PHASE 10	「アンツィオとガンダム降臨」	134
PHASE 11	「プレシアの思惑と動く影」	144
PHASE 12	「再び舞い降りる剣」	154
PHASE 13	「断ち切れないトラウマ」	165
第二章 ソレスタルビーイング		
PHASE 14	「イギリス奪還作戦」	175
PHASE 15	「憎しみの輪舞曲」	187

PHASE 16	「合流と三人の激突」	196
PHASE 17	「Still Siss」	203
PHASE 18	「嵐の予感」	210
PHASE 19	「赤龍帝ドライブと篠ノ之箒。動き出すダブルオーとユニコーン」	216
PHASE 20	「Gspirits隊が見た流星」	225
PHASE 21	「勇気の滑空」	233
PHASE 22	「宣戦布告と覚醒する少女」	239
PHASE 23	「紅の乙女」	249
PHASE 24	「二人の少年と翔真達の休日」	256
PHASE 25	「デート・ア・ブレイク」	264
PHASE 26	「ローエンングリゲート」	272
PHASE 27	「攻略開始」	279

PHASE 28	「揺れる旋律の大地」	286
PHASE 29	「ロウと翔真とマルス」	295
PHASE 30	「シュミレーションとソーナ・シトリー」	302
PHASE 31	「ノーヴェとアインハルトとの出会いとソーナの宣言」	315
PHASE 32	「翔真からの依頼と飛び立つ翼」	325
PHASE 33	「戸惑いと新たな仲間」	331

### 第三章 自由と衝撃の輪舞

PHASE 34	「始まる戦い」	339
PHASE 35	「降臨する者」	346
PHASE 36	「自由対衝撃」	354
PHASE 37	「漆黒とバルバトス」	363
PHASE 38	「戦乱と散りゆく牙」	371
PHASE 39	「蘇るもう1つのゼロ」	380

PHASE・40 「敵となるなら」……………

PHASE・41 「始まりが故に」……………

PHASE・42 「マルス・レディーレ」……………

PHASE・43 「葛藤するクリス」……………

PHASE・44 「再会する白と紅」……………

PHASE・44・5 「天使湯での秘め事」……………

#### 第四章 すれ違う者達

PHASE・45 「虚無の申し子バンシィノルン 前編」……………

PHASE・46 「虚無の申し子バンシィノルン 中編」……………

PHASE・46・5 「箒とつかさの出会い」(2017.7/21 修正)……………

PHASE・47 「虚無の申し子バンシィノルン 後編」……………

PHASE・48 「束にとっての翔真とは」……………

PHASE・49 「新たなガンダム」……………

PHASE 50	「リンネの怒りとツバサの悲劇」	478
PHASE 51	「正義と自由とグシオン・リベイク」	486
PHASE 52	「深紅の輝き」	494
PHASE 53	「大切な物ありますか？」	501
PHASE 54	「思春期を殺した少年少女達の翼」	508
PHASE 55	「復活のバルバトス」	515
PHASE 56	「嘆き」	523
PHASE 57	「救世主が落ちる時」	530
PHASE 58	「美男（イケメン）トリオの天使湯」	538
PHASE 59	「らぶりいガール」	543
PHASE 60	「開かれた運命の扉」	549
PHASE 61	「反乱の業火」	557
PHASE 62	「忍び寄る刺客と巨大な力」（2017.7～28修正済）	564

PHASE 63	「燃えるベルリン」	570
PHASE 64	「記憶と衝撃とトランザムバースト」	577
PHASE 65	「深海の孤独」	584
PHASE 66	「決意するシャルロット」	591
PHASE 67	「悲しみと翔真母」	597
PHASE 68	「それぞれの想い」	605
PHASE 69	「自由と衝撃、再び」	612
PHASE 70	「蒼き天使の墜落」	618
PHASE 71	「箒と千冬、運命と伝説」	625
第五章 迷える運命と切り開く変革		
PHASE 72	「歌姫の移転と迷い混んだ二人」	633
PHASE 73	「不安と孤独」	640
PHASE 74	「操られた騎士は本当の意味を知る」	647

PHASE 75	「雷鳴の闇前編」	655
PHASE 76	「雷鳴の闇後編」	662
PHASE 77	「交差する三人」	670
PHASE 78	「ソーナとマルスと一夏の修羅場」	678
PHASE 79	「和解」	690
PHASE 80	「00 RAISER」(2017 7/28 修正済)	696
PHASE 81	「strike」(2017 7/28 修正済)	703
PHASE 82	「これが！俺達のガンダムだ！」(2017 7/28 修正済)	714
PHASE 83	「修羅場の果てに」	721
PHASE 84	「深紅の笑い」	728
PHASE 85	「ヘブンズベース」	735
PHASE 86	「亡霊のMS」	743

PHASE 87	「翔真ガールズ対名瀬ガールズⅠ」	749
PHASE 88	「翔真ガールズ対名瀬ガールズⅡ」	759
第六章 黒き復讐者と蘇る赤き正義		
PHASE 89	「違和感と赤き少年」	765
PHASE 90	「悲劇の悪魔Ⅰ」	771
PHASE 91	「悲劇の悪魔Ⅱ」	777
PHASE 92	「悲劇の悪魔Ⅲ」	781
PHASE 93	「悲劇の悪魔Ⅳ」	785
PHASE 94	「蘇る悪魔の騎士」	790
PHASE 95	「交差する者達Ⅰ」	798
PHASE 96	「交差する者達Ⅱ」	806
PHASE 97	「交差する者達Ⅲ」	811
PHASE 98	「交差する者達Ⅳ」	818

第七章 3機のZ\世界を変えたシステム

PHASE 99	「切り札」	.....	827
PHASE 100	「シナンジュ・スタイン 1」	.....	832
PHASE 101	「シナンジュ・スタイン 2」	.....	837
PHASE 102	「和解と3機のゼータ 1」	.....	842
PHASE 103	「和解と3機のゼータ 2」	.....	848
PHASE 104	「和解と3機のゼータ 3」	.....	855
PHASE 105	「和解と3機のゼータ 4」	.....	861
PHASE 106	「和解と3機のゼータ 5」	.....	866
PHASE 107	「対等」	.....	871
PHASE 108	「イギリス防衛戦 1」	.....	876
PHASE 109	「イギリス防衛戦 2」	.....	883
PHASE 110	「イギリス防衛戦 3」	.....	889

P H A S E 1 1 1	「イギリス防衛戦 4」	.....	894
P H A S E 1 1 2	「イギリス防衛戦 5」	.....	899
P H A S E 1 1 3	「イギリス防衛戦 6」	.....	904
P H A S E 1 1 4	「イギリス防衛戦 7」	.....	911
P H A S E 1 1 5	「イギリス防衛戦 8」	.....	916
P H A S E 1 1 6	「イギリス防衛戦 9」	.....	922
P H A S E 1 1 7	「イギリス防衛戦 10」	.....	928
P H A S E 1 1 8	「戦後の希望」	.....	935
最終章 君は僕に似ている——future Destiny——			
P H A S E 1 1 9	「プレシア・テスタロッサ」	.....	941
P H A S E 1 2 0	「ダークハウンド対エクシエス前編」	.....	948
P H A S E 1 2 1	「ダークハウンド対エクシエス後編」	.....	953
P H A S E 1 2 2	「セブンスードとガイア」	.....	959

P H A S E 1 2 3	「緊急脱出」	.....	965
P H A S E 1 2 4	「女神」ダカール演説 1	.....	971
P H A S E 1 2 5	「女神」ダカール演説 2	.....	976
P H A S E 1 2 6	「伝説」ダカール演説 3	.....	981
P H A S E 1 2 7	「伝説」ダカール演説 4	.....	987
P H A S E 1 2 8	「最後のステージ」	.....	993
P H A S E 1 2 9	「願いと戸惑い」	.....	999
P H A S E 1 3 0	「戦いの代償」	.....	1005
P H A S E 1 3 1	「開く扉」	.....	1010
P H A S E 1 3 2	「正義と運命 1」	.....	1018
P H A S E 1 3 3	「正義と運命 2」	.....	1024
P H A S E 1 3 4	「正義と運命 3」	.....	1031

PHASE 1 3 5	「正義と運命 4」	.....	1038
PHASE 1 3 6	「妹よ」	.....	1043
PHASE 1 3 7	「ハシユマルの目覚め」	.....	1050
PHASE 1 3 8	「集結、ガンダム・フレーム」	.....	1058
PHASE 1 3 9	「最終決戦 1」	.....	1064
PHASE 1 4 0	「最終決戦 2」	.....	1070
PHASE 1 4 1	「最終決戦 3」	.....	1076
PHASE 1 4 2	「最終決戦 4」	.....	1081
PHASE 1 4 3	「最終決戦 5」	.....	1090
PHASE 1 4 4	「最終決戦 6」	.....	1095
PHASE 1 4 5	「最終決戦 7」	.....	1103
PHASE 1 4 6	「名も無き歌」	.....	1109

PHASE 147	「約束された世界」	.....	1114
PHASE 148	「それぞれの道」	.....	1122
PHASE 149	「旅立ち」	.....	1128
PHASE FINAL	「泪のムコウ」	.....	1134
番外編 エンドレスナイト			
PHASE 001	「ラグナリン共和国」	.....	1149
PHASE 002	「左手に剣を、右手に君を」	.....	1157
PHASE 003	「コードネーム」	.....	1163
PHASE 004	「双子座と龍」	.....	1169
PHASE 005	「悪夢の始まり」	.....	1175
PHASE 006	「宣戦布告」	.....	1181
PHASE 007	「レミング」	.....	1187

PHASE-008 「墜ちる翼」……………

PHASE-009 「ゼロが見せる未来」……………

PHASE-010 「コードネームはホワイトウイング」……………



## プロローグ 1

オリ主がシリーズ、待望の？セカンドシーズン開幕！

---

## 翔真 side

あの第一次蒼穹大戦から4年が経過した。まあ二年前にもいろんな世界へ飛んでトラブルに巻き込まれたけど、でもそろそろ帰らないとまらない。そう・・俺やシャル達がいたあの世界へ

今俺は楽園でいつものように料理を作っていた。

「今日も大丈夫だな」

(翔真、今日の味は大丈夫なのか?)

アルビオンが話し掛ける。

「ああ」

「今開いているか？」

「相変わらず賑わっているのね」

「お邪魔するよ翔真」

「やっほ〜！翔真久し振り〜！」

「おお、リンネ達じゃないか。カウンター席に

座っていてくれ、何か出すよ」

店に入って来たのは次元世界からやって来た俺の

友達である月村リンネとリアス・グレモリーのカップル

とツバサ・カミヤとネプテューヌのカップルだ。

「翔真、少し聞きたい事があるのだがいいか？」

「早く言えよ、こっちも暇じゃないんだから」

「あなたは元の世界に帰る気はあるの？」

リアスの質問に翔真は手を止める、少し沈黙が

続くが翔真は口を開く。

「当たり前だろ？俺や束達の故郷だ。帰るに

決まってる」

「でも翔真、君の世界は平和になっているのかな？」

「・・・ツバサ、多分それは無いだろうな。」

あんな事で平和になったという事はまず無いはずだ」

「なあ翔真、良ければ俺達も付いて行っていいか？」

「僕からお願ひするよ、僕達は君に助けられ

ているから・・・だから今度は僕達が君に

恩返しするよ」

「……ありがとう二人共、俺は今日の夜

束達に話そうと思う」

「それがいいと思うぞ」

あれから夜になり俺は束達に話した。あの世界に  
帰る事を……

「という事なんだが、束達はどう思う？」

「うん。そろそろ私達も帰りたいと思ってた所。

でも……箒ちゃん達無事だといいね」

「ああ、なのはやフェイト、シグナムはどうする？」

「もちろん私達も行くよ！翔真君の世界をこの眼で

見てみたいし！」

「それに、翔真だけに戦わせないよ！」

「私達はいつでもお前と共にある」

「そう言ってくれてありがとうな、ヴィヴィオ達

も行きたがるんだろうな・・・あの世界に帰還

するのか・・・」

あの世界には悲しい思い出が多いからな・・・

翔真side end

俺と簪は久々にミットチルダに戻り管理局のMS格納庫である機体を整備していた。

「一夏・・・本当にまた乗るの？・・・『ユニコーン』に」

「ああ、もしかするとあの世界は・・・また

争いが始まるかもしれない。だから俺はこいつに

・・・祝福ってやつを果たそうぜ、ユニコーン」

「・・・」

「簪、俺は大丈夫だから・・・心配は無用だぜ」

「うん・・・簪達の事はどうするの？」

「簪達の事はもう考えは決まってるさ」

「そっか・・・そうだ！ユニコーンの隣にある

あの黒いダブルオーは何？」

「翔真が言うにはあるダチに渡すらしいぜ？・・・

箒・・・セシリア、みんな」

俺は決めたんだ、最低かもしれないけど・・・

箒、セシリア、鈴、ラウラ・・・待っていてくれ！

一夏side end

場所は変わり、翔真達がいたIS世界へと移る。

一人の少女が夜空を見上げていた。

「一夏……あれから二年が過ぎた、私は

戦う……お前や翔真の変わりに」

「箒？何してるの？」

「アリスアか、インパルスガンダムを見ていただけさ」

箒は視線を上へと移す、ザフトの最新機体であり

自分の専用機となる『ZGMF-X56S インパルスガンダム』

が月の光りに当たり姿を現す。

次回は第 s i d e の話です！まだプロログですね！

---

## プロローグ2 「運命の扉」

箒は一夏にもう好意を抱いてはいませんが、アスランポジション誰にしようかな。

### 箒side

あれから何年立つのだろうか？翔真や一夏達が

必死の思いで戦ったレクイエム攻防戦・・・あの日

から私達はいろいろな出来事に見舞われた。まず

一夏が突然消えた事だ、セシリアや鈴は特に酷かった。

ショックから一時は失語症になったが今はちゃんと

話せるようになっていた。ラウラは相変わらずだが以前のようにはキハキとした姿は何処にも無い。私の場合は精神が可笑しくなりそうだった、どん底の闇の中、私に手を差し伸べてくれた人物がいる・・・

名前は『アリシア・テスタロッサ』だ。彼女の

優しい気持ちに私は癒された。いつしか抱いては

いけない想いを抱いてしまう、それでもアリシアは私の全てを受け入れてくれた。嬉しかった。そして

次にあの大戦の後の話だ。ザフトは今までの行いを

IS学園に謝罪し生徒達の安全確保を条件に傘下に入って欲しいと現ザフト最高評議会議長であり

アリシアの母上でもある『プレシア・テスタロッサ』

が申し出た、IS学園の理事長である十蔵さんは悩んだ末にこの先の事を考え傘下に入る決意をした。そして

私は自らザフトに入隊してMS操縦やいろいろな術を

覚えて今は赤服を着るまでに成長した、一方で地球連合の方は新たな量産型MS  
「ジンクス」という機体を作り

あげたらしい。私は常に思っている、再びこの世界で

また醜い争いが始まるのでは？ そうすれば罪の無い

人達が死んでゆく、もしその時が来るなら私は皆を

守る為の剣となる！ 例え手を血に染めたとしても……

簞sideend

アリシアside

初めまして、アリシア・テスタロッサだよ。私と

お母さんは実はこの世界の住人じゃないんだ、しかも

私に至っては死んでたらしいけどお母さんが言うには

生き返ったらしい。凄い事もあるもんだね、だけど

この世界はあまりいい場所とは言いきれない。怒りや憎しみ悲しみが私の頭で時々響く、そんな感じで一時は自分がおかしくなりそうだった。でも最近は何と一緒に居るお陰かな？そんな事は無くなった。箒はいつも私を気に掛けてくれる、だから私は決めたんだ。箒といつも一緒について助け合って生きて行こうと……もう悲しい想いをさせないよ……箒。

アリシア side end

場所は移り、とある某アジトではコード・アメリカウス

が居た。彼女もまたこの世界に災いを起こそうと現れ地球連合にジンクスを授け地球連合は今アメリカウスの支配下にある。

「さて、この世界はどうなるだろうな？ネオ

・・・いや『ハヤト』？」

「俺はハヤトって名前じゃないぜ？ネオ・ロアノーク大佐だ、そこん所分かってほしいね」

アメリカウスと話しているのは顔にマスクを

付け地球連合の大佐の位置に存在するネオ・ロアノークだった。だがこの男の正体がアイツだとはまだ知るよしもない。

場所は変わりIS学園の屋上ではスーツに白衣を身に付けているスクールとレディーススーツを着込んでいる千冬が食事をしながら話していた。

「早いわね、セシリアちゃん達も卒業間近・・・」

「そうだな・・・こんなに空が青いのに

悲しいのは何故だろうな・・・」

「千冬、今日それ言って四回目よ。隼人

・・・天国で元気にしてるのかしらね・・・」

スクールは隼人と一緒に写った写真を見ながら呟く。

戦いの始まりは刻々と迫っていた。

それは悲しい再会でもある。

次回でプロローグ終わりです！

プロローグ3 「集う仲間、そして……」

今回から時神様、ライトちゃん様の作品から

ヤマトとリアス、明久とアンジュを出します！許可を  
頂きありがとうございます！

---

翔真は自分の世界へと帰還する為いろいろと準備を

していた。まずは艦の手配やMSパイロットの候補を

や機体などを揃えていた、艦は『プロレマイオス2』

であり翔真に付いて行く人員はシャル、東、なのは、

フェイト、シグナム、真耶、大和。

一夏、簪、ニック、千夏、油希、ノーヴェ、スバル、  
ティアナ、さらには異世界から帰還したシュテル、  
ディーアチェとユーリ、レヴィが付いて行く事が  
決まった。

そして今翔真はある人物達と話していた。

翔真 s i d e

「これからは宜しく頼む、ヤマト、リアス」

「ああ、こちらこそだよ翔真」

「でもMSね、あんな大きいロボットを操作

出来るなんてすごいわね」

「慣れば誰でも扱えるけどさ」

俺は現在、ヤマトとリアスと共に管理局のMS

格納庫へ来ていた。すると丁度そこにはリンネ

とリアス、異世界から移転して来た明久とアンジュ

がいた・・・ん？リンネとリアス？・・・やば！

俺アイツらにまだ言っただけじゃなかった！

「翔真お前も来たか・・・」

「全く、少し遅すぎ・・・え・・・」

「り、リアスがもう一人居る!？」

「嘘でしょ・・・こんな事って・・・」

二人のリアスがお互いを見ている、何か新鮮だな！

ヤマトに至ってはかなりビックリしている

「まさかお前、俺とリアスの事話していなかったな？」

「翔真！一体どういう事!?!」

「ヤマトは少し動揺しすぎだぞ、今から説明するから聞いてくれ」

俺はリンネとリアスの事をヤマトとリアスに話した。

でもリンネ側のリアスが普通の人間である事は

ビックリしていたがな。

「さて明久達も・・・戦うのか？」

「うん、僕は黙って見ているつもりは無い。

アンジュ、君は・・・」

「私も行くわよ！明久だけに戦わせない！

私達はいつも一緒のはずよ・・・明久」

「そうだね・・・アンジュ」

明久とアンジュは平行世界に存在するIS世界

で戦って来た二人だ。傷付いて、さらには自らを犠牲にしたとこの世界に来て俺や束達に話してくれた。でもそっちにも俺が居るとはまたまた驚いたけど。

そしてヤマトにはMSとして健造したダブルオー  
ダークライザーと明久にはエクストリームガンダム  
を渡して俺は久々にバンシイノルンへと搭乗して  
試しにテストで戦う事になり俺やヤマト、明久は  
戦闘に入る。

「行くよ翔真！」

「ISとは違うけどやってみせる！」

二人のコクピットは複座になっているから  
愛しの彼女も乗せられるようにしといた！

翔真 s i d e e n d

バンシイノルン、ダブルオーダークライザー、  
エクストリームガンダムは模擬戦を始めて二時間  
が経過していた。

「これでも食らえ！」

バンシイノルンはウォームスフィアを複数発現

させ投げ付けるがダークライザー、エクストリームは旋回して交わす。

「明久！今よ！」

「分かっているよアンジュ！行け！アリスファンネル！」  
アンジュはモニターと睨みっこしながら明久に  
今がチャンスと明久に告げる。明久はエクストリーム  
ガンダムに装備されたアリスファンネルを使い  
バンシイに攻撃を定める。

「ナイスコンビネーションだなあの二人、俺達も

負けてられないなリアス！」

「その通りね！ヤマト、今ならいけるわよ！」

「了解、トランザム！」

ヤマトやリアスも明久達に負けじと対抗心を現わ  
にしてトランザムを発動する。そんな四人の会話は

音声通信で翔真に聞こえていた

「全く、どうして俺の知り合いにはバカップルが多いんだろうな……俺も人の事言えないけど！」

バンシィノルンはビームサーベルを抜き二機を

同時に相手をする、ダークライザーはGNソードIII

でバンシィに斬り込もうと挑む、しかし左腕に

装備されたアームド・アーマーDEで防ぐ、だが

次にアリスファンネルが迫り来る。

「そんなもので！」

バンシィはビームマグナムを撃つ、アリスファンネルは散開して交わす。

模擬戦は結局引き分けだったがダークライザーとエクストリームの性能は十分に発揮されていた。

そして翔真達の居た世界には先にリンネとリアス、ヤマトとリアスが調査する事になり四人は機体へ乗り込む。

「シナンジュ、月村リンネ出る！」

「月村リアス、デルタカイ！行くわよ！」

「ダブルオーダークライザー、ヤマト！『リアス！』  
グレモリー！行きますす！」

3機は一足先にあの世界へと向かう。

エクストリームガンダム（アイオス・フェース）  
搭乗者 吉井明久（複座の場合はアンジューも搭乗可能）  
明久専用の機体。ストライクフリーダムの兄弟機  
として開発されたガンダムタイプの機体でゼロ  
システムを搭載している。さらにHi-νガンダム  
とフリーダムのデータを参考にして作られた

「アリス・ファンネル」を装備している。

型式番号が存在しない理由は不明。エクストリームの意味は極限。

### 武装

ヴァリアブル・ライフル

ビームサーベル×2

アリス・ファンネル×8

エクストリームシールド

GN・0000+GNR・010「D」ダブルオーダークライザー

搭乗者 ヤマト・グレモリー（複座の場合はリアスも  
搭乗可能）

翔真のダブルオーライザーの予備機として長年

格納庫に保管されていたがヤマトの機体として

改造してくれないかと、翔真の頼みを聞いた

リンネがOSからGNツインドライブまでの制御を  
行い完全な新機体として生まれ変わる。カラーは  
名前の通り黒をメインとしている。補足だがこの  
1機だけで平行世界へと行けるらしい。

武装はダブルオーライザーとほぼ同型である。

RX・0 「N」ユニコーンガンダム2号機 バンシィノルン

搭乗者 綾崎翔真

フェイト・T・ハラオウン

翔真の搭乗機の内の一機で平行世界に存在する

もう一人の自分が居る『ハイスクールD×D』の  
世界へと行っていたが何らかの経緯で戻って来た。

さらにはツバサの世界に敵として現れるフェストゥム  
を同化しており技も使える。サイコフレーム発光色

は金色だったが翔真が完全に使いこなせるように

なり緑に変化している。

### 武装

60ミリバルカン砲×2

ビームサーベル×4

ビームマグナム（リボルビング・ランチャー装備）×1

アームド・アーマーDE×3（内の二枚はスラスタ

としての役割を果たす）

武器同化、武器再生（マークザインの能力）

同化能力（マークニヒトの能力）

ワームスフィア（同化したフェストウムの技）

次回から本編始まります！

## 機体解説

ザフト量産型  
MS

ZGMF-X2000 シュバルツエアグフ

武装

テンペストビームソード

スレイヤーウィップ×2

ドラウプニル4連装ビームガン×2

対ビームシールド

搭乗者 ラウラ・ボーデヴィツヒ

ザフトの最新量産型MSである。ジンやジグウーの

後継機としてザクと共に開発されたグフは空中戦を得意とする戦闘を重々した機体となっている。正式名はグフイグナイトテッド。シュバルツェアはラウラが付けた名でありカラーは黒。

ZGMFX1000 ザクウォーリア

武装（ガナーウィザードを含める）

ビーム突撃銃

対ビームシールド

ビームトマホーク

オルトロス高エネルギー長射程ビーム砲

搭乗者 鳳鈴音、ザフト一般兵

量産型MSの一つでこの機体が多く生産されている。

コストや汎用性にも優れている、なおバックパック

換装システム「ウィザード」が存在する。

## セカンドステージシリーズ

ZGMF-X56S *a* フォースインパルスガンダム

装甲素材 ヴァリアブルフェイズシフト装甲

武装 (フォース)

20mm CIWS × 2

高エネルギービームライフル

機動防楯 × 1

フォールディングレーザー対装甲ナイフ × 2

ヴァジュラビームサーベル × 2

武装 (ソード)

エクスカリバーレーザー対艦刀 × 2

フラッシュエッジブーメラン × 2

## 武装（ブラスト）

ケルベロス高エネルギー長射程ビーム砲×2

デリュージョー超高初速レール砲×2

4連装ミサイルランチャー×2

デифアiantビームシャンベリン×1

## 搭乗者 篠ノ之箒

セカンドステージシリーズの内の一機で合体機構を

持つガンダムタイプのMS。バックパック換装システム

シルエットシステムを搭載してフォース、ソード

ブラスト三つのシルエットが存在する。インパルスと

シルエットシステムはGAT-X105ストライクガンダム

を参考に行っている事実が存在する。さらに電力供給

「デュートリオンビーム送電システム」がある。

ZGMFX23S セイバーガンダム

装甲素材 ヴァリアブルフェイズシフト装甲

武装

20mmCIWS×2

高エネルギービームライフル

ヴァジュラビームサーベル×2

アムフォルタスプラズマ収束ビーム砲×2

スーパードルティスビーム砲×2

ピクウス76mm機関砲

空力防盾

搭乗者 織斑千冬

可変MSである本機はGAT-X303 イージスガンダム、

ZGMFX09A ジャスティスのデータを少し流用して

建造され頭部にトサカ状のセンサーユニットを

備えている。本機はもう一機プロトタイプに当たる

プロトセイバーの実験データを元に組み立てられ  
千冬専用に調整が行われている。

ガンダムエピオンパイ（後に登場）

装甲素材 ガンニウム合金

武装

ビームトライデント

ドラゴンハング

（大型ビームカノン）

（マシンキャノン）

パイロット????

ZGMFX24S カオスガンダム

装甲素材 ヴァリアブルフェイズシフト装甲

## 武装

12・5mm CIWS×4

20mm CIWS×2

高エネルギービームライフル×1

ヴァジュラビームサーベル×2

カリドウス改複相ビーム砲

機動兵装ポッド×2

(ビーム突撃砲

ファイヤーフライ誘導ミサイル)

ビームクロー

巡航機動防盾

76mm近接防御機関×2

搭乗者 西住まほ

セカンドステージの内の一機で宇宙や空中での

高機動戦闘を主眼に置いている。  
MA形態への

可変機構と多彩な武装を備えた強襲用の可変MS  
である。連合側の型式番号はR G X・01。

PHASE-00 「真剣で私達のチョコを食べなさい！」

はあ、彼女が欲しい……

---

トレミーⅡの調理室、そこでは東達がチョコを作っていた。

「みてみて東ママ！じゃーん！翔真パパ！」

「私も！ほら！」

「わあー！つうちちゃん（椿）、ヴィヴィちゃん上手

だねー！しょう君ソックリだよ！なのちゃんもそう

思うでしょ？」

「うんうん！デザートペンで翔真君の顔が書ける

なんてヴィヴィオや椿は天才だよ！」

チョコケーキの真ん中には翔真の似顔絵が書かれていた。椿やヴィヴィオは頬に生クリームを付けて笑っていた。何とも微笑ましい光景である。

「あ、そんな乱暴にかき混ぜちゃダメだよノーヴェ。もっと優しくね？」

「こ、こうか？」

「はい。とても上手よノーヴェ」

「あれあれ？ソーたんはチョコが2つあるけど

誰にあげるの？あ！もしかしてお姉ちゃん……」

「違います」

「即答!？」

シャルロットはノーヴェに優しく指導してソーナは姉であるセラフォルとチョコを作っている、さらには

「これでツバサも喜んでくれるかな！」

「ネプテューヌそれは？」

「よくぞ聞いてくれたねフェイトちゃん！その名も

チョコカップケーキだよ！」

「ほう、ネプテューヌはチョコカップケーキにしたか」

フェイト、ネプテューヌの側にシグナムが駆け寄る、

シグナムは片手に可愛くデコレーションされたクッキー

が並んだ鉄板を持っていた。

「シグシグはクッキー？」

「ああ、フェイトや束達はケーキの方は進んでいるのか？」

「順調だよ。あ、リアスとアンジュはどうなんだろ？」

フェイトは視線をリアスとアンジュの方へ向ける。

「ちよつとアンジュ！焼き方はもっと丁寧になって

言ってるでしょ！」

「いいの！これくらいの焼き加減なら大丈夫なんだか

ら！」

どうやら仲良くという雰囲気は出ていない。

一方で一夏に好意を寄せる簪、セシリアもまたチョコを作っていた。

「ちよつとセシリア!? 何で醤油を入れようとするの!？」

「もっと濃く仕上げるのならば醤油が必要かと

思いました……」

「絶対に必要ないよ！」

まあ何だかんだあるが女子達全員は無事チョコを作り終えた。

「はいしよ君！」

「私達からですよ！」

東、大和が差し出したのは可愛くデコレーションされたチョコレートケーキとシグナム、翼が作ったチョコクッキーもあった。

「おお、可愛くデコレーションされてるな。しかも

俺の似顔絵まであるじゃないか」

「それはつうちちゃんとヴィヴィちゃんが書いたんだよ！」

「翔真パパ、どうかな？」

「どうかな？」

「上手いぞ二人共！食べるのがもったいないぐらいだ！」

「えへへ〜」

「束達もありがとうな」

「別にいいよ、さあ！早く食べよう！」

「そうだな」

翔真は膝に椿とヴィヴィオを座らせ東達と一緒に食べる事にした。

「リンネ、これを……」

「チョコか、ありがとうソーナ。頂く」

「フフ、はい、これはお母さんからよマルス」

「は、はい！」

リンネとマルスはトランプで遊んでいるとソーナが声を掛けた。ソーナは二人にチョコを手渡す。

「うん、いつものように美味しいぞ」

「ありがとうございます！」

「どう致しまして。あら？どうやら二人もマルスに

チョコを渡しに来たようね」

ソーナは背後を向くと可愛くラッピングされた

チョコの入った包みを持ったノーヴェとアインハルトが

いた。

「ぎ、義理チョコとかじゃないからな! ほら! 〓〓〓」

「料理は初めてでしたので上手く出来たかは

分かりませんが、ですが……食べてもらえませんか

？」

「ノーヴェさん、アインハルトさん……ありがとう。

美味しく頂くね」

マルスは二人に微笑む。案の定二人は顔を紅くした。

「ヤマト……! 何で逃げるのよ……!」

「明久……! 待ちなさい……!」

「当たり前だろリアス!? クッキー渡しと思えば

次は私を食べて♡みたいな感じで全裸チョコまみれ  
だし……!」

「何時からアンジュはそんなエッチな子になった

のさ……!」

ヤマト、明久は全裸チョコでコーティングされた

リアス、アンジュから逃げていた。

「ツバサ！この最強女神様、ネプテューヌが作った  
カップケーキを召し上がれ！」

「最強女神か、フフ、ありがとうネプテューヌ」

「えへへ！どう致しまして！」

「はい一夏！」

「わたくしと簪さんとで作りました、板チョコ  
レートですわ！」

簪、セシリアはお手製板チョコレートを一夏に  
手渡した。

「板チョコレートなんてまた新鮮だな。ありがとう  
二人共」

一夏は微笑むと二人に礼を告げる。

こうして彼女達のオペレーション・バレンタイン  
は幕を閉じた。

PHASE・00・1 「問題児達がお返しを作るそうですよ？」

ホワイトデーの回ですよコノヤロー！

---

ある日の事

トレミーの調理室、そこには翔真達男子組がいた。

理由は一つ、それは愛しの彼女達からもらったバレンタインデーのお返しを作る為だからだ。そして今、翔真達

は準備に取り掛かっていた。

「ツバサ、スポンジケーキに生クリームを塗る時は

土台を回しながら塗った方が上手くいくぞ？」

「わ、分かった」

「すまないが翔真、少し聞きたいのだがクッキーを

焼く時間はこれでいいか？」

「いや、基本その時間はレシピ通りだがあんまり

火が通らない時があるから少し時間は長くした方がいいかもな」

「了解だ」

ツバサやリンネに料理のアドバイスをする今の翔真は

真剣そのものだ。翔真は束達にお返しのケーキを作る

途中だった為再び生クリームを塗る作業に入る。

「なあ翔真、この焼き加減で大丈夫か？」

「ああ、完璧だぜ一夏。それならセシリア達も大

喜びだな？」

翔真と一夏に関してはやはり長年共に戦い続けた  
パートナーであるからか息びったりだった。

「明久は何を作ってるんだ？」

「僕はミルクレープだよ、アンジュはこのケーキが

一番好きだからね。ヤマトは？」

「俺か？俺はパンだな。スイーツばかりだと飽きる

かなって思って今回はメロンパン、あんパン、クロ

ワッサンを作るんだ」

「パンって難しくないの？」

「いや、そこまでじゃないさ」

ヤマトと明久は会話しながらパンやケーキを作る。

一方で翔真は自分のお返しが完成した為、今はマルスの  
指導に付いている。

「うーん、味は悪くないが……見た目がちょっとな」

「やはりダメでしょうか？」

「いや、味は美味いぞ？だが見た目が問題なんだよな。

だったら俺がちよっと工夫するからマルスはもう一回

ショートケーキを作り直せ、俺も手伝うから」

「はい！」

翔真達男子のホワイトデーのお返しは次々と完成し  
準備は整いつつあった。

まずは翔真。翔真は東達を集めて大部屋へと集まっていた。

「これが俺からのホワイトデーのお返しだ！」

「すごい!!これって!!」

「ガンダムではないか！」

「だ、抱き締めたいくらいです！」

ケーキを見た瞬間、束、シグナム、大和はビックリした。何故ならホール型のショートケーキの上には砂糖菓子で作ったSDサイズのウイングゼロ、エクシア、ダブル

オーなどが可愛くデコレーションされていた。

「可愛い〜、翔真って本当女の子の弱点知ってるよね？」

「うん。なんか翔真って可愛い物を作るの凄いで意  
だよね？」

「全く、これを見た女子達はイチコロではないか」

「うふふ、でも食べるのが勿体無いぐらいです♪」

シャル、フェイト、翼、真耶は翔真の腕の器用さに  
圧倒されていた。

「それ程でもないけどさ。じゃあ、束もなのは達も  
食べてくれ！」

「翔真パパー！私達は！」

「もちろんヴィヴィオ達にもどうぞ？」

ヴィヴィオ、椿は翔真の脚に座るとケーキを食べ  
始める。束達の美味しく食べる姿に翔真の心は  
癒されていた。

翔真のお返しが大反響を呼んだ後、リンネ、ツバサはソーナ、ネプテューヌにクッキーとフルーツケーキを渡す。

「バレンタインデーの時のお返しだ、ソーナ」

「うふ、所々に焦げ目がありますね？相当苦労したんですね」

「ま、まあな。クッキーは少し大変だったが」

「美味しく頂きますねリンちゃん」

「ああ。そう言えばマルスからはちゃんと貰ったか？」

「もちろん。照れながら渡してくれましたよ♪」

「はいネプテューヌ、フルーツケーキだよ。バレンタインデーの時のお返しだよ」

「ツバサ……ありがとー　　！大好き！」

「ちょ!?!抱き締められたら……ぶはア　!?!」

ネプチューヌは嬉しさのあまりツバサに抱き付く。  
女の子から発せられる独特の甘い匂いと柔らかい  
2つの膨らみが体に密着した為に吐血した(笑)。

「リアス、俺からはパンの詰め合わせだ。あ、

もちろん手作りだぞ?」

「凄いわ!凄いわヤマト!これ全部が手作りって  
事よね?」

「もちのろんだ!」

「はいアンジュ、僕からはミルクレープだよ」

「ありがとう明久!」

「セシリアと簪にはチーズケーキを」

「チーズケーキ、うーん！美味しそうな匂いが  
しますわ！」

「うん！」

ヤマト、明久、一夏もまたホワイトデーのお返しは  
大反響のようだった。

そしてマルスも……………

「ノーヴェさん、アインハルトさん、これ」

マルスは照れながらも翔真が見た目を工夫し自分が  
作ったショートケーキを二人に手渡す。

「お、おう、ありがとうなマルス」

「マルスさん、ありがとうございます！」

「いや、二人にはバレンタインデーのチョコを

貰ったから……」

「二人にはあげられて私達には無いのかしら？」

「アーニーキ？」

「え……しまったァ　　！二人の分作り忘れてた！

今すぐ作って来ますから待っていてください！」

マルスはついうっかりしてクリスと今はある事情から

トレミーに乗艦している『御門涼子』の分を作り忘れて

しまった事を思い出し急いで調理室へと向かった。

「うふふ、マルスも大変ね」

涼子は急いで調理室へと向かうマルスの後ろ姿を見て

微笑む。





## 第一章 怒れる瞳の少女

### PHASE・01 「怒れる瞳の少女」

本編開始！

---

リンネ、リアス、ヤマト、リアスは翔真達の居た

IS世界に到着した。リンネ達は機体を隠してそれぞれ  
行動を始める。リンネとリアスはこの世界にある

MSの情報をハッキングや基地のデータベースから

盗み取りデータ保存したメモリーデバイスを使い  
かつて翔真達が使っていた島のアジトの中、パソコンで  
見ていた。

「ふむ、ザフトの量産型は主にザクでバックパック  
を喚装出来るのか、後はティエレン、ジン、ジグウ  
か・・・リアスの方は？」

「ええ、地球連合は疑似GNドライヴを搭載した

ジンクスだったかしら？それが今の連合の主力よ」

「やっかいな物だな、それとリアス。しばらくは

俺が考えた偽名を使ってくれないか？理由は・・・」

「分かってるわよ。もう一人の私が居るから  
でしょ？同じ名前だと混乱するしね」

「ああ。取り合えずは『クギミヤ・ケイ』と  
名乗っていてくれ」

「了解」

「リンネ、そっちはどう？」

「何とか情報は掴んでいる。ヤマトやリアスの方は？」

「この世界の今を調べて来た。主にZ・A・F・Tメインだけだ」

「それでも構わない、話してくれ」

「分かった。まずザフトでは新たなG兵器が

開発されている。その名はセカンドステージシリーズ  
というカテゴリーに分類されている」

「あとはザフトの今の主導者の事だけ……」

「どうしたの私？」

「……ザフト主導者はプレシア・テストロッサ  
なんだ……」

「テストロッサって……確かフェイトちゃんの……」

「いや、どちら世界の母か分からないぞ？ヤマトの

方にもフェイトが居るわけだからな」

「そうだ・・・リンネ、この後はどうするんだ？」

「IS学園の海域近くに建造された人工島・・・  
アーモリーワンに行くぞ、そこに行けば何か  
分かるかもしれないしな」

それからリンネ達は機体へと搭乗して人工島  
アーモリーワンへ向かう。

アーモリーワンに到着したリンネ達は機体から一旦降りて島の内部を歩き見ていた。島と呼べる程の森や草などは無くMSなどが主に収容され周りはザフトの整備班や関係者などが集まっていた。

だがそんな中で、新型MSが収容された4番格納庫では三人の少女が侵入していた。

「本当にここであってるの？まほ」

「間違いないはず、多分あの三機がネオの

言っていた『ガンダム』だ」

「ならば作戦を開始しましょう」

三人の少女は『霧生つかさ』、『西住まほ』、

『逸見エリカ』であるネオの命令でザフトの

新型機体の強奪を命令されこのアーモリーワンに  
侵入したのだ。

「何者だ！」「侵入者だ！捕まえろ！」

「ヤバ！見つけたよ！」

「少しは静かに出来ないのか・・・つかさ、

エリカ、行くわよ！」

つかさ、まほ、エリカはザフト兵をナイフや

拳銃で殺して『ガイア』、『アビス』、『カオス』

ガンダムに乗り込む。

「ほお、これがガンダムか！」

「……システムに異常は無い」

「いつでも行けるわよまほ」

ガイアにはつかさが乗り、カオスガンダムには

まほが乗り、エリカはアビスに乗り込んだ。

3機のツインアイが光だし、機体は動き始めようとしていた。

一方でリンネ達は機体へと戻りモニターで

敷地内を観察していた。

「別に怪しい所は無い……翔真に報告を……」

「リンネ！ ザフトの人達の様子がおかしい！」

「何だと？5秒待て・・・これはトラブル発生

らしい。ヤマトとケイは一旦ここで待機してろ！」

リンネはシナンジュを敷地内へと向かわせる。

先程リンネがモニターを拡大して見ていたのは

3機のガンダムが暴れ回っている姿だった。

「喰らいなさい！」

3機のガンダムを強奪したまほ達は後から来た

ザフトのMSと交戦していた。しかし性能差で

圧倒されジグウー部隊は全滅、次につかさが駆る

ガイアガンダムはバクウのような四本足に変形

してグリフォン2ビームブレードで建物を一刀両断

する。まほの駆るカオスガンダムはビームライフルを

撃つ

「こんな事やめろ！」

「何!? 未確認機だど！」

3機が破壊活動をする中で、リンネの駆るシナンジュがビームサーベルを抜きカオスガンダムに斬りに掛かる。まほは一度回避行動を取りサーベルを交わした。

「誰だか知らないけど、邪魔しないで」

カオスもビームサーベルを抜きシナンジュに迫る。

リンネは防御に入るのが良いと判断して

シナンジュはシールドでサーベルを防ぐ。

だが後ろからガイアが接近していた。

「悪いけどまほはやらせないよ！」

「ち、邪魔だ！」

シナンジュはシールドの内側に付いてるビーム

アックスを取り出しガイアに向けて投げる。

つかさはアックスがこちらに向かって来る事に

気づいてガイアを人型へと戻しシールドでガード

するも弾き飛ばされる。

「あの紅い機体のパイロット、なかなかやるわね」

エリカは紅い機体（シナンジュ）のパイロット

は相当なやり手だと考えていた。そして

アビスガンダムをシナンジュに向かわせる。

同時にガイアも襲い掛かる。

「3機同時に来たか！」

カオスがビームサーベルを降り下ろそうとした

その時、カオスの後ろにミサイルが直撃した。

リンネ達はモニターに目を移すと三機の戦闘機

だろうか？こちらに向かって来る。やがて戦闘機

は一機のMSへと変わる。そのMSはセカンドステージ

シリーズの内の一機、ZGMF-X56Sインパルスガンダム

が対艦刀を手に現れた。そしてパイロットは・・・

「何でこんな事・・・また戦争がしたいのか！

あなた達は！」

篠ノ之箒であった。

霧生つかさはあかね色に染まる坂から、まほと  
エリカはガールズ&パンツァーからです！

## PHASE・02 「戦いを呼ぶもの」

今回はヤマト君がああ覆面と戦います！

箒はコクピット内で叫ぶと同時にソードインパルスをかイアガンダムに向かわせる。インパルスは対艦刀エクスカリバーを両手に持ちガイアに振り下ろす。つかさは機体を回避させる。

「何んなのあれは!？」

「はああああ！」

ガイアの動きが止まった隙を狙い、箒は攻撃を続行する。ソードインパルスはエクスカリバーを連結すると薙刀のように扱いガイアのシールドに

激突させて機体は少しの距離だが飛ばされる。

まほやエリカはモニターからインパルスとガイアの戦闘を見ていた。

「まほ！あの機体は!?!」

「分からない。けど新型は3機のはずでは？

・・・ならあの機体も奪うしかない！」

まほはカオスガンダムを動かす。カオスはビームサーベルを抜きインパルスに斬り掛かる。

「敵！後ろか！」

箒は後ろから接近されている事に気付く、しかし全方からアビスも接近していた。

「あの機体、前が見えてないのか？く！」

リンネはシナンジュをインパルスの後ろに

近付ける。シナンジュはビームライフルで狙撃するが

まほはギリギリで回避、カオスからビーム  
ライフルが放たれる。

「ちい！」

シナンジュはシールドで防いだ。だがリンネは  
この付近に敵が接近しているのに気付く。

「熱源が10機、その内の一機は速い！・・・

ケイ！聞こえるか！」

「どうしたのリンネ！」

リンネはケイ（リアス）に通信を繋げる

「ケイはこの世界の状況を翔真に話す為に

一旦ミッドへ帰還するんだ！そしてヤマト、ダーク  
ライザーでこちらに来る敵を倒せ！」

「分かったわ！」

「了解！」

「私！気を付けるのよ！」

ケイの駆るデルタカイはアーモリーワンを離れて  
ヤマトはダブルオーダークライザーを空中に  
浮かばせそのまま加速する、連合の量産型MS  
ジンクスにGNソードIIIを向けてそのまま接近戦  
に移る

「ヤマト！十二時の方向！」

「はあああ！」

リアスは敵の位置をヤマトに告げる、ヤマトは  
レバーを動かして敵を斬り刻む。

「これは・・・ヤマト！こちらに接近する  
機体があるわ！」

「何だって！・・・あれは・・・マスラオ！」

ダーククライザーに向けて接近していたのは疑似GN

ドライブ搭載機マスラオだった。パイロットはつかさ達の上司に当たるネオ・ロアノークだ。

「ん、確かにこれは俺のミスだな。だが

あの黒い機体・・・なかなか興味深いな！」

マスラオはGNロングビームサーベル、シヨート

サーベルを展開してスピードを上げると同時に

ダークライザーとの距離を詰める。しかしここで

ヤマトとネオは互いに何かが通じ合う。近づく度に

頭の中にイナズマが駆ける。

「(この人は?・・・でも今は!)」

ダークライザーはソードⅢを一旦収めて

GNソードⅡ2本を持ちマスラオと同じ二刀流で

斬撃を食い止める。

「クッ！」

「今のはさすがだと褒めておこうか? 黒い

ガンダム君！」

だがマスラオは攻撃をやめる事なくGNロングビームサーベルやショットサーベルを交互に降り続ける。

「あのマスクみたいなやつ付けてる機体、

なかなか手強い！」

「何処を見ている！」

「貴様こそ！」

リンネはまほの駆るカオスガンダム、エリカの駆るアビスガンダムと交戦していた。

「このままでは！」

「そちらの紅い機体のパイロット！大丈夫か！」

「音声通信か・・・あなたは？」

リンネが問うとその数分後、紅い機体が

ビームサーベルを振り、アビスガンダムを

離れさせる。

「・・・篠ノ之！無事か！」

「織斑教官・・・はい」

そう、紅い機体は「セイバーガンダム」であり  
乗っているのは織斑千冬だった。

## PHASE-03 「アーモリーワン崩壊」

千冬とまだ登場はしていませんが長瀬湊ちゃんが  
またまた翔真のヒロインになるかな？ 束達も  
居るけど・・・

---

戦闘が続くアーモリーワンでは千冬がセカンド  
ステージに分類される新型MSセイバーガンダムに  
乗り現れた。そして戦闘は再び開始される。ヤマト  
とネオの戦いも今だに続いていた。

「その程度の攻撃！」

「ヤマト、熱くないのよ！」

「分かってるさ・・・ッ！」

ダークライザーはGNソードIIを巧みに使いながらマストラオとの真剣勝負を繰り広げていた。

「そんな事では俺を倒せないぜ！」

マストラオはダークライザーの一振りを交わして

お返しにと言わんばかりにGNロングビームサーベルでダークライザーのGNソードを一本吹き飛ばした。

「ッ！まだだ！」

ダークライザーは右腕にGNソードIIIを装備して再び戦闘に入る。

リンネは後から来た千冬の駆るセイバーガンダムと共に3機と交戦していた。

「返してもらおうぞ！」

「また新型！」

セイバーガンダムはビームライフルでまほの駆るカオスを撃つが、カオスガンダムもビームライフルを取り出して撃ち合い戦へと発展する。

「全く！赤の次はまた赤か！」

エリカは苛立ちを隠せないでいた。本当ならばこのまま強奪して今頃ならとっくに撤退しているはずだった。しかしまさかのインパルスやシナンジュ、セイバーが出現するというアクシデントが発生したのだから当然動揺を隠せない。それも時間が経つにつれて苛立ちが立ち込めるのは無理もない。

「この距離ならば・・・ッ！」

リンネはアビスを標的に捉える。シナンジュはビーム・ライフルでアビスを狙い撃つ。

エリカは回避行動を取るが見事に機体の装甲に

ヒットする。

「さすがに長く居すぎたか？ちィ！」

ダークライザーと戦闘している中で

ネオは今の状況はまずいと考えて部下と連絡を取りある事を指示する。

「篠ノ之！回り込め！」

「言われなくてもやっています！」

箒はつかさの駆るガイアガンダムと交戦している、  
エクスカリバーで斬撃を与えようと近付くが

「遅いよ！」

ガイアガンダムはソードインパルスに飛び蹴りを  
お見舞いする。

「く！コイツら！」

「箒！聞こえる？」

「アリシア！」

「今そっちにフォースシルエットを射出したから  
喚装して！あとアーモリーワンから退避して！」

「どうして・・・」

ドゴオオオオオン！！！！

箒が喋っている途中で爆発音が響き渡る。敷地内の  
地面から炎の火柱が立つ、それを見たリンネは・

「・・・これは・・・ヤマト！戦闘を中止して

この戦域を離れろ！」

「え!?!・・・分かった！」

ヤマトはそれを聞き、マスラオを退ける。リンネも  
機体を上空へと上げる。箒は飛ばされて来た

フォースシルエットをインパルスに喚装させ  
空を飛翔する。

「上手く行ったか、つかさ！まほ！エリカ！  
撤退するぞ！」

「了解！」

マスラオを含む四機は撤退していく。そして  
千冬のセイバーガンダムや箒のインパルスも  
離れ、アーモリーワンは爆発して数分後には  
海の中へと消えてゆく。

「まんまと敵の罠にハマったという訳か……」

「その未確認機体に告げる、話を聞きたい。  
艦までご同行願おう」

「（確か織斑千冬だったな……一夏の姉か）」

モニターにはビームライフルの銃口を向けていた。

さらに大きく全般がグレーのカラーに染まり所々に赤いカラーが施してある艦がこちらに向かって来ていた。艦はザフトが作り上げた新鋭艦である「ミネルバ」である。リンネやヤマトは取り合えず同行する事決めてセイバーガンダム、インパルスと共にミネルバへ向かう。

PHASE 04 「EXODUS—長い旅の始まり—」

リンネ、ヤマトがミネルバに入った頃、ケイ（リアス）  
はいち早くミッドチルダへと帰還して翔真と共に  
プロレマイオス2の装甲板の上で話をしていた。

「・・・これがあなたの世界の今の現状よ。

悲しいけど戦争は始まるわ・・・」

「そうか。でもザフトの最高評議会議長がプレシア

テスタロッサってマジかよ？」

「ええ、どうするの翔真？ フェイトちゃんに

伝える？」

「伝えるつもりだ。いずれにせよ隠しても無駄

だろうからな」

「・・・あなたが言うならいいけど」

ケイは翔真達と一緒に飛び立つ為、プトレマイオスの室内へと戻る。

しばらくして翔真はフェイトを呼び出した。

「翔真どうしたの？話したい事があるからって来たけど・・・」

「お前には伝えておくべきだと思ってな。実は

お前の母親・・・プレシア・テストロッサだったな？」

「・・・うん」

「プレシア・テストロッサは俺の世界でザフト

の最高幹部らしい。つまりプレシアは・・・生存している」

「！・・・嘘・・・母さんが・・・うう・・・」

「フェイト！」

その事実を聞いた為かフェイトは床に座り込み震えていた。昔に味わったあの仕打ちがフラッシュバックしてフェイトは恐怖に襲われる。だが翔真はフェイトの事はなのはから聞いていた為に動揺はせずにフェイトを後ろから抱き締める。

「・・・翔真・・・」

「大丈夫だ。お前は俺が守る・・・安心してくれ」

「・・・うん、ありがとう。だけでもうちよつとだけこうさせて・・・」

「ああ、もちろんだ」

フェイトは安心して翔真に寄り添う。

「（絶対に今度こそ守ってみせるんだ。大切な人を守る為に・・・）」

あの後フェイトと別れてプロレマイオスのMS格納庫にいた。自分の愛機であるウイングガンダムゼロカスタムを見上げる。

「ゼロ・・・俺に力をまた貸してくれ・・・」  
ウイングガンダムゼロは翔真にとって相棒というよりは仲間に近いというよりもいくつもの戦場を駆け抜けた戦友みたいな感じだ。

「あ・翔真さん！ここに居たのですね！」

「ユーリか、どうしたんだ？」

「はい、翔真さんはダブルオーでは行かない

んですか？」

「あれはまだ早い。俺にはウイングゼロと

アヴァランチエクシアがある。そう言えば君達の  
機体は？」

「はい！トライオン3はもう起動したり合体

出来たりしましたから大丈夫です。でも動力源

は何ですか？あれだけのパワーだと・・・」

「（確かこの動力源の事は霧也には喋るなって

言われたんだっけ？）それは秘密だ」

そう、実は翔真二年前にリコの時に一緒に戦った

犬神霧也からある物を渡されてそれがトライオン3  
の動力源となっている。

「さあそろそろ部屋に戻っておけよ、確か

艦長はディアーチェだよな」

翔真はユーリと共に格納庫を後にした。そしてブリッジにはディアーチェが指揮を取り始める。

「よし全て正常だな！」

「問題はありません。いつでも行けますよ

ディアーチェ」

「うむ！なら発進するぞ！」

そしてプロトマイオス2はIS世界に向けて発進した。



## PHASE 05 「ファーストコンタクト」

今回は最後ら辺のみですがこの世界の明日菜と関係がある？長瀬湊ちゃんが登場します！

---

リンネ、ヤマト、リアスは千冬の指示でミネルバの中へと入っていた。機体は格納庫へと置き千冬も機体から降りてリンネ、ヤマト、リアスと箒をミネルバのブリッジへと連れて行かれる。

「なあ、これから俺達は何処に向かうんだ？」  
「ブリッジらしいぞ、何でもザフト最高評議会

議長が自ら俺達に会いたいそうだ」

「誰から聞いたのよ？」

「千冬さんに聞いたんだ」

「お前達がああ機体のパイロットなのか？」

「君はあのインパルスガンダムとかいう機体の

パイロット、篠ノ之箒か」

「(箒か、どの世界でも変わらないな)」

「先程は助かった。ありがとう」

「礼はいいさ、戦場では助け合うのが当たり前だ」

「あなたは大丈夫なの？ さっき戦闘があったから

疲れてるんじゃないの？」

「リアスさんでしたか？ 私は大丈夫です。」

心配を掛けてもらいありがとうございます」

「お前達、そろそろ口を謹め。ブリッジに入るぞ」

千冬達はブリッジへと入る。

「箒！アンタ大丈夫なの！」

「急いで出て行くから心配したぞ」

「すまない。鈴、ラウラ」

箒に声を掛けたのは同じくザフトの赤服に身を包んだ  
凰鈴音とラウラ・ボーデヴィッツヒだ。

「箒！」

「アリシア」

次に声を掛けたのは、今では大切なパートナーである  
アリシア・テストアロッサだ。

「大丈夫だった!？」

「心配しなくても私はこの通り元気だから安心  
してくれ」

「ならいいけど・・・」

「それよりもアンタ達が噂の助っ人なの？」

「助っ人……そういう事になるな」

「お前達、名はなんと言うのだ？」

「月村リンネだ」

「ヤマト・F・セイエイ」

「リアス・グレモリーよ」

「月村リンネにヤマト、リアス。私はラウラ・ボーデ  
ヴィツヒだ先程は仲間を救ってくれた事に感謝する」

ラウラがリンネ達に礼を告げた後にある一人の  
女性が現れる

「あなたが先程のMSのパイロットさん達かしら？」

「(リンネ、あの人……)」

「(議長であるプレシア・テストアロッサか……)」

「警戒はしとくべきね」

「?・・・どうしたのかしら」

「いや何でもない。ところで話でもあるのか?」

「・・・お察しの通りよ、私達は今から

強奪された3機を取り戻さなければいけないの。

お願いがあるの、奪還に協力してくれないかしら?」

「構わない」

「!?!」

リンネのあまりの早さの即答にヤマト、リアスは驚く。

ミネルバがIS学園の海域から出た後、時を同じくして特殊戦闘艦であり全ての地形に対応させ

改良されたガーティ・ルーが姿を現す。ブリッジ

ではネオ・ロアノークが大型ディスプレイに映像で表示されたミネルバを見ていた。

「あれがザフトの新型艦？なかなか興味深いな」

「お前もそう思うか？まほ……だが

せっかくの新型艦なんだろうが落とさせてもらおう」

ガーティ・ルーのカタパルトデッキが開き、そこ

からアビスガンダム、カオスガンダム、続いて

量産型MSでありジェットストライカーを装備した

ウインダム5機が出撃する。

一方でミネルバのMS格納庫ではウイングガンダムゼロ

カスタムによく似た機体「ウイングガンダムルシフェル」を見上げる少女がいた。

「……私は戦います、例えあの人のクローン  
でも……」

サイドポニーが似合うこの少女の名前は長瀬湊。

彼女もまたある宿命を背負っていた。

ウイングガンダムルシフェルはティエルの衝動

から出しました！

## PHASE 06 「妖気と微笑み」

ミネルバのブリッジに敵MSの襲来を知らせる

警告音が鳴り響く。

「一体何事!?!」

艦長であるスコールが声を荒げる。

「後方から敵MSです!」

ブリッジクルーである清香がそう告げる。すると  
プレシアがある指示を出す。

「インパルスとセイバー、ルシフェルを発進させて  
ちようだい。あとラウラちゃんに鈴ちゃんには艦の  
防御をやってもらおうわよ、いいわね?」

「「「「はい!」」」」

「もちろん貴方達も出てもらうわよ？」

「だが今回は俺一人で出る。この戦闘が終われば

俺達は帰らせてもらおうぞ？ いいな」

「……ええ、もちろん」

発進が急がれる中で

リンネはヤマト達から呼び出されてMS格納庫にいた。

「リンネ、何でこの戦いに参加するって言ったんだ？」

「もしここで俺達が下手な動きをすれば怪しまれる。

だから俺はこの戦闘に参加してプレシアに自分達は

味方だと敢えてアピールするんだ」

「確かにリンネの言う事に一理あるわね。彼女も

私達の事はあまり信用していないみたいだけど」

「だからリンネはこの戦いに？」

「ああ、お前達は一応ダークライザーに搭乗して待機してるんだ。何かあれば呼ぶ」

「分かった。行こうリアス」

「ええ」

二人はダークライザーへ搭乗する。

そしてミネルバのカタパルトデッキが開く。

「織斑千冬、セイバーガンダム出る！」

「長瀬湊、ウイングガンダムルシフェル行きます！」

最初にセイバーガンダムとウイングガンダムルシフェルが発進する。

「凰鈴音！ザク行くわよ！」

「ラウラ・ボーデヴィツヒ、シユバルツェアグフ  
発進する！」

次に鈴のパーソナルカラーである薄い赤にペイントされたガナーザクウォリアーとラウラのパーソナルカラーで染められ漆黒の騎士を思わせる黒い色のグワイグナイテッドが出撃する。

「月村リンネ、シナンジュ行くぞ！」

「コアスプレnder、行きます！」

最後にリンネのシナンジュが勢いよく飛び出し

コアスプレnderからチェストフライヤー、レッグ

フライヤー、フォースシルエットと順番に出撃する。

空中で三機は合体して一機のMSへと変わる。フォースシルエットを装備してフォースインパルスガンダムへと変わり、VPS装甲が起動すると同時に青、赤、白のトリコロールカラーへと変色する。

「はあああ!!」

箒はインパルスを敵機に向かわせる。フォース  
インパルスはヴァジュラビームサーベルを抜き  
ウインダムを一機切り裂く。

「あの機体、換装型か!? 厄介な!」

エリカはインパルスの姿を見て言うと、アビスを  
海中へと沈めて水中航行形態へと変形させる。

「水中に一機か、行かせない!」

リンネはアビスが水中にいる事を確認すると  
シールドにマウントされたバズーカ砲を取り出し  
それを放つとアビスの装甲にかすった。

「ち、あの赤いの!」

そして千冬はカオスガンダムと交戦していた。

カオスのパイロットはつかさだった。

「うーん、やっぱガイアガンダムだっけ？」

あれの方がまだいいかもしれない……ッ！」

カオスガンダムはビームライフルを放つ、セイバーガンダムはとっさにシールド（空力防盾）で防ぐ。

「その機体はザフトの機体だ、返してもらおう！」

戦闘が勃発する中でガーティ・ルーから一機の

MSが出撃した。黒い可変MSである機体の名前はフラッグ、パイロットはネオだ。

「さてと。その赤い機体（セイバー）も頂きたい  
と思うが難しいか。ネオ・ロアノーク！フラッグ  
出るぞ！」

だがこの戦域にもう一機のMSが接近していた。

「やはりこの世界は……翔真さんの守った  
世界なんです！両軍とも私が叩きます！」

紅い機体、ガンダムエピオンがビームソードを  
展開して援護に向かっていたウインダム4機を  
切り裂く。パイロットは綾崎ニヤル子だった。

そして次回遂に！

翔真「この世界は歪んでいる・・・なら俺が  
駆逐してやる！アヴァランチエクシア、目標を  
破壊する！」

ニヤル子「・・・翔真さん？」

翔真が遂にこの世界に仲間と共に帰還して少し  
戦います！

## PHASE 07 「蒼き騎士」

「いい加減に落ちろォ！」

「手こずらせる！」

リンネは水中から攻撃するアビスガンダムに苦戦していた。アビスは水中から現れると共にビームランスで突くようにシナンジュに攻撃する。

だがリンネは考えながらアビスの動きを読み

シールドで防ぎ切る

「ち！」

「次はこちらからだ！」

シナンジュはビームサーベルを抜き一気に距離を

詰めるが

「君の相手はこの俺だぞ？ 紅い坊主君！」

「あれはフラッグか！ 加速性なら負けはしない！」

ネオの操るフラッグが出現してリンネはシナンジュを別方向へと加速させる。

「エリカ、君はあの二機（インパルスとセイバー）を頼む。いいな？」

「了解！」

「さて見せてもらおか？ そのMSの性能とやらを！」

フラッグはシナンジュを追い掛ける。

「そんな程度か！」

ラウラはミネルバに近付くウィンダムをテンペスト

ビームソードで斬って倒していく。シュバルツェア  
グフとはラウラ専用にかスタマイズされたグファイグナイ  
テッドである。

「まだやるか！」

次にシュバルツェアグフはスレイヤーウィップで  
敵機のビームライフルを絡め取りそれと同時に  
鞭は赤く染まりビームライフルが破壊される

「鈴！」

「任せなさい！」

鈴は射程に敵を捉える。鈴の操るガナーザクウォーリ  
アーはオルトロス高エネルギー長射程ビーム砲を  
構える。

ビーム砲が放たれウインダムを全撃墜する。

一方で湊はモニターでフラッグを捉えていた。

「ターゲット、敵MS！」

ツインバスターライフルを構えたルシフェルはフラッグに向けて発射する。

「ん!? まずい！」

ネオはギリギリの所で交わす。

「ザフトのMS、まだあんなにあるのか? やれやれ！」

「あの機体、カスタマイズされてる？」

フラッグはビームサーベルを抜きルシフェルに近づく。

だがその時、全MSのコクピット内にアラート音が

鳴り響く。湊はモニターで敵を発見しようとしていた時ゼロシステムが僅かな反応を見せる。

「こんな下らない事ばかりして！」

「あの機体は!？」

ルシフェルの前にガンダムエピオンが現れビームソードを降り下ろそうとしていた。

「貴様はまだこんな事オオ！」

「箒さん……ッ！」

箒はニヤル子の駆るガンダムエピオンに迫る。

ビームライフルで数発撃ち、次にヴァジュラビームサーベルを二本持ちエピオンに攻撃する。

「あなた達はただあのプレシアって人に騙され

てるだけです！何故分らないのですか！」

「黙れ！議長は私に力を与えてくれたんだ！あの

人を悪として見るならニヤル子！お前を倒す！」

「口車に踊らされてるのに！だから私達はこの道を

取ったんです！翔真さんや一夏さんなら同じ事を

していたはずです！」

「ッ！その名を出すなァア！」

ニヤル子は箒をプレシアの手から解放しようと

説得を試みる。

「なんだ！お前は！」

エピオンとインパルスが戦闘を行っている時に

エリカの操るアビスが水中から姿を露にして

ビームランスでエピオンを叩き落とす。

「グッ!？」

「邪魔をするな！」

だがインパルスはビームサーベルでビームランスを  
真っ二つに斬る。

「私が隙を許しただど!？」

アビスはまた水中へと消える。

「箒さん！退いてください！紅い機体は私が  
消します！」

「・・・分かった」

インパルスはエピオンから離れてルシフェルは

ツインバスターライフルを構えて発射しようとしたその瞬間。

ザ  
シ  
ュ  
ー  
ン  
!!

鋭い音と共にツインバスターライフルが粉々に  
なり破壊される。そしてエピオンの右手を掴み  
助けたMSが出現する。

緑の粒子を放出して、右腕には大剣を装備し蒼い  
騎士を思わせる機体の名前はガンダムアヴァランチ  
エクシアだった。

「大丈夫か？ニャル子」

「・・・!?・・・翔真さん？」

「ああ・・・まずは状況を突破する！綾崎翔真！

アヴァランチエクシア！目標を破壊する！」

蒼い騎士が剣を振るう！

PHASE 08 「激突」

「行くぞ！エクシア！」

翔真の駆るアヴァランチエクシアがGNソードを展開して最初に接近するインパルス、ガイア、アピスの右腕や足を即座に斬り裂く。

「ッ！！！？？」

「あの機体は？」

「オイオイ！何だよあの速さは!？」

湊、ネオはモニターでエクシアの機動性を見て驚く。だがそれだけではない。

キュイイイン!!

「ッ!!」

「これは・・・頭が急に！」

二人は何かの気配感じ白いイナズマが頭の中に  
駆け巡る。湊はエクシアを見ながら・・・

「(なんででしょうか、この懐かしい感じは・・・

でもそれと同時に悲しみがあるのは何故?)」

湊はいつの間にやら涙を流していた。エクシアから  
感じ取れる懐かしいという感情のせいだろうか。

「今度は何だってんだ！」

ネオの駆るフラッグが人型に変形してビームサーベル  
を抜きエクシアの後方から斬りに挑む。しかし

「遅い！」

翔真はフラッグの攻撃を避ける。エクシアはGN

ビームサーベルとダガーを同時に投げてフラッグに  
見事命中する。右腕や左足に突き刺さり爆発が起き

ネオはその場から離れる。

「・・・この俺が攻撃を読まれたとはな、仕方ないつかさ！ エリカ！ 撤退するぞ！」

「し、しかし！」

ネオの下した命令に反論するエリカだが

「このままじゃこちらがやられるぞ、無駄な戦闘は避けるべきなんだよエリカ。俺の言ってる意味が分かるな？」

「・・・了解」

「でもあの蒼い機体、なんだろうね」

ネオはエリカとつかさを引き連れて撤退する。

戦闘をコクピットのモニターから見ていたリンネは小さく呟く。

「・・・その道を取るなら今後はかなり険しくなるぞ・・・翔真」

一方で翔真はウイングガンダムルシフェルと戦闘に入っていた。

「あのウイングゼロに似た機体は・・・一体」

「悪いですが落とさせてもらいます！」

ルシフェルはビームサーベルを抜きエクシアに近づく。

「・・・させるか！」

エクシアはGNソードでルシフェルの左翼スラスターを見事に斬り次に左手にGNロングブレードでメインカメラを破壊する。

「そんな！」

「コクピットは避けたんだ・・・大丈夫だ・・・

ニヤル子！撤退するぞ！」

「は、はい！」

アヴァランチエクシアとエピオンは急いで戦線を

離脱する。

この戦闘は翔真の介入により終わりを迎え箒達も撤退する。

プトレマイオスに帰還した翔真はエピオンから降りて来たニャル子と再会を果たす。

「翔真さん！お久し振りです！・・・うわああん！」

「よしよし、今は泣いても構わないから・・・」

あれからしばらく泣き止んだニャル子は翔真達に事情を話していた。自分達が何故ザフトに入らず第3勢力として戦っているのかを。

「大体は理解した。つまりニャル子達はプレシアの思惑に勘づきこんな事をしているという訳なのか」

「ニャルちゃん、他の皆は？」

「はい、ちゃんと皆さん生きてますよ！」

「そっか・・ニャル子、エピオンで戦っ・・」

翔真、束、ニャル子が話していた時、先程の会話を聞いて異を唱える者がいた。

「・・・何が第3勢力として戦っただ！」

「・・・！」

「ニツクさん・・・」

「例えどんな理由であれテロリストじみた事

をするのは間違ってるだろうが！」

「それは……」

「そういう理由で戦場に出るな！まだそんな事

しなくても道があったはずだぞ！」

「……自分勝手な意見ですねニツクさん」

「翔真……どういう意味だ」

「話し合いで済めば戦争なんか起きないんだ

そんな理由で戦場に出るな？ニヤル子の方が

完全に正しいと思いますよ俺は！」

「なんだと！」

「大体テロリストじみた事って言ってますけど

俺達は武力介入をするんです。だから……」

「はあ!?そんな話聞いてないぞ！」

「だがこれは皆で話し合った結果だ！あんたの  
ようなわがままは通りしねえんだ！」

「・・・！」

「気に入らないなら出て行けばいいでしょ！」

翔真は少しだけ怒りを込めてその場から立ち去る。

「ニャルちゃん、今はこっちにおいで」

「は、はい」

「何でこんな！」

「ニックさん、この世界を一番よく知っているのは  
俺達です。ニックさんの言う事も分かるけどこう  
でもしないとダメなんです・・・今は」

「一夏・・・ち、勝手にしろ！」

ニックもその場から立ち去る。一夏ははあくくと

溜め息を付きながらも自分の部屋へと戻る。



PHASE-09 「やはり翔真のスケベは直らない、あとファースト  
ミッション」

前半は明るめの話です！

---

ニックとの激突がありながらもあの後自分の部屋に戻った翔真はベッドに寝転んでいた。

「今日は嫌な事ばかりだな。それにしてもあの

ウイングゼロに似た機体はなんなんだ？・・・

取り合えず気晴らしにゲームでもしよ！」

机の棚に隠してあるエロゲームを取り出しパソコンを開きゲームを始めた。

しばらくして翔真の部屋の前に大和とフェイトが立っていた。先程の事もあり心配して来ていたのだ。

「翔真君があれほど怒る所なんて久々に見ました。

大丈夫なんでしょうか・・・」

「うん、でも翔真なら平気だと思っけど入ろっか」

大和とフェイトは部屋のスライド扉が開く。翔真はもしかしすると落ち込んでいるのではないかと

二人は翔真を見る・・・

『ああ！ダメ！こんな所で・・・ご主人様！

ラメ！』

「・・・・・・・・」

部屋中に女の子の喘ぎ声が響き渡っていた。

「なんでしようか・・・この抑えきれない殺気は」

「大和ちゃん、気持ちちは分かるよ」

「はあ〜！やっぱ俺は純愛物じゃないとテンションが  
上がらないんだよな〜」

この綾崎翔真という青年は世界を救った英雄、

真壁一騎（EXODUS）に似ている為イケメンなのだが  
救いようの無いスケベでもある。

「さてと！次はどれにしようかな〜」

「じゃあこれがいいんじゃないかな？」

「お！ありがとう・・・フェイト？」

誰かに後ろからエロゲーのソフトを手渡され

受け取ろうと後ろを向くとフェイトが物凄く

いい笑顔（目が笑っていない）で待っていた。

「あの・・・これは・・・」

「ねえ翔真？ 私達と結婚する時約束した事覚えてる？」

「・・・えとエツチな物は禁止・・・です」

「はい！ 正解です！」

「待ってくれエエエエ！！！！ 大和！ さすがに

刀で！ のわああ！！！！」

「あ、なのは達にも連絡してあるから安心してね？」

「終わった・・・俺の人生終わった！」

「お前一体何をしてそんなボロボロになるんだ？」

「ノーヴェカ・・・あれを喰らった時初めて死を意識したぜ」

MS 格納庫では翔真とノーヴェカがパイロットスーツを着て話していた。

「んで？今から武力介入するとか言ってるけど

何処に介入するんだ？」

「ああ、今から介入というよりもまずは基地の

機能を停止させるんだ。俺達が今から行くのは

トルコからクルジア付近にあるディオキア基地だ。

この基地にはMSが大量に置かれているらしい」

「なるほど、つまり破壊するって訳か。なら

私はガンダムアストレアで出ればいいんだな」

「そうだ。だが人は殺すなよ」

「分かってる」

そして翔真はエクシアの改造機であるイノセント

エクシアに搭乗してノーヴェは赤いカラーが特徴の

ガンダムアストレアタイプFに搭乗する。

「よし、システムオールクリア……行くか」

プロレマイオスMSデッキが開き二機が発進の準備を

する。イノセントエクシアはGNソード、シールドを

装備して、アストレアはプロトGNソード、こちらも

シールドを装備する。

「カタパルトオンライン！システムオールグリーン！発進いつでも大丈夫ですよ〜！」

「気を付けて行くのだぞ！」

ユーリとディアのアナンウスが響く

「了解、綾崎翔真！イノセントエクシア！出る！」

「ノーヴェ・ナカジマ！アストレア！行くぜ！」

二機は艦から飛び出して下にあるザフト基地、

ディオキアを目指す。

ちなみにイノセントエクシアはオリジナル機体で

姿はBFのイメージングエクシアです！

## P H A S E 10 「アンツィオとガンダム降臨」

ザフトのディオキア基地の訓練場では黒い機体がザクを4機相手に模擬戦をしていた。

機体の名はセイバーガンダムのプロト機であるプロトセイバーガンダムだった。黒いカラーが特徴の機体、プロトセイバーはビームサーベルで即座にMDであるザクウォーリアーを破壊する。

「この子には少しクセがあるわね。まだトール

ギスの方が言うことを聞くのに」

コクピットでコンソールパネルを触りながら

呟くのはナターシャ・ファイルスだ。彼女もまた

ザフトに正式なパイロットとしてこのディオキア

基地に駐在していた。

「お見事だったわナターシャ特佐！やはりプロト

セイバーを動かせるのはあなたしかいないわね！」

「そんな事無いわよ、千代美」

通信の相手はこの基地のトップクラスの操縦技術を

持ち、MS部隊アンツィオの隊長安齋千代美である。

皆からはアンチョビ姉と呼ばれている。専用機である

ガンダムヘビーアームズ（EW版）をプロトセイバー

に近付けさせる。

「それにしてもナターシャ、あの話し聞いた？」

「ええ、セカンドステージシリーズが強奪され

たんでしょ？地球連合の特殊部隊ファントムペイン

が行った事件よね」

「最悪よね、うちの機体を強奪して何が

したいのかしら？まずそれが知りたいわ」

「戦争かもね・・・」

ナターシャは外を悲しい表情で見つめていた。

ドゴオオオオオオオン！！！！！！！！

「ッ!? 爆発した!」

「一体どうしたのよ!」

ナターシャが外を見つめていた時に薄緑に光る

ビームが格納庫の屋上にヒットして爆発を起こした。

「アンチヨビ姉! ナターシャ特佐! 大変だ!」

「どうしたの! ペパロニ!」

通信の相手はアンツイオに所属しアンチヨビ直属の

部下であるペパロニである。

「上空に未確認MS出現したんです!」

「マジかよ・・・アンツイオ出撃だ!」

アンチヨビが命令を下すとドムトルーパー5機が基地から出撃する。

そして二機の機体がディオキアに降臨する。

「……これよりミッションを開始する！」

翔真の駆るイノセントエクシアがGNソードを展開して基地施設の破壊を開始する。

「悪く思ふなよ！」

ノーヴェの操るガンダムアストレアタイプFも破壊活動に移る。

「好きにやらせるもんですか！」

アンチヨビの直属の部下の一人カルパッチヨが自分の機体であるドムトルーパーをアストレアに向かわせる。

ノーヴェはアストレアを自在に動かしドムの攻撃を

避ける。

「次はこっちからだ！」

アストレアはシャーリーがリボルバーナックルを元に開発したGNナックルを装備してドムに一撃を与えて行動不能にさせる。

「ッ！何だあの装備は!？」

「ええい！突撃あるのみ！」

ペパロニや他の隊員もアストレアに攻撃を開始しようとするが

「させるかよ！」

イノセントエクシアが一瞬にして武装を破壊する。

「「「.....!」」」

「ナターシャ！これはまずいかも！」

「だとしてもやらなきゃマズイでしょ！」

ナターシャの駆るプロトセイバーガンダムが  
イノセントエクシアに接近する。ビームサーベルを  
二本抜き迫る。

「この動きはナターシャさんか・・・！」

だがエクシアはGNソードだけでプロトセイバーの  
攻撃を食い止める。

「大人しく投降してもらおうわよ！」

「邪魔だ！退け！」

エクシアは左手にGNビームサーベルを持ちプロト  
セイバーのメインカメラを斬って破壊する。さら  
に四脚すべてを斬り落としてコクピットのみと  
なったプロトセイバーは下へと落下する。

「心配するな。殺しはしないんだ」

翔真はモニターに移るコクピットのみプロト  
セイバーを見る。

だが少し油断していると敵を知らせるアラート音が  
コクピット全体に響き渡る。しかし敵は意外な人物  
であった。

「・・・！」

エクシアの後ろにはニツクの操るガンダムDXが  
物凄い早さで来ている。ニツクはXラウンダー

の能力でこの基地にナターシャが居る事を突き止め  
たのだが翔真の容赦の無い攻撃に怒りを覚え自我夢中  
で機体に取り込み今に至る。

「翔真アアアアアア！！！！！！！！」

「どうせこうなるとは思ってたけど！」

DXはバスターライフルを撃つ。エクシアは交わして  
蹴りでダメージを喰らわせてDXもまた基地の下へと

落ちる。

「やめてよね、アンタが俺に勝てる訳ないだろ」

「翔真！何でニックのDXが!？」

「……さあな、だがあの人は敵になるかも

知れない……多分な。撤退するぞノーヴェ」

「お、おう」

基地施設の半分の破壊を済ませて翔真は撤退を決めてディオキア基地から姿を消す。

「翔真、テメー本気なのかよ!……………」

クソオオオオオオオ!……………」

「……今の声は……ニックなの？」

憎しみは何処で生まれるか分からない。

## PHASE-11 「プレシアの思惑と動く影」

翔真達が基地破壊を終えた頃、リンネ、ヤマト、

リアスはIS学園がある人工島の港にいた。ここには

機体の整備施設がある為ミネルバはここに立ち寄っていた。

「なあリンネ、あのエクシアに乗ってたのは

翔真なんだよな？」

「そうだろうな。翔真がその道を取るなら

それでいいのだろう」

「・・・そっか。ところでそろそろ抜けるのか？」

「ああ、ここに長居は無用だし作戦にも協力

したし問題は無いだろう。プレシアの所に行ってくる」

リンネはそう言うとプレシアが居るミネルバへと

戻る。ヤマトはリンネが行く姿を見た後遠くの海を見る。

「俺が居たIS世界とは違いすぎるな。これから  
どうなるのかな・・・」

「どうしたのヤマト？元気がない顔して」

「いや何でもないよリアス。ただ・・・」

「なるほど、あなたの用件は聞き入れたわ」

「なら俺達はこれで失礼するぞ。やる事は

やったからな」

リンネはミネルバのブリッジでプレシアと話をしていた。

「月村リンネ君、ここには居ないけどヤマト君にも

お礼を言っておいてくれるかしら？」

「分かった。じゃあ」

リンネは話を終えてブリッジから出る。誰も居ないブリッジでプレシアは艦長席に座る。

「アスナ、あなたは世界を壊す計画を実行出来な

かったかも知れないけど私が成功させてあげる。

ただし・・・私のやり方でね」

自然と笑みがこぼれ彼女はあの一冊のノートを

片手に部屋を後にする。

ミネルバ格納庫

「俺達はここで別れさせてもらう。短い間だったが  
世話になった」

リンネ、ヤマトとリアスは箒達に別れを告げていた。

「こちらこそ窮地を救って頂きありがとう」

「リンネにヤマト、リアス。また会えるか？」

箒がお礼の言葉を伸べてラウラがリンネ達に問い

ヤマトが答える。

「生きている内はまた会えるさ、だからラウラ達も生き残ってくれ」

「ああ、そちらもな」

リンネ、ヤマト&リアスは機体に乗り込みミネルバから出撃する。

シナンジュとダークライザーが空を飛行する中  
一機のMSが二機を捉える。

「目標確認、ガンダムタイプのMS」

シナンジュのコクピットではコンソールパネルを操作して翔真達の居場所をリンネは探していた。

「よし、翔真達は今イギリスの空域近くに居る。

合流するぞ」

「了解」

ピピピピピピ!!!

「ん？MSか！ヤマト気を付けろ！」

「あれはガンダム!?」

「あのガンダムって確か「ストライク」じゃ!?」

「だが形状が少し違うな」

「その機体はガンダムだな？」

ストライクに似たガンダムは大剣をダークライザーに向ける。

「何故かは知らないがいきなり失礼じゃないのか？」  
ダークライザーはGNソードIIを同じく敵に向ける。

「・・・綾崎翔真を知っているか？」

「……………!?!」

敵パイロットから意外な名前が出てびっくりする

リンネ達だが……………

「無言なら知らないという事か……………なら用は無い」  
機体は大剣を両腰に収める。

「戦わないのか？君は一体……………」

ヤマトが尋ねるとパイロットはこう答える。

「俺の名はルウエン・エル・バヤン。この機体は  
ゲイルストライクだ」

そう言い残すとゲイルストライクガンダムは去る。

「ルウエン・エル・バヤン……………か」

リンネ達はその後警戒しながら翔真達のプロトレマイ  
オス2を目指す。

ルウエン・エル・バヤン（18）

二人の前に現れた謎のパイロット。翔真と何か  
関係があると思われるが不明である。容姿は  
ゼロの使い魔の平賀才人の髪を白くして大人に  
した感じ。性格は冷静。

LA  
G  
A  
T  
I  
X  
1  
0  
5  
ゲイルストライクガンダム

装甲素材 フェイズシフト装甲

武装

75 m対空自動バルカン砲塔システム

「イーゲルシュテルン」×2

アーマーシュナイダー×2

高エネルギービームライフル×1

ウイングソー×2

シールドストライカー

(ビームサーベル×2、対ビームシールド)

地球連合がGAT-X105ストライクを独自に組み上げた機体で主に秘密の組織ファントムペインによって

運用されている「新GAT-Xシリーズ」の内の一機。

接近戦を得意として二本の大剣「ウイングソー」で

MSや戦艦を切り裂く事が出来る。

彼は連合側のオリ主君ですね！彼はあまり  
出て来ませんが来年当たりに連載予定の外伝作品の  
主人公になります。

## PHASE-12 「再び舞い降りる剣」

今回はセシリアを救出します！

---

翔真達がディオキア基地の襲撃をして3日が立った。

プトレマイオスの一室で一夏は今セシリアの所在と

イギリスの事について調べていた。

「イギリスはここまで進展しているのか・・・

それなりに防御力があるのか」

「一夏お父様？」

「心配するなよアインハルト。だから簪と

ここで待っていてくれ」

「はい、私は待っています！」

「あとお母さんが増えるぜ」

「え？」

一夏とアインハルトの会話はさておき

一夏が調べたイギリスの現状はこうだ。イギリスは

MS企業においてこの世界でトップらしい、それと

同時に今はMS開発が難であるザフトから狙われている

だが今、イギリスのMS開発連合トップ兼オルコット家

当主セシリアはイギリスの国民の安全を考え影から

卑怯な手を使うザフトから守る為にザフトの幹部で

あり同い年であるハルト・エドワードと結婚する事を

決めたらしい。

「・・・とう言う事なんだ。力を貸してくれ

翔真！明久！」

「僕は大丈夫だよ。翔真君はどうするの？」

「協力するさ。そうと決まれば行くか？今日

なんだろう・・・セシリアの結婚式は」

「ああ、急ごう！」

そしてプロトレマイオス2からフリーダムガンダム、  
エクストリームガンダム、ウイングゼロが飛び立つ。

イギリス―結婚式場―

セシリア side

わたくしは母国を守る為にイギリスMS連合の

トップに登り詰めました。理由はザフトの卑怯な手

つまりは虐殺、暴行などを治安鎮圧という名目で

国民を苦しめているからでありわたくしは折紙さん、

マドカさん、ハスタさんと共に国民を守る為に

戦い続けました。ですが最近は限界直前であり

ザフトから彼と結婚してイギリスが組織の傘下に

入るならイギリスには手を出さないという条件で  
わたくしは結婚を決意しました。

「一夏さん・・・」

「セシリア、結婚を決意しなくても私達で何とか  
出来たのに・・・」

「マドカさん、でもあなたが死んでは一夏さんは  
きっと悲しみますわ。ですからこれ以上あなた達に  
迷惑は掛けられません」

わたくしはウェディングドレスに身を包み椅子に  
座ってマドカさんと話しています。マドカさんは  
私の側近としてチェルシーと共に頑張ってくれました。

「それでは行きましょうか」

「・・・無力だな私は・・・」

マドカさん、そんな顔をしないでください。  
わたくしは大丈夫ですから。

セシリア side end

結婚式場には政治やザフトの関係者が集まっていた。  
そしてハルト・エドワードはセシリアを待っていた。  
ハルト・エドワードはアスナの弟に当たる

「(結婚か、まあセシリアちゃんは僕の玩具

として楽しませてもらうか・・・ククク」

歪んだ想いを浮かべながら待っていた。

式場の扉が開きセシリアはハルトの元へとゆっくりと歩き出す。彼女の表情は暗い。

「(最後に一夏さんの顔を見たかったです・・・

一夏さん・・・)」

セシリアは初恋の相手である一夏を思い出す。

彼に会いたい、彼に抱き締めてもらいたい。そんな

感情が溢れだす。叶わない願いだとしても・・・

《その結婚ちょっと待ってもらうぜ!!》

突如として鳴り響く声、同時に式場の天井が剥がされる。

「な!! ガンダム!? しかもフリーダムだと!？」

そう、姿を現したのは二年前の戦いで有名となったガンダム「ZGMF-X10Aフリーダムガンダム」であった。フリーダムはセシリアを右手で優しく包み込み式場を後にする。

「あのフリーダムは・・・もしかして！」

マドカは折紙達に電話してある事を伝える。

イギリスの街上空では明久のエクストリームガンダムと翔真のウイングガンダムゼロがザフトのMSと戦っていた。

「行け！アリスファンネル！」

アリスファンネルが展開されMSを一気に撃破する。

「明久！一夏はセシリアを回収したみたいだ！」

一旦撤退するぞ！」

「了解だよ翔真！」

ウイングガンダムゼロ、エクストリームガンダムは  
スピードを上げて一足先に撤退したフリーダムを  
追い掛ける。

海上では大きな蒼い翼を広げたフリーダムガンダムが  
カモメと共に飛んでいた。

「セシリア……遅くなったな。ごめん」

「一夏さん！……今は……抱き締めて

くださいませんか？」

「もちろんだ。今は」

セシリアと一夏はコクピットの中で再会を果たして抱き締めあっていた。

PHASE 13 「断ち切れないトラウマ」

艦に帰還した翔真達は機体から降りていた。一夏とセシリアは一足先に部屋へと戻った。

「セシリア、かなり待たせたな」

「一夏さん。あの、二年間も何処に居たのですか？」

「それを話さないと始まらないよな」

一夏は空白の4年、いやこちらでは2年というべきだろう、一夏はあの戦いの後自分達がしてきた事をセシリアに包み隠さずすべて話した。

「異世界に転移ですか・・・不思議な話ですわ・・・」

「まあそう思うよな。なあセシリア、イギリスは今ザフトに狙われてるのか？」

「はい、マドカさん達も頑張ってくれていたの

ですがわたくし達ではどうにも・・・」

「心配すんな、俺達が居る。セシリアはしばらく

休んでくれ、君は凄く頑張ったんだ。それと

セシリア、遅くなったけど・・・俺と結婚を

前提に付き合ってくれないか？この道を取るしか

君達を幸せに出来ないと思ってるさ・・・いいか？」

「一夏さん・・・はい、慎んで返事を

お受けしますわ！」

セシリアは嬉しさに涙が溢れる。だが娘である

アインハルトを見た時はかなり驚いていた。

翔真 s i d e

ここは何処なんだ？さっきから荒れ果てた戦場を歩いている。下には兵士と思われる人間の死体が転がり周りを見渡せばMSの残骸がある。

「  
・  
・  
・  
・  
あれは」

周りを見渡していると目の前に敵のMSパイロットが

マスクを被ったまま俺に拳銃を向ける。俺も腰のホルダーから拳銃を取り出す。

「拳銃を捨てろ、さもなくば撃ち殺す」

「・・・また・・・私を救ってくれないの？」

翔真・・・」

「・・・明日菜」

マスクを外した敵は死んだはずの白雪明日菜だった。

しかし彼女はもうこの世には居ない・・・

「明日菜はもういない。消えろ」

「冷たいね・・・そうやってまた殺すの？」

「・・・」

「人殺しを簡単にしちゃうんだね？ まあ仕方ないよね。なんせこの街を破壊したのは翔真だもんね」

「・・・？」

不思議に思っている景色が変わる。それはウイングガンダムゼロカスタムがツインバスターライフルで街の人々を殺していた。

「違う・・・俺じゃない・・・俺じゃ・・・」

「翔真、また私を・・・救ってくれないんだね  
・・・さようなら」

そしてバスターライフルから放たれた黄色いビームが明日菜に直撃する。

「やめろオオオオオ!!!!!!・・・はあ、はあ、

夢・・・なのか？」

気付けば俺は夢を見ていたらしい。

「ちくしょう、また俺は・・・ぐ！」

「・・・翔真、大丈夫？」

「さっき声が聞こえたけど・・・」

「シャル、フェイト、ごめん・・・起こしたな・・・」

椿やヴィヴィオ、束達が寝ている中でシャル、フェイトだけが目を覚ましたらしい。

「翔真、泣いてるの？」

「・・・・・・・・」

「もしかして悪い夢でも見たの？」

「大丈夫だよ、ちょっとさ・・・・・・・・」

俺は二人にそう言って布団に潜る。こんな弱虫な自分を見せたくないからな。

翔真side end

場所は変わり格納庫に収められているウイングガンダムゼロの cockpit 内では  
ゼロシステムが作動していた。

これが何を意味するのか？

次回は翔真達の戦いとリンネ達が合流します！

---



## 第二章 ソレスタルビーイング

### PHASE 14 「イギリス奪還作戦」

翌日、プトレマイオスのブリーフィングルームでは千夏とディアーチェがセシリアから聞いたイギリスの情報を今回出撃する翔真、一夏、スバル、ティアナ、に話していた。

「とういう感じで街中の道路の下にはMSが収納されている格納庫があって敵襲が来た時にはいつでも出撃出来るらしいの」

「今回我が考えたのはまずスケベ（翔真）と一夏達は出撃する敵を撃墜して同時にシャルロット、

リアスは後から合流するリンネとヤマト達と共に

基地の破壊するというプランだが大丈夫か？」

「問題は無いがディアーチェ、スケベとは俺の事か？」

「そう聞こえなかったかこのたわけ」

翔真はスケベと呼ばれて腹が立ったのかディアーチェとメンチを飛ばしている。

「まあ翔真はほつといてスバル、ティアナ、出撃準備しようぜ」

「うん！」

「先に行ってるわよ」

スバル、ティアナは先に格納庫へと向かい

一夏はセシリア、簪、アインハルトに呼び止められる。

「無事に帰って来てくださいな」

「アインハルトと一緒にご飯を作って帰りを

待ってるからね一夏」

「今日はカレーです！一夏お父様気を付けて！」

「・・・ああ、ありがとう皆。じゃあ行つて来る！」

一夏はいつもの爽やかスマイルをセシリア達に

見せて格納庫へと向かう。

「うるせえぞこの上から目線野郎が！」

「ぐぬぬぬ！！！！ 言うではないかこのスケベバカ！」

「ぐぬぬぬぬぬぬ！！！！！！！！」

「翔真！早くしないと〜！」

「王様も落ち着きなよ〜！」

翔真とディアアーチェは未だにいがみあっており

フェイトとレヴィはそんな二人に手を焼いていた。

そして・・・

「綾崎翔真、ウイングガンダムゼロ飛翔する！」

「織斑一夏、フリーダム行きます！」

「スバル・ナカジマ、ガンダムヴァーチェ行くよ！」

「ティアナ・ランスター、ガンダムデュナメス  
リペア行きます！」

イギリスに再び接近しているプトレマイオス2から  
ウイングガンダムゼロ、フリーダムガンダム、  
ガンダムヴァーチェ、ガンダムデュナメスリペアが  
出撃する。

一方イギリスの街中ではマドカが自身の専用MS  
であるストライクルージュ（I・W・S・P装備）で  
出現したザフト性のMDビルゴと戦闘を行っていた。

「くたばれエエエエ!!!」

ビルゴの特殊バリアであるプラネイトディフェンサー  
を両手でこじ開けるストライクルージュはその

隙にバルカン砲でメインカメラを破壊していく。

「一夏兄さん、もし居るならこの戦闘に気付いて！」

マドカはフリーダムガンダムを見た時ザフトの支配下になりつつあるイギリスを守る為に折紙達と共にクーデターをしていた。

「翔真、私達に気付いて」

上空を飛行するのはスタイリッシュなフォルムに改修を施されたウイングガンダムだった。パイロットである折紙はバスターライフルで上空を飛行しているジグウーを蹴散らす。

「アイツら、せっかくの命を無駄にするなんて。

本当にバカな奴らだよ！」

コクピットでこう呟くのはハルト・エドワードだった。

搭乗機体はガンダムスローネツヴァイだった。

「君達も命を捨てるような事をするなんて本当に

バカとしか言いようが無いよ！ハァ！」

スローネツヴァイは素早くウイングガンダムに

接近して攻撃を仕掛けようとフアングを放とうと

していた。

「やらせるか！」

しかし翔真の操るウイングガンダムゼロカスタムが

ツヴァイを蹴り飛ばす。ゼロの姿を見た折紙は

通信を繋げる。

「翔真、翔真なんだね？」

「・・・久し振りだな、折紙」

イギリス海域では三機のガンダムが戦場へと向かって  
いた。

「なあルウェン、本当にイギリスでクレーターが  
起こったのは本当なのか？」

「上層部がそう言うんだ。本当の事だろう」

「なら久し振りに暴れちゃおうかしら」

ゲイルストライクガンダム、レーゲンデュエル、  
ヘイルバスターが接近していた。

---

LR・GAT-X102 レーゲンデュエル

装甲素材 フェイズシフト装甲

武装

バルカン砲 「イーゲルシュテルン」×2

175mmグレネードランチャー装備57mm高エネルギー

ビームライフル×1

115mmレールライフル「ルドラ」

ビームサーベル×2

対ビームシールド

バズーカストライカー

(350mmレールバズーカ「ゲイボルグ」)

パイロットアキナ・レスティス

こちらもゲイルストライクガンダムと同じで

「新GAT-Xシリーズ」の一機でデュエルのカラーリング

を変えて中、遠距離戦能力を追加し全領域での戦闘を

柔軟にこなす機体へと強化されている。パイロットの

アキナは女で17歳、容姿はストライク・ザ・ブラッド

のラ・フォリアで髪は金髪。

LH-GAT-X103 ヘルバスター

装甲素材 フェイズシフト装甲

武装

220mm径6連装ミサイルポッド×2

120mm径3連装対艦バルカン×2

バスターストライカー

(350mmガンランチャー、94mm高エネルギー

収束火線ライフル)

特殊装備 ミラーージュコロイド

パイロットカイト・キサラギ

こちらもゲイル、レーゲンと同じであり狙撃戦に

特化した機体となり今では違法である技術ミラーージュ

コロイドを搭載している。パイロットのカイトの

歳は17歳。容姿は銀河機攻隊マジエスティック  
プリンスのアサギ・トシカズ。

## PHASE 15 「憎しみの輪舞曲」

上空に現れたウイングガンダムゼロ。翔真は

街へ降下しようとするビルゴを狙いレバーのトリガーを引く。

「ターゲット確認、破壊する！」

ゼロはツインバスターライフルを構えて砲撃する。

黄色く光る一筋の閃光がビルゴを焼き付くす。

「折紙！まだいけるな！」

「問題無い」

街の中ではティアナのガンダムデュナメス、スバルの

ガンダムヴァーチエが戦闘に参加していた。

「いいスバル！バズーカは使わないようにね！」

「分かってるよティア！街の人はいないね」

スバルはヴァーチエをビルゴに接近させる。ビームサーベルを抜き、ライネトディフェンサーを発動する前にビルゴを倒す。

一方、一夏はフリーダムを降下させビームサーベルでビルゴを瞬殺する。次は右手にルプスビームライフルを持ちかえて素早く狙撃する。

「MD、所詮はマニュアルどおりか」

一夏は冷たい視線でそう言い放つとフリーダムを加速させてサーベルでビルゴをまた破壊していく。

「一夏兄さん！」

フリーダムにストライクルージュが接近する。

マドカは通信で話し掛ける。

「大丈夫かマドカ。ごめんな帰りが遅くなっち

まって、ん？マドカ！回避しろ！」

「え？……キャ      !!」

ストライクルージュに突如何処からか放たれた

ビームが着弾する。

「マドカ！一体何処から……あれは、デュエル

でも違う……」

コンソールパネルを操作してルージュを攻撃した

敵を割り出す。そして見つけ出しモニターに映って

いたのは二年前翔真や一夏の前に何度も立ち塞がった

デュエルだった。だがデュエルはカラーが違い

少しカスタマイズされているようにも見える。

「あれがフリーダムか、確か噂じゃ織斑一夏君

！

が乗っているって言ってたわね・・・うふふ、さて

狩りを始めましょうか！レーゲンデュエル！」

そうこのデュエルはレーゲンデュエル、アキナは

獲物を捉えた狼のような眼差しでフリーダムを

狙う。

「マドカ下がれ！俺がアイツの相手をする！」

フリーダムはビームサーベルを構え直して上空

へと上がる。

「卑怯じゃないのかしらね・・・そう言うのはさ　　！」

レーゲンデュエルは後ろに装備された350mm

レールバズーカ「ゲイボルグ」を取り出す。

アキナはフリーダムに照準を合わせる

「……………もらったよん♪」

凄まじい音が鳴り響き同時にバズーカ砲が放たれ

フリーダムはラミネートアンチビームシールドで防ぐ。  
しかし衝撃に耐えきれず吹き飛ばされる。

「クッ！」

「よくも兄さんを！」

マドカの駆るストライクルージュは対艦刀を抜き取り  
レーゲンデュエルに襲い掛かる。

「ゲイルの元型ね。二年前の機体なんかには負けは  
しないのよ！」

「あの機体はバスターね、しかもかなりの腕ね」

一方ティアナはデュナメスリペアをビルの影に隠す。

何故ならカイトのヘイルバスターが現れ少しの間

銃撃戦に入り今に至る。

「なるほど、あの機体は俺のバスターと同じ狙撃が得意とみた。まあせいぜい俺を楽しませてくれよ」

94m高エネルギー収束火線ライフルを構える  
ヘイルバスター。カイトはデュナメスがいつ出て  
来ても狙撃できる準備をしていた。

「これで全部か。それにしてもあのバスターと  
デュエルはなんだ？」

「気になるか？綾崎翔真」

「ッ!?! ストライク!?!」

モニターに映った機影を見て翔真は驚きを隠せない。

それは自分の元愛機であるストライクガンダムに似た

機体が二本の大剣を振りかざし襲い掛かって来るからだ。

「ウイングガンダムゼロ、パイロットは綾崎翔真だな」

「何故俺の名を……」

「どうやら当たりらしいな。悪いが貴様は仕留め

させてもらう」

ゲイルストライクは大剣であるウイングソーを

巧みに操りゼロを圧倒する。

「お前は一体何者だ！」

「ルウェン・エル・バヤン、俺は貴様のカーボン

ヒューマン……クローンだ　！」

「カーボン……ヒューマン……俺のクローン……だと

!？」

カーボンヒューマン、それはとある人物の遺伝子

データ、記憶、人格のデータを培養した素体に

注入する事で完成する人工生命体。

「当然貴様の過去は知っている。そう『白雪明日菜』の事もなア？」

「……その名を出すなアアアアア！！！！」

翔真の叫びと共にウイングガンダムゼロのツインアイ、胸部中心に付いた球体が光り出す。

「そうか！アイツが……アイツが姉さんを！

綾崎翔真アアアア!!」

先程のルウエンと翔真のやり取りを聞いたハルトはウイングゼロに機体を前進させる。

次回はシャル達の話です。

## PHASE-16 「合流と三人の激突」

翔真達が戦闘をしていた頃、イギリスのMS基地ではリンネのシナンジュ、ヤマトとのダークライザーが既に行動を開始していた。

シナンジュは基地のMSハンガーから出撃したザクウォーリアをビームサーベルで一刀両断する。

ダークライザーはGNソードIIIで同じくザクウォーリア

を斬り破壊する。

「あとは司令塔を破壊するだけだな」

「リンネ、この近くに接近する機影がある。これは」

「援軍らしいな」

基地に近付いていたのはシャルの駆るガンダムAGE-2

ノーマルとケイ（リンネ側のリアス）のガンダム

デルタガンダムカイだ。

「リンネ！無事で何よりだわ！」

「あはは、相変わらずケイは心配性だね。リンネ君

今の状況はどうなの？」

「基地の全般84%の破壊は成功している。あとは

司令塔だけだ。行くぞ！」

シナンジュがビーム・ライフルを向ける。しかし

その瞬間

「よくもやってくれたな！だがこのクリーム・ニッケが来からには貴様らを生かしては返さんぞ！」

「ッ！」

突如上空から現れた青いMSがシナンジュに向けて  
ビーム・ワイヤーを放つ。リンネはギリギリ回避する。

「リアス！あの機体の事分かる？」

「待ってヤマト……分かったわ！あれは

ザフトのMSAMYMO3モンテローよ！」

青いMSの正体はモンテローと呼ばれるMSらしい。

「パイロットは誰なんだ、まあそんな事よりも

ガンダムを見たからには帰すわけにはいかないよ！」

ヤマトのダークライザーはGNソードIIを両手に

持ちモンテローロに襲い掛かる。

「はん！黒いからと言って！」

モンテローロはビーム・シャベリンでダークライザーの一撃を食い止める。

「ガンダムだからと言って全てが強いわげじゃないのだよ！」

モンテローロはシャベリンを強く突きダークライザーを圧倒する。

「く！何だこの強さは!？」

「ヤマト！ここはトランザムを発動した方が！」

「ダメだ！この世界ではまだトランザムはダメだ！」

「これ以上は無理か！シャルロット！ケイ！ヤマトの援護を頼む！」

「了解!!」

そして場所は戻り……………

「お前がその名を口にする事は絶対許さない！

ゼロ！俺に勝利を見せてみる！」

「……………なんだこの強さ……………チィ……………！」

翔真はゼロシステムを駆使してゲイルストライクを  
追い詰めていた。

「僕を無視するなアアアア!!!」

ウイングゼロとゲイルストライクが戦闘を行って  
いる中でハルトのスローネツヴァイがバスターソード  
を構えて接近する。

「お前に構っている隙はねエエエ!!!」

ゼロは斬撃を交わしてビームサーベルでツヴァイの  
左腕を斬り落とした。

「くそがアアアア!!!」

「邪魔だ、退け！」

再びゼロに近付こうとするもゲイルが立ちはだかる。  
ウイングソーでメインカメラと右腕を斬られた  
ツヴァイは蹴り飛ばされ近くに落下する。

「邪魔者は消えたぞ。さて再戦に行くでしょう」  
ゲイルストライクはウイングソーを構え直して

ゼロに近寄る

「上等だ、ゼロ……俺を導いてくれ　　！」

ウイングゼロが分離したバスターライルをゲイル  
ストライクに向ける。

PHASE 17 「Still Sis」

ファフナーがかなりヤバイ事になったな、一騎の  
右腕が消滅した時かなりビックリした。番外編で  
蒼穹のファフナーEXODUSとコラボしますので  
お楽しみに！

「そこだァァ!!」

ウイングガンダムゼロはバスターライフルをゲイルに  
向けて放ちルウエンは上手く回避する。

「チィ！」

だがルウエンも反撃が出来ず次の手に困っていた。

「お前は絶対に許さない、ルウエン・エル・バヤン！」

翔真はモニターに写るゲイルストライクを睨み

ながら言い放つ。ウイングガンダムゼロはバスターライフルを合体させツインバスターライフルにして

発射体勢を整える。

「殺す……お前が俺のカーボンヒューマンで

あろうとなアア！」

プロレマイオス翔真の自室

「！！」

東、なのは、大和は何かを感じ取る。

「東ちゃん、大和ちゃん、今のって……」

「翔真君の怒り……」

「ダメ……そんな事したら　　！お願い届いて！

なーちゃん！やーちゃんも力を貸して！」

「うんはい！！」

「私もしょうくん程じゃないけど……使えるだよ、

『イノベーター』の能力を……クロッシング」

場所は戻り戦闘区域、ウイングガンダムゼロが  
ツインバスターライフルを放とうとしていた。

コクピット内は黄色い光りが覆い尽くされていた。

「敵は倒す、ただそれだけだ！」

翔真は怒りでゼロシステムで我を忘れ掛けていた。

（翔真やめて！そんな事したらあなたの悲しみが

また増える！）

（やめるのだ翔真！）

乙姫、アルビオンが心の中で話し掛けるも翔真は

それさえも聞こうとはしなかった。だがその時……

【しょうくんダメだよ】

「ッ!？」

【翔真君、自分を見失っちゃダメ！ヴィヴィオ達との約束を破る気なの！】

【お願いです。もう……翔真君の悲しむ顔を見たくありません】

「……ヴィヴィオ達との約束……」

【大丈夫。私達が側にいる……しょうくんは一人じゃないから】

「東……なのは……大和……フェイト達も

……そうだ、俺はもう決めたんだ。これ以上血で手を染めないって!!」

ツインバスターライフルを下へと落として

ウイングガンダムゼロはビームサーベルを抜いて

ゲイルの両脚を切断する。

「バカナッ!?」

「もう撤退しろ！お前らの負けだ！」

ゼロはゲイルをアキナのレーゲンデュエルの元へと

投げ捨てる。アキナはそれに気付きゲイルを受け止める

「ゲイルがこんなに!?カイト！かなりマズイわ！」

「なんだと!?く、撤退しかないか！」

ヘイルバスターと中破したゲイルストライクを

抱えたレーゲンデュエルは戦闘区域から撤退してゆく。

「ありがとう、東、なのは、大和。あと一息だ、行くぞ！」

白い翼を羽ばたかせゼロは空を舞う。

クロッシング

東が二年前から使えるようになった念話のような

能力である。相手の顔を思い浮かべて話し掛ける事で

直接どんな離れた所でも繋がる事が可能でありその

人物が見ている景色を自分も見ることが出来る。この

能力が使える為かはやて、ラフェルは東が純粋種の

イノベーターに覚醒しているのでは？と推測している。

## PHASE-18 「嵐の予感」

場所は変わり、リンネ達はクリム・ニックの操る

モンテローと未だに交戦していた。

「ビーム・シャベリンはこう使う！」

「やるな！」

モンテローはシナンジュに攻撃を続けていた。

シャベリンを巧みに操りシナンジュを吹き飛ばす。

「クッ！（シナンジュが俺の動きに付いて来れない！）」

「まだ俺達が居る！」

ヤマトの駆るダークライザーがGNソードIIIを構えて

モンテローの左腕を切断する。

「今が好機だよケイ（リアス）！」

「そのようね！」

シャルのガンダムAGE-2がハイパードッグズライフを構えようとした時シャルはこの基地にもう一機近づく機影を確認する。

「識別は……ザフト、あれが例の機体だね」

モニターに映し出されたのはZGMF-X11Aリジエネリートガンダム。パイロットはザフトの赤服で箒達と同じエースであるダージリンである。

「あの人はまた、モンテローがボロボロじゃないの」  
ダージリンは無惨にも破壊されたモンテローを見て溜め息を付く。

「仕方ありませんね、倒します！」

彼女の駆るリジエネリートはビームサーベルを展開してガンダムAGE-2に襲い掛かるがシャルは即座に反応してビームサーベルで対応する。

「私の一撃を止めた！……  
やりますね」

リジエネレイトはAGE-2を蹴り飛ばしてそのまま破壊しに掛かる

「そうやっても動きは丸見えだよ！ケイ！」

「任せてちょうだい！」

ケイの駆るガンダムデルタカイがロング・メガ・バスターを放ちリジエネレイトの装甲に着弾する。

「ッ！バカな！」

「ヤマト！」

「ああ！」

最後にダークライザーがGNソードIIIでリジエネレイトの右脚、左腕を斬り爆発が起きる。

「なんなのこの強さは！ここは撤退した方がいいかも  
しれないわね」

ダージリンはやむを得ず撤退を選びモニター口を  
連れて撤退していく。

その後、リンネ達は基地を完全に破壊してその場から去りこの事はいずれ箒達に知らされる。

場所は戻りイギリスの街中では翔真の駆るウイングゼロがツインバスターライフルを放ち上空にある輸送機から降り注ぐビルゴを一瞬にして焼き付くしていた。

一夏もザフトMSを完全に破壊まで追い込んだ。フリーダムはビームサーベルを抜いて機体を次々に

一刀両断していく。

スバルやティアナ達も地下へと機体を潜らせて  
潜んでいたザフトのMSを撃破した。

そして翔真達は見事にイギリスをザフトの手から  
解放して初勝利を収めた。

場所は変わり、IS学園理事長室

「本当なのアリシア？ イギリスにあるMSが  
全て全滅したというのは」

「本当だよお母さん、しかも中にはフリーダムや  
ウイングガンダムゼロの姿も確認されてる」

「……………これは伝えるべきかしらね、彼女に」

プレシアはパソコンの画面に映し出された箒の  
プロフィールを見ていた。

「(彼女なら綾崎翔真や織斑一夏を倒せるわ。

なにせ『SEED』を持っているのだから)」

戦いは加速していく。

PHASE-19 「赤龍帝ドライグと篠ノ之箒。動き出すダブルオーとユニコーン」

翔真達の戦いから数日、イギリスは完全に中立国を貫く宣言を世界中に言い放ちさらには翔真達チームの存在を明かし「ソレスタルビーイング」の映像を流しザフト、連合は映像を見て警戒心を強めていた。

何故ならフリーダムガンダムやウイングガンダムゼロが映っていたからだ。二年前の戦いを終わらせた英雄として有名だからである。

ザフト最高評議会議長プレシア、地球連合最高司令はソレスタルビーイングを敵視するようになっていた。

箒  
s  
i  
d  
e

ここは……何処なんだ  
はずじゃないのか？

？私は確かあの後寝た

《初めてましてと言うべきか、我が主よ》

龍？お前は？それにここはどこなんだ……

《俺の事はドライブで構わねえぜ。ようやく

目覚める事が出来た、あとここはお前の精神世界だ》

私の精神世界、ドライブだったか？何故お前は

ここに居るのだ？

《さあな、気付いたらお嬢ちゃんの中に居たのさ》

そうだったのか、寂しくは無かったのか？

《何？……フハハハハハ　　！》

何がおかしい

《いや、寂しくはないかって言われたのは

初めてでな。まあ孤独は慣れてるさ》

変わっているな

《別に、俺からすればいつもの事さ。じゃあな  
お嬢ちゃん。また俺の話し相手にでもなってくれ》

うき！………箒

！………起きて

！

「……アリシアか　？」

「私しか居ないでしょ？」

私が目を見ますと目の前にアリシアの顔がズーム

アップしてこちらを見ていた、確かここは私と

アリシアの部屋だったな。

「箒も起きた事だし、一緒にご飯食べに行かない？」

「私は構わないぞ」

私はアリシアと共に部屋を出る。今の私はIS学園

三年生でありちゃんと授業は受けている。

「箒！アンタここに居たのね！」

「大変な事が起きたぞ！」

突然部屋に入って来たのは鈴とラウラだった。

何故か慌てた様子だ、まさか敵襲か？

私は二人に連れられ食堂へと向かう。中に入ると

沢山の女子達が大きいテレビに映った映像を夢中で

見ていた。だが次の瞬間私は目を疑う光景を目にした。

何故なら二年前から行方知らずだったフリーダム

ガンダムとウイングガンダムゼロがザフトのMSを

撃破していたのだ。

「……………」

「フリーダムって事は……………一夏なのよね……………!?」

「嫁は生きていたんだ、となればお兄様も！」

鈴やラウラは何処か嬉しそうに言っていたが私には  
喜びという物が不思議な事に沸かなかった。という  
よりも何故一夏達はザフトのMSに攻撃しているのか  
が分からない。なんで……なんで今さらになって  
私の前に現れたんだ、一夏……ッ

！

箒sideend

場所は変わり時空管理局 MS 第 10 番 MS ガレージで  
翔真の愛機であり今は MS としては強力すぎる為に  
しばらく乗っていない為に封印措置を施された  
ダブルオーライザーとリンネの真の愛機である  
ザルヴァートルモデル RX-0 ユニコーンガンダムが  
立っていた。二機のコクピットは当然誰も居ない為  
真っ暗だ。だが……………

《お願い、一騎や総士を……………助けて》

その声ガガレージ内に響き二機のツインアイが  
徐々に光を灯していく。

PHASE 20 「G s p i r i t S 隊が見た流星」

今回は新たなオリキャラ二人出ます！

---

ミッドチルダ管理局地上本部、提督室では大東と

ラフェル、和馬がソファーに腰を掛けてIS世界に居る

千夏からの定期報告書を見ていた。

「バカな！翔真達がやっている事はテロリスト同然

じゃないか！」

「隊長！俺達だけでも翔真達の世界に行かせて

ください！」

「だが……このままにしておいても世界が混乱

するだけだからね。なら元G s p i r i t s 隊をミッドチルダ海上基地に集結させるんだ。なんとしても翔真君達  
がやっている事は止めなくては……」

二年前に建設されたミッドチルダ海上基地、そこには

懐かしのG s p i r i t s 隊の面々が面々が揃っていた。

「さて諸君、準備は大丈夫かね？」

「俺達ならいつでも行けますよ」

「私達も大丈夫です」

第一小隊、第二小隊の隊長であるヴェルンハルデ・

アドラーと和馬が大東の問いに答える。

「翔真に会ったらぶん殴ってやらないとな。今の

アイツがやっている事は！」

ラフェルは翔真のやっている事に怒りを覚えていた。

全員がMSへ搭乗しようと機体へ近寄っていた。

しかし、基地内に敵MSを知らせるサイレンが鳴る。

「敵MS!?こんな時に！」

基地に接近する機体はまるで鳥を思わせるような

MAだ。そして徐々にガンダムタイプのMSへ変形する。

「あれはウイングガンダム!？」

大東はガンダムを見てウイングだと判断する。

「ナガスミ・ハヤセこれより任務を開始する、

ターゲット海上基地、破壊する」

ウイングのパイロット、ナガスミは基地に目掛けてバスターライフルを向ける。

「いかん！全員退避しろ！」

大東の指示により全員がその場から離れる。だがバスターライフルから黄色いビーム砲が放たれ基地の半分を焼き尽くした。

「なんて事を！」

「あっちが仕掛けて来たんだ！容赦はせんぞ！」

Gspirits隊第一小隊がMSに全員乗り込みウイングガンダムへ攻撃を開始しようとしていた。

「まるつきり動きが見えてるぜ！」

ウイングガンダムはビームサーベルを抜き接近する機体の急所を狙い次々に行動不能に陥れる。

「悪いがこれも任務なんでね」

バスターライフルを再び構えて撃ちあつと言う間に第一小隊を壊滅までに追い込んだ。

「あの機体のパイロット只者じゃないぞ！」

「ですがウイングガンダムならばわたしのエピオンの方が上、それを証明しましょう！」

「邪魔をするなら排除する！」

ミイリスはガンダムエピオン（EW）、ラフェルはガンダムラファエル、和馬は代用機としてHi-Vガンダムへと搭乗してウイングガンダムに攻撃を開始する。

「翔真先輩の所にアンタらを行かせるわけにはいかないんだ！許してくれ！：

……コードZERO」

ナガスミがそう言うとモニターに『ZERO』と  
標示される。ウイングガンダム ツインアイ、  
球体が明るく灯る。

バーニアを勢いよく吹かせてまず最初にラフェルの  
ラファエルと交戦する。

ビームサーベルを使いラファエルを押ししていく

「バカな!?なんだこの力は！」

「悪いけどやらせてもらおうよ！」

サーベルを器用に振り回して右腕を斬り次に  
左足を斬る。

「後ろは貰いました！」

エピオンがウイングの後ろを取る、だがウイング

は攻撃を交わしてエピオンを背負い投げして  
ラファエルと激突させる。

「あと一機！」

「こんのオオオオオ……!!」

Hi・レガンダムが接近しながらビームライフルで砲撃を  
開始する、ウイングはシールドで防ぐ。

「ッ！さすがはニュータイプって奴か！」

ピピピピ!!

「ん！この基地に敵機、しかも速い……」

海上基地の付近に全身が黒く染まった機体が接近

していた。コクピットで操縦レバーを握りしめた

少年が炎の上がった基地を発見すると………

「サーペントテール6、アストレイ・エクシエス  
戦闘に入る」

眩きスピードを加速させる。

ナガスマ・ハヤセは自分が連載しているクロスアンジュ  
で活躍するオリ主君です！次回もお楽しみに！

## PHASE 21 「勇気の滑空」

アストレイ・エクシエスが海上基地に接近する、

ナガスミはモニターで機体の映像を見てウイングガンダムを向かわせようとするが、和馬のHi・Vガンダムが

行く手を阻む。

「何故こんな事をする！」

和馬が通信を繋げてナガスミに問い掛ける。

「何故つかて？ アンタ達が関わる事じゃないからさ！」

ウイングガンダムはHi・Vガンダムを蹴り飛ばし

さらにバスターライフルを放ちメインカメラを破壊する。

「本当に悪いな、だがこれは翔真先輩達の問題なんだ、

アンタ達は引っ込んでろ！」

ナガスミはSEEDを発動して機体を前進させる。

ウイングガンダムはビームサーベルを再び抜き

Hi・レガンダムの武装、ファンネル、腕や脚を

斬り裂いて基地の下へと投げた。

「これで任務完了か。さて次はあの機体らしいな！」

右翼、左翼のスラスターから推進剤が一気に

吹き出し全速力でアストレイ・エクシエスに向かう。

「来るなら……容赦はしない」

エクシエスのパイロットの少年はそう言うと言と操縦レバーを操縦する。エクシエス

はカードリッジ式ビーム発生器

内蔵実体剣シユベルトゲールを構えてやって来た

ウイングガンダムに一撃を与えようと降り下ろす。

「そう簡単には！」

ウイングガンダムはシールドで斬撃を食い止める。

ナガスミは巧みにウイングを操りながらエクシエスとの距離を取りバスターライフルのカードリッジを入れ替える。

「ターゲット、未確認MS！」

バスターライフルが放たれ、エクシエスは簡単に交わして武器を構えたままウイングに迫る。

「しつこいんだよ！」

ナガスミは操縦桿にあるスイッチを押す。するとウイングの頭部に二基内蔵されたバルカン砲が放たれる、連続で弾がエクシエスの装甲に当たっているがダメージは無い。

「終われ！」

エクシエスがシュベルトゲールを振り回して

ウイングを突き飛ばす。

「やってくれるな、だが俺の相棒を甘く見るな！」

ウイングはバード形態へ変形する。ナガスマミは

スピードを上げてエクシエスを翻弄する。しかし

エクシエスは直ぐに本機の後ろを取る。

「なんつう早さだ！あの機体は一体なんだ！」

「これで」

ピピピピ!!

「……!!」

空中でドッグファイトを繰り返している内に

二機の目の前にダブルオーライザーとユニコーンガンダムが現れる。

「あの機体は確か……翔真先輩、リンネ先輩の機体」  
「機体に人が乗っていない!? どういう事なんだ……」

そしてダブルオーライザー、ユニコーンガンダムは  
時空のゲートを開き翔真達が居るIS世界へと向かう。  
「待て！」

ナガスミとエクシエスのパイロットも時空のゲート  
へと入っていった。

結局海上基地は半分が壊滅したが幸いには死者は  
出ていない。

ウイング、エクシエスはそのままダブルオーライザー  
やユニコーンと共に時空のゲートへと消えて行った。

次回からは箒達メインです。

## P H A S E 22 「宣戦布告と覚醒する少女」

フリーダムやウイングガンダムゼロのイギリス急襲の映像を見た箒や鈴達。彼女達は戸惑っていたがつかの間次は地球連合軍がザフト及びソレストアルビーイングに宣戦布告を宣言した。連合軍はこの機会にザフトを打倒する目標を掲げ敢えてこの宣言をした。

しかし、宣戦布告を聞いたプレシアは何も動揺せず地球連合軍の身勝手さに溜め息を付いていた。そんな中情報機関からプレシアは連合軍が新たな兵器を開発したと耳にしていた。その新兵器は連合が所有する基地、ガルナハン基地あるらしい。プレシアはミネルバ艦長スコールに基地攻略を提案して箒達をあちらへ

と向かわせる。

ミネルバのブリッジには箒、千冬、湊、鈴、ラウラが集められスコールから作戦内容を聞いていた。

「良い皆？今回が初めての作戦になるわ。私達が

今から攻めるのは連合ガルナハン基地よ。でも

まずは連合軍の海域を抜けないとならないわ。恐らく

連合も仕掛けて来るわよ」

まず問題はミネルバで行くに当たりガルナハン

までは最初に海域を越えないとならない。しかし

基地周辺の海域は守りが固くここを突破しなければ

ならない。

「箒はフォースインパルス、千冬はセイバーガンダム

で空中を警戒に当たって。鈴とラウラはミネルバのカタパルトデッキから敵の攻撃を頼むわね。湊は私の指示があるまでは待機していて。以上よ」

「了解」

「了解だ。スコール、お前の指揮を頼りにしている」

「任せてちょうだい。今から少し厳しくなるわよ！」

麻子、全速前進よ！」

「ラジャー」

ミネルバの操舵である冷泉麻子がだるそうに答え

スコールは艦長席のシートに座りミネルバはガルナハン基地を目指し海域を突き進む。

三時間後、ミネルバは海域をなんの問題は無く

突き進んでいた。空中では箒のフォースインパルス、千冬のセイバーガンダムが飛んで警戒に当たっていた。

しかし既にミネルバは連合によって囲まれていた。

「！……十時の方向に連合の艦隊を感知、これは

……連合のデモイン級です　　！」

「確かイージス艦だったわよね、アリシア他には？」

「ッ！ミネルバの回りに艦隊が！艦長！」

アリシアが慌てたように報告する。

「なるほど。私達が来る事を事前に知っていたようね。

優花里、敵のMSは？」

「は、はい！敵MSは主にウインダムばかりであと

一機未確認不明機がいます！」

と秋山優花里がスコールに報告する。

そして外では箒、千冬がウインダムとの交戦に入る

「悪いがやらせてもらうぞ！」

フォースインパルスがヴァジュラビームサーベルを  
抜きウインダムの胴体を斬っていき撃墜する。

「こんな数を出してくるとはな！」

千冬は機体や艦隊の多さにビックリするがすぐに集中する。セイバーガンダムは高エネルギービームライフルでウインダムのメインカメラを破壊する。

「喰らいなさいよ！」

ミネルバのカタパルトデッキでは鈴の操るガナーザクウォリアーがオルトロス高エネルギー長射程ビーム砲を放ちミネルバに近づくウインダムを一掃する。ラウラもシュバルツェアグフで戦う。

「取り舵10！撃って！」

ミネルバから多数のミサイルが発射しデモイン級に複数当たりデモイン級は爆発した。

「退けエエエエ!!!」

箒は叫びながら敵を倒していく。

フォースインパルスはビームサーベルを二本構えて二機同時に撃墜する。

だがその時、インパルスに接近する機体があった。

「あれはMAか!?だがデカイ!」

MAザムザザーがインパルスに攻撃を始める。

「チッ!」

フォースインパルスはサーベルを一旦収めてビームライフルをザムザザーに向けて放つが陽電子リフレクタービームシールドで防がれる。

「ビームが効かない!サーベルしかないか!」

「待て篠ノ之!あまり一人で勝手な行動は……クッ!」

千冬はインパルスの元へ向かおうとするがウィンダムによって阻まれる。

「デカイからと言っていい気になるなアアア！」

フォースインパルスはザムザザーに近づきビーム

サーベルを降り下ろそうとしたが……

ザムザザーのクローに左脚を掴まれる

「……！」

ザムザザーはそのまま勢いよく海の方へインパルスと共に落下を始める。

「うわああアアア……！」

ミネルバのブリッジではアリシアが今にも泣きそうな表情で箒を心配していた。

「箒！」

ザムザザーは落下寸前でインパルスは海面へと投げ出され同時に左脚が破壊される。このまま行けばやられるのはもう目に見えていた。

「(結局私は……………)」

箒はゆっくりと目を瞑る。すると今までの思い出が頭の中で駆け巡る。最後にある場面が過った。

それはアリシアと初めて会った時の事だ。二人で  
いろんな場所へ行って二人で泣いて、笑って、時には  
喧嘩もするが箒にとって命を賭けてでも守りたい  
アリシア：：：：彼女の心の中に再び闘志が灯り始める。

「こんな所で、こんな所で私はアアアアアア！！！」  
叫んだと同時に箒の中で何かが弾けた。目はハイライト  
が消えて赤色一色に染まる。

今、怒れる瞳の少女が反撃を開始する。

## PHASE 23 「紅の乙女」

「このオオオオオオ！…… まだ落ちないか！」

「ッ！ 遅いぞ！」

箒はザムザザーから放たれたビームの砲撃を交わした。だが交わしたと同時にインパルスの装甲が灰色に変色する。そうエネルギー切れを起こしたのだ。

しかし慌てる様子もなく箒はミネルバに通信を繋げる。

「ミネルバ！ アリシア！ デュートリオンビームを！」

あと、レッグフライヤー、ブラストシルエット、

ソードシルエットを射出準備！」

左脚が破壊され尚もビーム砲を放ち続けるザムザザー

の砲撃を交わすフォースインパルスがミネルバに近づく。

「艦長！」

オペレーターであるアリシアがスコールに判断を委ねる。

「いいわ、彼女の指示に従って」

スコールの許しが出てアリシアは準備を始める。

「デュートリオンチェンバースタンバイ！ 測敵

システム、インパルスを捕捉しました！ デュートリオン  
ビーム照射！」

アリシアの声がブリッジに響き渡る。同時にミネルバから細かい光のビームがインパルスの頭部に命中する。

そしてパワーは満タンになりインパルスは元の

蒼、赤、白のトリコロルカラーへと染まる。

「これで終わりにしてやるぞ、連合のMA！」

インパルスは勢いよくバーニアを吹かせてザムザザーに向かう。ザムザザーの砲撃を交わしながら箒は

徐々に距離を詰める。

「な、来るな！」

「怖がっていないで早く撃ちなさいよ！」

「ヒイ！」

ザムザザーのパイロットである三人の女性は近寄って来るインパルスに恐怖心を見せていた。特に一人は二年前に戦った事がある《ストライクガンダム》とインパルスの姿を重ねていた。

「嫌だ……まだ、まだ死にたくないよオオ  
！」

だがそんな願いなど通じない。インパルスはもう

目の前に来ていた。箒はビームサーベルをそのままコクピット部分に突き刺し、  
ザムザザーは爆発を起こし

ながら海へと落ちた。

ザムザザーの爆破をモニターで確認した箒はミネルバ  
に再び通信を繋げる。

「シルエット射出！早く！」

「わ、分かったよ箒！」

次にミネルバからレッグフライヤー、ブラストシルエット、ソードシルエットが  
射出される。破壊されたレッグ

フライヤーが分離して新たなレッグフライヤーが

装着されバックパックはフォースからブラストシルエットに換装する。

さらに後から来たソードシルエットからエクスカリバー

を二本抜き艦隊の攻撃に移る。

ケルベロス高エネルギー長射程ビーム砲を放ち

デモン級を次々と破壊する。ウインダムが接近

する中で次にエクスカリバーで二機同時に撃墜する。

「はあアアアアアア!!!」

エクスカリバーを連結させアンビデクストラス

フォームにさせて器用に振り回して敵MSや艦を

一刀両断する。

次々と炎が上がり艦を破壊していく様子をミネルバの

クルーは呆然として見ていた。

「あれが筈なの？」

「……………筈」

「篠ノ之！」

コクピットの中で鈴、ラウラ、千冬も鬼神のような戦いぶりを見せるインパルスに呆然としていた。

そして最後の一隻になりブラストインパルスは  
ビームシャベリンを投げて最後の一隻を破壊した。

「はあ、はあ、はあ、はあ、……ふう〜」

箒は息を整えて敵機や艦隊が居ないかを確認すると  
ミネルバへと機体に向けて帰還する。それは鈴達  
も同じであった。

こうして敵の包囲網を突破したミネルバはガルナハン  
へと向かう。



## PHASE 24 「二人の少年と翔真達の休日」

箒達の激闘が終わった頃、イギリスの上空に時空の

裂け目が現れその中からナガスマのウイングガンダムと数分前に遭遇した黒い機体であるガンダムタイプのMSが弾き出された。

「クッ………！」

二機はそのまま自由降下しながら二人は機体のOSを再起動、体勢を立て直すと近くの無人島へとお互いに離れた位置に不時着し、互いに向き直り動かない。

「聞こえているか、黒いMSのパイロット。俺は敵じゃない……話を聞いてくれ」

ナガスマミは意を決して、謎の黒いMS近付きシールドとシユベルトゲールに触れ接触回線でパイロットに呼び掛けた。しばらくしてハッチが開き連合のパイロットが降りて来た。事情を説明して自分が敵では無い事を伝えるとパイザーを脱ぎ露になる顔を見てナガスマミは驚く。何故なら自分とあまり年が変わらない少年だったからだ。少年は敵ではないと分かったのか、互いの事を話し始めた。

「えとマルスで良かったんだっけ？」

「うん」

今二人はそれぞれ機体の足元に座っている。ナガスマミがコクピットにあったコーヒーをマルスに差し出し互いにコーヒーをちよつとづつ飲みながら互いの事を話し

始めた。

「お前あんな近くで何してたんだ？」

「……任務で……あの世界（ミッドチルダ）とは

違う世界から来たんだ」

「そうなのか!? という事は次元転移者って奴

じゃないのか? ……任務って事はもしかして軍人なのか  
？」

「……うん……そうなるかも……あ、僕は軍人

じゃなくて傭兵なんだ……これ以上は守秘義務で

内容は……ごめん」

「別に構わねえよ。そうか傭兵か、でもよ元の

世界に居る家族とか心配してんじゃないのか？」

「……ごめん、家族は居ないんだ……それに

記憶が無いから居た事すらも分からない」

「ッ! すまねえ、つい……」

「あ、気にしないでナガスミ君。でも信頼出来る

仲間が居るから大丈夫だよ」

「そっか………だけどこれからどうしたもんかね〜」

ナガスミは果てしなく広い海を見ながら呟く。

あのイギリス奪還作戦の戦いが終わり、翔真達は今セシリアの計らいでイギリスに滞在しており翔真は今ニヤル子と二人っきりで出掛けていた。

「しかし二人ってのも懐かしいもんだな」

「本当ですよ翔真さん！今日は私の彼氏として

1日中付き合ってもらいますからね！」

ニヤル子は頭にある少し長いアホ毛をふいんふいんと揺らしながら翔真にこう告げた。

「分かってるよ、なら今日だけはお前の彼氏になって

やるさ。それと俺は今アレックス・ディノって名乗ってるからアレックスと呼ぶんだぞ」

「はい！このニャル子！心得ておりますよ！」

二人は何処から見てもカップルにしか見えない。だが

翔真達の後を追っている者達がいた……………

「ねえシグナムさん」

「なんだなのは」

「このイライラは何なんだろうね？」

「少なく共、あの光景を見ているからだろう」

「あの……………二人共　　？少しは落ち着いて？翔真の

事だからもしもの事は……『ねえフェイトちゃん』は、はい　　！」

「もしもの事があった時じゃ遅いんだよ？」

「だから私達は見張る。分かったか？フェイト」

「う、うん……………どうしようツバサ、ネプテューヌ　　！」

あの二人完全に目のハイライトが消えてるよ！これ

じゃ翔真が死んじゃうよ！」

「そうだった時はネプテューヌに止めてもらうしかないね」

「フェイトちゃん！そうだった時は私に任せてよ！

私が女神化すれば大丈夫だよ！」

なのは、シグナム、フェイト、付き添いでツバサ、ネプテューヌが来ていた。

これから翔真の戦争（デート）は大変になるだろう。

---

今回出て来たマルス君の容姿はSEEDデスティニーの

シン・アスカとT O L O V E への結城リトを足してニで  
割った感じですよ。近々プロフィールを乗せるので  
お楽しみに！

## PHASE 25 「デート・ア・ブレイク」

翔真とニヤル子はイギリスの街中を歩いていた。

ニヤル子は嬉しさのあまり腕に抱き付いていた

「な、なあニヤル子？ 少しくつつきすぎじゃないか？」

「いえいえ！ これくらいはしてもらわないと！」

「はあ、分かった」

二人はそれからカフェへと入り少し早いランチへと

移る。翔真とニヤル子はペアー席に座りサンドイッチ

とコーラを2つ頼んだ。

「うーん！ やっぱりサンドイッチは美味しいですね！」

「そうだな。今度はサンドイッチを作ってみようかな」

「是非作ったら私に下さいね！」

「もちろんだ、ニャル子、口にタレが付いてるぞ」

「ほ、本当ですか!？」

「じっとしとけ。俺が拭いてやる」

翔真はそう言うのとズボンのポケットから生地が布で

出来たハンカチでニャル子の口の近くに付いたタレを

拭き取る

「(翔真さんの顔が……近い　！それにしても翔真さん

本当にかっこよくなりましたね……きゃ　！)」

ニャル子はちよっと興奮していた。

一方近くの茂みで二人を観察していたなのは達は

「デイバイン！ シュー……」

「待って！ 待って！ なのはさん！ こんな所で砲撃魔法  
なんか射ったら大変な事になるよ!？」

「ツバサ君？ 退いてくれるかな、翔真君をころ……」

お仕置き出来ないから」

「今何か危ない単語が出ようとしてなかった!？」

僕の聞き間違いじゃないよねネプテューヌ!？」

「うん！ 確かに危ない言葉が出ようとしてたよ!！」

「し、シグナム！ 少しは落ち着いて？ ね?！」

「ぐぬぬぬ！ なんて羨ましい事を!！」

フェイトは今にも二人に襲い掛かりそうなシグナムを  
落ち着かせていた。

「だがフェイト！ もしニャル子に翔真を寝取られたら  
どうするのだ!！」

『悪いシグナム達、俺とニヤル子はこの関係なんだ！だからお前らとの関係はここで終わらせる！』

『はう♡ああ！……翔真さん　　！もつと突いてくだ

ひゃい！は♡……ああん　　！』

「みたいな事に！」

「シグナム!? 昼ドラの見すぎだよ！どれだけ

翔真の事心配なの！」

「ていうか翔真を何で昼ドラのような主人公に

仕立てあげてんの!？」

シグナムの行き過ぎた妄想にツッコミを入れる

フェイトとツバサ、ネプテューヌはSLBを放とうと

するなのはを落ち着かせていた。

二人はいろいろとお店に入っけいき翔真はニャル子に洋服などをプレゼントして時間はあつという間に過ぎ今は公園で、ベンチに座りながら夕日を眺めていた。

「今日は楽しかったです、ありがとうございます！」

翔真さん！」

「楽しめたなら良かったよ。なあニャル子、俺達がやろうとしている事は間違っているのかな？」

「……いいえ、私は間違っていないと思います。」

多分ザフトも連合もこの争いを早く終わらせようとはしないでしょうね……だから翔真さん達は戦い

続けてください！思いだけでも、力だけでも、

それがある限りは」

「思いだけでも……力だけでも……か……

そっか、ありがとうなニヤル子」

「翔真さん……」

二人は向き合い徐々に顔を近付けこのまま行けばキス出来るような感じだった。

しかし、当然それを許さない者達は………

「「翔真（君）？」」

「……なのは、シグナム、フェイト」

上空にはレイジングハート、レヴァンティン、バルディッシュを構えたのは達がいた。どうやらツバサとネプテューヌでは抑えきれなかったらしい。

「まさかそのままキスをしたりしないよね？ これでも私信じてたんだよ？」

「フェイトがヤバイ！ ニャル子掴まってろ！」

「にゃ!？」

翔真は白龍皇の光翼を展開して広げなのは達から逃げる。だがなのは達も追い掛ける。

余談だが四時間の逃亡劇が繰り広げられたのは  
言う間でもない。

次回対にガルナハン基地攻略戦！

## PHASE 26 「ローエングリゲート」

箒の圧倒的な力により連合の包囲網からなんとか突破したミネルバ、今現在はガルナハン基地周辺に身を潜め友軍の支援を待っている所だ。

ミネルバの艦の中の部屋の一室では箒がベッドに寝転び先程の戦闘の事を振り替えていた。

「あの力は一体なんだ？あの瞬間に私は……」

（お嬢ちゃん、あまり考えすぎると体に悪いぜ）

「（ドライグか、私は考える事が好きなんだ。

だから出来るだけほっといて欲しい）」

（ハハハ、その言い様なら心配する事もなかった

みたいだな)

「(私が落ち込んでいるとでも思ったか?)」

箒が念話でドライグと会話していると部屋の扉が開く。

「アリシアか」

「私で悪かったね?」

入って来たのはアリシアだった。

「悪いとは言っていないのだが?」

「ふふふ、冗談だよ。それよりも箒、体は大丈夫?

さっきの戦闘の後だし何処か痛むとかある?」

「大丈夫だ。こう見えても体は鍛えてある」

「そうなの!?!そうは見えないけど……」

「あ、アリシア! そう言いながら何故私の胸を見る!」

アリシアはマジマジと箒の豊満な胸を見て、箒は

恥ずかしいので両腕で胸を隠す。

「えー、いいじゃん別にー！」

「それでも恥ずかしい！あ、そろそろ作戦会議があるから私は行くぞ！」

箒は顔を紅くしながら部屋を出た。

「箒は本当に可愛いんだから♪」

そしてミネルバのブリーフィングルームには箒、ラウラ、鈴、湊が用意された椅子に着席する。数秒後にパイロットスーツを着込んだ千冬が部屋に入る。「皆揃っているな？これより今後の作戦の経緯を説明する」

千冬は箒達に大画面ディスプレイに表示されたガルナハン基地の地図を見せる。そこから今の現状と過去にザフト地上部隊が突入を試みたが失敗に終わったという話を千冬は淡々と話す。

「そして今新たに写り変わった画面に表示されて

いるのはこの基地の厄介な兵器ローエン格林砲だ。

これの直撃を受ければミネルバは無事ではすまない」

「じゃあミネルバはあんまり動けないんじゃない」

「話は最後まで聞くんだった風、このローエン格林砲は

いつでも簡単に撃てるものじゃない。一発放たれ

たとしてその後のエネルギーチャージに時間が掛かる、

この間に連合はMSやMAを沢山出してくる、さらに

今回は新たなMAが確認されている」

ディスプレイにMAゲルズゲーが映し出される。

「今回は私、凰、ボーデヴィツヒ、長瀬がミネルバの  
防衛兼敵MSを撃破する事、そして篠ノ之、お前には  
別の任務を任せる。これを渡しておく、ゆつくりと  
目を通せ」

千冬はデータメモリーを箒に渡す。

「は、はい」

「それでは各員MSへ搭乗してくれ、以上で作戦  
会議は終了する！」

箒は一先ず先にコアスプレnderへと搭乗して  
出撃準備する。

「坑道を利用して敵の砲台を叩くか、だが坑道に

光が無いというのはどういう事だ？それに……」

箒は先程千冬から言われたある言葉を思い出す

『モビルスーツでは無理でもインパルスなら

抜けられる、データ通りに飛ばせばいい。ただし

坑道を抜け出すタイミングを決して間違えるな。

早くても、遅くてもダメだ』

今回箒はコアスプレンドーでローエングリング砲台の

すぐ傍まで続いている坑道を利用して敵の砲台に強襲

するという任務を任されたのだ。千冬達は艦の防衛や

敵MSの撃破はもちろんだが一番の目的は砲台で守りに

入っている陽電子リフレクターが搭載されたMA

ゲルズグーを引き離す事だ。

「やってやる。私とインパルスならやれる！」

【ハッチ解放！進路クリア！コアスプレンダー

発進どうぞ！……箒、気を付けてね】

「心配性だなアリシアは……篠ノ之箒　　！

コアスプレンダー、行きます！」

ミネルバのインパルス専用のカタパルトハッチが開きコアスプレンダー、チェストフライヤー、レッグフライヤーが射出され作戦は間もなく開始される。

## PHASE 27 「攻略開始」

箒の操るコアスプレnderはレッグフライヤー、チェストフライヤーを引き連れて坑道跡に接近していた。先程整備班が取り付けたライトがコアスプレnderに装着されている。

そして坑道跡の入り口を発見した箒はそのまま中へと侵入する。しかし

「な、何だこれは!? 真っ暗すぎるぞ!」

案の定、坑道の中は箒が思っていたよりも真っ暗でライトを点けるもののそれでも少し前が見える程度である。

「本当にデータだけが頼りかッ!」

箒は周りにある岩の壁にぶつからないようにコア

スプレnderを上手く操りそのまま前へと突き進む。

「何がデータ通りに飛べばいいんだあの人（千冬）！」

箒は千冬の言った言葉を思い出す。思い出すだけで

徐々に苛立ちが増す。

「何がお前には別の任務を与えるだ！本当は

あの人自分でやりたくなかっただけじゃないのか！」

コアスプレnder、チェストフライヤー、レッグフライヤーは坑道の中を突き進んでいく。

一方でミネルバは砲台の付近まで接近していた。  
だが目前には地球連合の新型の量産型MSジンクス30機  
とウインダムが艦に接近していた。

ミネルバのMSデッキのカタパルトが開き

セイバーガンダムとウイングガンダムルシフェルが

出撃体勢に入る。

「織斑千冬、セイバー発進するぞ！」

「長瀬湊、ウイングガンダムルシフェル行きます！」

二機は出撃して襲い掛かろうとするジンクスに

攻撃を開始する。

セイバーガンダムはヴァジュラビームサーベルで

機体の二脚を破壊してジンクスを撃破する。

「ルシフェル、私に勝利を見せてください！」

ルシフェルは湊の声に答えるようにツインアイを

光らせる、ジンクスはビームサーベルを降り下ろそうと

したがルシフェルは回避、そのまま背後に周り込み

ジンクスの左腕を切断する。

「そこです！」

湊はゼロシステムを駆使しながらジンクスを圧倒していく。次にツインバスターライフルを構える

「ターゲット、ジンクス」

ツインバスターライフルの銃口から勢いよく

物凄い威力のビームが吐き出されジンクスは一瞬にして消滅した。

湊は一旦コクピットの中で息を吐き、再び戦闘に入る。

そして、セイバーガンダムとルシフェルの驚異を知りMAゲルズゲーが動き出す。

「ラウラ！ 私達も行くわよ！」

「言われなくとも！」

ミネルバから鈴のガナーザクウォーリアーとラウラの

シュバルツエアグフが出撃して戦闘に参加する。

またザフトからの援軍でグフ数機も戦闘に入る。

そんな中で上空に翔真が操るウイングガンダムゼロ  
カスタムが現れる。ステルス機能がある為箒達には  
バレていない。翔真はモニターに映ったインパルス  
を見ていた。

「インパルスガンダム、あのパイロットが  
箒って訳か……一夏にはこれからキツイ戦い  
になるな」

翔真はそう呟きながら戦闘を再び見る。



PHASE 28 「揺れる旋律の大地」

ここで皆さんにご報告！心滅獣身オウガさんが

この作品のASTRAYに当たる作品、オリ主が再びIS世界で

頑張る話だけど……side ..ASTRAYを書いてくれています！本編

とのクロスはありますので是非そちらも見て

楽しんで頂けたらと思います。

「しつこいのよ！」

鈴の操るガナーザクウォーリアはオルトロス

高エネルギー長射程ビーム砲を放ちミネルバに接近

していたウインダムを撃墜する。

「こんな数、いくら来ても無駄だアアア！」

ラウラは叫ぶとペダルを踏み込みシユバルツェアグフを加速させる。シユバルツェアグフはテンペストビーム

ソードで機体を次から次へと斬り裂いていきさらには  
ジnkスまでをも斬る

「く、来るなアアア！」

「怯えるなら戦場に出て来るな！」

テンペストビームソードを上から降り下ろしウインダムは真っ二つにされて撃破される。

「ハアアアア!!」

千冬と湊は先攻して防衛部隊に突入する。

湊の操るウイングガンダムルシフェルはビームサーベルを抜いて敵機を真っ二つに斬る。

「遅いですよ！」

ルシフェルのメインカメラの頭部に装備された

2門のバルカン砲から弾丸が弾き出されウィンダムのメインカメラにヒットして爆発する。

基地の司令塔では女の連合軍司令官はモニターに

映し出されたミネルバ、さらにはMS部隊を見て徐々に

苛立ちが立ち込める。

「く、まさかミネルバもいるなんて……………」

「司令！このままでは！」

「分かっているわよ！だったらローエン格林を発射しなさい！」

「了解！！」

そしてローエン格林砲がミネルバを照準を

合わせて赤いビーム砲が発射される。

「まずい！取り舵一杯！メインエンジンの出力を最大にして！」

「言われなくても……ッ　！」

操舵士である麻子はビーム砲ギリギリ回避するが

ミネルバは地面へと落下する

「ミネルバ！」

ミネルバの落下にビックリする千冬だがそんな暇は無い。ローエングリンが発射された後防衛MS部隊がセイバーガンダム、ルシフェルに襲い掛かる。

「(箒さん、急いで！今なら！)」  
湊が箒に最後の想いを掛ける。

当の本人、箒は薄暗い坑道を飛行し続けていた。

「まだ見えないのか……」

コアスプレnder、チェストフライヤー、レッグ  
フライヤーの三機は飛行をまだ続ける。すると少し  
づつ光が見え始める。

「出口か！」

コンソールパネルに手を伸ばす箒

「これで！行ってくれエエエ!!」

コアスプレnderからミサイルが放たれ周りの

岩に壁はミサイルが当たり粉々となりコアスプレnder

は外へと脱出、次にチェストフライヤー、レッグフライヤーという順番だ。

「な、何だ!？」

ゲルズゲのパイロットの一人である女がコアス

プレンダーを見てビックリする。

そして三機は一機のMSに変形して青、赤、白のトリコロールカラーに染まったインパルスが姿を現す。

「ハアアア!!」

インパルスはビームライフルを射ちウインダムのコクピットを撃ち抜く。機体は次々と爆発する。

「クッ！ローエングリン砲を守るんだ！あの機体を

落とせエエエ!!」

「させるわけないだろ！」

ゲルズゲーがビームライフルをインパルスに向けようとした瞬間、千冬のセイバーガンダムがビームサーベル二本でゲルズゲーの右腕、左腕を破壊する。

「今だ篠ノ之！」

「了解です」

インパルスはローエングリン砲台の近くまで行く、しかし道を遮ろうとウインダム二機が立ちはだかる。

「雑魚に構っている暇は無い！」

インパルスは両腰のホルダーからフォールディングレイザー対装甲ナイフを取り出してウインダムのコクピットに突き刺して二機は爆発する。

「こんな物破壊してやる！」

ローエングリン砲の目の前まで来たインパルス、ビームライフルを射ち続け、さらにはシールドの裏に装備されたビームサーベルを取り出してローエングリンを破壊した。

「箒……そんな戦い方じゃ何かを失うぜ」

戦闘の一部始終をウイングガンダムゼロカスタム

のкокピットで見っていた翔真はそんな事を呟きながら

機体を動かす。

ウイングガンダムゼロカスタムはそのまま戦闘区域

から離脱した。

このガルナハン基地攻略は見事ザフトの勝利で幕を

下ろした。

だが箒はまだ知らない、後に一夏と戦う事になろうとは。

次回はあのジャンク屋が登場！SEEDを知る皆さんなら

誰  
か  
は  
分  
か  
り  
ま  
す  
よ  
ね  
？

PHASE 29 「ロウと翔真とマルス」

ローエングリン砲破壊から一日が経過した頃、翔真

なのは、フェイト、は翔真の自室ではミッドに

居るはやたと通信で話していた。

「それではやて、今のそちらの状況は？」

『うくん、別に問題はあらへんけどラフェル達が

そっちに行こうとしとる……、大東さんもこのまま

テロ行為を許すわけにはいかん！って言うてるし』

「やはりな」

「翔真君、もし大東さん達が敵になったらどうするの？」

「その時は……倒すまでだ。大体あの人 (大東) が

そんな事言える立場なのかよ」

「翔真……もしかしてまだあの事件の事……」

フェイトは翔真を心配な眼差しで見詰める。そんな緊迫した空気の中で翔真は口を開く。

「地球蒼生軍の残党が引き起こしたあの事件を

俺は忘れない……絶対にだ……」

翔真が言う事件、それは新暦74年クラナガン南部

次世代エネルギー開発研究所で起きた地球蒼生軍残党が起こした立てこもり事件である。翔真もその現場に居合わせた……というよりも愛機であるウイングガンダムゼロカスタムで戦闘に参加していたのだ。

「なのは、フェイト、もし俺があの人達の敵に

なっても……俺に付いてきてくれるか　？」

「当たり前だよ！私やフェイトちゃん、束

ちゃん達もヴィヴィオも翔真君の味方だから……」

「私達は翔真の味方だから安心して？」

「ありがとう、二人共」

『うゝん、そろそろイチヤイチヤは終りそうかなア？』

「はやて、イチヤイチヤはしてないから！まあ

それはそれとして俺の『クアンタ』はどうなってる？」

『うん、こちらは順調やけどもしかすると開発が

中断になるかもしれへんのよ』

「そうか。なら近々俺が一旦ミッドに戻って

クアンタを貰いに受けるか」

『そんな時はうちらも協力するから安心してなア？』

「だけど……いいのかよはやて、俺達に味方なんて

してさ……」

『別にええんよ、うちは翔真君に一杯助けてもらった

しせてももの恩返しや。そや！実は翔真君に言わなア

事があるんよ!』

「分かってるよ、ダブルオーとユニコーンの事だろ？」

『やっぱそっちに行ってたんか……分かったわ』

取り合えず今日はここまでやね』

「ああ、色々ありがとうはやて」

翔真ははやてとの通信を終えるとなのは、フェイトと

共に部屋を出た。

母艦であるプトレマイオス2は今、ある場所に身を寄せていた。それはマスド  
ライバー施設を備えた人工島

ギガフロートである。実は二年前にアーモリーワン

とは別に建造されたIS運用と軌道エレベーター開発

および建築材料を打ち出す為に IS 学園、連合が建設  
していた物だったが情勢悪化に伴い白紙にされそのま  
ま未完成のまま放置されていたが、この世界に存在する  
ジャンク屋組合とある人物の協力でギガフロートを  
組合本部へと変えたのだ。

そして翔真は今ある人物と話していた。

「俺はロウ・ギュールだ！宜しくな翔真！」

「はい、こちらこそ（まさか伝説のジャンク屋に  
会えるとは光栄だ）」

ロウ・ギュール、彼もまた樹里と共にこの世界に  
転移してきた人物であり伝説のジャンク屋とも言われ  
ている。

「そう言えば今ハンガーにあるあのGはお前のか？」

「ウイングガンダムゼロの事ですか？あれ俺の

専用機ですよ」

「そうなのか!?ならあの機体をメンテナンスしても

大丈夫か？見た所色々と傷付いてる部分もあるしよ」

「ロウさくん！ナガスマ君との模擬戦終わりました！」

「あのドライツバード、なかなかの威力だった……」

あれ!?翔真先輩じゃないですか！」

「よ、ナガスマ元気そうだな……ん　　？その隣の奴は？」

「紹介しますね！こいつはマルス・レディーレです」

「初めまして！マルス・レディーレです」

「マルスだな、俺は綾崎翔真だ。宜しくな」

二人は自己紹介を終えると握手を交わした。

これで今年最後の更新終了です！それでは皆さん！

よいお年を！

次回は翔真、マルス、リンネ、ヤマト、ツバサ、一夏  
明久それぞれの日常回です！

## PHASE 30 「シュミレーションとソーナ・シトリー」

今回は翔真、マルス、ツバサ、リンネ、ケイ（リアス）、ヤマト、リアスがメイ  
ンです！

ロウがウイングガンダムゼロカスタムを整備して  
いる中、翔真はナガスマとマルスと共にロウが  
半壊したウインダムの胴体部分を修復しシュミ  
レーションシステムを積んだコクピットの中に  
居た。

「これで……ばっちりだ。よしマルス、今俺が  
入れたデータの中に沢山のガンダムの戦闘記録が  
入ってる。シュミレーションだからと言って気を抜く  
なよマルス」

「はい！」

「よし、ナガスミ降りるぞ」

「了解でさあ」

翔真、ナガスミはコクピットから降りてマルスのみが一人残り操縦レバー二つ握りしめシュミレーションが開始される。

モニターが起動してシュミレーションの場所はどうやら宇宙である事が想定されていた。しかし数々の任務をこなして来たマルスにとって宇宙での戦闘は慣れている為動揺はしない。

「僕の機体エクセスみたいだね。ん？敵機を確認」

モニター、つまりは機体の前方に二機のガンダムが

接近していた。近付くにつれて二機の情報が表示される

『GAT-X105 ストライクガンダム』

『GAT-X207 ブリッツガンダム』

「G系統のMS……ッ！」

ストライクとブリッツ、かつて翔真と一夏が使っ

いた愛機だ。マルスは機体を加速させて戦闘へと

突入する。

ブリッツがランサーダートを射出してエールストライ

カーを装備したストライクはビームライフルでマルス

の駆るエクシエスに攻撃を開始する。

「……」

マルスは二機の攻撃を余裕で交わす。そしてエクシエス

はシュベルトゲールを構えて迫る二機を同時に真っ二つ

にして撃破する。

「まだ来る……」

エクシエスの前に現れたのは翔真の駆るXXX-G00W0

ウイングガンダムゼロ(EW)、リンネの駆るRX-0

ユニコーンガンダム、一夏の駆るZGMF-X10Aフリーダムが接近する。データ上の戦闘とは言え気を抜く事を

しないマルスは今は目の前にいるガンダムを倒す事だけを考える。

「……………ッ！」

エクシエスがリンネのユニコーンガンダムに接近する。だがこの後マルスは信じられない光景を目の当たりにする。

ユニコーンガンダムはNT-Dを発動しておりさらに右手に持ったビームマグナムの持ち手が緑の結晶に覆われる。

「結晶が生えた!？」

これにはマルスもビックリする。それはそうだろ、

何せ緑の結晶が生えたのだから。普通のMSでは絶対に有り得ない事だ。

「……何であろうと倒す」

エクシエスはウイングゼロ、フリーダム、ユニコーンに近付く

一方で翔真とナガスマは大型画面に写しだされたエクシエスの戦闘を見ていた。

「……」

「翔真さん！マルスの奴スゲーだろ！あんなほんわかしてる奴なのに戦闘になると別人みたいに……」

さっきから黙ってるけどどうしたんです？」

「いや、ただマルスの戦い方に少し違和感があつてな」

「違和感？」

「ああ、マルスはMSの操縦テクニックは俺や一夏

リンネと同等だ」

「マジですか！」

「嘘は言わないさ。だが一瞬の迷いも見せないあの

戦い方は……」

「オーイ、そんな所で何してんだ？」

「おう、ノーヴェ、それにアインハルトも一緒か」

翔真の後ろからノーヴェとアインハルトがやって来た。

「ナガスマミさん、お久し振りです」

「アインハルトちゃん、元気そうだな」

「あのコクピットに誰か乗ってるのか？」

「ああ、今はシュミレーションしてる。終わったら会ってみるか？」

「そうだな……気になるし会ってみるよ」

ノーヴェはそう言うとその場で待機する。その最中翔真はある事を考えていた。

「(マルスは確か傭兵だってナガスマミから聞いたな。

マルス・レディーレ……アイツの事を調べて

みるか……)」

場所は変わりプトレマイオス艦内では平行世界を繋げる扉がある部屋にリンネ、ヤマト、リアスが居た。

「しばらくお別れねリンネ」

「ああ、でも順番が回れば会えるさ」

「そうね。じゃあそろそろ行くわね。ヤマト君にもう一人の私、じゃあ」

「ああ」

「また会いましょう！」

ヤマト、リアスに別れを告げたリンネ側のリアスは

扉を開けて元の世界へと帰って行った。

一旦扉を閉めてリンネは再び扉を開けた。するとある人物が立っていた。

「リンちゃん、お久しぶりです」

「久しぶりだな。ソーナ」

「………ソーナ      !?!」

その人物はヤマト達も知っている人で名前をソーナ・シトリーという。

今の主人公紹介

綾崎翔真(19)男

身長 180 cm

体重 55 kg

容姿、長かった髪は切り今はガンダムSEED Destinyのシン・アスカに似ていて瞳は蒼い。だがイノベーターの能力を使う時は瞳が金色になる。

性格以前よりも静かになり穏やかになった。だがスケベなのは相変わらず。

好きな事料理を作る事、子供達と遊ぶ事

恋人、シャルロット・デュノア、篠ノ之束、山田真耶、

大和、高町なのは、フェイト・T・ハラオウン、シグナム

風鳴翼、ロスヴァイセ

子供、綾崎ヴィヴィオ、綾崎椿

搭乗MS ウイングガンダムゼロ(EW)、ダブルオー

ライザー、バンシィノルン、イノセントエクシア

イメージCV 石井真

今作の主人公の一人。純粹種のイノベーターでありながらも第四真祖である。基本的にスケベは相変わらずだが恋人である束達や子供達を大切にしており自分が命を掛けてでも守り抜くと決めている。MSでの戦闘の際はコクピットは狙わず武装やメインカメラを破壊する。これは翔真にとつての殺さずの誓いであり椿やヴィヴィオの事を考えて二度と人を殺さないと決めている。ちなみに体は鍛えているが着痩せするタイプである。かなり成長し、4年前と比べてかなりイケメンになっている(なのは談)

月村リンネ(18)男

身長 180 cm

体重 57 kg

容姿 蒼穹のファフナー EXODUS 皆城総士そのまま  
性格 クールだが熱い一面もある。

恋人 リアス・グレモリー、ソーナ・シトリー、

サラマンディーネ、シェリル・ノーム

好きな事 チェス、読書

イメージ CV 石田彰

搭乗 MS ガンダムデルタカイ、シナンジュ、

ユニコーンガンダム

翔真の親友でソレスタルビーイングの中では

ディアーチェと共に作戦プランを練るなど戦術予報士  
でもあり頭脳派と言っても過言では無い。この戦いに  
参加したのは翔真に恩を返す為に参加している、また  
スバル、ティアナからは何故かは知らないが慕われ

ている。ヤマトとは妻が同じリアスである事から  
何かと気が合う。過去の戦いでユニコーンの力を  
使い過ぎて生命限界が来ている。寿命は三年と  
シャマルに言われている。ニュータイプ能力を持つ。

次回はソーナがマルスのお母さん宣言をする！

PHASE 31 「ノーヴェとアインハルトとの出会いとソーナの宣言」

マルスはシュミレーションを終えコクピットから降りて来た。

「はあ、はあ、はあ、今………終わりました」

「大丈夫かマルス？」

「はい。翔真さんはデータ上ですがかなり強いんですね」

「別にそんな事は無いけど、でも俺や一夏、リンネを

倒せたなら対したもんだ。ほら取り合えず水でも飲め。

水分補給は大切だからな」

「は、はい」

翔真は水が入っているボトルをマルスに手渡すと

その場から去る。

「(データ上で翔真さんや一夏さんはかなり強かった。

もしかすると効を超えるのかな?)」

マルスは先程の戦闘を終えて翔真の操縦テクニックに付いて考えていた。もし翔真と本当に戦うとしたらどうなるのか? 心の中では密かに翔真と戦ってみた」と想っているマルス。

「(今度模擬戦でも頼もうかな)」

水を飲みながら翔真に模擬戦を頼もうかと考えていた。そんな中、マルスに近づく人影が二ついた。

「お前があのコクピットに乗っていたパイロットだよな?」

「凄い汗ですね」

「ほえ?」

マルスが横を向くとそこにはノーヴェとアインハルトが居た。

だが次の瞬間、マルスは頭に激痛を覚える

「ッ！」

痛みの中、マルスは頭を抑える。同時にある記憶が映し出される。

『アレスお兄ちゃん！抱っこして！』

『え？全くハーティは甘えん坊さんだな』

『お、こんな所に居たのね二人共？そろそろご飯だから降りていっらしゃい』

『はい、それじゃあ行こうか。ハーティ』

『うん！』

「（この男の子は………僕なのか

？それに

……うっ　　！）」

「お、オイ！大丈夫か！」

突然頭を抑えて苦しむマルスにノーヴェはビックリしたのか彼に駆け寄る。

「アインハルト、ツバサを呼んで来てくれ」

「わかりました！」

ノーヴェは冷静にアインハルトにツバサを呼んで来るように言って、アインハルトはその場から走り去る。

「特に異常は見られないね、多分偏頭痛だと思う」

メデイカルルームへとノーヴェと共に来たマルスは

ツバサの診察を受けていた。

「ツバサ、本当に大丈夫なんだろうな？」

「あれあれ！ノーヴェちゃんはツバサの診察を

信用出来ないのかな！」

ノーヴェに向けてそう言う人物はナース服を来た

ネプテューヌである。

「別にそこまで言っていないけどさ……まあ異常が

無いなら良かった」

「なんか心配してもらって、申し訳ありません」

「でもマルスさんが無事でほっとしました」

異常が無いと聞いた為か、アイハルトは胸を撫で下ろす。

「でもマルス、ちゃんと休憩はしないとダメだよ？」

「そうそう！たまにはゆっくり行くのもいいもんだよ！」

「は、はい」

ツバサとネプテューヌのアドバイスを聞いたマルスは

頷きメデイカルルームから出ようとした時スライドドアが開きマルスはある女性とぶつかる。

「うわッ！」

「キャ！」

「す、すいません！怪我はありませんか!？」

「……………」

「あ、あの……………大丈夫ですか　？」

「可愛い……………」

「え？」

「可愛いです!!」

女性はマルスを突然抱き締めた。ツバサはその女性を知っていた。

「もしかしてソーナさんですか!？」

「ツバサ君、お久しぶりですね」

女性はリンネの彼女であるソーナ・シトリーであった。

「私、決めました。私はこの子のお母さんになります！」

「………」

「「「はぁアアアアアア!?!?!」」」

ソーナのぶつとび発言が出ている中、マルスは

女性特有の柔らかいあれに埋もれて鼻血を出していた

そうだ。

---

オリキャラの紹介

ツバサ・カミヤ（15）男

身長 174 cm

体重 50 kg

性格 基本的に皆に優しいが戦闘になると冷酷な一面を見せる事もある。

容姿 デート・ア・ライブの五河士道を幼くした感じ。

恋人 ネプテューヌ、搭城小猫

搭乗MS ガンダムバルバトス、ガンダムジェミナス

イメージCV 保志総一郎（そらのおとしもの智樹に近い感じ）

異世界に存在するゲームギョウカイに住む少年で

ありネプテューヌのマネジャーでもある。基本的に

誰にでも優しく接する、中でもナガスマミとは仲が良く

後にマルスとも親友関係を築く。ちなみに医療の資格を

持っている為プロトレマイオスの艦内では医者としても

活躍している。

ナガスマミ・ハヤセ（17）

身長 178 cm

体重 50 kg

性格 社交的で明るい

容姿 武装錬金の武藤カズキ

恋人 サリア、サラマンディーネ（平行世界同一人物）

紅月カレン

搭乗 MS ウィングガンダム（TV版）ガンダムエピオン

イメージ CV 福山潤

クロスアンジュの世界とコードギアスの世界で

戦い抜いて来た経験を持つ。今回は翔真に頼まれて

G s p i r i t s 隊を足止めする為にミッドチルダへとやって

来たが同時にマルスと共に翔真がいるIS世界へと

飛ばされる。マルスとは出会ってまだ間もないが

今は親友に近い感じで親しくしている。

PHASE 32 「翔真からの依頼と飛び立つ翼」

プトレマイオスⅡの艦内にあるバー、マスターを  
シュテルが努めてバーのカウンター席には翔真、リンネ  
が片手にノンアルコールカクテルを持ちながら  
話をしていた。

「相変わらずソーナちゃんは変わってないな。

いきなりお母さん宣言と来た。だったらお前は親父  
だな」

「あんな大きい子供を持った覚えはないぞ。だが

悪くはないな」

リンネはフツと笑うとカクテルを飲む。

「はあ、翔真さん！」

「あれ？ マルスじゃねえか」

バーに入って来たのはかなり落ち込んでいたマルスだった。

「元気が無いが何かあったのか？」

「リンネさん、実はうっかりしてノーヴェさんが

入浴中に中へと入ってしまった……」

「つまりあれか？ その後からノーヴェから口を聞いてもらえないと……」

「はい」

リンネはマルスに落ち込んでいた経緯を聞いて事情を察した。

「アハハハ！ そうか、まさかそんな事がなく！」

「笑い事じゃありませんよ翔真さん！」

翔真は経緯を聞いて笑いマルスが少し怒る、だが次にシュテルが口を開く。

「しかしマルスさん、ノーヴェさんが怒るのも

無理はありませんよ。取り合えず謝り続けるしかありませんよ」

「は、はい」

シュテルはマルスにアドバイスを送った。

「まあそれはさておき、マルス。確かお前は傭兵をやっているって言ってたな？」

「はい」

「マルス、お前にある依頼を申し込みたい」

「僕にですか？」

「ああ、突然でビックリするかも知れないが聞いてくれ。この世界の戦いが終わるまでソレスタルビー

イングへ所属してくれ……ていうのだけど大丈夫か？

「理由はありますか？」

「もちろん。今の俺達には力が必要なんだ。連合や

ザフト、この二大勢力を相手にするなら戦力が

今は1つでも欲しいんだ、頼めるか？ マルス」

「……分かりました翔真さん、依頼を引き受けます」

「そうか、ありがとうよマルス。あと依頼の内容で

もう1つ、所属中に依頼を受けた場合は離れても

構わない。だが危機的状況下に置かれた場合、依頼は

キャンセルする事だ」

「了解。マルス・レディーレ、綾崎翔真さんの

依頼、慎んでお受けします」

「宜しく頼む」

翔真とマルス、二人のやり取りが終わりリンネは

カクテルを飲みながら彼もまた新たな決意をする。

「俺も覚悟を決めるか、命は残り少ないが……」

そして翌日、ソレスタルビーイングが飛び立つ日がやって来た。翔真はロウに別れを告げる。

「じゃあロウさん、世話になりました」

「ああ、またいつでも来いよ翔真！じゃあな」

「ええ」

翔真は先に飛び立ったプロレマイオスⅡを追う為

ロウにゼロと同じ整備してもらったウイングガンダム（EW）に搭乗し艦の後を

追う。

「さてと、ナガスマミのウイングガンダムを改造

しないとな」

「すいません、俺のウイングガンダムを改造まで

してくれるなんて」

「気にすんなって！じゃあ始めるか！」

ロウはナガスマミのウイングガンダムの改造に取り掛かる。

## PHASE 33 「戸惑いと新たな仲間」

ローエングリンゲート攻略に成功したミネルバは

今現在ディオキア基地へと立ち寄っていた。理由としては艦の補修と機体の整備で来ていた。

「それにしても、まさかお前がここに在住して

いたとはな、スタニック・デュノア」

「へ、たまたまだよ」

基地内の廊下を歩いて喋っているのは千冬と

同じくザフトの紅い制服に身を包んだニックであった。

ニックはあの後ナターシャと再会して彼女のコネで

今現在はこのディオキア基地に少尉として在住している。

「それよりも、あの戦いの後お前達は何処に

居たのだ？そして一夏達は？」

「さあな、今の俺には関係ない話だね。何せ

俺は翔真達とは敵対したんだから」

「何んだと？」

「俺は翔真達は何をしたいのかわからない。言えるのはそれだけだ」

「そうか……（一夏、お前は今何処に居るんだ）」

基地の外、海が眺める場所に篠ノ之箒は居た。

海から送られる潮風を体全体を通して感じる、今は

まさに戦いで疲れた体を癒しているようにも見える。

「……」

（そんなに風が心地良いのか？お嬢ちゃん）

「（ドライグか）」

彼女の心の中に話し掛けてきたのはドライグである。

「(こうでもしなければ体が持たん。ただそれだけだ)」  
風が吹き、それに伴い髪の後ろに結んだポニーテール  
が揺れ動く。

「箒さん、こんな所で何してるんですか？」

「湊か」

後ろから現れたのは長瀬湊であった。

「アリシアさんが探してましたよ」

「それをわざわざ言いに来たのか？」

「それもあります。が次の戦闘で新たにミネルバに

配属になったFAITHの人を紹介したいと思ひまして

……こちらです　　！」

「よお、お前が篠ノ之箒だな？最新機体インパルス

ガンダムのパイロットは？」

「貴女は？」

「紹介が遅れたな、私の名前はイーリス・コーリング

だ。階級は中佐だ」

イーリス・コーリング、かつて翔真と戦ったMS

パイロットである。通称アメリカの牙、今となっては

ザフトの牙とまで言われている彼女はプレシアの

切り札とまで言われている。

「……篠ノ之箒、ミネルバ所属でZGMF X56S

インパルスガンダムのパイロットを務めております」

箒は背筋を伸ばして姿勢を正して敬礼する。

「ここがザフトの基地、ディオキアって訳？」

「案外大きいわね、けれど至る所に傷痕が見えるのは気のせいかしら？」

「情報によれば前に正体不明機の奇襲があったそうよ」

ディオキア基地の外側に三人の少女が乗った車が止まっていた。三人の少女とは霧生つかさ、逸見エリカ、西住まほである。そして運転手を務めているのは

「ザフトは凄いいね、あんな基地まで建てるなんてさ」

「それでネオ、これからどうするの？」

「まあザフトの連中にはやられてもらわないと  
ならないし、そろそろ行きますか」

ネオはそう言うと言車走らせる。

戦いはまた始まろうとしていた。

キャラ紹介

吉井明久（18）男

容姿 原作通り

身長は原作より少し高め

性格、原作とは違いバカじゃなく少しクール

恋人 アンジュ

搭乗機体、エクストリームガンダム

ある世界からアンジュと共にミッドチルダへと次元

転移して来た。翔真とは一年前に出会い今は喫茶

楽園でアルバイトとして働いている。戦いに参加

した理由としては過去にやって来た罪をこの戦いで

消し去りたい、つまりは罪滅ぼしをしたいと考えて

この戦いに参加している。

なおこの明久とアンジュは

フレットSein様の作品からの参戦です！

ヤマト・グレモリー（20）男

容姿第2期のガンダム00の刹那・F・セイエイで

表情が柔らかい。

身長 179cm

性格、クールだが誰にも優しく接する。しかし

大切な人や恋人を傷付ける者には容赦無い。

恋人リアス・グレモリー、塔城小猫、更識簪、

高町なのは、フェイト・T・ハラオウン、八神はやて

（なおなのは達もまた平行世界同一人物）

姉 シャルロット・デュノア

子供 高町ヴィヴィオ、アインハルト・ストラトス

（ヴィヴィオ達もなのは達と同じ平行同一人物）

搭乗機体、ダブルオーダークライザー

翔真と互角に戦える数少ない人物。愛妻家であり

いつもスケベをやらかして奥さん達から怒られて

いる翔真に少し呆れているが同時に自分と同じく

辛い過去を背負っていないながらも前を向いて歩き

続ける彼を尊敬している。リンネとは親友に近い

関係を築いている。だが後にリンネの生命限界を知る。

ヤマト君は更識蒼様のオリキャラになります！

## 第三章 自由と衝撃の輪舞

PHASE・34 「始まる戦い」

プロレマイオスⅡの艦内、渡り廊下ではツバサとマルスがMSデッキに向かっていた。

「まさかツバサ君があのかんダムバルバトスのパイロットだったなんて驚きだよ」

「そこまで驚くような事じゃないさ。マルスはそう言えば今回の武力介入は初めてだったよね」

今回、ザフトと地球連合の戦いがまた開始されると察知した翔真達は今回この戦いに武力介入する事を決めていた。

今回の出撃のメンバーは、翔真、なのは、

明久&アンジュ、ツバサ、マルス、ネプテューヌ、

ノーヴェが出撃する事が決まっている。

「また余計な死者が出る前に何とかしないと」

「ツバサ君……ん　　？あれて翔真君じゃないの!？」

「あゝ、また何かやらかしたのか翔真は」

「何で平然としてんの!？」

ツバサは呆れた感じで言うと言とマルスが思わず

ツツコミを入れる。

渡り廊下にはボロボロの状態のパイロットスーツを

着た翔真が倒れていた。

「翔真、今回は何をしたの？」

「よお……ツバサ、今回はマジで死ぬかと思った」

「だ、大丈夫なの翔真君!？」

「別に気にしないでいいよツバサ、どうせ翔真の

事だからスケベな事したんでしょ？」

「その通りなのよツバサ」

「誰!？」

マルスは隣の部屋から出てきた女性に目線を移した。

「あ、ネプテューヌ」

「ネプテューヌさん!？それ本当なのツバサ君!？」

「そう言えばマルスには言って無かったけ？」

ネプテューヌはね一時的に女神モードになると

成人の女性になるんだよ、さらに言えば今の

彼女はパープルハートという一人の女性だよ、それで

翔真は一体何をやらかしたの？」

「それがね、翔真ったら私達のおっぱいを触ろうと

女子更衣室に入って来たのよ？」

「翔真、君はこれから死刑に処するから安心して

あの世へ行きなよ」

「でも、心配しないで？なのはがスターライト  
ブレイカーを放ってお仕置きはある程度終わって  
から安心して？」

「なるほど、了解。さて翔真、寝てないで早く  
行くよ」

ツバサはそう言うのと翔真を引きずりMSデッキへと  
向かった。

一方でディオキア基地から出航したミネルバは  
ヨーロッパとアジアの境界をなすダーダネルス海峡へ  
と向かっていた。何故ならば地球連合との戦闘が  
始まるからだ。やがて作戦領域へと入るミネルバ。  
さらには援軍の艦隊も姿を見せる。地球連合側も  
かなりの艦隊を出しているようでも一目置くのは  
タケミカズチ級の艦である。

「アリシア、コンデイションレッド発令。セイバー、  
インパルス、グフは直ちに攻撃させて頂戴」

「了解です。コンデイションレッド発令、パイロット  
は直ちに攻撃してください、繰り返します……」

「イゾルデ、トリスタンで敵艦艇に砲撃、清香、タンホイザーの発射準備お願いね」

「はい！了解です！」

箒はパイロットスーツに着替えておりMSデッキへと向かっていた。

「地球連合、今日こそは根絶やしにしてやる！」

「そんな神経質になりすぎるなよ？箒」

「ニックさんか」

あとから追うように来たのはニックであった。実はイーリスと共にミネルバへと配属され今はDXはある事情により使えない為試作MSであるシュヴァルベ・グレイズで今回の戦いに参加する。

「言われなくても分かっています、貴方こそ私の

足を引っ張らないでくださいね」

「何？」

「私は貴方に心配される程、臆病者じゃない。

心配なんて入りませんから」

「俺も舐められたもんだな……」

シュヴァルベ・グレイズは鉄血のオルフェンズから  
出しました！

## PHASE-35 「降臨する者」

既に艦隊での砲撃戦が始まっている中、ミネルバのカタパルトデッキからMSが次々と発進する。

「篠ノ之箒、コアスプレnderer行きます！」

専用のカタパルトからコアスプレndererが発進し

レッグフライヤー、チェストフライヤー、フォース

シルエットが順番に発進する。

空中でのドッキングを開始して、フォースインパルス

へと変わり箒はペダルを踏み込むと同時に敵艦隊の中に

突っ込む。

「織斑千冬、セイバー出る！」

「イーリス・コーリング、グフ行くぜ！」

「スタニツク・デュノア、シュヴァルベ・グレイス  
発進する！」

そして箒のインパルスに後を追うかのように  
千冬のセイバーガンダム、オレンジ色に塗装された  
イーリス専用機のグフイグナイテッド、ニツクの  
シュヴァルベ・グレイスが出撃する。

敵艦、タケミカズチの司令室。ネオはモニターに  
移るミネルバを見詰める。

「やはり厄介だなあの艦は、先端に何か大型  
ビーム砲があるかもしれないな。ま、早い所撃沈され  
てもらおうか。全MS部隊の発進準備急げ！」  
ネオが指示するとタケミカズチからガイア、カオス、  
アビスが姿を現す。

「ザフトの奴等、倒す。西住まほ、カオス出るわよ！」

「早い所消えてもらわないとね？ 霧生つかさ

ガイア出るよ！」

「逸見エリカ、アビス行きます！」

カオス、ガイア、アビスが三機が出撃すると同時に

連合のタラワ級パウエル15隻からMSが複数機出撃する。主にジェットストライ

カーを装備したウインダムが

出撃して来る。

「はああああ!!」

箒の操るフォースインパルスはヴァジュラビーム

サーベルを二本両手に持ち攻撃を始めるウインダム

を斬っていく。

「またお前か！」

「アビス！」

海中からアビスが姿を現しビームランスを構えて

インパルスに近付く。

「……！」

しかし、インパルスは後ろの腰部にマウントされた高エネルギービームライフルを取りアビスを近付けさせまいと乱射する。エリカはビームを避けて再び海中へと潜る。

「はっ！」

別の空中ではウィンダムを海へと落としながらまほのカオスガンダムと戦う千冬のセイバーガンダムの姿があった。

「変形機構、厄介な物だが仕留める！」

カオスガンダムは機動兵装ポッドを駆使しながらセイバーに攻撃を集中させる。

「そんな事で私は落とせん！」

セイバーは砲撃全てを交わし、カオスへと接近するとヴァジュラビームサーベルを横一閃へと振るう。だが咄嗟にビームクローを展開したカオスは斬撃を回避する。

「私が押されているというのか……あの紅い機体落とす！」

「攻撃のパターンは全て見えている、今度こそは返してもらおうぞ！」

一方でイーリスはグファイグナイトッドでウインダム数機相手になっていた。テンペストビームソードを展開してウインダムを斬り裂いてゆく。

「私の敵じゃないぜコイツらは！」

「あまり前に出過ぎるなよイーリス！」

シュヴァルベ・グレイスを操りながらコクピット

でイーリスに通信越しで注意するのはニックである。

「心配すんなくて、コイツらは私に勝てやしない

んだからさ！」

戦闘が行われている中でミネルバのブリッジでは

スコールが戦闘の様子を伺っていた。

「あれが連合側のタケミカズチという奴ね。麻子、

タンホイザーのエネルギーは？」

「95パーセントチャージ完了、いつでも撃てる」

「分かったわ、タンホイザーを使用するわよ！」

「了解、目標を敵母艦に設定」

ミネルバの先端から巨大なビーム砲タンホイザーが姿を現し今まさにタケミカズチに向かって放たれようとしていた。

しかし

「ターゲット確認、破壊する！」

飛来した一筋のビームがタンホイザーに貫通する。タンホイザーは爆発を起こす。ブリッジは爆発の衝撃で揺れ動く。

「ビーム!? 索敵急いで！」

清香、アリシアが一斉に敵を探す、そしてモニターに映し出された映像にスコールは啞然とした。

「あれは……ウイングゼロ　　！」

映し出されていたのは分離したバスターライフルを構えるウイングガンダムゼロカスタムの姿だった。

## PHASE-36 「自由対衝撃」

この作品を投稿したらしばらくは更新出来ないの  
詳細は活動報告を見て頂ければと思います。

ミネルバのタンホイザーを破壊したウイングガンダム  
ゼロカスタム、翔真はコンソールパネルに手を伸ばし  
現在の戦況を確認する。

「連合側が多いな。一夏とマルスもそろそろ着く頃  
だな」

モニターに目を移すと一夏のフリーダムガンダムと  
マルスのエクシエスが連合のMSと戦闘を開始して  
いた。

「もうあんな惨劇、二度とごめんだ！」

過去の戦いを思い出しているか、翔真は機体を加速  
させる。ゼロカスタムはビームサーベルを抜き連合の  
MSとの戦闘に入る。

「あの戦いで何も学ばなかったのか！」

一夏は今の戦闘を見て悲しみに暮れる事しか出来ない。  
しかし今は戦いを止める事が先決である。一夏は迫り  
来るウィンダムの姿をモニターで捉える。

「ッ！」

フリーダムは蒼い翼を広げてラケルタビームサーベル  
を抜き払う。サーベルを勢いよく振り上げて

ウィンダムメインカメラに目掛けて振り下ろす。  
ウィンダムのメインカメラを破壊したフリーダムは  
ツインアイを光らせ数機のウィンダムが迫る中  
再びラケルタビームサーベルで戦いに入る。

「何故だ……何故今さら戻って来たのだ……」

「一夏ッ！」

箒はアビスの相手をしながら突如として戦場に  
現れたフリーダムに動揺する。

「ッ！」

フォースインパルスはヴァジュラビームサーベルで  
アビスのビームテンペストを真っ二つに斬る。

「バカなッ！あの機体のパイロット、前よりも  
強くなっている気が!？」

アビスを退けたインパルスはそのまま空へと浮上

してフリーダム元へと駆け寄りヴァジュラビームサーベルを振り下そうと迫る。

「一夏アアアア!! 何故今更戻って来たアア!」

「この声は……：……やっぱりあのインパルスっていう機体のパイロットだったのかよ、箒!」

フリーダムはラミネートアンチビームシールドでインパルスのサーベルを受け止める。

「一夏、何故ザフトに敵対した! あのイギリス戦の事、はっきりと答えてもらおうぞ!」

音声通信から聞こえるファースト幼馴染みの声、明らかに声からして怒りが込められていると悟った一夏はこの箒の問いに反論する。

「箒! お前は何も知らなすぎる! ザフトが裏で

何をやっているのか、お前は知らないだろ!」

フリーダムとインパルス、両者共にサーベルでの

激突が激しくなる。

「悪く思うなよ、箒！」

フリーダムは背後の翼に収められたパラエーナプラズマ収束ビーム砲を二門展開して発射する。

しかしインパルスはギリギリ回避する。

「今の私はあの頃の私じゃない！」

「交わした!?!」

インパルスはヴァジュラビームサーベルを振り回し

フリーダムに当てようと距離を詰めて行く。

「(無茶苦茶だ、箒の攻撃は!!)」

「はあああ!!」

隙すらを作らないインパルス、一夏は徐々に

追い詰められる。

「(だけど……負ける訳にはいかねエエ

!)」

一夏はSEEDを発動して攻撃を回避する。

「何!？」

「……」

フリーダムは腰部に装備されたクスイファイアレール  
ガンを展開してインパルスのフォースシルエットの  
両ウイングを粉碎する。

「クッ!？」

「何だ、お前はアァ！」

フリーダムの下、海中からアビスが現れ砲撃を  
しようとする。しかし全ての攻撃を読まれアビスは  
フリーダムにアビスを蹴飛ばされる。

「ち、フリーダムか！」

イリスのグフがテンペストビームソードを振り  
フリーダムの元へ行こうとしたその時。

「行かせはしない！」

翔真のウイングガンダムゼロが立ち塞がる。

「!.....こりゃ懐かしい奴に出会えたぜ、ニヒヒ.....」

また私を楽しませなァ! スカルハート!」

「翔真、お前は!」

ウイングゼロにグフ、シュヴェルベ・グレイズが  
迫り来る。

タケミカズチのブリッジではネオは突如乱入して  
来たウイングゼロ、フリーダムを見ていた。

「よりにもよって昔の英雄かよ、これは少し

難しい状況だな.....仕方ない、ルウェン、

出られるか?」

『任せろ』

そしてタケミカズチから漆黒の幻影、ストライク  
ノワールが出撃する。

「ルウェン・エル・バヤン、ストライクノワール  
出るぞ！」



PHASE 37 「漆黒とバルバトス」

皆、待たせたな！

次回はイーリスが……

---

ウイングゼロに近づくグフはテンペストビームソードを構えて今まさに接近戦へと移行しようとしていた。

「ッ！」

「スカルハート！」

ゼロはビームサーベルを抜きグフの一撃を振り払う。

「ターゲット、敵MS！」

ツインアイが一旦光る、そしてバスターライフルを

持ち砲撃の体勢を構える。だが背後からニツクのシュヴェルベ・グレイズが迫り来る。

「何故出て来た！聞こえているんだろ翔真！

答えろ！」

「裏切り者に話す事なんかありませんよ」

「何だと！」

ウイングゼロは背後から来るグレイズの攻撃を避ける。

「生憎あなたの相手をしている暇は無い。ツバサ！

ネプテューヌ！後は頼んだぞ！」

ウイングゼロはイーリスのグフと共にグレイズの

元から離れ、その後に空中戦使用に改造された

ツバサの駆るガンダムバルバトス、ネプテューヌの

ガンダムヴィルキスが現れる。

「さてと……行こうか、バルバトス　　！」

「貴方の事はあまり知らないけど、倒させてもら

うわよ！」

ガンダムバルバトスはメイスを構えてグレイズに攻撃を開始する。

一方で明久&アンジュの乗るエクストリーム

ガンダム「エクリプス・フェース」、なのはの

フリーダム、ノーヴェのガンダムアストレアF「高機動

ユニット装備」は周りの連合のMS、ザフトのMSを

蹴散らしていた。

「数が多いかも……なら、これだよ　　！」

なのはのフリーダムはパラエーナプラズマ収束

ビーム砲を放つ。メインカメラだけに狙いを定めて

次々と破壊していく。

「さすがは翔真の彼女だね。コクピットだけを

狙わない戦法、だけど僕は翔真達より下手だから

来るなら……撃っちゃうよ　　！」

エクリトリームガンダムはヴァリアブル・サイコ・

ライフルを両手に持ち360度回転して敵MSを一瞬に

して消し去った。

そして連合側の艦隊はマルスのエクシエスが

シュベルトゲール《グラム》を構え次から次へと

撃破していた。

「約70%、艦隊の消滅を確認。後はフリーダムを

援護しないと……」

コクピットで冷たい口調でマルスは呟き機体を

フリーダムの方へ動かそうした。しかし敵の接近を

知らせるアラート音が響きマルスはモニターに視線を移す。

「GATX105Eストライクノワール……向かって来るなら容赦はしない」

また、ノワールのコクピットではルウエンがモニターに移るエクシエスを見ていた。

「該当する機種は見当たらない。新型か？まあ

どちらにせよ……逃がすつもりは無い」

エクシエスとストライクノワールは一瞬で戦闘へ

入る。グラムとフラガラッハーの刃がぶつかり

互いに目に見えない早さで空中でドッグファイトを繰り広げる。

「ッ！」

二人に緊張が走る、ノワールはフラガラッハでエクシエスのグラムを払い落とす。だが瞬時にマルスは次の行動へと出る。エクシエスは高出力ビーム斬撃剣ライオットザンバーを取り出してノワールに斬りかかる。

「あの正体不明の機体のパイロット、なかなかやる。一瞬も隙を作らない……」

「(ストライクノワールのあの動き、翔真さんに似ている……誰なんだ、貴方は……)」

マルスとルウェン、数々の思考を思い浮かばせながら戦闘に集中する。

GN-012ガンダムヴィルキス

武装

対艦刀クイーンブレイド×1

高エネルギービームライフル

ビームサーベル×2

日本刀型ブレイド「不知火」

リンネが有り余ったMSの予備パーツを組み込み

ヴィルキスを改造した機体である。メインカメラは

G《ガンダム》を思わせる物へ変更され大きさも

MS程に変更された。動力源はGNドライブ1基を

搭載してトランザムも発動可能。

エクストリームガンダム「エクリプス・フェース」  
エクリトリウムガンダム専用開発された射撃戦  
特化した装備である。

武装

ヴァリアブル・サイコ・ライフル×2

ブラスター・カノン×2

投射式ジャミングシステム

単弾頭ミサイル

ビームサーベル×2

規格外拠点攻撃兵装カルネージ・ストライカー

PHASE 38 「戦乱と散りゆく牙」

エクシエスとノワールが互角の戦いを見せていた頃  
翔真はウイングゼロを一夏のフリーダムと合流して  
箒の操るインパルス、イーリスのグフを相手にして  
いた。

「お前もどういふつもりだ！翔真！」

「それはこちらのセリフだ、箒！」

ウイングゼロとインパルス、二機の壮絶なビーム  
サーベルでの打ち合いは激しさを増す。

「お前はただ怒りに身を任せて戦っているだけだろ！  
それじゃ二年前の俺と同じだ！」

「ッ!?!…だ、黙れ　!…」

インパルスのビームサーベルが縦一直線に振り下ろされ

ようとする。ウイングゼロはサーベルを受け流し  
インパルスを蹴り飛ばす。

「クッ！」

機体が蹴り飛ばされた事により振動がコクピットに  
伝わり筈は歯を食い縛り何とか耐える。

「……………敵機接近、あれは」

ウイングゼロに近づく機影がある。その機体は千冬の  
操るセイバーガンダムだった。

「何故こんな事を……………綾崎　　！一夏！」

通信機器を弄い二人に通信で問い掛けようとしたが  
電発障害により返事は返って来ない。

そんな事お構い無しにウイングゼロはサーベルを構えて  
セイバーに襲い掛かる。シールドでガードするセイバー  
だったがウイングゼロのサーベルの威力は凄まじく

シールドは真っ二つに切断される。

「何故私達が戦わなければならぬんだ！ 答えろ！」

千冬の叫び、だが決して翔真の耳に入る事は無い、

ウイングゼロはサーベルで左腕を破壊すると同時に

メインカメラを破壊しようともう一度サーベルを

セイバーに向けて振り下ろそうとしていた。

「させるわけないだろオオオオオオ！！！！！！」

イーリスはグフのスラスターを全開にしてウイングゼロに近づく、それに気付い

た一夏はフリーダムをグフに

接近させる。

「……！！」

一夏はSEEDを発動する。スラスターを全開にして

グフに追い付きラケルタビームサーベルでグフの

メインカメラを目に見えない早さで破壊したフリーダム

「クソツタレがアア！！！！」

グフは海面に落ちる寸前だった、それならまだ良かったのだ……

「消えろ！」

カオスガンダムが目の前に現れビームサーベルを

グフのコクピットに突き刺す。

「ガハッ!？」

グフは数秒もしない内に爆発した。

「イーリス！」

千冬とニックが同時に叫ぶ。事実上イーリスは戦死した。

「ち、これもお前らが乱入なんかしなければ！」

ニックのグレイズがランスを構えてツバサのガンダムバルバトスに近付く。バルバトスはメイスでグレイズのランスを砕く。

「あのグフのパイロットが死んだのは注意をちゃん

としなかったその人自身が原因だろ？人のせいにするのは間違いだよ、Xラウンダーのスタニック・デュノア！」

「…!?」

ツバサが冷たい口調で言い放つと同時にガンダムバルバトスはメイスでグレイズの装甲をボロボロにしていく。メイスでの打撃はそれなりにダメージを与えられる為グレイズの各部からはオイルらしき物が溢れだしバルバトスに飛び散る。

バルバトスはツインアイを光らせる。未だにメイスでの攻撃をやめない。

「たかが小僧ごときに負ける俺じゃねえんだよ！」

グレイズは中破寸前だったが唯一残っていた右脚部を使いバルバトスを蹴る。

「ツバサ！そろそろ引き際よ！」

「分かったよネプテューヌ、それとニックさん。もし次戦場で会ったなら……命は無いと思ってくださいね。例え貴方がシャルロットさんのお兄さんであらうと……僕は倒します」

「何だと……ッ！」

ガンダムバルバトス、ガンダムヴィルキスは戦線を離脱していく。

「(何故だ！何故翔真の機体に追い付けない!?)

インパルスは最新機なのに!」

インパルスはウイングゼロを追い掛けるがインパルスは徐々に距離を離される。

「そろそろ引き際か、近づくにトレミーも接近して  
るな。一夏、大分片も付いた」

「……ああ」

翔真は明久達に撤退を言い放つと同時に戦場から離脱する。

「……ッ  
！」

ノワールとエクシエスの戦いはまだ続いていた。

ルウエンはエクシエスを倒す事だけに集中して

周りが見えていなかった。

それはマルスも同じだった。互いに笑みを浮かべて

ノワールのフラガラツハが、エクシエスのライオット

ザンバーがぶつかると。だがそんな時ノーヴェの

アストレアがエクシエスに近づく。

「マルス！そろそろ撤退だ！早くしないとやられ  
ちまうぞ！」

「……………了解」

ノーヴェの声がコクピット内に伝わりマルスは周りを  
見渡してモニターにウイングゼロ、フリーダムが

撤退していく姿を確認する。一旦落ち着く為深呼吸する。そしてノーヴェのアス  
トレアを追うかのように

戦線から離脱する。

「……………あの機体、次こそは」

ルウエンはエクシエスを見てそう言い残すとノワールを  
タケミカズチへと向かわせる。

ちなみにソレスタルビーイングの介入によりザフト、

地球連合はかなりの大ダメージを喰らったのは言う間でも無い。

## P H A S E 39 「蘇るもう1つのゼロ」

ザフトと連合の戦闘がソレスタルビーイングの介入による被害を受けて丸三日が立っていた。両軍共にダメージが酷く特にザフト側はエースパイロットの一人であるイーリスが戦死したのはかなりの痛手である。

一方で翔真達ソレストルビーイングは南極へと身を潜めていた。そして氷山の一角に一機のMSが姿を現す。

翔真のウイングガンダムゼロだった。

何故ウイングゼロが居るのか？これは二時間前に遡る。

プロレマイオスⅡMS格納庫

「それって本当かよ千夏」

「うん。翔真のゼロカスタムの方は最新のパーツを組み込んでいるけど所々ガタが来てるの」

千夏の報告に翔真は驚くしかなかった。それは長年

乗ってきて連れ添って来た愛機であるウイングガンダム

ゼロカスタムが限界を迎えているという事だった。

翔真が純粹種のイノベーターという事もあってか

ゼロが翔真の動きに付いてこれて無い、故に無理な

戦闘を強入れた事でゼロフレームが悲鳴を上げている

千夏はゼロを整備した時に感じた事を翔真に話す。

「私が思うにゼロカスタムは一旦バラしてゼロ

フレームから改修していかないとゼロはこのままだと

中破、ううん、大破するよ」

「……………何とかして直せないか？」

「ロウさんの所に行って私が一緒に改修するって

いうプランがあるよ。けど時間は掛かるよ？」

「それでも構わない。頼むぜ千夏」

「了解、けど翔真？何でダブルオーライザーを使わないの？」

「あれはまだ使う時じゃないからな」

そう言って格納庫の奥の扉の前へ立つ翔真、すると扉が開き一機のMSが姿を現す。

「……しばらくはコイツを使わせてもらおうか」

姿を現したのは二年前にリンネから譲り受けた

ガンダム『ウイングガンダムゼロ（TV版デザイン）』である。

そしてこのウイングゼロを使うに当たりテストをして機動性を確かめようと翔真は考えてたのだ

千夏はゼロカスタムに乗りロウのギガフロートに向けて旅立っていた。

機体のコクピットシートに座る翔真。

「……………よし、行くか」

そしてテストが開始される。両翼のウイングスラスターを全開にしてウイングゼロは加速する。

「……………」

機体の加速時に体にGが掛かる、翔真は無言で機体をさらに加速させる。

「ターゲット確認、破壊する」

ウイングゼロはツインバスターライフルを構えて

氷山に目掛けて発射する。

一瞬にして氷山は消えてウイングゼロは次に

飛行形態であるネオバード形態となり空を飛行する。

「機動性も抜群、加速性も問題は無いか。しばらくは

コイツで戦うしかないよな」

ネオバード形態のウイングゼロはそのまま

空を飛行し続ける。

インフル、  
何とか引いて来た。

PHASE 40 「敵となるなら」

今回はシリアスかな、それと翔真の8人目の妻が  
出ます。第1期を見ている方なら誰だか分かりますよね

---

南極の海上、プトレマイオスIIは停泊していた。

BARのカウンターにはリンネが一人でシュテルが  
配合したカクテルを飲んでいた。

「今日は皆さん、来ませんね」

「それぞれやりたい事があるんだろ。ソーナに  
至ってはマルスを可愛いがってるしな」

「フフ、やきもちですか？」

「なわけないだろ。こんな歳になってやきもちは  
かっこ悪いにも程があるだろ」

「それもそうですね」

リンネとシュテルは会話に没頭していると

「あ！リンネはっけくん！」

「セラフオール姉か」

BARに入ってきたのはソーナの姉であるセラフオール  
だった。何故彼女が居るのかというと妹のソーナ  
には内緒で最初からこの艦に搭乗していたのだ。

「貴女は俺の居た世界に帰らないんですか？」

「う〜ん、私はこの世界に興味が出たからまだ  
帰らないからね♪」

「そうですか：：シュテル、彼女にもカクテルを

……いや、もう一人にも頼む」

リンネはそう言うのと後ろに視線を移した。すると蒼色のロングヘアーの少女が入って来ていた。

「私の気配に気付くとは流石だな、月村リンネ」

「当たり前だ、君もどうだ？ 風鳴翼」

風鳴翼、翔真が二年前に友人の世界で出会った

少女であり今は翔真の奥さんの内の一人でもある。

「はあ、月村リンネ少し相談がある」

「どうせ、翔真のスケベはどうやったら直るか？ だろ」

「やはり無理か」

「アイツの変態ぶりはツバサでも無理だろ。だが

それがアイツの良いところでもあり悪いところでもある」

「でもでも、翔真君って何だかんだ言われても

彼女達に愛されてるよね？」

「当たり前だ、し、翔真は……私達だけを愛して

くれるからな≡≡≡」

「ラブラブな事はいい事だがな」

リンネは呆れるもカクテルを口にすする。

一方でミネルバはディオキアで修復を受けていた。

そして箒は今、鈴、ラウラと共にミネルバの

テラスデッキに出て夜空を見上げていた。

「それにしてもこの前の戦闘凄かったわね」

「ああ……だがそれにしても一夏やお兄様

何故あんな事をしたんだ」

「さあな。だが……私は一夏や翔真には全く

手が届かなかった、奴等は強い」

「けど箒！翔真も一夏も敵じゃないわ！だから

次もし会う事が……敵だ　！……　！」

鈴は箒に言葉を掛けるが彼女の一喝により遮られる。

「もし敵じゃないなら、私やニックさん達を攻撃したり

ミネルバのタンホイザーを破壊したりしない！」

「……………」

(翔真)

「鈴にラウラ、お前達はまだ一夏の事を想っている

かもしれないが私は違うぞ……………翔真や一夏が次に

現れるなら……………私はアイツらを打つ  
！」

箒は闘志を露にして月に向かって拳を向ける。

「(箒……………今のアンタ、見てらんないわよ。

きっと今のアンタを見たら、一夏の奴泣くわよ。

……………一夏、アンタならどうする  
？」

「(一夏……………どうしたらいいんだ私達は)」

鈴、ラウラは己の中で想い人、一夏の事を考えていた。

PHASE 41 「始まりが故に」

今回はマルスの過去に関係する人物が登場。

---

南極の北側の方向、一機の未確認MSがトレミーIIに刻々と迫っていた。

「許さない……ソレスタルビーイング　！」

コクピットで叫ぶ少《雪音クリス》はペダルを全力で踏み込み自身の専用機《ニャイアアストレイ・イチイバル》を加速させる。

一方でトレミーのブリッジではシュテルがいち早く  
ニャイアアストレイの接近を察知して翔真、翼に  
報告する。

「未確認のMS？」

「シュテル、詳しく」

「該当機種は不明です。ですが機体の構造からして  
ガイアガンダムに似ています」

「そうか、翼」

「私も出よう。アヴァランチエクシアは？」

「アヴァランチエクシアの整備は全て終わっています。

いつでも大丈夫ですよ」

そして翔真、翼はパイロットスーツに着替えてMSデッキへ急ぐ。ウイングゼロ、

アヴァランチエクシアに乗り込んだ二人は機体を起動させる。

「ウイングゼロ、綾崎翔真行きます！」

「風鳴翼、アヴァランチエクシア、駆け抜ける！」

カタパルトデッキが解放されウイングゼロ、アヴァランチエクシアが出撃する。

翔真は早速未確認MSを直に捉えてウイングゼロを加速させた。

ビームサーベルを抜くウイングゼロは未確認MSに

斬り掛かる。未確認MSはシールドらしき物で斬撃を

食い止める。

「何者だ、連合の者か？それともザフトか？」

「答えろ」

「敵と話す事なんかねえよ！行くぜニヤイアアストレイ！」

ニヤイアアストレイ・イチイバル、この未確認  
MS

の本当の名前であろう、ニヤイアアストレイは

ウイングゼロを蹴り飛ばし懐に入ろうとする

「ッ！」

だが左手に持ったツインバスターライフルを構えて  
発射する。ニヤイアは紙一重で交わして獣形態へと  
変形する、姿はまるで猫を思い浮かべるシルエット  
でありウイングゼロと距離を取り複合兵装マーキュリー  
レヴを展開する。

「綾崎翔真！答えろ！兄貴を……アレスを何処に  
やりやがったアアアア！」

少女の叫びと同時にニャイアアストレイは加速する。

迫り来るニャイア、だが

「翔真一人とは限らない」

翼の駆るアヴァランチエクシアがニャイアの動きを

片手で止める。

「離せ！」

「この声は……クリスなの？」

一方で翔真はウイングゼロを動かそうと操縦レバーを強く握ったその直後ゼロシステムが反応する。全周辺のモニターからある場面が映し出される。

『俺は許さない……大東貫一とGspiritS隊を！』

「マルス………なのか？」

映し出された映像には怒りの籠った声で黒い機体を動かす少年、マルスの姿があった。しかしマルスの目には憎しみが宿り黒い機体、エクシエスはマルスに答えるように敵を次々に斬り込んで行く。

「(違う……コイツはマルスなんかじゃない !

コイツは……)」

何かに気づいた翔真はウイングゼロを加速させる。

ウイングゼロはビームサーベルを再び構える

「(とにかく、マルスにはまだ謎があるという事

……そう言いたいんだな、ゼロ !」

キュイン！

「ッ!? この感じは……とても懐かしい……  
行かないといけないような気がする！」

「な！ どうしたんだよマルス！」

「マルスさん！」

マルスは何かを感じ取り自身の愛機であるエクシエスの元へ行く。

次回はナガズミとパワーアップしたウイングガンダムが登場！

PHASE 42 「マルス・レディーレ」

JGMWF00X アストレイ・エクシエス

装甲素材 発泡金属+VPS

動力源 パワーエクステンダー+デュートリオン

特殊装備 ヴォワチュール・リュミエール

武装

対ビームコーティング・アーマーシユナイダー

量子通信誘導浮遊破砕爪 《ドラグ・リム》

カードリッジ式ビーム発生器内蔵実体剣

《シュベルトゲール・グラム》

高出力ビーム斬撃剣 《ライオットザンバー》

特殊システム???:???

搭乗者 マルス・レディーレ

マルスの専用機。この機体は数年前に《C・E》の世界で、ロウが火星圏を訪れた際に同圏内にあるデブリベルトを航行中に両腕、両脚、装甲、胴体が破損され残骸の中から冷凍睡眠されていたマルスと共に回収された。失われた両腕は連系MSGATX105系列、200系列を使い脚はアメノミシハラで天ミナをメンテナンスした際に余ったパーツを組み込み、唯一小破程度で済んだボディーフレイムには発泡金属+VPSを合わせ機体データにあった外見とほぼ同じに仕上げる一方で背部には《GATX105 ストライクガンダム》と同じようにストライカープラグを組み込んだ。プラグを組み込んだ事で、エール、ソード、ランチャー、マルチプルアサルト、I・W・S・Pなどを装備出来る。この機体は唯一マルスの失われた過去の記憶に関係する鍵とされている。機体性能で言えば軽く

セカンドステージシリーズを越え一夏のフリーダム、  
翔真のウイングゼロと同等の力である。

「はああああ!!」

翼の駆るアヴァランチエクシアとクリスの駆る

ニヤイアアストレイが戦闘に入り激戦を繰り広げていた。

ニヤイアはヴァジュラビームサーベルを構えて

アヴァランチエクシアに斬りかかる、しかし翼は

一降りの斬撃を避けてエクシアは翼に応えるように

GNソードでニヤイアの左腕を斬り落とす。

「ちい！」

左腕を失うニヤイア、だが攻撃の手を止める事は無く

アヴァランチエクシアに襲い掛かる。

翼はこの時操縦をしながらある事を考えていた。

ニヤイアアストレイのパイロットの事である。

声や喋りからして知り合いに凄く似ていると翼は

思う、しかし彼女の知る《雪音クリス》は自分が

居た世界にいるはずだ、だが自分の事を知らないし

ましてや敵扱いをされている。そう、このクリスは

違う、翼は一つの考えを導き出した。

「平行世界同一人物……それしか有り得ない」

エクシアはGNダガーを投げ付ける

「その攻撃が効くとも思っているのか！」

ニヤイアはビームクローを展開してエクシアに

激突する。

「クッ！」

機体がぶつかった衝撃がコクピットに伝わる。翼は

歯を食い縛り衝撃に耐える。

「私は絶対に許さない！ 兄貴を悪用するソレスタル  
ビームイングを！」

「何の話か全く分からないが、来るなら倒すまでだ！」  
海に落ちる寸前だ、エクシアは回避する。だが  
ニヤイアが目前に迫る。

「やらせるかアアアア!!」

翔真の駆るウイングゼロがニヤイアに蹴りを入れる。  
ウイングゼロはそのままニヤイアに近づく。

「負けられるか！」

クリスはモニターに写るウイングゼロを睨み付けて  
機体を立ち上がらせ、ニヤイアは右手に持った  
ヴァジュラビームサーベルを持つ。だが次の瞬間  
黒い機体がウイングゼロの前に立ち塞がる。

「……………どういふつもりだ、マルス」

「……………」

マルスの駆るアストレイ・エクシエスがニヤイアを守るように立ち塞がっていた。翔真は音声通信を開きマルスに問う。

「……………自分でも分からないんです。何故敵を庇っているのか、けど……………僕は感じたんです。

あの機体に乗っているパイロットを僕は知っている」  
「そうか……………ならマルス、そいつを任せる」

ウイングゼロはエクシエスから離れマルスはニヤイアに通信を開く

「僕はマルス・レディーレ、パイロット聞こえるか？」

「ッ！兄貴……………なのか？」

「……………君は僕を知っているの？」

「当たり前だ！大体マルス・レディーレって何だよ！

兄貴の名前はアレス・ルセデイスだ！」

「アレス……ルセデイス……うっ  
！」

アレス・ルセデイスという名前を呟いた途端にマルスの頭に激痛が走る。

「あ、頭が！」

頭痛は増していきマルスの視界が徐々に揺らいでいく。

「あ、兄貴！ やっぱりお前らが兄貴に何かしたんだな！」

クリスは通信越しから聞こえるマルスの声に翔真達が何かやったと勘違いしニヤイアを動かそうと操縦桿を握る。しかし

「もうやめとけ、正体不明機さん」

「な、ナガスミ君？」

ニヤイアの背後にナガスミのウイングガンダムが立っていた。だがウイングはロウの手により改修を

施され今は『ウイングガンダムフェニーチェ』

リナシータ』である。バスターライフルの銃口が  
ニヤイアに向けられる。

「い、いつの間に……………」

「取り合えず正体不明機、お前をトレミーへ連行する。  
いいな？」

「……………クソ            ！」

フェニーチェ・リナシータはニヤイア、エクシエスを  
連れてウイングゼロ、アヴァランチエクシアと共に  
トレミーへと帰還する。

次回はかなりエッチな回です！

---

## PHASE-43 「葛藤するクリス」

はい！ R-18的な要素が少しありますが声だけですの  
ご案心ください！

クリスは翔真、翼、ナガスミに連行されて独房に入れ  
られていた。そして今現在翔真は翼、フェイトと  
付き添いでクリスと話していた。

「だ〜か〜ら！俺達はマルスを洗脳したり悪用  
しようだなんて思った事は一度もない！」

「嘘だ！兄貴はあんな優しい顔をしていなかった！

私は何を言うおうが絶対に信じないからな！」

「少しは話を聞けよ」

「嫌に決まってるだろ！」

「そうかよ！ならこちらはある手段を取らせてもらおう」

「し、手段？」

「話したくなるようになるから安心しろ」

手段、この言葉を聞いたクリスは拷問ではないかと

考えが浮かぶ。そして翔真はフェイト、翼にある事を

耳元で話し二人は顔を紅くしたが仕方ないという感じ

でクリスの元を離れる。

「(い、一体何が始まるんだ?)」

クリスは少し緊張する、すると……

「なあフェイト、翼。今なのは達やヴィヴィ才達も

居ない事だし……しようぜ　　？」

「だ、ダメだよ、こんな所で……」

「す、少しは羞恥心という物を……はう♡」

「とか言いながら何期待してるんだよ翼」

「こら、やめんか……ふあ……」

「翔真、誰も居ないとか言うけどクリスちゃん……」

あん！こ、こら〜！」

「フェイトのここもぐっしりだな？」

「(アイツら！一体何してんだよ！)」

ナニである(嘘)

翔真、フェイト、翼はクリスの入る独房の隣で

わざとそういう声出していた。

「いきなりオッパイ吸っちゃ……だ……め……」

「はあ、はあ、やっぱり最高だなフェイトのオッパイは……さて、翼には俺のを舐めて貰おうかな」

「スケベ、強姦魔……だが、仕方ないから

舐めてやる。防人として、勤めを果たさせてもらおう！」

三人のいやらしい声が独房内全体に響き渡る。

「(クッ！これってある意味拷問じゃねえか！

ヤバイ、特に女子二人の声を聞いたせいか……

急にムラムラして来た……あ、兄貴……)」

クリスは完全にムラムラし始めていた。当たり前だろ

うが隣でそういう行為(嘘)をされたら誰だって

そういう状態に仕上がる。

「あん！あん！翔真！」

「フェイト、可愛いぜ！」

「ちくしょオオオオ!!分かったよ！全て話す

からもうやめろオオオ！」

結局、このエッチな空間にクリスは我慢出来ず

大声を上げる。これを聞いた翔真、フェイト、翼はクスクスと笑ったのは言う間でもない。

クリスはマルスの事、ニヤイアアストレイ、自分が

P・Tという人物に会った事を話した。

「P・T……」

P・Tという単語にフェイトは何処か引っ掛かる。

「これが全てだ」

「たく、要らねえ嘘を吹き込んだのはソイツの仕業か」

「迷惑もいい所だな」

「だから私はソレスタルビーイングに戦いを挑んだ

って訳だ」

「……そうかい、クリス、全て話してもらって

ありがとうな。だが俺達は何言ってもダメなら本人の

口から直接聞くんだな」

翔真はそう言うのと独房室の入り口に視線を移す。

そこにはマルスと白衣に身を包んだツバサが立っていた。

## PHASE-44 「再会する白と紅」

クリスがマルスと話し、和解した事でソレスタル

ビーイングの一員になって次の日、一夏はアインハルトと共にフリーダムのコクピットに居た。

「アインハルト、忘れ物は無いか？」

「はい。しかし一夏お父様？今からどちらに行く

んですか？」

「たまには外に出るのもいいだろう？昨日は

簪とセシリアと出掛けていたけど今日はアインハルト

と出掛けようと思ってさ」

「そうなのですか……」

だから今日は思いっきり楽しもうなアインハルト」

「はい！」

一夏はペダルを踏みフリーダムガンダムを発進させた。

フリーダムを人目のつかない所へ隠し一夏はアインハルトと共に小さな町へと来ていた。

「へえ、規模は小さいけど沢山の物があるな」

「人もかなり多いですね。あ、一夏お父様……」

「ん？ どうしたんだアインハルト……なるほど」

アインハルトの視線の先に縫いぐるみが沢山置いてある店が移る。アインハルトも何だかんだ言っても女の子、縫いぐるみが欲しいのは当たり前である。ちなみに今日の衣装はセラフォールがコーディネートしたゴスロリ衣装である。

「欲しいのか？縫いぐるみ」

「……はい」

「あははは、それくらい買ってやるぞアインハルト。じゃあ店に行くか」

一夏がそう言うときアインハルトは嬉しく頷く。

買った熊の縫いぐるみを大切に持ち気分がルンルンと高くなっているアインハルト。一夏はうっすらと笑みをこぼす。

「(それにしてもアインハルトも12歳か、成人まで

まだただだけど……いつかはお嫁に行くのか)」

まさしく父親らしい事を考えている一夏、彼もまた

一児の父であり、最近は密かにアインハルトが好意を

寄せているマルスの事が頭に浮かぶ。

「(マルス君ならアインハルトの過去を知ったとして

事実を受け止めてくれるだろうか……)」

「?……どうかしたのですか一夏お父様　?」

「……なあアインハルト、マルスの事どう思っ

るんだ?」

「ふえ!?ま、ま、マルスさんの事ですか!?!」

マルスの名前を聞いただけで顔を紅くして驚く

「もしかしてマルス君の事……好きなのか　?」

「好きじゃないと言えば……嘘になります」

「そうか……詳しく聞いてもいいか　?」

それから一夏はアインハルトと共にハンバーガー屋に

入る。マルスの印象を聞いて一瞬だが翔真を思い

浮かべたのは言う間でもない。

「アインハルトも恋をするようになったから、

嬉しいけど悲しくもあるな」

「反対でしょうか？」

「いや、恋をする事はいい事さ。俺は反対しないぞ」

「一夏お父様」

娘が恋をする事は嬉しい、だが少し寂しい気持ちに

襲われる一夏、複雑な物だ。

「さてと……」

一夏が席を立ち上がろうと瞬間

「お前、一夏か!？」

「………箒……」

一夏の横にファースト幼馴染み、今はインパルスの

パイロットである筈が驚いた表情をしていた。

さらには……………

「フェイトさん……………」

「？」

「え……………」

アリシアが居た。

## PHASE 44・5 「天使湯での秘め事」

お色気シーン満載だ！

---

一夏とアインハルトが出掛けて数分後、

トレミーのメディカルルームには珍しいメンツが集まっていた。

「マルスはこんな物まで作れんのか！スゲーな！」

「そうでしょうか？」

「才能があるという事だろう」

「なら僕も今度マルスにハロを作ってもらおうかな」

「お！それいいな」

「ていうか、何で翔真達はメディカルルームに

居るわけ？」

ツバサは若干イラツとしながら翔真、リンネ、マルス、ヤマト、明久に問う。

「暇だったからかな」

翔真が代表してツバサの問いに答える。

「あのね……はあく、まあいいや。確かネプテューヌ達はお風呂だったよね」

トレミーにはもちろんお風呂が存在する。しかも

温泉であり名前は『天使湯』である。

そして天使湯には東達女子ガールズ達が入っていた。

「あれ？またフェイトちゃん胸が大きくなった？」

「うん、胸が大きくなったのは翔真のせいだよ。いつも隙あらば私の胸を揉むんだから……」

///

「……翔真君、あとで

O ☆ HA ☆ NA ☆ SHI なの」

「僕も付き合うよなの」

なのはとシャルロットは翔真に O ☆ HA ☆ NA ☆ SHI する

と誓いを立てていた。そんな二人をよそにシグナムは

溜め息を付きながら……

「常にスケベな事しか考えておらんのだな翔真は」

「はあ、困った物です」

翔真のスケベなど今更直る物ではないとシグナム、

真耶は溜め息を付く。一方でネプテューヌはシグナムと大和にある疑問を持っていた。

「ねえねえ、シグシグにヤマヤマ（大和）は何で

ずっとポニーテールにしてるの？」

「色々と事情がありまして……」

「ただ私達がポニーテールをほどけば翔真が

大変になるから（性的な意味で）私達はほどかないんだ」

「そうなんだ」

ネプテューヌは取り合えず納得した。

「うう、皆どれだけ発達が良いの……」

「気にしないのですよ簪、まだまだこれからです」

「そうだぞ。胸が私達の全てではない」

ちよっと胸が残念な簪、ソーナ、翼は全てが胸ではないと正論を導き出す。女子風呂ではよくある光景なのだろう。

「それにしても、アンちゃん（アンジュ）や

リーちゃん（リアス）も束さんに負けじと巨乳だねー！スーちゃん（スバル）もそう思わない？」

「はいはい！だからアンジュさん、リアスさん……

私達にその豊満な胸を触らせてください！」

束とスバルに至っては自分達も巨乳のクセにアンジュ、リアスの胸を揉もうと迫る。

「ちよっと！そのいやらしい手つきは何なのよ!？」

「や、やめなさいスバル！こら！……ああ　　！」

二人に危機が迫ろうとしていた時、ティアナと

ノーヴェが何処から出したか知らないがハリセンで二人の頭をそれぞれ叩く。

「スゲー賑やかなんだな、お前達ってさ」

「これが普通なのですよクリス。でも翔真達が

いればもっと騒がしいですが」

クリスはちよつと変わった光景に驚くもののシュテルは

いつもこんな感じですよという表情でシュテルは

湯船に浸かる。

束達は普段翔真達男子の前では話せない事を話したりと優雅な時間を過ごしていった。



## 第四章 すれ違う者達

PHASE 45 「虚無の申し子 バンシイノルン 前編」

篠ノ之箒（18）

CV 日笠陽子

容姿原作よりも背が若干伸びている。

搭乗機 インパルスガンダム、後にDestinyニーガンダム

本作の主人公の一人でザフト側の主人公。簡単に

言えばシン・アスカと同じポジション。一年前に

地球連合がザフトに見せしめとして日本にある

都内数ヶ所爆破、さらには残忍な虐殺などを目の当たりにして地球連合を滅ぼそ

うと野望を持つ。さらには

セカンドステージ強奪事件発生の半年前にある人物を救えなかった事を悔やんでおり己の無力差が故に憎しみを持つ。恋人はアリシア。

突然の再会を果たした一夏と箒、アリシアとアイン

ハルトを含む四人は場所を移して人も誰も居ない

海岸へと来ていた。フリーダムとインパルスが向き合っている状態で鎮座しており一夏と箒はそれぞれアイン

ハルト、アリシアをコクピットに待機させて対話に

挑む。

「……………」

一夏と筈、約二年ぶり（一夏からすれば4年ぶり）の再会となる。その為どちらから話そうかと迷うものの最初に口を開いたのは筈だった。

「二年ぶりになるな、一夏」

「そうだな、筈」

「再会した直後に悪いが……………この前起きたダーダネルス戦介入に関して聞きたいのだが」

「あの事に関してはただ戦闘を止めたいだけだった。

誰かが血を流すなんて間違ってる、俺達は……………」

「何が戦闘を止めたいだ……………貴様達が介入した事で要らない犠牲だって出たんだぞ！それを分かっているのか！」

「けど、俺達はそれでも戦闘を止めたい、あと

この戦争を俺達で終結させるつもりだ」

「何だと!？」

「お前は反対するかもしれないが俺や翔真の決意は

固い」

「貴様……だが私達だって必死にこの戦いを

止めようとしている! テスタロッサ議長も!」

「悪いが、俺達はテスタロッサ議長を信用していない。

あの人は本当に信用出来るのかよ」

「当たり前だ!」

「……やっぱり、俺とお前は分かり合えない

みたいだな」

一夏はフリーダムがある方向へ歩き出す。

「待て一夏!」

「箒……次に戦場で会ったなら……俺は一人

の兵士としてお前を倒す」

「……!？」

一夏は箒の今置かれている状況を何となく分かった。

『ニュータイプ』である彼には箒の後ろに誰か

黒幕がいると感じとる。そして一夏は一人の人間と

して、一人の兵士として彼女と決別する事を決めた。

「じゃあな」

それが箒に送った言葉だった。

一夏はフリーダムに乗り込む。フリーダムガンダムは蒼い翼を広げてその場から飛び去る。

「……一夏……クソ」

一夏と箒が話し合っていた頃にトレミーⅡの食堂

では翔真とマルス、ディアーチェが席に座って

ある話をしていた。

「ミッドチルダへ一旦帰るとな？ どのような事だ翔真？」

「僕も気になります」

「まあ話が長くなるから手短に済ませますがはやての

報告によると俺のイノベーター専用機の開発が中止

された……………」

「……理由は一つ、我らが武力介入する事を気に入らないGspirits隊が  
勝手に起こしたストライキのような

ものか」

「Gspirits隊……………」

「俺は一旦ミッドチルダへ帰還してダブルオーク

アンタを奪取する。そこでマルス、ディアーチェ

お前達に手伝って欲しい」

「仕方ない、お義父様と敵になるが我も心を

鬼にして貴様と共に行こう」

「僕も行きます、ですけど僕ら三人だけで大丈夫なん  
でしょうか？」

「その事なら心配無用だ。マルス、お前にある物を  
見せてやる」

「ある物？」

「ああ………『虚無の申し子』の力を見せてやる」

そしてトレミーから翔真の駆るバンシィノルン、  
マルスのエクシエス、ディアーチエはなのはから  
借りたフリーダムに搭乗していた。

「さてと、バンシィノルン………お前の力を

思う存分に発揮させよう！」

翔真の叫びに応じてNT・Dが発動しバンシィノルンはデストロイモードとなる。緑色に光るサイコフレームは神秘的な光を放つ。

「マルス、ディアーチェ、バンシィに掴まれ」

エクシエス、フリーダムはバンシィノルンの背部の  
アームド・アーマーDEスラスターの左右それぞれに  
掴まる。

バンシィノルンはエクシエスとフリーダムと共に  
ワームスフィアを使いミッドへと次元転移する。

す。  
ミッドチルダ上空、  
転移したバンシィノルン、  
フリーダム、  
エクシエスが姿を現

「無事転移完了だな」

「ふむ、しかしよく晴れておるな」

「……………」

「マルス、どうかしたか？」

「いや、その機体……バンシイが凄いなと思ひまして」

「何だマルス？こんな事ぐらいで驚いているのか？」

「バンシイの力はまだこんなもんじゃないんだが……」

「呑気にお話している場合ではないぞ！」

「あれは!?!」

「……………Gspirits隊か」

前方からGspirits隊のMS部隊が現れる。

「仕方ない、俺があの人達の相手をする。ディアーチェ

お前はダブルオークアンタを頼む。そしてマルスは

俺の援護に回れ！」

「任せておくがよい」

フリーダムはバンシィ、エクシエスから離れる。

「アンタ達との戦闘は避けたいがそうはいかないよな。

けど、敵になるなら俺はアンタ達を……倒す

バンシィノルンは右手に持ったビームマグナムを

構える。その瞬間右手首がエメラルド色の結晶に

覆われる。

「ターゲット、G s p i r i t s 隊」

ビームマグナムから紅い一筋のビームが放たれた。

！」

PHASE 46 「虚無の申し子 バンシイノルン 中編」

ミッドチルダの上空でGスピリットS隊のMSと戦闘に入る

翔真のバンシイノルンとマルスのエクシエス。最初に  
量産型MSM1アストレイ10機が迫る。

「雑魚に用は無い！」

バンシイノルンはビームマグナムを放ち一気に

アストレイのメインカメラを二機破壊する。

「……」

マルスもまた戦闘が始まるなり傭兵モードとなり

冷酷な目付きモニターを睨む。エクシエスがグラム  
でアストレイを次々に切り裂く。

「……遅い　　！」

エクシエスは素早くグラムを横一閃にスイングする。

「やはりそう簡単には通してくれないよな……  
だったら見せてやる、虚無の申し子の力を！」

バンシィノルンはワームスフィアを発動する。ワーム  
スフィアがM1アストレイに当たり全機撃墜する。

しかし、そう簡単には見逃してくれないのがG s p i r i t s 隊  
である。

「翔真さん、前方に敵MSです」

「G s p i r i t s 隊の紅い彗星か……ヴェルンハルデ・  
アドラーか……」

前方に紅いMSサザビーが接近していた。搭乗者は  
G s p i r i t s 隊第1小隊長ヴェルンハルデ・アドラー  
である。

『綾崎翔真！貴様を国家反逆罪で捕らえる！いけ  
ファンネル！』

サザビーからファンネルが展開されファンネルはバンシィノルンに近付くがバンシィノルンは右手をかざす。するとファンネルはサザビーに向かって攻撃を始める。

『何故だ!? ファンネルが言う事を聞かない!?!』

「その機体を選んだのはアンタのミスだ」

バンシィノルンはビームマグナムをしまうとワームスフィアを円形状に形成する、それブーメランを投げるような感じでサザビーに放つ。サザビーはファンネルから発射されるビームの雨を避けながら交わす。

『クッ!?!』

「アンタ達が俺達の事をどう思うが勝手だがあっちの世界は俺達の世界だ。そうやって訳も分からず俺達を批難するのは間違っている」

『だが貴様達のやっている事はテロリスト同然だ!』

「あんな奴等と……………一緒にするなアアアア

!!」

テロリスト同然、翔真はヴェルンハルデの言った

言葉に怒りを覚える。怒りに応じるかのように

バンシィのサイコフレームが緑色から赤色へと

変わる。

「はアアアアアアア!! バニシングシフト!!!!」

サザビーの周りにワームスフィアが大量発生し

機体は攻撃に堪えきれず徐々に爆発を起こす。

ヴェルンハルデは爆発寸前に脱出している為無事

であった。

「……………な、何なんだ……………あれは」

マルスは目の前で起こった光景に目を疑った。

バンシイノルンの性能は従来のMSを遥かに越えて

いる、それが故にマルスからすれば驚くのも無理はない。

「マルス！動きを止めるな！」

「は、はい！」

虚無の申し子、マルスはこの言葉がどういう意味を示すのかと考えていた。

PHASE・46・5「箒とつかさの出会い」(2017/7/21 修正)

今回はちょっとした小話。あとスマホを換えてまだ扱いが不安定なのでもしおかしな所があれば言ってください。

これは翔真、マルス、ディアーチエが

ミッドチルダで戦闘を繰り返している頃の話である。

一夏との再会から丸2日経っていた頃、

箒は久々に日本へと帰って来ていた。ひとまず

先に自身の愛機であるインパルスガンダムは

IS学園のMS格納庫へと納め、モノレールに乗り

大型ショッピングモールレゾナンスへ来ていた。

「懐かしいものだな。よくセシリア達と

来ていたものだ：・あれからどれだけ経ったのか：・」

変わらない風景に箒は何処かほっとしていた。

服でも買いに行こうと箒は歩き出そうとした。

「ちよっと何なのよ！」

「ん？」

何処からか女性の声が聞こえて箒は周りを見渡す。

すると、一人の少女が複数の男に囲まれていた。

「だらさア、俺達と楽しい事しない？」

「大丈夫だから一緒に行こうぜー」

「お前達みたいな奴等なんか誰が

付いて行くもんか！」

「んだと？」

「今どきナンパなんて格好悪いんじゃないの!？」

「ッ！この女アア！」

少女の態度に気に入らなかつた男は殴ろうと右拳を振り上げようとした。だが

「一人の女の子に手を上げるのは最低だぞ」

「ああ？何だテメーは」

「へえー、君も結構べっぴんさんだね？」

拳を止めたのは箒だった。複数の男は箒の全身を

見るなりゲスい笑みをこぼして箒に近付こうとした。

だが、そんな事お構い無しに複数の男を相手に

素手で相手をして一瞬で瞬殺した。

「私に触れるな」

冷たくそう言い放ち少女の手を取りその場を後にした。

「大丈夫だったか？」

「う、うん……ありがとう、助けてくれて」

「気にするな。困っている者がいれば助ける、

当然の事だ。そう言えばここらではあまり

見ない顔だな？」

「実はここに来るのが初めてで、ちょっと道に迷った所なんだよね。だから……」

「それでさっきの輩に絡まれていたという訳か」

「まあね。そうだ！ねえ、アナタってこのモールは詳しい方？」

「ん？ああ、全ては把握している」

「凶々しいかもしれないけど案内とか頼んでも

いいかな？私、服とかが欲しくて……でもお店が何処にあるのかが分からないから」

「おお、それは奇遇だな。今日私も服を買いに来た所だ。ならば一緒に行くか？」

「うん！」

「そう言えばまだ名を語っていなかったな。私は  
篠ノ之箒だ」

「箒……何だかジャパニーズサムライみたいな  
名前で格好いいね！」

「そ、そうか？」

名前を格好いいと言われた箒は

若干嬉しさが込み上げる

「じゃあ次は私だね！霧生つかさ、宜しくね箒！」

「ああ、つかさ」

それから箒とつかさは一緒に服を選んだり、ご飯を  
食べたり、ゲームセンターで遊んだりと楽しい一時を

過ごした。やがて二人は時間の都合上別れた。その際に  
二人は約束した、また会えたら遊びに行こうと。

だが、後に悲しい再会を果たす事になろうとはまだ  
箒とつかさはまだ知らない。

---

今連載しているオリ主が再びIS世界で頑張る話だけで

他の作者様が書かれているオリ主がのアストレイ作品を紹介します！

まずはXENON・199XRさんが書いてくれている作品、

マルスの視点を中心に描かれた

「オリ主が再びIS世界で頑張る話だけど・・・sideASTRAY」と、

ヘルダイバーさんが書かれている作品でGspirits隊、

大東貫一の視点から描かれた「オリ主が再びIS世界で

頑張る話だけど・・・sideGspirits team」です。

是非ともこのお二つの作品も読んで頂ければさらに

この作品を楽しめると思います！それとsideストーリーを書いて頂いてい

るXENON様、ヘルダイバー様

ありがとうございます！

次回からまた戦闘に入ると思います！

PHASE・47 「虚無の申し子 バンシィノルン 後編」

M1アストレイ部隊を全滅させた翔真とマルス、だが二人の駆るバンシィノルン、エクシエスの前方からある一機のMSが接近していた。

「照合、Hi・Vガンダムか。とういう事はカスタム機」  
翔真はモニターに映る機体を見てそう呟く。

二機に迫る機体、その正体は改修を施されたHi・Vガンダムヴレイブであり改修後はHi・Vガンダムリベレーターへとカスタムされた機体である。パイロットはもちろん和馬である。

リベレーターはビームサーベルを抜き瞬時にバンシィノルンの右腕を切断する。

「(動きが速い！ヴレイブの時とはかなり違う。

油断しきっていた！」

あまりの早さに翔真が驚いている中、リベレーターから通信が入る。

『今すぐに投降しろ、翔真』

「やはりアンタだったか、和馬さん」

『俺はお前とは戦いたくない。投降すれば命は

助かる！だから！』

「ッ……そっちから攻撃をしといてよく言う」

『違う！』

「だったら何が違うんです？ 貴方達が俺と戦う意思

が無くても俺に刃を向けたなら敵だ、例えアンタだろ

うとね！」

バンシィノルンの切断後の右腕にはエメラルド色の

結晶に覆われ一瞬にして砕け散る。そこには破壊され

たはずの右腕とビームマグナムが復元されていた。

「再生した!？」

普通MSが再生能力を持つはずもない。バンシィノルンの驚異的な力に驚くマルスト和馬。

「これ以上敵とくどくど話すつもりはない！」

バンシィはビームサーベルを抜くとリベレーターに斬り掛かる。

「やっぱりそうなるのかよ！」

バンシィのサイコフレームは緑色に輝き機体全身オーラが纏われる。だがリベレーターにもNT・Dがある為にリベレーターも強制的にデストロイモードとなる。

「NT・Dだと！だとしても！」

「くっそ！なんつうシステムだ！意識を乗っ取ろうとしやがる。翔真に一夏はこんな危険なシステムを使っていたのか！」

互いの機体は輝きを放ち続ける。そして翔真はある事を和馬に問う。

「アンタ達は何の為に戦う！」

「何!？」

「軍の命令か？それとも自分の成績の為か？」

「なわけあるかア！俺は……俺達は醜い戦いを

終わらせる為に戦っているんだ！この手で何千人

という人達を救って来た！翔真、お前がもし今迷って

いるのなら……俺が助けてやる　　！」

「助けてやる……か、アンタ達はそうやって

幾つもの命を救って来たかもしれない、けど……

俺には救えなかった、恋をした女性(明日菜)を、

自分を慕ってくれた女性(クー子)を、何千人という

命すらを救えなかった……軽々しく　　！助けると言う

言葉を使うアアアアアア……！」

バンシイノルンのサイコフレームは緑から青へと変わる。

近くではエクシエスが二機の凄まじい戦いに動きを止めていた。その光景をモニターで見ていたマルスはただ黙るしかなかった。一瞬だが翔真の叫びが頭の中に響いた、普段は救いようのないスケベである彼の普段見せない怒りにマルスは自然と悲しみが胸で広がるのを感じる。

「(どうして……だろ、悲しくないのに胸が痛む……)」

『何処を見ているの！』

突然通信から女性の声が響き、5秒後にガンダムタイプのMSがエクシエスに斬

りに掛かる。

「ッ！」

エクシエスは紙一重で交わした。だがマルスの頭の中で白いイナズマが駆け抜ける。

「(あのガンダムタイプに乗っているパイロット、

僕は知っているような気がする。誰なんだ)」

エクシエスに襲い掛かったのはギンガ専用に変更

され蒼いカラーに染められたガンダムレギルス。

パイロットはギンガ・ナカジマである。

そしてギンガもまたマルスと同じで頭の中で白いイナズマが駆け抜ける。

「(誰? 貴方は………誰

! )」

レギルスからビットが放たれる。今のエクシエスは  
アメイジング・ウェポンバインダー装備、つまり

簡単に言えばエクシエス版のヴァランチュユニット

と言った方が分かるだろ。バーニアを全開にして

エクシエスはビットを避ける。

マルスは機体を加速させる時でも頭の中で白い

イナズマが何度も駆け抜ける。

「(この感じ……僕は本当に知っているのか　?)」

今は迷っていても仕方ない。マルスは戦闘に集中

してビットを交わし続けレギルスに近付く。グラムが

降り下ろされようとしていた瞬間、ギンガは即座に

反応してビームサーベルを展開してグラムを退ける。

「(このパイロット……強い)」

マルス、ギンガの考えが一致する。エクシエスと

レギルスが白熱の戦いを繰り広げる中でディアーチェから通信が入る。

「聞こえるか！翔真、マルスよ！」

「ディアーチェさん」

エクシエスの後方にはクアンタを担いだフリーダムが近付いていた。

「小鴉（はやて）から預かった物だ！翔真！」

ディアーチェからの報告を聞いた翔真はリベレーターとの戦闘を中止してフリーダム、エクシエスの前にゆっくりと近づく。

「クアンタは貰っていく。俺達の任務はこれで  
終わりだ」

「ッ!? 待て!」

和馬が呼び止めた時には遅くバンシィノルン達は消えていた。

場所は戻ってISの世界。ザフト最高評議会議長  
プレシア・テストアロツサは今ザフト本部にある  
議長室で不敵に笑みをこぼしていた。

「綾崎翔真、マルス・レディーレ、織斑一夏、

篠ノ之箒……貴方達がいずれ世界を……

フフフフ……アハハハハハハ !!」

プレシアの思惑通りにある計画は順調に進められていた。まるで神になったように気分が上々のプレシア。

さらに言えば

後に地球圏統一連合とザフトが手を組む事はまだ誰も知らない。

## PHASE 48 「束にとっての翔真とは」

ミッドから帰還した翔真、マルス、ディアーチエ。

しかしバンシィノルンの能力を使いすぎた翔真は

コクピットから降りた途端に疲れから来る疲労感に襲われて今はメデイカルルームのベッドへと寝かされていた。

「ツー君、しょう君は大丈夫なんだよね？」

「大丈夫ですよ束さん。けどバンシィノルンは

あんまり搭乗するなどは言っておいたはずなんですけどね……」

命に別状がない事を知ると束は安心して翔真に

寄り添う。ツバサはデスクに散らばった診断書を

手に片付けをしようとした所マルスが部屋に入って

来た。

「ツバサ、今いいかな？」

「……何か聞きたいって顔だね。いいよ、コーヒー入れるから椅子に座って待ってなよ」

数分後、ツバサはコーヒーをコップに入れて

一つをマルスに手渡す。ツバサは椅子に腰を掛けてマルスに視線を移す。

「さて、聞きたい事は？」

「バンシイノルンについてなんだけど。あの能力は

何なの？普通腕が再生したり、ガンダムへ変化すると

光を放つし……だから僕は不思議に思っただけに聞こうと思っただけ……」

「まあ確かにマルスの言いたい事は分かる。バンシイノルンは元々普通のMSに過ぎなかった。けど翔真が何回か搭乗する度にチートと言っても過言ではない

能力を手にした」

「……………」

「あと一つ、バンシイノルンは翔真の悲しみと憎しみを受け止める器でもあるんだよ、つまり僕が言いたいのは

は機体自らが進化していったという事さ」

「機体自ら……そんな事が有り得るの？」

「あくまで推測だよ。それとマルス、バンシイには

近付くなよ？ あれは翔真以外の人間が触れると同化されるからな」

「同化……………」

二人が話している中、束がツバサに近付く。

「ねえツー君、もうしよう君をバンシイには乗せないで

……………またしよう君に憎しみでも生まれたら……………」

「翔真には言ってるんですけどね……………」

「？」

いまいち話の内容が分からないマルス。

「まあ話は終わりにしてマルスは僕と部屋を出ようか」

「ほえ？」

ツバサはマルスと共にメデイカルルームを出る。

今部屋には束とベッドに寝かされている翔真だけだ。

「本当にしよう君は無茶ばかり……出会った時からずっと……」

束は翔真の横へと寝転がる。

「心配する私達の身にもなってよ。お願いだから

……」

徐々に束のつぶらな瞳から涙が溢れ出す。

「悪いな、いつも心配ばかり掛けて」

「しよう君、起きたの？」

「そんな声でお願いされたら起きるぜ誰だって」

「いつもはスケベで、バカで、私達のオッパイを

揉む事しか考えていないクセに……こういう時だけ

格好いいだから」

「それが俺だからな」

翔真と束、二人はベッドで横になりながら今まで

IS世界で起きた過去を懐かしむように話した。ちなみに

途中でなのは達が乱入したのは言う間でもない。



PHASE 49 「新たなガンダム」

今回は翔真、シャルロット、ツバサ、ネプテューヌが

ヤマトがメイン

さらにオルフェンズからあの機体が!?

---

ダブルオークアンタを強奪（本当は貰い受けた）して数日。ツバサはロッカー  
ルームに居た。

「……ザフトの主要施設を破壊か。やる事はそれしか無いよね」

青と白のツートンカラーに染められたパイロットスーツを着るツバサ。スライドドアが開き翔真が姿を現す。

「よ、準備は出来ているみたいだな」

「そういう翔真も準備万端って言った所だね」

「まあな。それとツバサ、あのもう一機のエクシアは俺のか？」

「うん。君の専用機であるイノセントエクシアを元の形に戻して君の操縦に付いていけるようにしてある。けど、無茶苦茶に扱うなよ？」

「分かってるよ。つうかツバサ、ネプテューヌも連れて行くのか？」

「ネプテューヌも私も力になるって言って言う事を聞かなくてね」

「そうか。まあ今回はシャルロットも同行するから俺も人の事言えないんだけどな」

翔真は照れくさそうに笑う。

「……ねえ、翔真」

「何だツバサ？」

「ニックさんの事をどう思う？」

ツバサは日頃気になっている疑問を翔真にぶつける。

「ニックさんか……あの人は、俺達がやって

いる武力介入が気に入らないから敵になったわけだか

あの人が言っている事が間違っているわけじゃない」

「……」

「どちらにせよザフトに連合に付いた所でいい事は

あまりない。俺達は俺達なりの戦いをする、それだけだ」

「そうだね」

翔真とツバサは格納庫へと歩き出す。

今回翔真達がやる事はアフリカ大陸にあるビクトリア湖の近くにあるザフトの基地。前に調査と称してヤマトが潜入した齊に大量のMDを開発している事が発覚。

そして今回はビクトリア基地の襲撃を開始する。

ビクトリア基地の上空付近にトレミーが近付き

同時にカタパルトデッキが開き、翔真のエクシア、シャルロットのウイングゼロ、ツバサのガンダムバルバトス、ネプテューヌのガンダムヴィルキス、

ヤマトのダブルオーダーガンダム（オーライザーを外した状態）が出撃する。

「いいか！俺達がやる今回のミッションはあくまでMDの破壊だ！例え戦闘に入ってもなるべくMSを無力化させろ、いいな！」

「了解！」

一方、ビクトリア基地では敵接近を知らせるサイレンが鳴り始めていた。幾つかのガレージからジン、ザクウォーリアーが共に15機ずつ現れる。上空から最初にエクシアが現れる。素早くGNソードを展開してジンのメインカメラを破壊していく。後からツバサ達も戦闘に入る。

『アイツらはまさか！ソレスタルビーイングか！』

『まさかあの事が知られたのでは!?!』

『なんとしても倒せ！』

敵のパイロット達に緊張が走る中ツバサはモニターに映ったジンに視線を向けて

「倒す、死にたくないなら……退いての方が身の為だよ」

ツバサはそうやすやすと敵を安全に帰しはしない。

メイスを握りしめるバルバトスはザクウォーリアーの

メインカメラ目掛けて降り下ろす。

力強くメイスを何度も何度も降り下ろしザクウォーリアーはスクラップにされた。

「まだまだ……ッ      !?」

ツバサは次のターゲットの方へと視線を向けようとした瞬間、機体が何かに激突したのかクピットに衝撃が走る。

『前の借りは返させてもらうぜ、クソガキ』

「この声は……ニックさん、それに……その機体は」  
バルバトスを羽交い締めにする機体、その正体は  
ガンダムキマリスだった。パイロットはニックで  
あった。

ツバサとニックが再び激突する。

## CBS-74 プトレマイオスII

かつてソレスタルビーイングが使っていた艦で地球圏統一連合が残されていたデータを使い完成させた。

所有権ははやてにあり、いくら誰が何と言っても彼女の命令無しでは取り上げる事は出来ない。本艦はMSの

収容数が15体まで可能である。さらには温泉施設

天使湯が設備されてある。もちろんの事ながらトランザムも発動可能である。

武装

GNキャノン・4門

GN GN 小型  
ミ バル GN  
サイ ル カン キヤ  
ル カン ノ  
ン  
・  
4  
門

## PHASE 50 「リンネの怒りとツバサの悲劇」

バルバトスとキマリスが戦闘に入っている頃、トレミーⅡではリンネ、マルス、一夏、簪が大量に隠されて

あった監視カメラを見つけて破壊していた。

「何がGspirits隊だ、アイツら……」

「そこまでして僕達を監視したいのか！」

「大東さん、さすがに信頼を失うぜ」

「プライバシーの侵害だよ！こんなの！」

大東の策略か、監視カメラが付けられていた事に一同は怒りを隠し切れない。そしてリンネはある決意をする。

「大東貫一……貴様は俺達の障害となる。お前を殺す。マルスしばらくトレミーを頼むぞ！」

「リンネさん！」

リンネはシナンジュの元へ駆け寄り機体を発進させる。

「シナンジュ、月村リンネ出る！」

シナンジュはバーニアを勢いよく吹かせるとトレミーから出撃する。

「Gspirits隊、お前達だけは俺の手で潰す！」

いくら何でもプライバシーを侵害する行為は許されない。リンネは怒りを露にして再びミッドチルダへと

行く。

ビクトリア基地ではツバサのバルバトス、ニツクのキマリスが戦っていた。

「オラオラ！その程度かよくそガキ！」

ランスがメイスに何度も当たると。

「うるさいなア、少しは黙りなよ！」

バルバトスはメイスを横へとスイングして、

キマリスはランスで交わす

「僕は貴方が嫌いだ！いつもキレイ事ばかり並べて

……世界はそんなに優しくもないんだよ  
！」

バルバトスはメイスを振り回しキマリスの装甲を

殴る。

「俺もお前がキライだ！クソガキが戦い方に

口を出すんじゃない！」

ツバサの物言いにニツクは苛立ちを覚え、キマリスは

ランスでバルバトスに反撃する。

「スタニツク・デュノア！ザフトの番犬にまで

なつてアンタは一体何をするつもりだ！」

ランスの一撃を退けメイスでキマリスを吹き飛ばす。

「はぁアアア！！！」

バルバトスは次第に距離を詰める。

一方で翔真とネプテューヌは任務を遂行していた。

基地から徐々に爆発が起きる。

シャルロット、ヤマトに関しては互いにモニターに

写るバルバトスとキマリスの戦いを見ていた。

「お兄ちゃん、どうして」

「(スタニツク・デュノア、Xラウンダーの使い手

だって前に翔真から聞いた事があったな。今は

取り合えず任務に集中しないと)」

ツバサとニツクの叫びがこだまする中でバルバトス、  
キマリスが壮絶な戦いを繰り広げる。

「前のようにはいかねえ！」

キマリスはバルバトスに目掛けてランスを投げ付ける。

ツバサはギリギリ回避するが

「ッ!? ネプテューヌ……!!」

ランスが向かう先にはネプテューヌの機体があった。

ツバサはアクセルを全開にして庇おうとランスを

追いかける。

「やめろオオオオオ!!……!!」

そして、バルバトスは自らランスを受け止めコクピット  
付近に突き刺さる。

「うわァァァ!!」

コクピットは少し爆発を起こす。

「ツバサ……ツバサ……ツバサァァァ!!!」

目の前でその光景を見てしまったネプテューヌ（今は女神化している為パープルハート）は中破したバルバトスに機体を近づけさせる。

「ツバサ！お願いだから返事をして！ツバサァァァ！」

「……………」

通信回線は開いているが応答が無く、次第にネプテューヌの目から涙が溢れ出す。

「何でこんな事するの……………お兄ちゃんはそんなに

私達が邪魔なの？……………女の子を狙うなんて……………」

最低だよ！」

シャルロットの駆るウイングガンダムゼロはキマリスに向けてツインバスターライフルを放つ。キマリスは直撃コースを回避したがこちらでも中破する。

「まさか、そのウイングゼロに乗っているのは……」

シャルロットか！」

「…………お兄ちゃんがそんな人だとは思わなかった。

もう…………貴方なんか私のお兄ちゃんじゃない  
！」

「ッ!？」

ニツクにとって一番キツイ言葉が飛び出した。シャルロットと翔真達は機体を使い中破したバルバトスを抱えビクトリア基地を後にした。

誤解が誤解を招く……

## PHASE-51 「正義と自由とグシオン・リベイク」

任務から帰還した翔真達、トレミーIIのメディカル  
ルームでは上半身に包帯を巻かれて人工呼吸装置を  
取り付けられたツバサがベッドで寝かされていた。

「ツバサ……」

「ネプちゃん、取り合えず君の命に別状は無いから  
安心して」

「……けど」

ネプテューヌは酷く落ち込んでいた。愛する人が  
こうなればいくらお気楽なネプテューヌでも元気を無くす。東は落ち込むネプ  
テューヌを抱き寄せて頭を撫でる。

翔真とマルス、ヤマトは翔真の自室に集まっていた。

それは大東貫一の事である。いくら上司とは言え

人のプライベートを侵害する事は許されない行為だ。

「……ここまで勝手な人だとは思わなかったな」

「翔真さん……」

「それで翔真、これからどうするんだ？」

「……ヤマト、お前に頼みがある」

「何だ？」

「明久と共に地球圏統一連合を黙らせてくれないか？」

「理由は？」

「ゼロが見せた未来、大東さんや地球圏統一連合は

必ず俺達の障害となる。システムの戯言だと思うかも

しれないがゼロの予測は当たってきている。だから

こちらとしても手を出さしかない」

「理由は分かった。いいぞ、だが明久と俺だけじゃ

戦力が足りない」

「心配するな。お前らの味方はちゃんという」

すると翔真はメディカルルームのデスクにあるパソコンの液晶キーボードに何かを打つ。

「頼むぜ………レイジ」

その頃ミッドチルダの海域ではMSの残骸が幾つも

浮かび上がっていた。それはリンネが操るシナンジュが何機も撃墜した為である。

「やはりお前達と俺達とでは互いに意見が食い違う！

俺達を監視し、そこまでして俺達の邪魔をするか！」

シナンジュのビームサーベルは大東の操るMS

「千式（デルタサウザント）」に降り下ろされる

千式はビームシールドでサーベルを食い止める。

「あくまでわたしの話を聞かないつもりか！」

「聞く気などないし、聞こうとも思わない！」

シナンジュはシールド裏に装備されたビームアックスを

展開して千式に攻撃する。

「人の話を聞けエエエエ！」

大東は話を聞こうとしないリンネに苛立ち千式を

加速させる。千式はクレイバズーカを零距离射撃で

放ち、シナンジュのメインカメラに当たる。

「クッ！」

「これでエエ！」

大東はチャンスと確信してシナンジュを捉えようとした。

「敵が一人だと思わない事だな」

コクピット内に響く冷酷な声に大東はモニターを見た。  
すると目の前にGタイプを思わせる機体が現れていた  
「いつの間にな！」

「任務を遂行する、行くぞグシオン・リベイク」

グシオン・リベイク、それがこの機体の名前だ。

リベイクは両手にハルバードと呼ばれるアックスを持ち千式の右腕、左腕に突き刺す。だが装甲が固い為には破壊出来ない。

しかしリベイクは次にロングレンジライフルを千式のコクピットに向ける。

そして、リベイクのパイロット『レイジ・クロサキ』は大東に警告する。

「大東貫一、これ以上ソレスタルビーイングに関われば貴様の命の保証は無いぞ。それともう1つ、貴様が何らかの動きを見せれば愛しの妻が帰らぬ人となるぞ」

「何だ?!? リンディに何をするつもりだ!」

「別に何もしない。だがこうでもしなければ貴様は動く事を止めないだろ?」

「ッ！」

「それと、翔真達の世界にいる諜報員達も早くこの世界に帰還させろ、断れば分かっているな？」

「……ははは、してやられたな」

「月村リンネ、貴様は1度トレミーに戻れ」

「レイジか、借りが出来たな」

「気にするな」

リンネは戦闘区域から離れて転移を始め、リベイクは千式の元を離れる。

「綾崎翔真、これで奴等は黙らせた。あとはお前が何とかしろ」

レイジは静かにそう呟いた。

次回は箒とつかさの出会いを書きます！

## PHASE-52 「深紅の輝き」

今回はあのシルエットが出ます！

---

ミッドチルダでの戦闘が終了した頃、

ミネルバは修理を終えてクレタ沖を通過しようとして

いた。しかしまたもや連合軍がミネルバの前に立ち塞がる、水上艦艇イージス艦やスペングレー級が複数と

タケミカズチが前方に現れる。コンディション

レッドが発令され千冬、鈴、ラウラ、湊、ニックが

出撃する。

タケミカズチのブリッジでネオはミネルバを肉眼で捉えていた。

「たく、最近のザフトはガンダムばかり開発しているのか？見た事ない機体まで居やがるな」

「ロアノーク大佐、どう致しますか？そろそろ

攻撃を開始いたしましょうか？」

「俺が出撃したら全艦攻撃を開始してくれ。さて

この戦闘に奴等は介入してくんのかね？ソレスタル  
ビーイングは」

ネオは不敵に笑うとまほ達を引き連れMS格納庫へと向かう。

そんな中ミネルバのMS格納庫では箒はただ一人、出撃せずに

「あと少しだから待っててね〜シノノン〜」

「本音、飴をくわえながらの整備はどうかと思うぞ」

ミネルバの整備スタッフの一員である本音はある

シルエットを整備し終えて合体済みのインパルスに

ワイヤーを使いインパルスに装備させる。

「うん！完成。シノノン〜お待たせ〜デスティニー

インパルス再誕だよ〜」

本音はさまざまな手を施し完成させたデスティニー

インパルス箒を見せる。実は一回だけ箒はデスティニーシルエットを装備した

インパルスである敵と戦った

事があったのだがエネルギーの消費が半端なく悪い。箒はあまりデステイニーシルエットを使いたくはないと思っていたが、本音を含む整備スタッフの知恵と努力によりデステイニーシルエットは改良され箒は本音達に応える為にこのデステイニーインパルスに搭乗する事を決めていた。

「パワーエクステンダーを搭載して出力は少し

控え目に押さえてあるからデュートリオンビームは

1回くらいで大丈夫だから」

「そうか。すまないな本音」

「えへへ、別に気にしないで」

「それでは行ってくる」

箒は本音にお礼を込めたハグをしてデステイニー

インパルスへと乗り込む。

《カタパルトオンライン、システムオールグリーン！

箒！ 出撃大丈夫だよ！》

「了解だ！ 篠ノ之箒、デステイニーインパルス  
出るぞ！」

デステイニーインパルスはミネルバから出撃すると  
同時に光の翼を輝かせ戦場へと旅立つ。

「地球連合……清香を、関係の無い人達を殺した罪、  
死んで償ってもらおうぞ！ 私と戦場を舞え！ インパルス！」

箒の声に応えるようにデステイニーインパルスの  
ツインアイが光る。

深紅の衝撃の運命が地球連合に襲い掛かる。

そしてこの戦闘区域に翔真、一夏、マルスのウイングゼロ、フリーダムガンダム、エクシエスが接近していた。

「行くぞ、一夏。こんな事バカげた事、やめさせるんだ」

「ああ！」

「（また、貴方がまた現れるのか？ 箒さん）」

ウイングゼロ、フリーダム、エクシエスは加速して  
戦場へと向かう。

PHASE 53 「大切な物ありますか？」

今回の題名がとらハマりたいなキャッチフレーズなのは  
気にしない、気にしない。

---

ザフトと地球連合が戦闘を開始している中、翔真は  
一夏のフリーダムよりも、マルスのエクシエスよりも  
ウイングゼロを加速させる。

「(何でこんな事、俺が……………俺が……………」

この世界に転生したから……………こんなにも歪んで

しまったのか？」

加速によるGが体に負担を掛けている中で翔真はこの世界の事について考えていた。

「(もし……………、俺がこの世界を歪ませてしまったなら……………)」

「翔真！前を見ろ！」

「何？……………ストライクノワール、ルウエンか」

モニターの前方にルウエンのストライクノワールが接近していた。だがその横には新型と思われる機体が飛行していた。

「綾崎翔真……………貴様だけはッ  
！」

「ルウエン君、こんな事やめよ？復讐したって何になるって言うの？」

「ティアーユ、俺はこの戦いで奴と決着つけなければ  
ならない……………だから見ていてくれ」

ルウエンはノワールを加速させる。徐々にウイング  
ゼロとの距離を詰める。

「(アイツも俺が居なければ生まれて来なかった  
はずだ。だけど今は)」

翔真はレバー引き戻してウイングゼロを人型形態へ  
と戻す。

「一夏、マルス。お前達は先に行け」

「任せていいのか？」

「アイツは……………俺が倒さないと意味が無いんだ」

「分かった。行こうマルス。」

「はい」

フリーダム、エクシエスは急いで戦場へと行く。



「お前に何があったかなんて聞こうとは思わない。けどな、俺だって全てを持ってしている訳じゃない」

「何!？」

「確かにお前からすれば俺は全てを持っているかもしれない。けど、俺はそうは思わない。何故だか分かるか？」

「そんな事知るものか！」

ノワールはフラガラッハを降り下ろそうとする。しかしウイングゼロはフラガラッハを右手で受け止めた。

「過去に……守りたい者を守れなかったからだ」

「ッ！」

ウイングゼロはフラガラッハを投げ捨てビームサーベルを抜く。ビームサーベルで一瞬にしてノワールの左腕を破壊する、次に右脚を切り裂く。

「もう終わりにしようぜ、ルウエン……いや、もう一人の俺」

ツインバスターライフルをノワールに向ける。

だがその瞬間、ストライクノワールの前に『Hi-Vガンダム・インフラックス』が立ち塞がる。

「もうやめて……彼を殺さないで……」

「殺すつもりはない。だがトレミーには連行させてもらう、ルウエンとは腹を割って話したいしな」

「分かりました」

「そう言えばアンタは？」

「私はルウエン君の付き添いで来ただけです。名前はティアーユ・ルナテイクと言います」

「そうか。付いて来い」

ウイングゼロはノワール、インフラックスをトレミーへと誘導し戦場へと急いぐ。

テイアージュはT O L O V Eるから出しましたがこの世界に  
存在する平行世界同一人物という設定です。だから  
普通に人間で容姿はそのままです！

---

## PHASE 54 「思春期を殺した少年少女達の翼」

ミネルバと地球連合の艦隊が遂に戦闘を始めた。艦隊の数は連合が圧倒的に多いのは目に見えてる事であり

ミネルバは孤立無援の状況下で対抗する。

MS部隊の方は千冬の駆るセイバーガンダム、ホッパー

ユニットを取り付けたニツクのガンダムキマリス、

湊のルシフェルが上空を担当し鈴、ラウラはガナー

ウィザードを装備したザクウォーリアーでミネルバに

近づく敵を一掃する。

「はあああああ!!!」

箒の怒号がコクピットに響く中でデステイニーインパルスはエクスカリバーを両

手に持ちウィンダムを同時に

真っ二つに斬る。

「来るなら来い！私とデステイニーインパルスが  
全てを蹴散らす」

『何を偉そうに！』

『あんな奴早く落としてやる！』

ウィンダムが五機デステイニーインパルスに迫る。

五機のウィンダムはビームサーベルを同時に降り下ろそうとした。だが素早く回避したデステイニーインパルス

はビームブーメランをコクピット目掛けて投げ付ける。

ウィンダムはビームブーメランを回避出来ず爆発する

「箒さん、貴女ならこの世界を議長と共に変えられ  
るはずです……私に見せてください、戦いの無い

世界を……」

湊はルシエルを操作しながら箒の戦いぶりを見ていた。

まるで鬼神のような戦い方で敵を撃破していくその姿は悪魔そのものだ。湊は祈るように箒にある想いを抱いていた。

「篠ノ之、お前……………」

「なんつう戦い方だよ……………ありゃ」

たった一機でMS部隊を圧倒していく箒に千冬、ニックは唾然とする。だがセイバーとキマリスにカオス、アビスが迫る。

「今日こそ落とす！」

「カオスガンダムか！」

カオス、セイバーはビームサーベルを引き抜き戦闘に入る。

「そのデカブツ、邪魔だアアアア！」

エリカの駆るアビスはキマリスに近付く。

「チィ！」

ミネルバのブリッジ

「取り舵20！ トリスタン、撃てエエ！」

ミネルバの周りにウインダム、さらにはジンクスが集まっていた。

「艦長！ 敵はますます接近して来てます！」

「仕方ないわ……………タンホイザーを使うしか……………」

スコールがタンホイザーを使おうと考える中、アリシアが突然慌てる

「どうしたのアリシア？」

「この海域にMS三機が接近してます！ しかもその内の三機はフリーダム、ウイングゼロ、エクシエスです！」

「まさか……………ソレスタルビーイング」

スコールの発言通り、翔真達ソレスタルビーイングはこの戦闘に介入する。

「もうやめろ！こんな事して、一体何になるんだ！」

『あれは!?!』

『フリーダム！二年前の機体など！』

一夏のオープンチャンネルを使つての説得は虚しく  
終わり、ウィンダムのパイロットはその言葉に耳を  
貸さなかった。

ウィンダム二機はビームサーベルを右手に握りしめ  
フリーダムに接近する。

「あの二年前の戦いで、何も学ばなかったのか！」

フリーダムは素早くラケルタビームサーベルを抜刀しウィンダムのメインカメラを破壊する。

「一夏アアアア！貴様アアアア！」

「箒!?インパルスの装備が!?!」

フリーダムとデステイニーインパルスが戦闘に入り戦おうとしていた頃、翔真やマルスもウイングゼロ、エクシエスである敵と交戦に入ろうとしていた。

「あの黒いフラッグから感じれるこの気……………」

お前なのか？隼人」

「毎度毎度ごちゃごちゃと、お帰り願おうか？ソレスタルビーイングさん！」

「黒い機体、逃がしません」

「ッ！」

翔真の駆るウイングゼロとネオの駆るフラッグは空中で  
ドッグファイトを繰り広げマルスのエクシエスは  
湊とのルシフェルと交戦に入る。

## PHASE 55 「復活のバルバトス」

オリ主シリーズ最終作、オリ主がガンダムSEEDの

世界で頑張る話だけを連載致しました。是非見て

ください！このSEEDでオリ主シリーズを完結させたい

と思います。

---

ルシフェルはビームサーベルを抜きゼロに近づく。

「この動き……誰かに似ている、けど……」

機体の動き、反応速度、戦い方、誰かに似ていると

思いながらも翔真は額に冷や汗を掻きながらルシフェルと慎重に戦っていく。

「はああアアアア!!」

デステイニーインパルス、フリーダム of 戦闘は未だに  
続き激しい攻防が繰り広げられる、エクスカリバーを  
二刀流に操りフリーダムを圧倒するデステイニー  
インパルス。箒は攻撃の手を緩める事はない。

「貴様達は一体何がしたいんだ！」

「箒、やっぱりお前は何も分かってない！今のお前は  
ただ怒りに身を任せて戦っているだけだ！」

「黙れ！怒りに身を任せるだと？全部こうなったのは  
アイツら地球連合のせいだ！無関係な人達を虐殺し  
こっちは大切な仲間も殺されてるんだぞ！」

「ツ……そうやって他人のせいにする人達がいるから戦争が起きるんだ  
何を！だがそう言うお前達はなんだ！戦いを  
！」

邪魔する貴様らが言えた事か！」

「クッ……」

箒の反論に一夏は返す言葉が思い浮かばずひたすら  
DESTINYインパルスの攻撃を防ぐ。

「私はこの力で全てを倒す！プレシア議長がくれた  
この力で！」

「箒……」

「やめろオオオ!!」

「教官、千冬姉!?!」

二機の戦闘に千冬の駆るセイバーガンダムが割り込む。

「一夏、頼む。話を聞いてくれ！」

「なんで千冬姉が……」

MSに………どうしてこんな

事になるんだよ！」

一夏は叫ぶと同時にSEEDを発動し二機に再接近する。

「あの三機、今なら！」

アビスガンダムは水中から現れそのままフリーダムやインパルス、セイバーに攻撃しようとしていた。だがマルスは見逃さずエクシエスを向かわせ……

「悪いけど、やらせてもらう」

グラムを構えてアビスに斬りに入り装甲を貫く。

アビスは大破し爆発しながら海中へと沈む。

「やはり現れたか、ソレスタルビーイング！」

ニックはエクシエスをモニターで捉えキマリスは

「ソレスタルビーイング！ プレシアの理想を邪魔する

なら倒すのみだ！」

「……！」

キマリスはランスでエクシエスを貫こうと何度も突こうとした、エクシエスはグラムでランスを阻止する。

「悪いがやらせてもらおうぞオオオ！」

ニックはXラウンダーの能力を発動してエクシエスの一歩先を行きキマリスはランスで次々と攻撃していく。マルスはキマリスの動きを読もうと先手を打つ、だが動きが格段と速くなりマルスは翻弄される。

「(さっきより動きが速い！クッ！)」

「終わりだアアアア！！！！！」

最後の一撃がコクピットを貫こうと迫る、しかしその寸前でランスはコクピットを貫く寸前で動きが止まった。

「もしかして……ツバサ君

？」

「行くよ、バルバトス」

マルスがモニターで見たのはキマリスを背後から羽交い締めにして動きを止めるバルバトスの姿だった。さらにバルバトスは改修が施され水上戦でも戦闘が出来る、バルバトス第5形態の姿だった。

「お前!？」

「ガンダムキマリス、今のバルバトスの敵じゃない」

バルバトスは一旦キマリスを離すと、背部に装備された大型特殊レンチでキマリスを一振りで吹き飛ばす。バルバトスはレンチでキマリスの片腕を挟み、内部に仕込まれたチェーンソーで切断する。

「バカな!? キマリスの腕が」

「マルス、後は任せてもらうよ。そして………

相棒（バルバトス）を強化してくれてありがとう  
ツバサはそう言々と攻撃を再開する。

PHASE 56 「嘆き」

「行くぞバルバトス、あんなガンダムフレームに負ける訳にはいかないんだ……」

バルバトスはツバサに応えるかのように大型特殊レンチを振り回してキマリスを圧倒する。無駄の無い動きで攻撃は次々と当りキマリスの装甲はでこぼこに静んでいく。

「クッソ！」

「出直して来なよ、迷いながら戦ってもいい事はないよ」

「ッ！」

バルバトスの容赦ない打撃はキマリスに大ダメージを

与える。

「殺す価値もない」

キマリスのメインカメラを右手で鷲掴みするバルバトスはそのままミネルバの方  
向に投げ飛ばす。

「何処までお前は……………この俺を侮辱するんだアアアアアアアアアアアア  
ア!!!!!!」

ツバサの呆気ない態度はニツクを怒らせる、キマリスは  
はブースターを全開にしてランスを構えて突撃する。

「……………侮辱……………したつもりはないんだけどね」

ランスの一撃を避け、背部に装備された太刀《雷斬》  
を取り出すバルバトスはランスを一降りで破壊する。

「バルバトス……………お前の力を見せてみる　　！」

ツバサはバルバトスに力を求める。次第に機体と

シンクロする事を感じ取ると機体を動かす。キマリスを

限界まで雷斬で叩きのめしメイカメラを破壊する。  
もはや行動不能となったキマリス、ツバサの手により  
ミネルバの元へとまた投げ飛ばされる。

「スタニック・デュノア、確かに貴方は強い。けど  
迷いながら戦っていても敵は倒せはしないよ」

「はああああアアアア!!!」

一夏はセイバーガンダムに千冬が乗っている事に動揺を隠しきれないでいた。ラケルタビームサーベルを抜き

インパルスに近づくフリーダム。

「ふざけるなアアアア!!!」

だが箒もSEEDを発動しフリーダムの攻撃を回避する。

しかし、一瞬にしてインパルスの前方に近づくフリーダムは再度サーベルを降り下ろす。箒は一夏の攻撃

パターンを読むと素早く機体をのけぞらせた。

フリーダムの降り下ろしたサーベルはコクピットの

わずかな上を薙ぐ。

本来なら海の中へと倒れ込むはずだがデステイニー  
インパルスは微妙なバランスを保ちながら海上に  
寝そべるような形で滑空する。

意外な形で攻撃を交わされたフリーダムも投入の  
姿勢のまま機体を流す。

「これで終わりだアアアア!!」

デステイニーインパルスはフリーダムからいち早く  
離れるとエクスカリバーを抜く。しかし背後から

大破したアビスが迫る。

「何処を見ている！」

「ッ！邪魔するなアアアア!!」

エクスカリバーをもう一本抜くとそれをアビスに目掛けて投げる。アビスのコク  
ピットに貫通し一瞬にして

機体は大きな怒号を上げて爆発した。

「エリカアアアア！………インパルス　　！」

目の前で散っていた仲間を目の当たりにしたまほは  
インパルスに攻撃を開始する。

「よくもエリカをオオオ！！！」

「チィ！」

一方でルシフェルを退けた翔真はネオが駆るフラッグ  
と戦っていた。

「（この感じ、間違いない！お前は……ッ　　！）」

「（さっきからちらつくこのプレッシャーは何だ？）」

あの機体に乗るパイロットを俺は知っているのか？（）

ウイングゼロはサーベルを抜き払うとフラッグに降り下ろす。

## PHASE 57 「救世主が落ちる時」

ウイングゼロはビームサーベルを振り降ろしてフラッグの左腕を切断する。

「ッ！」

「……」

マシンキャノンを発射しフラッグの装甲に弾丸を次々と当てると最後に分離させたツインバスターライフルを両手に持つ。

「ターゲット、フラッグ」

交互にバスターライフルからビーム砲が放たれフラッグにヒットし大破まで追い込む。

「この俺がア！くそー！」

「そろそろ潮時か」

ウイングゼロはそのまま、フラッグが海に落下していくのを見届けるとその場から離れる。

「……………」

マルスは連合のMSと未だに交戦していた。グラムを振りウインダムを真つ二つに斬っていく、しかし後方からタケミカズチの支援攻撃があり交わしながら戦っていく。

「マルス！これを使え！」

突如翔真の通信が入り上を見上げるとツインバスターライフルが落ちて来るのを確認する。

「そろそろ引き際だ」

「了解」

エクシエスはツインバスターライフルを構えてウインダムを射程に捉える。

引き金が引かれツインバスターライフルから膨大なビームが放たれ一瞬にしてウインダムを焼きつくす。

ウイングゼロにツインバスターライフルを返し

エクシエス、ゼロの二機はそのまま戦闘区域から離脱する。

場所は変わり別の戦闘区域ではフリーダム、セイバーが戦っていた。

「こんな事しても！お前達の力はただ戦場を混乱

させるだけだ！何故それが分からない!？」

「確かにそうかもしれないよ千冬姉、けどテストタロッサ

議長はいずれこの世界を崩壊へと導く！」

「そんな事はない！あの人はこの世界を平和へ導こう

としている！」

「嘘だよそれは！千冬姉も箒にしてもザフトが裏で

何をしているのか知らなすぎる！」

「何だと！」

「俺達は何と言われようと今後も武力介入をする。

それを邪魔するなら例え千冬姉であろうと身内であろうと

俺は………

……貴方を伐つ　　！」

「ッ!?!」

フリーダムはラケルタビームサーベルを2本抜きセイバーに迫る。千冬は悔しさから歯を食い縛りながらも機体

を加速させる。左手にシールドをかざし右手にビームサーベルを持つセイバーはフリーダムに近づく、だが



2年前に共に勉強し、汗を流し、笑って時には喧嘩したりした友達、そして初恋の相手。だが今は敵という立場……箒にとって悲しい現実であり出来るならば夢であって欲しいと願いたい。しかし目の前で姉である千冬のセイバーが無惨にも散った場面を目撃してしまった。これは紛れもない事実。

「……………クツソオオオオオオオ！……！！」

ドステイニーインパルスは光の翼を広げエクスカリバーを構えて連合の艦隊に突っ込み艦の1つ1つを撃沈させてゆく。

連合の艦隊はデステイニーインパルスにより撃沈され  
唯一生き残ったのはタケミカズチだけだった。

悲しみに落ちる千冬と怒りに燃える箒、いずれ二人は  
激突する。

---

2→3話したら対にあげが出来ます。デストロイガンダムが、

PHASE 58 「美男（イケメン）トリオの天使湯」

今回と次回でまたエロエロです！

---

ザフトと連合の戦闘に介入し無事帰還した翔真、一夏、マルス。それぞれ最愛の人達による出迎えを受けた三人それから翔真はマルス、今は捕虜として捕まっているルウエンを引き連れある場所へと向かった。ある場所、それは………

「何故風呂に入る事になるんだ？」

「まあまあ、落ち着けよルウエン」

「俺は最初から冷静だ。しかし何故貴様まで一緒な

んだマルス・レディーレ」

「翔真さんに誘われちゃって」

三人は天使湯の湯船に浸かりながら話す。

「俺は敵だぞ？」

「敵だから何だよ？俺にはそんな事関係ないな。

つうかルウエン！1つ聞きたいんだがああの特イアーユ

とかいう人とどんな関係なんだ？」

「何故急にティアの話が出てくる!!」

「いやー、気になってさ」

「ティアとはただ……仲間なだけだ                   ！」

「本当にそうか？Hとかしてないのか？」

「「さっー！」」

二人は翔真の爆弾発現に倒れそうになる。

「何でいきなりそんな話題へ切り替わる！」

「そうですよ翔真さん！」

「何？まさかお前ら………経験ないのか　？」

「あるわけないだろ！お前ふざけてるだろ！」

「ふざける訳ないだろ、これは至って真剣だぜ？」

「そんな質問をぶつけてくる奴なんか初めて聞いたぞ」

「確かに……」

「何だよつまらねえ………じゃアルウエンにマルス、

お前達に聞きたい事があるんだけどいいか？」

「僕は構いません」

「……好きにしろ」

「そっか……それじゃ聞いてくぞ　？まずはマルス。

お前ノーヴェ、アインハルト、クリス、御門先生、

この四人の中で誰が好きなんだ？」

「ふえ!？」

質問の内容にマルスは目を見開く。

「最近ノーヴェとかアインハルトとかがいつもお前の事を話してるしさ、御門先生にしてもクリスにしても。

だから俺は思ったんだよ、当の本人であるマルスはノーヴェ達の事をどう思ってるのか」

「どう思ってる……ですか。僕はただ大切な仲間だと思ってます。ノーヴェさんやアインハルト、クリスも、御門先生も……」

「そうか…… (ノーヴェにアインハルト達よ、お前達の好意が届くのは随分先らしいぜ。頑張れよ)」  
翔真は遠い目をしながらノーヴェ達にエールを送る。

「翔真さん？」

「あ……わりい、ちょっとぼーっとしてた。まあマルスの気持ちは分かったとして……正直言っ

オッパイにも目が行ってるだろ？」

「な!?! お、お婆!?!」

「動揺しすぎだろマルス」

「だっていきなりそんな事言われたら誰だって

動揺しますよ！」

マルスは顔を紅くしながら翔真に反論する。どうやら

まだ話は続きそうだ。

PHASE 59 「らぶりいガール」

今回は短いですが、すみません！活動報告、是非見てくださいね。

男子三人が天使湯で話に花を咲かせている頃。

東、ティアーユ、涼子はそれぞれ翔真とルウエン、マルスが同乗する機体、ウイニングゼロ、ノワール、ゴーストガンダム(代用機) メンテナスしていた。

「ごめんねティアちゃん、うちのしょうくんがルルー(ルウエン)の機体を壊しちゃって」

「うんうん、気にしないで。また直せるから」

「それにしてもストライクノワール……だったかしら

？

かなりボロボロね」

「やっぱりそう見えるよね？この子は外見だけゲイルをノワールにしただけで内部構造は全く改修されてなくて、かなりガタがきてるの」

「うーん、なら束さんとミカミカ（涼子）にお任せ！」

「この艦にはちょうどパーツが揃ってるしノワールを完全に改修出来るわ。」

「本当に!？」

「ええ、けど条件があるわ」

「条件？」

「彼、ルウェン君との馴れ初めを聞かせてもらえる？」

「ふええ!？る、る、ルウェン君との馴れ初め?≡≡」

「あはは！ティアちゃんウブすぎるー！けど

おどおどして可愛いー!!」

「どさくさに紛れて何で私の胸を揉んでるんですか！」

ちよつとしたハプニングはあつたが作業を一旦

中断し三人はテールブルに着く。

「ルウエン君とは基地で出会つたのね？」

「しかも窮地を助けに来るなんて、まるで恋愛

マンガみたいなお会いだね！」

「た、確かに……」

束に言われ顔を赤らめるティアーユ

「なるほど。束はどんな出会いだったの？」

「私としようくん？ ティアちゃんと同じような

感じだよ？ あの時から初めてしようくんと出会つたん

だよね……あれから四年、まさか結婚して子供が

出来るなんて夢にも思わなかつただらうな」

「奥さんが増えてる事もね☆」

涼子はパチリとウインクする。

「ミカミカはマー君（マルス）と何処で出会ったの？」

「そうね、私がマルスと出会ったのは二年前に

なるかしらね……あの時は襲撃とかあったから

私も死を覚悟していたけどマルスに助けられたわ。

あら？ 結局束にしてもティアーユにしても私にしても

出会いは同じみたいね？」

「そう言われればそうね」

「私達って何か似てるね！」

束、ティアーユ、涼子、同じ科学者だからなのか、

意気投合してその後も話を続けていた。

しかし、そんな平和なトレミーに一機のMSが迫っていた。

「まずは手始めに貴様達から消えてもらおうか、ソレスタルビーイング」

アメリカスの駆るハルファスガンダムがトレミーに徐々に近付き牙を向こうとしていた。



## PHASE 60 「開かれた運命の扉」

ハルファスガンダムは接近を察知したユーリは直ぐ様皆に知らせ、翔真、フェイト、マルス、ノーヴェ、クリスは機体へと搭乗する。

「ウイングゼロ、綾崎翔真行きます！」

ウイングゼロはそのままトレミーから出るとビームサーベルを抜き払いハルファスガンダムに近付く。その直後、フェイトは自身の機体が今は無い為バンシィノルンに搭乗し出撃する。次にマルスの乗るゴーストガンダム、ノーヴェの乗るアストレアが、クリスの乗るニヤイアアストレイ・イチイバルが出撃する。

「ハアアアア!!」

ウイングゼロはビームサーベルを横へ斬るようにスイングしてハルファスに攻撃をしようとするがハルファスガンダムは瞬間移動を駆使してゼロを翻弄する。

「ちィ、遅い、遅いぞウイングゼロ！ 奴の反応速度を超えろ！」

ツインバスターライフルをハルファスに向けて放つ。だがIフィールドによって防御される。

「防いだのか！」

「次は」

「私達だからな！」

ウイングゼロに変わり次にゴースト、アストレアF2改

dash、ニヤイアストレイがハルファスガンダムに立ち向かう。

「あの機体に乗っている小僧、プレシアが言っていたマルス・レディーレか………フン、少しばかり貴様には消えて貰おうか」

コクピットで呟くアメリカウスはニヤリと笑う。

ハルファスガンダムは目の前に異次元へと繋がるゲートを出現させる。

「ッ！」

「しまった！」

「うわあああ！」

アメリカウスの罠によりゴースト、ニヤイアアストレイアストレアがゲートの中へと入った。

「マルス！ノーヴェー！クリス！」

「酷い、マルス君達を何処へやったの！」

フェイトはハルフアスに向かって叫ぶ。バンシイノルンはビームマグナムを射つ。

「うるさい小娘だ。綾崎翔真、貴様にも

しばらくは消えてもらおうぞ！」

さつきと同じようにゲートを出現させウイングゼロ、バンシイノルンはそのまま吸い込まれていく。

「綾崎翔真とマルス・レディーレ、お前達が

居ては計画の邪魔になる……安心するがよい

しばらくの間はこの世界には帰れまい」

アメリカウスが機体を後退させようとした時、アラート音がコクピット内に響き渡る。

「何だ！まだ来るのか！」

モニターに目を向けるとトレミーから出撃したダブル

オーライザーがGNソードをこちらに向け、ウイングガンダム（EW）がビームサーベルを抜き払いこちらに迫り来る映像が映し出されていた。

「翔真くんを……………」

「翔真を……………」

「返して！返せェ！」

ダブルオーライザーを駆りなのは、翼は攻撃目標をハルファスに向ける。

また同じくしてウイングガンダム（EW）に乗るソーナもマルスを目の前で消された事に怒りを隠せず  
にいた。

「許せない、あの機体だけは！」



翔真・フェイトはある世界へ……………

「俺の命はまだ……………ここにある

！」

「どうしたマークニヒト！虚無の申し子はその程度か！」

「あれがファフナーの力なのか？」

「凄い……………」

翔真とフェイト達の話はベルリン戦後に書きます！

---

## PHASE 61 「反乱の業火」

あの子の話をしてしよう。束と翼はダブルオーライザーを起動させてソーナが駆るウイングガンダム（EW）と共にハルファスガンダムに攻撃を仕掛けて翔真達を何処にやったのかと問いただそうとしたがあと

僅な所で瞬間移動され姿を眩ましたハルファス

ガンダム。束は艦に帰還した後、ティアアユ、

御門に協力を仰ぎ翔真とフェイト、マルスとノーヴェクリスを至急何処の世界に飛ばされたのかと探索を

始める。

今トレミーに居るガンダムパイロットは一夏、ルウエン、リンネ、ツバサ、シャルロットとシグナム達しか居ない。明久とヤマトはある任務遂行中の為恋人と共にトレミーには居ない。さらに言えば匿名からの通信でベルリン付近に地球連合のMS部隊が接近していると報告があり一夏達は急いでトレミーをベルリンへと向かわせていた。

トレミーにハルファスガンダムが強襲を仕掛けて来ていた頃、輸送船の司令室でネオは頭を抱えていた。この頃ザフト、ソレスタルビーイングに負けさらには部下であるエリカを失い、まほはある者達と共に姿を眩ましネオは事実上連合の中で危うい立場にあった。

「そろそろ潮時かね、この俺も」

自らの立場が危ういと感じつつも、ネオは立ち上がり巨大MSが納められたガレージへと向かう。

「あのデストロイガンダムならばやれるだろう」

地球連合が開発した巨大MS兼MA、デストロイガンダム  
ネオはつかさを引き連れてベルリンへと向かおうと  
していた。

そして、ミネルバも前回の戦いで中破していたが  
今は元に戻り、ザフト本部からの報告によりベルリン

付近に地球連合のMS部隊が接近しているとの報告を受け向かっていた。艦内で箒はただ一人廊下を歩いていた。とくにやる事もないので今はただ一人でふらついている。

「私ではまだ……勝てないのか、アイツらに」

前の戦闘で自分はフリーダムやウイングゼロ、つまり一夏や翔真にも敵わないという事を前の戦いで痛感させられていた。

「だが……やるしかないんだ、それでも……」

「篠ノ之、今いいか？」

「織斑教官」

後ろから呼び止められた声を聞き振り返ると千冬が立っていた。

「……また今度の戦いで一夏達と戦う事になっても  
……倒さないで欲しいんだ」

「ッ！何故です！」

「……一夏は私にとって一人しか居ない身内なんだ。  
翔真だってそうだ、アイツは私の教え子だ、私は  
アイツらと戦う事はもう、嫌なんだ」

「……今更何を言っているんですか……確かに一夏  
や翔真は貴方にとって大切な者かもしれませんが。  
けど、戦いの邪魔をするなら私にとって敵でしか  
ありません！」

「違う！」

「何が違うんです？アイツらはこれまで幾度となく  
戦いの邪魔をして来たじゃありませんか！邪魔  
なんかしなければ……イーリスさんだって死なな

かったはずでしょ……」

「……」

「機体を破壊させられた貴方は黙って見ていてください」

箒は千冬にそう言い放つとその場を後にする。

悲しい再会まで、あと少し。

PHASE-62 「忍び寄る刺客と巨大な力」(2017 7/28 修正済)

とある空間、そこにアメリカウスはいた。

この空間はアメリカウスが作り出した《ヴェーダ》  
と言える程の巨大コンピューターの中で世界中や  
平行世界の状況などを見る事が出来る。

そんな中で、アメリカウスはある平行世界の  
データを閲覧していた。

「ふむ。『BETA』と呼ばれる存在か…

人間を命として見ず、資源の一つと見なすか」  
興味深そうな表情でデータを見ていく

アメリカウス。

「綾崎翔真……お前には消えてもらわなくてはな。貴様は……居てはいけない存在なのだからな」

場所は変わりベルリン、街のあちらこちらから炎の火柱が立っていた。燃え盛る街で巨大なMSデストロガンダムが無差別攻撃を行っていた。後ろには後から続くようにネオの駆るスサノオ、ウインダム30機が飛行していた。

「凄い……凄いよネオ　　！これならこの街を全て

焼き尽くせるよ！」

「そうだなつかさ」

デストロイのコクピットに座るつかさは目を輝かせて街を次々と破壊していく。だがアラート音がなりつかさがモニターを見るなり前方からビームが二回に渡りデストロイに当たろうとしていた。しかし陽電子リフレクターによりビームは無効化される

デストロイに向けてビームを放ったのはトレミー  
だった。大型GNキャノンを二回撃ったはずが  
まさかの打ち消される事態にブリッジではディア  
チェ達がデストロイの大きさを、能力に目を見開いて  
いた。

「なんというバリアだ……まさか  
GNキャノンが  
消されるなどトッ！」

「あの機体はどうやらデストロイガンダムのように  
ですね。地球蒼生軍が使っていた物とほとんど  
変わりはありませんね」

「デストロイ……また厄介な物を……  
MS部隊  
出撃準備だ！」

トレミーのカタパルトデッキが二門開きそこから  
一夏が駆るフリーダムガンダムとなのはと翼が

乗るダブルオーライザーが出撃する。

「デストロイガンダム……あれはあっちゃいけないんだ！」

「翼ちゃん、ツインドライブの制御頼むね」

「任せてもらおう。しかし、あれだけの巨大MS

倒せるのか？」

フリーダムとダブルオーライザーはデストロイの元へと向かう。

まず先攻は一夏のフリーダムガンダム。

パラエーナを放つものの、特殊なバリアによりビームが弾かれる。

「くっそ！」

フリーダムはラケルタビームサーベルを抜刀。

デストロイに近付くがウインダム数機が  
行く手を阻む。

「邪魔だッ！」

ウインダムの数機に突っ込み、

ラケルタビームサーベルでメインカメラを破壊。

殺さず、生かす——キラのような戦い方をしながら

一夏はデストロイへと向かう。

## PHASE-63 「燃えるベルリン」

「皆……皆消えちゃえエエエエ!!!」

デストロイガンダムは攻撃をやめる事は無く  
ツォーンmk2を発射し街を破壊し続ける。

「(デストロイ……あの機体だけはッ　　!:)」

一夏はモニターに映されたデストロイを見て焦りを見せる。前にデストロイと戦った事がある一夏はあの機体の破壊力がどれだけ凄まじいかを知っている。もしこの機体で全てを焼き付くされたら戦争終結どころ話ではない。一夏はフリーダムを加速させる。

「まずは私達からだよ！」

「私となのはの歌を響かせる！」

なのは、翼が操るダブルオーライザーはGNソードIIIを展開して狙いをコクピット以外、機体の武装やメインカメラ破壊を狙う。

GNソードIII、さらにGNビームサーベルを使い

ダブルオーライザーは迫り来るウィンダム of 武装やメインカメラ、腕部、脚部を狙い行動不能に落とす入れる。

「(やはり来たか、ソレスタルビーイング!)」

ネオはダブルオーライザーに自身の専用機、スサノオ

を向かわせようとした。しかし一撃のビームが行く手を阻む。

「敵？何処からだ!？」

「なのはさん達の邪魔はさせないわよ！」

「同じ動源力同士私達が相手するよ！」

マスラオの後方からティアナの操るガンダムデュナ

メスリペアとスバルの操るガンダムヴァーチェが

接近していた。

「全く、モテるのもつらいな」

スサノオはGNロングサーベル、ショートサーベルを

抜きデュナメス、ヴァーチェに戦いを挑む。

「もうやめろ！」

フリーダムは両ウイングからパラエーナプラズマ収束ビーム砲を展開して射撃した。しかしビームを打ち消す陽電子リフレクターが発動しパラエーナから放たれたビームは消滅する。

「くっそ、お前達も邪魔をするな！」

一夏は前モニター、両サイドモニターに映るウイングダムを見る。ウイングダムは一夏のフリーダムに目掛けて攻撃をしようとした。

「全く、こんな時に！」

「よくやるぜ、連合さんよ」

攻撃の一步手前、ツバサのガンダムバルバトスがバード形態に変形したナガスミのウイングガンダムフェニーチェ・リナシータの上に立っていた。

メイスでウイングダムを蹴散らす。

「一夏！早くあのデストロイを！」

「俺達が時間を稼いでいる間に！」

「ツバサ、ナガスマミ……」

「早く行って！ここで貴方が死んでセシリアさん達に責められたらどうもこうもないからね！」

「すまねえ！」

蒼い翼を広げフリーダムは再びデストロイに近付く。

その頃、トレミーのブリッジではシュテルがある敵の接近を知らせていた。

「これは……ディアーチェ、十時の方向に敵艦」

「何だと？ 敵艦はザフトか？ それとも連合の増援か！」

「ザフトのミネルバ、さらに艦から熱源が4……」

これはインパルスです」

「!？」

インパルス、その名を聞きブリッジは凍る。

この戦闘区域にミネルバが近付いていたさらに

インパルス専用のカタパルトからコアスプレnder、  
レックフライヤー、チェストフライヤー、フォース  
シルエットが出撃する。

「何てデカさだ………ッ  
！」

三機はドッキングしインパルスガンダムとなり  
直後にフォースシルエットを装備しフォース  
インパルスへと変わる。

「倒してみせる……行くぞ、インパルス  
！」

PHASE 64 「記憶と衝撃とトランザムバースト」

「あれは、インパルス……」

「フリーダム……」

一夏、箒はモニターに映る交互の機体を見て小さく  
呟く。だが今は互いに戦っている場合ではないと  
インパルス、フリーダムはデストロイへと向かう。  
フリーダムは横へ一回転した後両腰部に装備された  
クスイファイアール砲を放つ。雷撃が当たりデス  
トロイのメインカメラにヒットする。

「キャアアア！」

つかさは衝撃が体に来た為に思わず悲鳴をあげる。

「今に掛ける！」

インパルスはフリーダムの横を通りヴァジユラ  
ビームサーベルを抜く。

『あれは、インパルス!?!』

『ザフトの白き彗星だと!』

『怯むな!我々のコンビネーションで倒すぞ!』

ウインダム3機はインパルスを見付けると即座に  
向かう。

「邪魔を、するなアア!」

ヴァジユラビームサーベルを右横へ一閃、

ウインダムを一瞬にして撃破する。左腕に装備された  
シールドを捨ててインパルスはビームサーベルをもう  
一本抜き二刀流でデストロイの方へ向かう。

一方でミネルバからルシフェルが出撃していた。

ルシフェルの装備は右手に大きなバスターソード  
《アスカロン》と左手には大きなシールドを装備  
していた。

「あのデカイMSは……一体、あれは　　！」

湊はダブルオーライザーが肉眼の視界に入る。

「(あの機体……間違いない、綾崎翔真の搭乗機　　！)」

ルシフェルが一気にダブルオーライザーに近づく。

「なのは！敵が来る！」

「了解、ダブルオー……力を貸して」

なのはの声に答えるようにダブルオーライザーは

素早く反応した。迫るアスカロンをGNソードIII

で退ける。そしてなのは、翼はあるシステムを

発動させる

「トランザム！」

「バァァースト！」

ツインドライヴから発せられる濃い緑の粒子が  
戦場を駆け巡る。

「ッ!? あ、頭が!?! くああああアァァァ!?!」

ネオは頭に激痛が走る、だがその中で昔失った  
ある物を取り戻そうしていた。

スコール——俺、約束するよ、あんたを守るって——

——嬉しいわ、『隼人』——

——一緒に幸せの家庭を………

「ッ！ああああああアアアア！……！」

ネオは混乱し機体を後退させた。

「(暖かい……光　　?)」

湊もダブルオーライザーから発せられる光に魅せられていた。

「翼ちゃん！」

「ああ、いけるぞ！」

「トランザム……ライザアアア　　！」

GNソードⅢにビーム刃が纏われダブルオーライザーはデストロイ目掛けて降り下ろす。陽電子リフレクター

を見事に破る。

「(光……………これは…………)」

「(暖かい光……………え……………?)」

声が響く、箒はそつとデストロイの方へ視線を向けた。  
するとデストロイのコクピットが徐々に透けていき  
乗っていたパイロットに箒は驚愕する。

「な……………何故お前がここに居るんだ……………つかさ」

「この声は……………箒……………！箒なんだね！」

次回でベルリン戦終わります。

---

## PHASE-65 「深海の孤独」

どうして……つかさが……

ツバサやスバル達が撤退していく中で一夏は未だに戦場にいた。

その一方で

心の中、箒は動揺するしかなかった。GNツイン  
ドライブから発せられた粒子によって作られた  
意識共有空間の中でデストロイのパイロットが  
つかさだと知り箒は自然と動きが止まる。

「何で……何でなんだアアアア     !!」

インパルスはヴァジュラビームサーベルを引き抜き  
デストロイに近付く。

「箒……どうして     ? 私を騙していたの? 何で箒が  
その機体のパイロットなの!？」

「ッ！」

つかさの声に耳も貸さず箒は機体を加速させた。

しかし背後からフリーダムがラケルタビーム

サーベルを引き抜き迫ろうとしていた。

「チィ! 貴様は退いてろ！」

「どういうつもりだ!？」

インパルスはフリーダムに追い付き退ける。

「そうだ……つかさは利用されただけだ……

敵に利用されただけなんだ！」

デストロイから発せられたビームを上手く避けながら接近する。

「つかさ！私と一緒に来い！」

「……箒　？」

「お前は利用されているだけなんだ！私と一緒に  
行こう！つかさ」

インパルスはサーベルを収めてデストロイの目の前に  
来ると右手を差し伸べる。

「箒………」

前までは敵であったインパルスが今は救世主に  
思えたつかさ、まるで1つの光が差し込んだか  
のように見えた。だが………

「あれは……葵い……悪魔」

インパルスの背後にゆっくりと現れた蒼い翼を



コクピットにもダメージはいきやがて炎に焼かれ  
機体は爆発した。

「なのは！」

「ヤバいみたいだね。一夏君！私達は撤退するよ！」

「了解」

爆発の威力でフリーダム、ダブルオーライザーは  
トレミーの方へと飛ばされるがこれを機に撤退する。

「そん……な……つかさ……」

目の前で起きた光景に箒は未だ呆然としていた。機体を降下させて周りを見渡す。

「……また私は……失ったのか」

「ほう……き　？」

「つかさ？　つかさアアア！！」

地面に倒れ込んだつかさを見つけた箒はすぐに駆け寄る。

「つかさ！」

「えへへ……わ、私……負けちゃったみたい……」

つかさは力が出せる限り声を出す。

「どうして……こんな再会、したくなかったッ　　！」

「私も……もしまた、来世で会う時は……」

「つかさ？……クッ」

つかさは喋る途中で息を引き取った。箸は自然と涙が溢れる。友人さえも守れなかった自分に悔しさで怒りを覚えた。

「うわああああアアアアアアアアアアアア！！！！」

少女の叫びはやがて、フリーダムを倒す事となる。

PHASE 66 「決意するシャルロット」

ベルリンでの戦闘が終わり1日が経過していた頃、  
トレミーは日本海域の上空を飛行していた。

—シャルロットと大和の部屋—

「という訳なの。今まで話したのがこの世界で  
やった事だよ、お母さん」

『そうなのね。だけどニックが離脱するとは  
ちよっと予想外ね』

「うん。どうしてこんな事になったんだろ……」  
シャルロットはミッドチルダにいる母、マリアと  
通信して話していた。

『仕方ないわよ、きつとニックにも何か考えが

あつて離脱したんでしょ？それに今の様子だと

翔真君と仲直りは……出来ないでしょうし』

「ボクどうしたらいいと思う？お母さん」

『うーん……今は分からないかな♪』

「お、お母さん……」

相変わらず呑気だね、と心の中で呟くシャルロット。

シャルやニックの母であるマリア・デュノアは

周囲が呆れる程能天気であり陽気な性格なのだ。

『ふう、まあ今は考えても仕方がないと思うよ？

ニックなら必ず戻って来るわよ』

「けど……私お兄ちゃんに酷い事言ったから」

『その時は心の奥から謝るのよシャルロット、

大丈夫！絶対仲直り出来るから』

「お母さん……うん　　！分かった！」

シャルロットはその後、マリアとの通信を切り

部屋を出る。

「(そうだよね……うん)」

「あ、シャルロットさん」

「ツバサ？どうしたの」

「実は今からある施設の破壊しに行くんです

けど、シャルロットさんも来てもらえませんか？」

「どうして？」

「僕が今から行くのは連合の施設なんです。

戦力がかかなりあると予想され僕のバルバトスや

ネプテューヌだけじゃキツくて」

「え？ だったらリンネ君達とかを誘った方が……」

「この破壊活動は元々マルス宛に届けられた物

なんです。三人までという決まりがありますし

リンネや一夏達はトレミーに居てもらわないと

色々と困る物がありますから」

「そっか……ボクで良ければ構わないよ」

「ありがとうございます。じゃあ先に格納庫で

待ってますね」

「うん」

ツバサはそう告げると場を後にする。

シャルロットは更衣室へと入りパイロットスーツ

を着て格納庫へと向かう。首には誕生日に翔真

から貰ったネックレスがキラリと光る。

格納庫へ向い、エクシアへと搭乗する。機体を

起動させエクシアのツインアイに光が灯る。

「今翔真は居ない……けど、ボクも戦うよ。だから

力を貸して翔真、エクシア」

翔真が搭乗したガンダムエクシア。シャルロットは

エクシアにそう声を掛けると発進シーケンスに

入る。

「ガンダムバルバトス、行きます！」

「ガンダムヴィルキス、出るわよ！」

ツバサのガンダムバルバトスはストライダー形態

にしたガンダムヴィルキスの上に乗る。

「シャルロット・デュノア、エクシア行くよ！」

そしてガンダムエクシアが出撃する。シャルロット

は戦争根絶を願い、エクシアと共に戦場を駆け抜ける。

シャルロットの母、マリア・デュノアの容姿は  
そのままシャルを大人にした感じですよ。

次回は箒sideのお話

PHASE 67 「悲しみと翔真母」

箒はあのデストロイとの戦闘を終えて、亡くなったつかさを抱き抱え湖へと静かに沈めた箒。

そして箒は決意する。一夏を……いや、フリーダムを倒すと心の中で強い決意を固める。

ミネルバの艦内、箒は自室でフリーダムを倒す  
シユミレーションをしていた。モニターと向き合い  
キーボードを素早く打つ。今の彼女は復讐という  
目標を掲げ打倒フリーダムに燃えていた。

「こんな事ではアイツには勝てない……もっと、  
もっと何かいい方法はないのか！」

「悪戦苦闘しているようですね箒さん」

「湊か」

声をした方に視線を移すと部屋の入口に湊が立っ  
ていた。

「何をしているんですか？アリシアさんが心配

していましたよ、部屋からまる3日も出て来ないから」

「アリシアには悪いが私には今、どうしてもやらなければならぬ事がある」

「……フリーダムですか？」

「ああ」

「……フリーダムを倒したいならちゃんと

フリーダムの攻撃パターン見る事です」

湊はそう言うのと箒の右横に行き、キーボードに手を伸ばす。

「フリーダムは敵と戦う際にMSの武装やメイン

カメラしか狙いませぬ。多分人を殺さずに倒す

戦法でしょうね」

「……何が人を殺さないだッ！」

「ですが、フリーダムはその戦い方をしている為

に隙が少しあります。インパルスの性能を持って

すれば勝ち目はあります」

「だが私は一度も翔真や一夏にも勝てなかった、

私に……本当に出来るのか　？」

「箒さん、弱気になっていたら勝てません……」

すると湊は箒の耳元で……

「倒すのでしょ？つかささんを殺した憎き相手、

全てを奪ったフリーダムを……織斑一夏を」

「ッ！」

「私も同じなんですよ？私は綾崎翔真を倒さない

とならないんですけどね……私が私である為に」

湊ら悪魔のような笑みを浮かべてそう告げた。

「ここは……私……はっ

！そうだ翔真は!？」

アメリカスの策によりフェイトは翔真と共にある  
世界へと飛ばされたはずだった。しかし周りを  
見渡すと一面真っ白だった。

「ここは何処なの？」

「貴女がフェイトちゃん？」

「え？……あなたは？？」

「ううん。私はね翔真の母、綾崎佐奈。いつも

翔真の側に居てくれてありがとう」

「し、翔真のお母さんですか……えと、私は

フ、フェイト・T・ハラオウンです！お、お、お母

義さん初めまして！」

翔真の母と聞きフェイトは少しばかり緊張する。

「うふふ。本当に可愛いのねフェイトちゃんは」

「あうう……」

「これからも翔真の事宜しくねフェイトちゃん、

それに束ちゃん達も……あの子は傷付きやす

いから」

佐奈は悲しい表情でそう告げると光に包まれ消え

ようとしていた。

「ま、待って！貴女のお名前は！」

「綾崎佐奈よ、フェイトちゃん」

真っ白な空間は光と共に消えていった……

綾崎佐奈(??) 女

翔真の母親。小さい頃の幼き翔真を守る為に

旦那の暴力に耐えていたが、限界を越えて自殺した。

しかし、幼き翔真を一人にしてしまった事から未だに

成仏が出来ず触れる事は出来ないがいつも見守って

いる。守護霊のような存在である。

容姿はハイスクールDDの姫島朱璃のそのまま  
グラマーでナイスバディ。

PHASE 68 「それぞれの想い」

数週間の間、プレシアは地球連合軍が過去に犯した非人道的な人造改造やテロといったと物をデータにまとめて、それを全世界に見せ今私達が打つべき敵は連合軍だと発言。プレシアの言葉に人々は心を動かされ地球連合を酷く非難した。

『こんな事が許されるでしょうか？連合軍は

人の命を玩具のように扱い、簡単に殺してしまいます。連合軍の後ろには旧亡国企業のメンバーで女ばかりで結成された秘密結社、ログスがいます。

すべてはログスが元凶なのです！だから私は

ここに誓います！ログスを、地球連合軍を倒すと！』

一旦プレシアは口を閉じ、呼吸を整えるとまた

口を開いた。

『ロゴスが動く中で、また関係のない組織も動いておられます。戦争根絶を掲げるソレスタルビーイングの意思に賛同し協力をする二つの組織が確認されていますが、私はソレスタルビーイングや地球連合の存在を認めません』

プレシアの発言は後に、『女神の誓い』と報じられメディアに取り上げられた。そして各地ではザフトを支持する者達とソレスタルビーイングを支持する者達が各地で激突していた。そしてプレシアはミネルバにある命令を下した。

それは地球連合を倒せではなく、ソレスタルビーイングを打てという命令であった。

—ミネルバ艦長室—

「スコール！それは本当なのか!？」

「本当よ。千冬、悲しいけどこれは事実よ」

「……だが　！私達の敵は地球連合のはずだろう！

なのに、何故一夏達を討つという命令になるんだ！」

「それは私だって一緒よ！私や千冬はザフトの

裏を知っているし翔真達のやっている事は正しい

とおもうわ！だけど……」

スコールは机の端に置かれた写真を見る。そこに写っていたのは二年前に自分の前で散っていった隼人だった。

「けど、どうしようもないじゃないッ！」

「……すまない」

スコールと千冬の間には沈黙が生まれていた頃、ミネルバのMS格納庫でも一波乱起きていた。整備が完璧に施されているデステイニーインパルスの足下で  
箒とニツクが両者激突していた。

「お前……もういっぺん言ってみろ　　！」

「ええ、何度だって言ってるやりますよ！翔真も一夏もシャルロット達も全員私が倒すって！」

ニックは箒がソレスタルビーイングの全員を

倒し、命を狩りとしてやると発言した事に怒りを覚えて箒とぶつかっていた。

「アンタに分かるのか!?大切な者が目の前で

殺され、深い悲しみに暮れている私の気持ちだ！」

「俺だって過去にそういう事を経験しているから

お前の気持ちは分かる！だがッ！」

「黙れ偽善者！そうやって私に同情するのかッ！

私は同情される事が嫌いだ！」

箒はニックの手を払いのける。

「あなたも早くキマリスに乗ったらどうです？

ま、せいぜいバルバトスとかいうMSにやられないよう

にしてくださいね」

「嫌味か？」

「かもしれませぬね」

箒は皮肉そうに言うと言とコアスプレンドーの元へ向かう。

「倒す。お前だけは……私が討つ……この手で」

「箒！ ちょっと待て！」

「アリシア、どうしたのだその格好」

「私も出撃するよ、これ以上ソレストアルビーイング

に邪魔されない為にも……一緒に戦お　　！箒！」

「……ああ　　！」

アリシアは箒にそう告げた後、プレシアがアリシアの為に作ったMS「ガンダムスローネアイン」の元へ

と行く。

PHASE-69 「自由と衝撃、再び」

お待たせ致しました！

---

一方でトレミーにもプレシアの演説は映像で確認されていた。それから2日後、トレミーはアルプス山脈の方で飛行していた。しかし雪が降り積もるアルプスでは雪の風吹が視界を奪うが今トレミーはザフトから総攻撃を受けていた。

—トレミーブリッジ—

「くっ！遂に我等を排除しに来たか！」

「トレミーの真下、バクウが50、トレミーの背後に  
デインが60、さらには……ミネルバまでいます」

「マジ!?王さま、もしかして私達って今物凄く

ピンチじゃない？」

「言われんでも分かかっておるわ！しかし、このまま

振り切れる事は無理かッ！……だがイギリスに着く

までは何としても耐えきるのだ！」

《ディアーチェ、俺だけでもトレミーの援護に

回る。だから出撃する》

「一夏!?お主本気か!?こんな猛吹雪の中で

戦えるのか！」

《やらなきゃ、誰がやるんだ!》

ブリッジにある巨大なスクリーンに一夏の顔が映し出され、一夏はトレミーを守る為にフリーダムと共に出撃する。

「……ッ　！」

一夏はSEEDを発動する。下で走行しているバクゥをクスイファイアール砲を展開して一斉に蹴散らすフリーダム。フリーダムはラケルタビームサーベルを抜刀するとディンの集団に突っ込みメインカメラを破壊する。

「（やらせるか。あの艦には……セシリアや

簪、アインハルトもいるんだ！）」

近づくディンの数機、フリーダムは攻撃を交わしてもう一本ラケルタビームサーベルを抜きディンの

武装を一斉に破壊した。

「次……あれはッ　！」

「見つけたぞ！フリーダム！いや……一夏アア　！」

フリーダムの前方から物凄い勢いでこちらに向かって

来るMSがいた。それは箒の駆るフォースインパルス

ガンダムだった。

「今はお前の相手をしている暇はない！」

フリーダムはハイマツトフルバーストを繰り出し

敵MSを蹴散らす。しかしインパルスだけはそれを

交わしフリーダムに近づく。

「いつもそうやってッ……やれると思うなアアアア　！」

箒はSEEDを発動しフリーダムに攻撃を加えていく。

容赦なく降り下ろされるインパルスのヴァジュラ

ビームサーベルはフリーダムのラミネートアンチ

ビームシールドを傷付けていく。

「箒の奴……攻撃が前より激しく……ッ  
！」

「ハアアアアアア！」

「退いてろ！ザフトのガンダム！」

インパルスがフリーダムを押す中、トレミーから

ルウエンの駆るストライクノワールが出撃し

一気に加速すると、インパルスを蹴り飛ばす。

「すまねえルウエン！助かった！」

「気にするな……ッ　！まだ何か来るぞ！」

「全く……どうして箒の邪魔するかなァ　！」

アリシアの操るガンダムスローネアインがストライク

ノワールに攻撃する。

「チィ！新型か！」

黒と黒がぶつかり、再び自由と衝撃の戦いが始まる。



## PHASE-70 「蒼き天使の墜落」

「箒は今目標に向かってフリーダムを倒そうと

しているんだよ！邪魔しないでよね！」

「チィ！」

ルウエンは修復されたストライクノワールを駆り

一夏のフリーダムの元に向かおうとするがアリシアの

操るスローネアインが行く手を阻む。

「お前だけは落とす！綺麗事ばかり並べてお前は

何がしたいんだ！」

「そういうお前こそ！箒、お前本当にプレシア議長

って人を信じるのかよ？」

「あの人は私に力をくださった人。プレシア議長が

貴様らを敵というなら私はお前であろうと倒す。

そして……つかさの仇だアアアアア      !!」

インパルスはヴァジュラビームサーベルを降り下ろす。回避するフリーダム、だが背後にインパルスが回り込み左翼を破壊されフリーダムは飛行が不安定になる。

「ッ！」

「……」

箒は湊がシュミレーションの時に言っていた言葉を思い出しながらフリーダムを圧倒する。

『決まってフリーダムは動きが速く射撃も正確です。ですが狙うのは武装かメインカメラです、そこにインパルスの機能をいかせばフリーダムは倒せます』

「お前は私が倒す！今日ここで！」

インパルスはシールドを投げ捨てヴァジュラビーム

サーベルをもう一本抜き二刀流でフリーダムから  
ルプスビームライフルを破壊やシールドを破壊する。

「ミネルバ！ソードシルエット！」

箒はミネルバにソードシルエットを射出を要求する。  
スコールは箒が本当にフリーダムを倒そうとして  
いる事に胸を痛める。

「(どうして……どうしてこんな事になるのよ)」

「どうしますか艦長？」

「麻子……お願い。綾崎君達……避けてちょうだい。

タンホイザーの準備をして！」

「了解」

ミネルバからソードシルエットが射出されインパルス  
の元に送り届けられる。インパルスは右手にエクス

カリバーを構える。

「止めようとした……なのに貴様が……  
つかさを殺したアアア!!」

「ッ！」

「織斑一夏！くそ、やらせんはせん！」

「待ちなよ！黒いストライク！」

「貴様に構っている暇はない！」

迫るスローネアインを蹴り飛ばすノワール、だが

それがまずかった。

アインがフリーダムの方に向かって来たのだ。

フリーダムはラケルタビームサーベルでアインの胴体

以外を一瞬にして斬り刻んだ。

「キャアアアア!!!」

「アリシア……貴様はアアアア!!!」

がむしゃらにエクスカリバーを降り下ろすインパルスはフリーダムに迫る。

「一夏、長い間だったけど……私が引導を渡す

!!」

「あのインパルスのパイロット、正気か……ッ

!

「まずい！トレミーがッ！」

ルウエンはトレミーがミネルバに狙われている事に気付き艦の付近へと近付く。ルウエンはトレミーに通信を繋げる。

「オイディアアーチェ！ミネルバに狙われてるぞ！」

《そんな事ぐらい分かっているわたくし。だが今は無駄な戦闘は避ける。これよりトレミーは海の中へと入る、それまでに一夏を連れ戻せ。よいな？》

「了解した」

ノワールは急いでフリーダムの元へ行く。

だがフリーダムは最悪な状況に追い込まれていた。  
左腕を破壊され、左翼、右脚も破壊され反撃すら  
出来なくなっていた。

「ここ……までか」

「はああアアア！！！！」

そしてインパルスはエクスカリバーを……………

フリーダムに突き刺した。

同時にミネルバからタンホイザーが発射され  
海の中へ入る直前だったトレミーの横を通過した。



PHASE 71 「箒と千冬、運命と伝説」

大破したフリーダムは海中へと落ちて、箒はGセルフで一夏共々回収に向かい、トレミーもまたタンホイザーを何とか交わしたが小破し海中へと潜った。

箒はアリシアと共にミネルバへと帰還した。

大勢の整備員が箒を迎えた。かつて戦いを終わらせた伝説の青き天使、フリーダムを倒したのだから。

「よくやったな篠ノ之！」

「こりゃ勲章だな！」

「スゲーよお前！」

男気がある女性整備員からの祝福の声に箒は嬉しさを

覚える。

「……一夏ッ……」

千冬も格納庫に来ていた、だが彼女は祝福に来た訳ではないのだ。

「アイツ……絶対に許さないッ　！」

「よくも……よくも一夏をッ　！」

「鈴音、ラウラ。お前達は部屋に戻っている」

「しかし教官！アイツが……箒が一夏を倒した

んですよ!?!これを黙って見ているとそう言いたいんですか貴女は！」

ラウラの声に気付いたのか、箒は千冬の方へと歩き出し目の前で来る。

「仇は取りましたよ……貴女のもね　？」

「ッ！貴様ァァ！」

箒のこの一言は千冬の怒りを買ってしまおう。

「貴様、何が仇だ！もう一度言ってみろ！アイツは

アイツは……ッ　　！」

「仇じゃ悪いんですか？」

「何……ッ　　！」

「やっと強敵を倒せたのに、喜んじゃダメなんですか？　だったらどうすればいいんです？　祈れって言うんです

か！　悲しめって言うんですか！」

「篠ノ之エ！」

千冬は箒の左頬に拳をお見舞した。

「ッ！　この！」

「おいおい！　止めとけ！」

千冬に殴り掛かろうとする箒を本音達が止めて、

ニツクと鈴、ラウラは千冬を止める。

「離せ！　コイツだけは！　殴らないと気がすまん！」

「やめてください千冬さん」

「湊……」

「織斑一夏さん……でしたよね　　？フリーダムの

パイロットは。貴女からすれば大切な家族かも

しません。しかし、フリーダムは敵です」

「違う！一夏達には訳があって……」

「訳？訳があるから戦場に介入するんですか？」

「……ッ」

「取り合えず争いはやめてください。箒さんにも

失言があったのは確かです、ですから今は頭を

冷やしてください」

「勝手にしろ！」

千冬はニック達の手を振り退けて格納庫を後にする。

続くように鈴もラウラも出ようと歩き出した。

そして二人は箒の方へと視線を向ける。

「箒、アンタとはこれまでね。もう私達に話し掛けないで」

「貴様は敵だ」

それは箒との決別を意味していた。

場所は変わりジブラルタル基地。新しいMSが納めら

れた格納庫でプレシアは新たなガンダムタイプのMS  
二機を見上げていた。

「どいつもコイツも私の邪魔ばかりしてくれる……ッ  
だけど私の騎士達が居る限り邪魔なんてさせないわ。  
この二機とあの二人が居れば……千冬、箒……  
貴女達に最高の騎馬を用意したわ。デスティニーと  
レジェンドを……」

運命と伝説、その姿が明るみになるのはもう少しかも  
しれない。

！





## 第五章 迷える運命と切り開く変革

PHASE・72 「歌姫の移転と迷い混んだ二人」

トレミーは今現在イギリスに向けて進路を向かわせていた。一夏の容態は少し怪我をしていて命に別状は無かった。

その一方で翼は翔真とフェイトを探す為に試運転も兼ねてダブルオークアンタを駆り上空を飛行していた。

「何処へ消えてしまったの？多分何処かに異世界へ繋がるブラックホールのような物があるはず……」

翼はダブルオークアンタの調整を施しながら  
翔真とフェイトを探す。

「（そう言えば初めて翔真と出会った時を  
思い出す）」

メインモニターに映る夕日を見て翼は翔真との  
出会いを思い出していた。

その後だった。ダブルオークアンタは翼の翔真を  
想う気持ちに堪えてGN粒子を最大放出する。

「一体どうしたのクアンタ……あれは      !?」

ダブルオークアンタのGN粒子は空にブラックホールを  
出現させる。

「（もしかして……可能性は低いかもしれない。だが  
私はお前に掛ける、クアンタ）」

ダブルオークアンタはGNソードビットを周りに配置させる。そして翼はディスプレイを操作し終える

「クアンタムバースト！」

GNソードビットが機体の周りを囲む。クアンタはそのままブラックホールの中へと消えてゆく。

マルスとノーヴェ、クリスが二年前の世界にタイムスリップしている頃、翔真とフェイトは何処かの世界に居た。

二人は小島で過ごしていて、翔真は今ゼロシステムでこの世界の事を調べていた。

「(今現在、西暦2151年。人類は未だにフェストウムと戦っているか……)」

分かった事は1つ、ここはMSなどは存在しないが変わりにファフナーという思考制御・体感操縦式の有人兵器があるという事と、フェストウムという人類の脅威という名の怪物がいるという事。

ゼロシステムはそれだけを教えて後は自然と停止する。

「情報がこれだけじゃ分からないな」

コクピットハッチを開けると潮風が翔真に優しく当たる。今翔真とフェイトは小さな小島にいた。

「これからどうしたもんか……ッ      !? あれは！」

翔真がさりげなく下の方を見ると黒いビキニを着用したフェイトがゼロの足元で寝ていた。

直ぐ様機体から降りる翔真。目的はただ1つ

「(フェイトお前が悪いんだからな? そんな

無防備な格好して寝るから。いや、これはむしろ

自分から触ってくれって言ってるもんじゃないか?

たく、フェイトはどんだけスケベなんだ)」

勝手な解釈をする翔真はすごくバカ、イケメンなのにこのスケベが全てを駄目になっている。翔真は

変態紳士と名づけられているらしい（命名者はリンネ）

「さてさて！」

「……ふえ　　？……翔真　　？」

「よ、ようフェイト！眠れたか！」

あとわずかという所でフェイトが目を覚ました。

「いつの間にか寝てたみたい……翔真はもういいの　　？」

「取り合えず今終わった所……ッ　　!？」

話す途中でイノベーターの能力で敵が来る事を察知する。

「フェイト敵が来る！」

「分かった！」

翔真とフェイトは急いで機体へ搭乗する。  
ウイングゼロ、バンシィノルンは起動して空へ  
浮上する。

## PHASE-73 「不安と孤独」

今回は遂にデステイニー、レジェンドが出ます！

あと、4話ぐらいしたら少しの間この作品を

休載します。理由は1つ、物語の構築をしないと

いけないからです。おかげさまでもうPHASE-70を越え

ました！しかしここで新たな問題が発生しネタ切れ

間近なのです。しばらくは物語の構築を考える時間

をください。自分勝手だと承知の上です、大変申し訳

ありません。その変わり3ヶ月の間には連載を再開します。迷惑をお掛けしま

す。  
by 作者

---

ミネルバは補給物資などの事情からジブラルタ基地に

来ていた。箒と千冬は丁度この基地を訪れていた

プレシア・テスタロッサに呼ばれジブラルタ基地

MS格納庫に来ていた。

「よく来てくれたわ」

「議長」

箒と千冬はかかさず敬礼をする。

「フツツ、そんなに硬くならないでいいわ二人共。

箒、前の戦闘御苦労様。フリーダムを倒すなんて

貴女は凄いわ」

「あ、ありがとうございます！」

「箒は素直ね。そう言えば前に整備班の子から

聞いたけどインパルスが操縦に付いてこれなく

なったらしいわね？」

「はい。機体の不調などは全くないのですが

私の操縦の問題で……」

「なるほど。まあ丁度いい頃合いね、千冬も

機体が無いのよね？」

「はい」

「丁度二人に渡す物があるわ。これを見て」

プレシアが指をパチンと鳴らすと格納庫に光が

差し込む。明るみになった格納庫で二機のMSが

露になる。

「これは……」

「ガンダム……」

「そうよ。まず後ろに翼がある機体はZGMFX42S

デステイニーガンダム。インパルスの全シルエット

の特性を一度に集結させた機体よ。これなら箒の

操縦にも応えられるはずよ」

「デスティニーガンダム……」

箒はデスティニーガンダムを見上げて目を輝かせる。

そしてプレシアが次の機体（レジェンド）の説明に行こうとした時千冬が声を発する。

「議長、少し宜しいでしょうか」

「何かしら千冬？」

「前に議長の演説を聞いたのですが、我等の敵は

連合のほうですよ？なの……何故ソレスタル

ビーイングを討てと命令を下したのですか？」

「ッ！貴方はッ！」

「落ち着いて箒。千冬はそれが疑問に残るの

かしら？」

「はい」

「そう……なら　　1つ私も言わせてもらおうけど

ソレスタルビーイングは戦争根絶を目指している

のよね？私達ザフトだってこの戦いを終わらせる  
為に戦っているわ。ならソレスタルビーイングは  
何故私達の所へ来ないのかしら？」

「それは……きつと翔真や一夏達には何か  
考えがあってッ！」

「そうかしらね？……ねえ千冬、確かソレスタル  
ビーイングには綾崎翔真君と織斑一夏君がいた  
わよね？」

「ッ!？」

「かつて二人はフリーダムとジャスティスの  
パイロットであり一度戦争を終わらせた救世主と  
して知られている……彼等も私も戦争を終わらせた  
いというのは同じ気持ちなはず。しかしソレスタル  
ビーイングは独自のやり方で戦場に介入しては  
戦闘を混乱させている」

「……………」

「ザフトとてソレスタルビーイングによる被害が

無い訳じゃないのよ？ イーリスの死、関連施設の

破壊……………こればかり聞いたら彼等は敵として

認知するしかないわ」

「……………」  
(クソ……………)」

千冬は即座にその場から立ち去る。プレシアは

先程の千冬の状態を見て徐々にある思いを抱く。

「(ソレスタルビーイング……………彼等に対しての気持ち  
が大きいわね……………千冬もそろそろ潮時かしらね)」

プレシアは隅にいる人物にアイコンタクトを

送った。

千冬は徐々に立ち場を失おうとしていた。

PHASE 74 「操られた騎士は本当の意味を知る」

時は遡り、数日前。ロウがいるギガフロートに

一人の青年が来訪していた。

—ギガフロート—

「本当にいいのか？」

「ああ、俺にはもうクアンタは必要ない。だから

この世界に居る純粹種にこれを渡してやって欲しい」

「そっか。けどこのクアンタ、装甲とかがあまり

ねえな。機体を修理するついでに改造も加えたい

んだけど大丈夫か？」

「そこはお前に任せる。じゃあ、俺は行く」

「お！まだ名前聞いてなかったけどクアンタは？」

「俺は……」

刹那・F・セイエイだ……

プレシアとの話をした後、千冬は基地の隊舎にいた。  
自室に籠り千冬はベットに寝転んでいた。

「やはり私は……愚かなのかも知れないな」

千冬は不意に過去の事を思い出していった。

束と協力して『白騎士事件』を起こした事を……

「全てはあの日から狂ってしまったのか……

世界は……」

自分が過去に犯した罪が現在のこの状況を導いた

のではないかと千冬は考えていた。

「お前ならどうする？綾崎……」

片手にはかつて翔真、一夏、箒達が所属していた

クラス1年1組の集合写真である。

「(出来る事なら、あの日々に戻りたい……)」

目からは自然と涙溢れだし、彼女の心は既に

罪悪感とプレッシャーに押し潰されそうに

なっていた。

だがその時、自室の扉がバンッ！と開く

「な、何事だ!？」

「私よ千冬」

「スコールか」

「千冬！早く服を着て！ここから逃げるわよ！」

「何？い、一体どういう事だ？」

数分前、スコールはプレシアと湊の会話を聞いていたのだ。

『やはり織斑千冬はもう無理かしら？湊』

『そうかもしれません。彼女のソレスタビーイング

への想いは強いかもしれません』

『そんな感情はとっくに無いと思っていたけど

所詮彼女も一人の人間でしかないのね。彼女もまた

戦士でしかないというのに』

『悲しいですね』

『湊、処分は任せていいかしら？』

『はい。手配は既に済ませていきます』

「という訳なのよ！ いずれ私も……処分される

かもしれないわ！」

「さすがは議長だな。よく私の事を知っている……

お前が味方で良かったと思うよスコール」

千冬とスコールは部屋にあった拳銃を手に部屋を出ようとした。しかし既に手は回っていた。

『ミネルバ所属の織斑千冬、貴方に伺いたい事がある。御同行願います』

「スコール！」

「分かってるわよ！」

千冬はドアを開けて、スコールはとっさに手榴弾を兵士達に投げる。

「「うわアアア!!」」

大きい爆発音が隊舎に響く。兵士達が混乱する中で千冬とスコールは隊舎から逃げようとしていた。

しかし、思わぬ人物が千冬達の前に立ち塞がる。

「そうやってまた逃げるんですか？千冬さん」

「湊……ッ！」

「ちょ!?千冬!?!」

千冬はスコールをお姫さま抱っこして窓から飛び降りる。

「このまま格納庫へ向かうぞ！」

「なるほど、けど貴女にお姫さま抱っこされるなんて思わなかったわ」

スコールはふいに笑いながらも千冬から降りると共に走り出す。

「チッ！」

湊も後を追いつけてゆく。スナイパーライフルを構えて千冬達を追う。

PHASE 75 「雷鳴の闇前編」

千冬とスコールはジブラルタル基地の敷地内に

あるMS格納庫へと入って行った。蒼いMSグフ

イグナイトッドが千冬の視界に入る。

「スコール、少し手荒らな運転になるが大丈夫か？」

「この際だもの。仕方ないわ」

千冬とスコールはワイヤーを使いグフのコクピットに搭乗して機体を起動させる。

「スコール：：もしもの事があれば：：一夏を

頼む」

「不吉な事を言うものじゃないわよ！」

千冬はスコールに一括されながらもグフを発進させた。

「チッ！……」

湊は舌打ちをしながらも制服のポケットからインカムを取りだし箒に連絡する。

「箒さん聞こえますか？」

《《ん？どうしたのだ湊？》》

「今すぐにデステイニー、レジエンドの発進準備を！」

《《え……どうして……》》

「織斑千冬、並びにスコール・ミューゼルが

兵を射ち、機体を奪取し逃走しました」

《《なに!?!》》

「早くお願いします」

インカムを収めて格納庫へ向かう湊。

「(勘づかれましたか……少し貴女達を

侮ってましたよ)」

湊は格納庫に着くなりレジエンドのコクピットに  
座りプレシアと通信を繋ぐ。

「議長」

《厄介な事になったけれど……湊、分かっているわね

?  
》

「はい」

プレシアとの通信を切り機体の調整を施す湊。

次に筈が通信回線を開く。

《どういう事なんだ湊！千冬さんや……スコール

さんが逃走なんて！何故！》

「訳なんて私は知りません。ですが兵を撃ち倒し  
逃走したのは事実です。早くしないと本当に  
逃げられます」

湊は機体を起動させ、灰色だったレジェンドは  
全身グレー、ダークブルー、赤の色が染まり  
レジェンドは発進する。

「どうして……ッ！」

箒もデステイニーガンダムを起動させ、千冬達を  
追う為にデステイニーは光の翼を広げレジェンドの  
後に続く。

海面上を飛行するグフ、天候は悪く雷が鳴り、雨が降っていた。コクピットでは千冬とスコールが話合っていた。

「それでこれからどうするの？」

「ソレスタルビーイングと合流する。それしか

手はない」

「けれど、そういう訳にはいかないみたいよ？」

「らしいな！」

アラート音が鳴り、グフの後方からビームが迫る。

湊の駆るレジェンド、箒の駆るデステイニーが

高エネルギービームライフルを右手に持ち迫っていた。

湊は再び箒に通信を開く。

「箒さん、千冬さん達は既に敵です。撃墜も

可能なので……なんとしても彼女達を……」

《待つてくれ湊！撃墜は……》

「撃墜は議長の許可をとっています」

《ッ!?!》

「そういう事です」

湊は通信を切る。グフにレジェンドが迫る。

レジェンドは高エネルギービームライフルを撃ち

グフを牽制する。

「レジェンド……湊か　！」

「逃がしませんよ？いくらブリュンヒルデとは

いえもう貴女は用済みです」

グフ、レジェンドが戦闘に突入する中で箒は

迷っていた。

あの人と戦うべきなのか——

相手はあのブリュンヒルデであり、一夏の姉であり、  
ましてや自分を鍛えてくれた恩師である。

「クソッ！」

デスティニーは高エネルギービームライフルの  
銃口をグフに向けた。

## PHASE 76 「雷鳴の闇 後編」

「なんで……なんでこんな事になるんだ　　！」

操縦桿を強く握り締めて千冬への怒りを露にする筈。  
DESTINYガンダムは右手に持った高エネルギー  
ビームライフルを構えて射撃する。

「クッ！DESTINY……篠ノ之か　　！」

「逃がしませんよ」

湊の操るレジェンドガンダムはデファイアント改  
ビームチャンベリを引き抜く。

「チィ！」

「千冬！」

レジェンドがグフに襲い掛かるがテンペストビーム  
ソードを展開しサーベルを受け止める。

「(このままではッー!)」

「箒さん!」

「……ッ　　!千冬さん……基地へ戻れ　　!降伏しろ!」

デステイニーは高エネルギービームライフルの銃口を

再びグフに向けた。だが、グフはテンペストビーム

ソードでレジェンドを退け、スレイヤーウィップ

で高エネルギービームライフルを破壊する。

「ッ!」

「聞け篠ノ之!お前もいい加減に真実をわかれ!!」

「何!？」

千冬は箒に通信を開いた。

「よく聞け箒!プレシア議長や湊の言葉……」

それがお前の支えであるという事は知っている。

だが、いずれ議長や湊は……」

「お喋りが過ぎますよ!千冬さん!」

「邪魔をするな！」

レジェンドはグフを倒す勢いで斬って掛かる。

しかし、グフはレジェンドの剣撃を交わす。

「議長の言う事に私は信じられなくなったんだ！」

そんな事ならいっその事ソレスタルビーイングに入った方がマシだ！」

「裏切りを堂々と宣言ですか。いい覚悟ですね！」

この言葉を聞いた湊は千冬を完全に敵と見なし攻撃を再開する。

「……議長の言う事　？」

「惑わされないでください箒さん！千冬さんは既に少し錯乱している！」

「湊！だが……」

「今ここで、こんな裏切りが許されるはずが

ない。議長の想いを無視した敵をまだ味方だと

言うのですか？ 箒さん」

「はっ！」

「彼女達は敵なんですよ！ 今ここで倒さなければ  
どれ程の被害が出るかわかりません！」

「クッ……」

——湊の言う事は正しい………だけど、千冬さん達は  
私達を裏切った………けど、それでも私にとっては——

「(どうすればいいんだ！ 私は！)」

箒は下へ傾き激しく息を吐く。そして今までの事が  
頭の中で甦る。

二年前の学園生活——

アリシアと出会ったあの時——

インパルスという剣を手に入れた時——

つかさと出会い、彼女を失った時……

「クッソオオオオオオオオ!!!」

箒は叫びSEEDを開花させる。そしてモニターに移るグフを紅い瞳で睨み付ける。

「アンタが悪いんだ……アンタが……アンタが裏切るからアアアア!!!」

DESTINYニールはアロンドイトを構えて光の翼を輝かせる。

「はあああッ!」

「千冬、箒が来るわッ!」

「分かっている!」

グフはスレイヤーウィップで対抗しようとした、

しかしデステイニーはパルマファイオキーナでスレイヤーを破壊する。

「ッ！」

「決めたんだ……あの日から……私が弱き者達の

剣になるって……ッ　　！」

デステイニーは一瞬の間を見逃さずグフに

アロндаイトを向けてこちらに向かって来る。

「ここまでか！」

グフの目前に迫るアロндаイト、しかし……

「……やらせない　　！」

「ッ！」

グフとデステイニーの間に割って入って来たのは

ゴーストの名を持つ機体、クロスボーン・ガンダム  
ゴースト、搭乗者は過去の世界から帰還した  
マルスだった。

ゴーストは真剣白刃取りでデステイニーの  
アロنداイトを受け止め、アロنداイトを  
退けグフと共に下がる。

「貴女は早くここから去るんだ！あと少し行った  
方向に僕達の所有する母艦がいるはずだ！早く  
いって！」

「ッ！……感謝する」

グフを逃がし、ゴーストは2機の前に立ちふさがる。  
「邪魔をするなアアアア！」

デステイニーは左の手の平をゴーストに向けて  
パルマフィオキーナを撃ち込もうとした。しかし  
ゴーストは当たる前に蹴り飛ばし、攻撃しようと

するレジェンドに向かう。

「……！」

「（この感じ……なるほど、貴方も私と同じ類いで

すか、なら仕留める！」

レジェンドはサーベル、ゴーストもサーベルを抜いて  
戦闘行動に入る。

## PHASE 77 「交差する三人」

お待たせしましたア〜！再開ですよ！

---

突如として現れたマルスの駆るクロスボーンガンダムゴースト。グフを庇い攻撃を始めるゴースト。

レジェンドガンダムを操る湊はゴーストを見た瞬間変な感覚に囚われる。

「(おかしい……何故貴方から綾崎翔真の事を感じるんでしょうか)」

レジェンドは高エネルギービームライフルを

射ち、ゴーストを牽制する。ゴーストの懐に

デステイニーがアロンダイトを構えて斬り掛かる。

ゴーストはアロンダイトの攻撃を、交わさずに

阻止する。だが、ゴーストの背後にレジェンドが

迫る。

「なるほど、貴方も私と同じ類いですか……

なら仕留める！」

天候は悪くなり次第に雨が降り注ぐ。雨が

降る中でもレジェンド、デステイニーの攻撃は

続く。

ゴーストのコクピットで、操縦桿を握りしめ

二機との戦いに集中するマルスもまた湊の

存在を気にしていた。

「な、なんだ……この感覚は　　？頭に響く……

それに同じ類いつてなんだろ……あの機体に  
乗っているのは……ッ　　！）」

先程からレジェンドを見る度にマルスの中で  
白いイナズマが駆け巡る。

「君は……君は誰なんだ）」

「長瀬湊、それが私の名前ですよ……マルス・  
レディーレ」

通信回線が開かれ、声からして女の子と分かった  
マルス。

「僕の名前を知っている……ッ　　！）」

「サーペントテール……確か貴方の所属して  
いた傭兵部隊ですよね？なのに何故こんな所に  
居るんです？」

「貴方には関係ない」

冷たく言い放つマルス。ゴーストはビームサーベルを抜いてレジェンドに挑む。しかし、光の翼を広げたデスティニーが立ち塞がる。

「ホアシン・リー……やはり貴様なのか　！」

「箒さん……」

デスティニーガンダムのパイロット、篠ノ之箒。

マルスは一度だけ、変装し偽名である

ホアシン・リーを使って彼女と会った事があった。

「やはり貴様も一夏達の……はあアアア　！！」

光の翼を再び広げるデスティニーはアロンダイトを構えてゴーストに近付く。

ゴーストはアロンダイトの剣撃を交わしていく。

しかし、デスティニーは攻撃を交わされながら

も光の残像を残しゴーストを翻弄する。

「…… 8！ファントムライト起動！」

《合点承知！ファントムライト起動！》

ゴーストの全身から炎が上がる。実際には炎ではなく、これはミノフスキードライブによる現象であり、そこからゴーストはビームサーベルを構え直す。

「何度来ようと同じだ！」

再びSEEDを発動し、箒はデスティニーの力を引き出す。光の残像はゴーストに翻弄を与える。しかしゴーストも負けじとデスティニーの動きに付いていく。アロンドイトが降り下ろされる度にビームサーベルで受け止めるゴースト。

「……ッ……！」

その一瞬、マルスの瞳が金色に輝くと同時に  
ゴーストがビームサーベルでデステイニーの  
装甲に斬り込みを入れる。

「デステイニー！ 私とお前なら！」

箒の声にデステイニーにはツインアイを光らせ、  
パルマファイオキーナを発動し、右の掌をかざし  
ゴーストの右腕を粉碎、そしてアロنداイトで  
コクピットに斬り込みを入れた。

「うわああアアア!!」

最悪、死は免れたがコクピットのコンソール類は  
所々小さい爆発を起こす。

《マルス！ 織斑千冬が搭乗するグフがトレミーと  
合流したぞ！》

「了解。8、粒子グレネードを」

《了解！》

グレネードを投げて、デステイニーとレジエンドの周りに煙幕が上がり、辺りを白く染め上げる。

「クッ！何処だ！」

「……その際に撤退しましたか。」

マルス・レディーレ、議長に報告しないと」

デステイニーとレジエンドはその場から退散した。

この戦いを通して、湊もまた新たな決意を固めようとしていた。

次回はソーナ暴走回ですよ、しかもかなりエッチだ！

---

# PHASE 78 「ソーナとマルスと一夏の修羅場」

今回は至って通常回。

---

マルスは何とかトレミーに帰投する事は

出来たが、機体は中破寸前、マルスも怪我を

しておりコクピットから降りるなりその場に倒れる。

「マルス！……ルウエン、ストレッチャーを　　！」

ティアーユさん！御門さん！マルスを一緒に

持ち上げて！」

「了解だ！」

「分かったわ！ティアーユ」

「うん！」

ツバサの明確な指示通り、三人は動いて

マルスは治療室へ運ばれる。そこから治療が開始されパイロットスーツを脱がしていくと、いくつか火傷している部分が見られた。

しばらくし、ナノマシンベッドへ寝かされるマルス。

しかし数分後、ツバサ、御門は驚くべき光景を目にした。身体にあったはずの火傷や、完全に傷がふさがっていた。ツバサはその驚異的な回復に驚いていた。

「(どういう事なんだ? ……回復するには

かなり時間が掛かるはずなのに……マルス、  
君って奴は本当に不思議な奴だ……」

「マルス……」

ナノマシンベッド内で驚異的な回復を見せる  
マルスに、ツバサはただ驚く事しか出来なかった。

―数日後―

意識が覚醒し、マルスはハロから得たデータ  
を見てトレミー修復に取り掛かろうとしていた。  
ちなみに機体の方もやっておこうと先に格納庫  
へ足を踏み入れた。

「よし、誰もいない……よね　？」

キヨロキヨロ周りを見渡すマルス。しかし、背後に怪しい人影が動く。

「マルス！」

「わぷッ!?!……そ、ソーナお母さん　!?!」

ソーナであった。何故服装がミニスカメイドなのかは知らないが、ソーナはまるで我が子のように強く抱き締める。

「もう……心配ばかりさせて……」

「す、すいません」

「許してあげません」

「ええ!?!そ、そんな」

「私の言う事を聞いてくれたら許してあげます」

「……分かりました。ソーナお母さんには

迷惑を掛けましたし、頼み事でも何でも聞きます」

「何でも……言ったのならちゃんと約束を

守るのですよ？うふふ……」

ソーナはイタズラな笑みを浮かべ、マルスと共に  
衣装室の方へ向かう。

—数分後—

「た、確かに何でもするって言いましたけど……

だからって女装は……」

「凄く似合ってますよマルス。しばらくはその姿  
でいてくださいね」

「あんまりですよ！」

マルスはソーナに抗議した。何故ならマルスは  
今女装させられているからだ。女子高生が

着るブレザーを着用するマルス。カツラやメイク  
を施し、誰がどう見ても女の子にしか見えない。

「さて、お腹も空きましたし食堂に  
行きましょうかマルス」

「はい……うう〜」

≡

「(落ち込んでいるマルス……可愛いは罪ですね)」

ソーナは落ち込んでいるマルスを見て、少し

罪悪感もあるが女装があまりにも似合いすぎる

マルスを見て笑みを浮かべる。

食堂ではルウエン、ティア、ヤマト、リアスが食事していた。

「そんな事があったのか」

「それが俺達の今の状況だ。これを食べたら

俺は綾崎翔真を探す」

「また綾崎君は行方不明になってるの？ティアさん」

「うん。多分時空の歪みの影響で何処かの

平行世界に居ると思うの」

「はあ、アイツもトラブルによく

巻き込まれるな」

「tOLOVEるダークネスもいい所よね」

「隣いかしらリアス？」

「あらソーナ：：その娘は誰　？」

リアスが声がした方に振り向くとソーナと

女装したマルスがいた。ヤマトとルウエンは全く気付いていなかった。

「この娘は『マルーナ・クライン』です。

マルーナ？ 挨拶を……」

「は、はい」

マルスはルウエン達にバレないようにと全力で祈った。

「……簪、トレミーは今何処に向かっているんだ

？」

「イギリスに向かっているよ。それより一夏、まだ気にしてるの？フリーダム的事」

「……」

怪我を負っていても一夏は未だにある事を考えていた。それは4年前に貰った皆を守る為の剣「フリーダムガンダム」を失ったからだ。フリーダムには特別な想いを託し、戦っていたからだ。だが、インパルスによる攻撃で機体を無くしてしまった一夏は複雑な想いを抱く。

「……一夏」

簀が心配な眼差しを送る中で、部屋のスライドドアが開く。

「いっちかアアアアアア!!!」

「め、メガーヌさん!？」

「どうしてここに!？」

あろう事か、トレミーには居ないはずの一夏の妻の一人、メガーヌがルパンダイブを決めて一夏の布団に潜って来た。

「一夏……撃墜されたって本当なの　？」

「どうしてそれを……」

「はやてが教えてくれたの。でも……良かった。

貴方が死んだら……私、私……」

「メガーヌさん……」

メガーヌは目を潤わせて一夏を見つめる。

体を四つん這いにして、今にもH出来そうな

雰囲気だった。

ガシッ！

「ねえメガーヌさん？何時までそうしてるのかな？」

「か、簪ちゃん!?痛い！頭全力で搦んだら

スライムになるから！」

「一夏は私が看病するから、メガーヌさんは

退いてて」

「イヤよ。久しぶりの一夏二ウムを撮取

しないといけないんだから、簪ちゃんはどっかに

行っればいいじゃない」

「……」

「……」

次第に二人の周りに黒いオーラが漂う。

数分間の沈黙が続く中で、一夏は冷や汗を

掻き始める。

「(だ、誰か……)」

助けを求め一夏に、救いの手が差し伸べられる。

「一夏……」

「ッ!? ……千冬姉……」

## PHASE 79 「和解」

千冬が部屋を訪れ、一夏は話をする為トレミーにある展望室に訪れていた。

「……改めて……千冬姉、久しぶりだな」

「ああ……久しぶりだな一夏」

一夏と千冬は気まずいと思いつながら改めて再会を果たした。

一度は敵として戦った二人。今は姉弟として

再会を果たして二人は何を話していいか

分からなかったが、一夏が口を開く。

「千冬姉……その、随分待たせてごめん」

「ッ！全く……お前という奴は」

「ご、ごめん！」

久々の千冬のドスの聞いた声に、一夏はびびった。

一夏の中では簪やメガヌよりある意味最強なのだから怖がるのは無理もない。

しばかれると思った一夏は思わず防御体勢に

入る。だが千冬は一夏を抱き締める。

「ち、千冬姉!?!」

「本当は……本当は殴って、説教する所だが　　！」

だが……生きてくれていたなら……それでいいッ

一夏の頬に落ちる、数粒の雫。千冬はこの数年の

「！」

間一夏の事ばかり気にしていた。

最愛の弟、それもあるが一夏は自分にとって

マドカと同じ家族なのだから気にするのは当たり前だ。

「俺こそごめん……心配掛けて。姉ちゃんを

泣かせるなんて弟失格だな俺は」

「ああ！全くだバカ者！」

そう言う千冬だが、表情はとても嬉しそうだった。

「千冬姉……今までの事を話すよ……でも

まずは……」

一夏が目をウインクさせて誰かに合図を送った。

すると……

「い、一夏お父様……」

アインハルトだった。

「お、オイ一夏？……今私の聞き間違いで

なければその女の子が今、お前に向かってお父様と呼んだ気がするのだが……」

「おう！改めて紹介するよ、俺の娘

アインハルト・O（織斑）・ストラトスだ」

「初めてまして一夏お父様のお姉様。

アインハルトと申します」

「む……む……」

いきなりの娘（血は繋がってないが）登場に

驚く千冬。そして一夏にゆっくりと近付き……

「オイ一夏……どういふ事か説明しろ」

「お、おう……」

一夏はアインハルトとの経緯と、ミッドチルダ

での戦いを千冬に打ち明け、恋人……

メガーヌ達の事も打ち明けた。

「はあ」

「なんでため息つくんだ？」

「お前は遂に未亡人にまで手を出したのか」

「その言い方やめてくれ！なんか俺が

最低な奴みたいな感じだろ！」

「本当の事ではないか！……それとアインハルト」

「は、はい！」

千冬に呼ばれ、体を震わせるアインハルト。

「そんなに怖がらなくても私は何もしない。

その……私の膝に来て欲しい……ダメか  
？」

「千冬様がいいのでしたら」

アインハルトちょこんと、千冬の膝の上に  
座る。

「これからは私もお前達と戦う。構わないか？

一夏……」

「はう！」

千冬はアインハルトの頭を撫でて、一夏に  
問いかける。

「もちろん……歓迎するよ千冬姉」

千冬は一夏と和解を果たして、翔真達の仲間になつた。

---

しばらくは翔真&フェイトメインでいきます！

PHASE-80 「00 RAISER」(2017 7/28 修正済)

『行けっ！ファンネル！』

「来るぞフェイト！」

「うん！」

翔真の駆るウイングゼロ、フェイトの駆る

バンシイノルンに近付いて来た機影はニューロの  
駆るクシャトリヤだった。複数ものファンネルを  
展開し、二機に襲い掛かる。

「これなら！」

バンシイノルンは右手に持ったビームマグナムで  
一発、二発と撃ち込んでゆく。しかし強化され、  
改造されたクシャトリヤに内臓されたIフィールド  
で防がれてしまう。

『行け！ファンネル達』

「負けない！」

フェイトの想いに、バンシィは応えるかのようにサイコフレームを金色に光らせる。

『光!? たかがそんな脅しで!』

「俺が居るのを忘れてないか? 謎の強襲者!」

クシャトリヤの背後に翔真の駆るウイングゼロが姿を現しビームサーベルを抜刀すると、斬りに掛かる。

しかし、翔真はこの時最大なミスを犯した。

『もちろん忘れていませんわよね?』

ファンネル!』

「何!?!」

ファンネルがウイングゼロを囲み、複数の角度からビームを発射した。

「うわああ!?!」

「翔真ッ!...このッ!」

『行かせません!』

フェイトは翔真の元へ向かおうとするが、クシャトリヤが行く手を阻む。

ビームマグナムを構える。しかし、

ビームサーベルを素早く展開した

クシャトリヤによりビームマグナムを

一刀両断されてしまう。

「なら!」

バンシイノルンはビームサーベルを抜いて

クシャトリヤに斬りに掛かった。バチバチと

互いのサーベルから火花が散る。

「フェイト:...ぐはっ!」

ファンネルの容赦ない攻撃はウイングゼロを、  
翔真を苦しめる。

いくらガンダニューム合金と言えど、ビームを  
当てられ続ければ装甲が剥がれてゆく。

「(読めない！ファンネルの動きが！)」

ゼロを通して、イノベーターの能力を使い

ファンネルの攻撃を避ける。しかしゼロの反応が  
僅かに遅れてしまい、右腕にビームが貫通し  
破壊されてしまう。

「(ゼロが俺について来れない！)」

感じた……感じてしまったのだ。微かにゼロが  
自分の動きに付いて来れない事を知って  
しまった。

「まずい……このままじゃ」

「翔真、フェイト……無事か　　！」

「この声は……翼　　!？」

通信回線から聞こえる声に、翔真は聞き覚えが

あった。バンシィノルン、クシャトリヤの戦闘区域

に近づく一機のMS。

「ダブルオークアンタ、風鳴翼！戦闘に介入する！」

翼の操るダブルオークアンタがバンシィの

援護に入る。

だが、この戦闘区域に近づくMSがいた。

それは、翔真の専用機であるはずの

ダブルオーライザーであった。GNソードIIIを

展開し、両腰にはGNソードIIを装備しており  
中破したウイングゼロの元へ向かうダブルオー  
ライザー。

「ようやく会えましたわ……翔真様」

「切姫夜架」……彼女は笑みを浮かべながら  
ゼロに近づく。

---

vivid strike!

始まりましたね。けど、なのは達が出ないのは  
少しさみしい。

今回は夜架が何故ダブルオーに搭乗しているのか

の経緯の話です。

PHASE 81 「strike」(2017/7/28 修正済)

今回は夜架と翔真ヒロインズがメインになるかな？

これは、マルスがトレミーと

合流した5日後の話だ。

イギリスにやっとの想いで到着した一向。

中破したトレミーは修理の為、一時行動不能と

なってしまう。その代わりマルスが用意した

変わりの艦、『バビロニアヴァンガード』で

行動を開始する事にした。

イギリスにあるオルコット家ではリンネとヤマト、  
ディアーチェは今後の行動について話し合いを  
していた。

「これからどうするんだ？ 翔真も未だに

見つからないし、このままイギリスに居るのか？」

「じっとするのもありだが、ザフトは俺達を

潰そうと確実に攻めて来る可能性があるのも

否定は出来ない」

「トレミーは修理するにせよ、我らはここで

立ち止まる訳にはいかん。翔真が言うようにこの

世界は歪んでしまっている……」

ヤマトの言う事も一理あるとしても、リンネが

言うように、このまま自分達がイギリスに身を

潜めていれば何時しかザフトに所在がバレてしまいい、イギリスが戦火に包まれる可能性は大ありだ。

ディアーチェは眉間にシワを寄せて、今後の行動を慎重に決めていく。

場所は変わり、トレミーの格納庫ではツバサとマルスがダブルオーライザーの整備を行っていた。

「え!?!…翔真さんってもう二人居るの　？」

「平行世界同一人物だけだね。翔真が言うには  
平行世界にもう一人の自分が居るのはあり得る  
話なんだってさ」

「そうなんだ……僕も会ってみたいな」

「俺は会った事あるよ」

「そうなの!? やっぱり翔真さんはその……」

「エッチだったの?」

「まあね……でも、やっぱり馬鹿でスケベで

どうしようもないけど、翔真らしかったよ」

「翔真さんに対して容赦ないんだねツバサ君」

「当たり前だよ。容姿はイケメン、優しさが取り柄

なのに翔真はスケベで全てをダメにしてる……

変えられない事実だ」

「あはは……」

ツバサの翔真に対する評価を聞いて、苦笑いするマルス。そんな二人をよそに、ダブルオーライザーに近付く一人の少女がいた。

「ようやく見つけましたわ……翔真様の愛機」

少女がダブルオーライザーを触ろうとした時

マルスは彼女の存在を察知する。

「!……誰か下にいる　!」

「なんだった?」

マルスとツバサはワイヤーを使って機体から

降りた。するとマルスの読み通り、黒いドレス?

または浴衣を思わせるような服装を着こなし、

長い黒髪をなびかせた少女が立っていた。

「貴方は誰ですか?」

「関係者……って訳でもなさそうだ」

マルスとツバサは彼女を警戒し、睨みを利かせる。

「初めましてですわお二人共。わたくしの名は

『切姫夜架』……翔真様をお救いする救世主……

とでも言っておきましょうか」

「救世主？」

「ツークン、まーちゃん？どうしたの……

貴方は……何者　？」

「あの人は……」

「知ってるのなのは？」

「知らない……でも、警戒しといた方が

いいかもしれない」

警戒する二人の後ろから束、シャルロット、なのは

が現れる。

「あらあら。誰かと思えば翔真様の恋人様達

でありましたか」

「正式には妻だけどね。それで、貴方は誰なのかな？

それに何でシー君の事を知ってるの」

東は真剣な表情で夜架に問う。すると夜架は……

「知ってるも何も、わたくしは翔真様に

命を救われたからです、そして彼は私に

こう言ってくれました……君の居場所になると」

そう言うと、夜架はダブルオーライザーの

メインカメラの方まで飛び立つ。

「ワイヤー無しで機体へ乗った!？」

「この際だから言っておきますわ篠ノ之東、

シャルロット・デュノア、高町なのは……

貴方達から翔真様を奪いますわ」

「……」

「……」

夜架の発言。それは宣戦布告とも聞き取れる

発言にあの三人も黙ってなかった。

「聞き捨てならんな……切姫夜架、それは

私達への挑戦と受け取っても良いのだな？」

「翔真君を、渡すもんですか！」

「私達の愛しい人を奪おうなどと……許せません」

シグナム、真耶、大和は束達の背後から姿を

現して彼女に敵対の視線を送る。

「束ママ……どうしたの？？」

「翔真パパがどうしたの？」

「ついちゃん(椿)、ヴィヴィちゃん……おいで」

束は椿とヴィヴィオを抱き締めて、

ダブルオーライザーのメインカメラのてっぺんに

いる夜架を見上げる。

「シー君を……渡さないよ……」

「……貴女達との勝負はまた今度ですわ」

夜架はそう告げて、機体のコクピットへ乗り移る。

「オーライザーが！」

「返して！それはショウ君と私達の機体だよ！」

《心配しなくても奪おうという考えはありません。

翔真様を連れ戻して来ますわ》

「「「「……!?」」」」

その言葉に全員が驚く中、ダブルオーライザーは動き始める。

「全員待避！マルスは緊急用ハッチレバーを！」

「は、はい！」

ツバサの指示により、全員が待避しマルスは

レバーを下げた。トレミーのカタパルトハッチが

開きダブルオーライザーは発進する。

「まずは翔真様をお連れしませんと。でないと  
盛り上がりませんかから」

夜架はトランザムを発動して、時空の扉を開らく。  
その中へと入り、翔真達がいる世界へとダイブした。

これが、夜架がダブルオーライザーに乗っていた  
理由である。



PHASE-82 「これが俺達のガンダムだ!」(2017/7/28  
修正済)

ウイングゼロを乗り捨て、翔真は  
ダブルオーライザーに乗り込む。

「システムに異常は無し、ツインドライブシステム  
正常、システムオールグリーン……」

自分専用にOSを改良してゆく翔真。目に見えない  
速さでキーボードのキーを早打ちしてゆく。

「よし、行ける」

「さすがは翔真様。何でもこなす所が素敵  
ですわ」

「この声は……君、夜架ちゃんなのか　!」

「正解ですわ♪お久しぶりですアナタ」

「ちよ!? 夜架ちゃん! 俺はアナタじゃないし

君のダーリンでもないぞ!?!」

「あら、あの時私に言ってくださったでは

ありませんか……君の居場所になると」

「それはそうだが……なあ夜架ちゃん、その発言を

まさか束達に言ったりしてないよな?」

「はい! 宣戦布告してきましたわ」

「ギヤアアアア!!……ああもう !

ダブルオーライザー発進する!」

やはり翔真の死亡フラグは立ちまくりである。

「GNソードビット!……フェイトは下がって。

私は何とかしてみせるッ!」

「ありがとう翼。でも気をつけて、あのMSの

パイロットの人……なかなか手強いよ」

フェイトはクシャトリヤのパイロット――

正しくはニューロのマリーダがただ者では

ないとこの数分間の間戦って感じていた。

クシャトリヤは容赦なく襲い掛かる。

ファンネルを操りながらの攻防。フェイトと

翼は苦しめられる。

『ガンダムは……敵……!』

クシャトリヤの周りにファンネルが飛び回り、

次の瞬間、ファンネルが一斉にダブルオークアンタ

に向かう。

ダブルオークアンタを駆る翼はフェイトが

搭乗するバンシィを庇いながらファンネルの

ビームを回避する。

「翼！あとは俺がやる！……トランザム　　！」

「翔真！」

クアンタの後方から深紅の輝きに染まった

ダブルオーライザーがクシャトリヤに砲撃を

放つ。

『お前も……ガンダムかアアア　　!!』

ファンネルを駆使し、ダブルオーライザーに

砲撃を送る。飛び交うビームの中ダブルオー

ライザーは交わしながらファンネルをGNソードIII

を振るい破壊していく。

『ファンネルがッ！』

「これで終わりだアアアア!!」

全てのファンネルを撃破し、ダブルオーライザーは

クシャトリヤに近付く。だがその時だった……

『あなたは……そこにいますか　?』

「……!?!」

金色に輝く何か……女性のような声でそう

問いかけるのはこの世界の脅威、フェストゥム  
であった。

「くっ!」

フェストゥム『スフィinks型』は

触手のような物を出して、クシャトリヤに

襲いかかる。翔真はそうはさせまいと

ダブルオーライザーで旋回して触手を斬り裂く。

「ッ!」

翔真はイノベーターの能力を解放し、機体を

動かす。次々に迫る触手をGNソードで斬ってゆく。



斬り刻んだ。同時にクシャトリヤも爆発に  
巻き込まれ消えた。

PHASE 83 「修羅場の果てに」

クシャトリヤを撃破した一行。翔真はダブルオーライザーを降下。続いて翼のクアンタが降下する。このまま平凡に済ませたかった翔真だが、そうは行かない。

「うふふ……翔真様♪」

「夜架ちゃん？少し近いと思うんだが」

「久しぶりの翔真様なんですもの。」

これくらいのスキンシップお許しください」

翔真の右腕に抱き付く夜架。シグナムや真耶程ではないが、ふっくらとした彼女の胸の感触は腕をとおして分かる。

「……」

「ねえ翔真。何時までくっついてるの？」

「(怖ッ!?)」

翼はずっと黙ったままこちらを睨み付けている。

フェイトに至っては凍り付くような笑みを浮かべ

ハイライトのない目でこちらを見ている。

「ねえ夜架ちゃん。いくらスキンシップとは

いえ度が過ぎるよ？」

「だからといって、わたくしはやめませんわ。

邪魔者は何処かへ行つててくださいな」

「誰かは知らないが、随分と舐めた事を……」

夜架——翼は知らないがフェイトだけは

彼女の事を知っていた。それは約1年前に

翔真とある任務の最中に出会った。

次元震により別の世界から飛ばされ

迷い込んだのがこの少女―切姫夜架だ。

それからというもの、放ってはおけない翔真は彼女の面倒を見ていた。

それが半年続き、次第に夜架は翔真を慕うようになった。

「わ、私だって……翔真とふれ合いたいのに。

大体翔真も翔真でしょ？」

「へ……？」

突然自分の名を呼ばれ、啞然とする翔真。

「夜架ちゃんに抱き付かれてデレデレしてる。

それに、顔がやらしい」

「な、なわけではないじゃん!？」

だが実際、デレデレしながら変な

妄想へ走り掛けているのは事実。はあと

ため息をつく翼。

「なあ夜架ちゃん……そろそろ離れてくれると

俺、嬉しいんだけど……」

「嫌ですわ♪」

離れる様子はない。そして突き刺さる

フェイトと翼の視線。

「(それにしても束達は大丈夫かな……」

椿やヴィヴィオが泣いてなければいいが)」

トレミーにある一室。翔真の名前を聞いて

帰って来たとは勘違いした椿とヴィヴィオは

泣いていたが、束とシグナムがなんとかあやし

寝かしていた。

「……束」

「なにシーちゃん？」

「翔真は何処にいるのだろうな……すまない、

先程の事は忘れてくれ束」

「ふふーん」

何を言い出すのかと思えば翔真の事か。

束はニヤニヤしながら口を開く。

「シーちゃんも大分変わったよね」

「別になん変わってなどない。私は私だ」

「はやてちゃんから聞いたけどシヨウ君の事を

話している時のシーちゃんの顔は凄く乙女らしいね」

「ぶっ！」

思わず吹き出すシグナム。ベッドから降りて

彼女は顔を赤くしながら束に反論する。

「そ、そんな訳ない！私はただ普段の

様子について語っているだけで！」

「えー？でもはやてちゃんが言ってたけど

シーちゃん：お姫様として扱ってもらいたい

って聞いたけどね」

「あ、主！！」

今はいない（いや、いるのだが）主、はやての

顔を思い出す。想像の中のはやては笑いながら

舌をチロツと出している。

「ま、まあそれは置いとくとして」

「（置いとくんのだ）」

「あの切姫夜架という奴がどんな人物なのか

たっぷり聞かないとな：翔真に」

「まあまあ。多分あの子がシヨウ君を

連れ戻してくれらるだろうし今は待とうよ」  
シグナムは笑顔だが目は全く笑っていないかった。

## PHASE-84 「深紅の笑い」

——あぎやぎやぎや!!

その高笑いと共に深紅の機体は駆け抜ける。

ジブラルタ基地に突如として現れたアンノウン。

『あれはガンダムか!?』『撃て!』

ジブラルタ基地に配備されたMS、ジン数機は

追撃に当たる。だが深紅のMSは攻撃を交わしていく。

「フォン、上空から増援来ます」

「上等……ぶっ倒すッ！」

上空からバビ数機が砲撃を始める。しかし

そんな砲撃など彼の前では無力に等しく余裕で

交わせられた。

深紅のMS……ガンダムアストレアタイプ F、  
だがノーヴェの機体ではない。アストレアの  
コクピットシートに座るのは一人の青年、  
後部座席にはゴスロリの衣装を着た少女が  
座っていた。

「ハナヨ、まだか？」

「……確認しました。スタニック・デュノアは  
この基地の地下に監禁されています」

「そうか……だったら早く終わらねえとな」

『フォン・スパーク』……この世界に何かしらの  
力で介入した元フェレシュテ所属のガンダム  
マイスター。ハナヨはジブラルタ基地のシステム  
ベースにハッキングして、ニックが捕らわれている

場所を把握する。

「トランザム」

トランザムを発動したアストレア。アストレアは疾風の如し、素早く敵を倒してゆく。

GNプロトソードを展開し、ジン、バビを破壊する。もし箒達が居たならアストレアの攻撃に向かっていた所だが、現在ミネルバはジブラルタ基地を出ていた。

一瞬にしてジブラルタ基地を壊滅寸前にまで追い込んだフォン。

アストレアからハナヨと共に降りたフォンは基地の中へと入る。

「先行ってる、まずは中にいる奴を排除しねえと」

「わかりました……フォン」

「ああ？」

「気を付けて」

ハナヨは、それだけを言い残すと立ち去る。

「気を付けてか……あぎやぎやぎや      !!」

笑いながら、フォンは走り出す。

——何処で間違えたのか……あの時から  
なのか……翔真達と決別した時から——

ソレスタルビーイングのスパイだという疑いを  
掛けられたニックはジブラルタルの地下牢獄に  
身を拘束されていた。

体力は底を尽き、体の自由が利かないニック。

「ちくしょう……ここまでか……」

「そういう訳でもありません」

「な……に……？」

牢屋の扉が開き、入って来たのはハナヨだった。

そして後からフォンも入って来た。

「見つけたァ……お前がスタニック・デュノアか  
？」

「き、貴様は……？」

「俺様か？それは後で答えてやるよ……ハナヨ」

「はい」

懐から黒いスイッチを押すハナヨ。すると、

基地内が一斉に爆発を起こす。

「行くぞ」

フォンはニックを担ぎ牢屋を出る。

「どういうつもりだ」

「どうもなにもテメエには少しの間人質に

なってもらっただけだ……アヤサキシヨウマを

釣る餌としてな……あぎやぎやぎやぎや……!」

「フォン、時間がありません」

「急げばいんだろ？」

フォンとハナヨ、そしてニックはアストレアに

乗り込むと基地を後にした。

後にこの襲撃事件はザフトにも知れ渡り

「赤い悪魔」として、アストレアはそう呼ばれた。

フォン・スパーク、この世界に何をもたらすのか……

フォンさんは、ガンダム00では刹那の次に好きなキャラなので出しました。フォンさんはどちらの味方でもない。

次回は箒達の話です。

PHASE 85 「ヘブンスベース」

この話は、まだフォンが来る3日前の話です。

千冬とスコールを撃墜した箒。未だに彼女は後悔していた……恩師を殺してしまったという罪悪感に襲われ、箒は精神が不安定になりかけていたが心の休む間もなく、ザフトは今最大の作戦を開始しようとしていた。

それは地球連合軍の最高司令部である

ヘブンズベースを攻略する事であった。プレシアはここを叩けば地球連合の勢力は弱まると考えて

このよう作戦を立案した。

さらにこの作戦にはプレシア派と名乗る

反地球連合派の艦隊も集まり、ミネルバは

ヘブンズベースを目指していた。艦長はプレシアが務める事となった。

そして現在、箒、湊はプレシアから作戦の経緯を聞いていた。鈴やラウラは千冬追撃以来から姿を見せなくなっていた。(正確には脱走した)

「このヘブンズベースは地球連合の最大の

拠点よ。ここを叩けば我々の敵は一つに絞られるわ」

「ソレスタルビーイング……ですか」

プレシアの後に、箒はソレスタルビーイングの名を口にする。

「その通りよ箒。まずはヘブンスベース攻略を

考えるのよ。ここさえ叩けば後はどうにでもなるの。けど、戦力はかなりあるから今度の戦いは気を

抜かないでね」

「分かりました議長。ところでインパルスには

一体誰が搭乗するのですか？」

「それは私よ」

スライドドアが開くなり一人の少女が入って来た。

「楯無さん！」

「久しぶりね箒ちゃん。自己紹介がまだだったわね、更識楯無です。本日付けでミネルバに配属されました……以後お見知りおきを」

楯無の挨拶が終わり、箒達は親しみを込めて敬礼する。

「新しい仲間も加わった事だし、皆はそろそろ出撃に備えて頂戴」

「了解！」

— ミネルバ・MS 格納庫 —

「……」

「大丈夫箒ちゃん？」

「え……まあはい」

浮かない顔をしていた箒に、楯無は声を掛けた。

「聞いたわよ。千冬さん達を撃墜したらしいじゃない……」

「私だって……出来るなら討ちたくありません」

でしたよ。でも……ッ　　！」

「……きつと、千冬さん達も訳があったんじゃないのかしら？」

「……そうでしょうか　？」

「私はそう思うわよ。それに……あの人達なら多分生きてるわよ」

そう言い残すと、楯無はインパルスの方へ向かった。

「……そんなはずない」

そして発進シーケンスに入り、カタパルトデッキが開く。

「長瀬湊、レジェンド発進します」

「篠ノ之箒、デステイニー……行きます　　！」

「更識楯無、コアスプレnder発進しちゃうから！」

ミネルバからデステイニー、レジェンドが発進し  
コアスプレnder、チェストフライヤー、レッグ  
フライヤー、フォースシルエットはドッキングし  
フォースインパルスガンダムが誕生する。

三機は先頭に立ち、味方の艦からもグフや  
ザクウォーリアー、ウインダム、ダガーが  
発進した。

場所は変わり、イギリスにある草原の広場で  
ルウエンは空を眺めていた。

「……」

「あ……ルウエン」

「ティアーユ」

ルウエンの横にティアーユがちょこんと座る。

「なにしてたの？」

「……争いはあるのに、空は変わらないな……」

「そうだね。ねえルウエン……この戦いが

もし終わったらどうするの？」

「……分からない。けど最近ある夢を持った」

「夢？……なにかな　？」

「ティアーユと結婚する事さ」

「ッ！ け、結婚!? ……ちょっと待てルウエン

！

まだ私心の準備がく！」

突然のルウエンの発言に、  
テイアークはあたふた  
していた。

PHASE 86 「亡霊のMS」

ヘブンズベースへの攻撃が開始される。グフは基地から発進したウインダムとの戦闘に入る。

「はああああアアア!!」

箒が操るデステイニーは光の翼を広げてビームライフルを射ってゆく。

「そこォ！」

フラッシュエッジを取りだし、それを投げるとウインダムを数機撃破する。

PPPP!

鳴り響いたアラート音。箒はモニターで機影がデステイニーに向かって近づく事に気付く。

「次は……な……あれは……」

モニターに写っていた物……それはかつて

翔真が愛機として搭乗していたGAT-X105ストライクに酷似したMS「GAT-X105EストライクE」だった。

さらには、下にロツソイージスまでもがいた。

バックパックにはI・W・S・Pを装備しているストライクEはデステイニーに襲い掛かる。

「(何故お前達が……ッ　　！)」

敵機がストライクという事実には箒は怒りを

覚える。ストライクガンダムとは箒にとっては

ブリッツと同じでIS学園を守り抜いた英雄に

近い存在なのだ。

だから許せない……

「貴様らが：：翔真達の機体に乗るなアアアア !!」

怒りを爆発させ、箒はSEEDを発動。アロンダイトを取り出して斬りに掛かる。

アロンダイトは見事にストライクEを切り裂く。

続いてこちらに向かうウインダムに向けて

長射程高エネルギービーム砲を放つ。

「数だけ至って」

湊の駆るレジェンドはビームジャベリンを抜刀し

ダガーを斬る。

だが周りに敵機が集まる。レジェンドは旋回し

背部に装備されたドラグーン・プラットに装備

されたドラグーンを可動砲台のようにビームを

放った。

その姿はまるで、ZGMF-X13Aプロヴィデンスを

思い浮かべてしまう程の活躍ぶりだ。

「私は……貴方を倒さなければならぬ。

こんな所でやられる訳にはいかないんです」  
湊には翔真を倒すという決意がある。だから  
ここでやられる訳にはいかないとレジェンドを  
駆使する。

レジェンドは右手にユーディキウム・ビーム  
ライフルを持ちトリガーを引いた。

「次は……」

レジェンドの背後に迫る影。それはレイダー  
制式仕様だった。3機がMAの状態で接近する。  
だがレジェンドは軽く旋回しビームライフルで  
撃破する。

「貴女達さえいなければ、私は簪ちゃんと

別れる事はなかったッ！」

自分の気持ちを叫ぶと、楯無はウインダムの

軍団に突っ込む。ヴァジュラビームサーベルを

抜刀するインパルスは即座に一機、二機、三機と

撃墜してゆく。

「今の世界にきつと、綾崎君や織斑君はきつと

満足はしてないでしょうね。それは私も同じよ)」

インパルスはビームサーベルを横に一閃する。

しかし、基地から次々とMSが発進する。さらには

デストロイ二機までもが姿を現す。

「箒さんッ！」

「くっ……またあんな物をッ

！味方のMSは

全機私に続けエエエエ!!」

デスティニーは光の翼を広げ、デストロイに向かう。

PHASE 87 「翔真ガールズ対名瀬ガールズI」

今回と次回でまさかの戦術機登場……

MSとの共演

箒達がヘブンズベースを圧倒的に壊滅まで

追い込んでいた頃。翔真が未だに不在の中で

一夏達は着々と力の準備をしていた。

怪我が直った一夏は簪とメガーヌと共に

ZGMF-X20Aストライクフリーダムを取りに

ミッドチルダへ渡っていた。ツバサや

ルウエン達も戦いに備えて機体の整備をしている。

トレミーのMSハンガーにはストライクノワールやバルバトスなどが固定されている。

—セシリア邸・待合室—

「ねえセツシーちゃん。私達に会いたって  
お客さんは何処にいるのかな？」

「(セシリアちゃんのお家……すぐかちゃん家

「みたいに大きいかも」

「どんな人なのセシリア？」

「翔真さん以上にハーレムを築いている……」

それだけは伝えておきますわ」

くすつと笑うセシリアに、東、なのは、シャル

ロットは首を傾げた。

ある人物が待つ部屋へ到着した四人。すると

ソファーには一人の男性と三人の女性が座っていた。

「お、ようやくご到着かな？」

ハット帽子を外し束達の姿を確認する男性

『名瀬・タービン』は怪しい笑みを見せた。

「へえ、あの子達が有名な綾崎翔真の

嫁さんって訳ね？」

名瀬に続いたのは第一夫人であるアマダ・アルカだ。

「お待たせ致しましたわ名瀬さん。いつも

イギリスに物資を運んで頂きありがとうございます」

「いいっていいって。可愛いお嬢さんの

願いならいくらでも引き受けるってもんさ」

「まただーりんが女の子口説こうとしてるよ姐さん！」

セシリアを口説こうとしている名瀬に対し

声を上げたのは『ラファタ・フラン克蘭ド』である。

そして隣には『アジー・グルミン』もいる。

「残念ですが名瀬さん。わたくしには恋い焦がれ

ている殿方がいますのでいくら口説いても無駄

ですわよ？」

「おっと。コイツは驚きだな」

「えと……セツシーちゃん　？」

「ご紹介しますわね。この方達はイギリスに

支援物資を持って来てもらっているタービンズ

の皆さんですわ」

「タービンズ？……確か幾つも支社を持つ

テイワズの……」

「当たり前だよ」

シャルロットが言い掛けた時、アミダが

口を開いた。

「アンタ達の活躍は知ってるよ。世界を

混乱に陥れるテロリストだって」

「あんまり名誉な事じゃないけど」

「いいや、それでいいんだよ」

「……？」

首を傾げる束達にアミダは話を続ける。

「この世界は正直言って平和という名の

皮を被っているにすぎない。ザフトも連合も

やる事は同じで私達は呆れてたけど……

アンタ達が現れて世界は少しづつ変わって  
いるよ」

「え……」

予想外な言葉になのはは思わず声を漏らした。

「ザフトや連合とは違う……アンタ達が

歪みとやらを駆逐していく内にソレスタル

ビーイングの支援者は徐々に増えてる」

アミダが話し終えたと同時に名瀬が口を開く。

「俺達は……いや、ティワズ及びタービンスは

ソレスタルビーイングをこれからも支援するさ」

名瀬はそこから淡々と話を続ける。

「この世界が今求めているものは……それは明日だ」

「明日……」

「明日……誰もが平和に暮らせる明日をな」

名瀬はワイングラスを持つ。

「だが、ザフトは今勢力がかなり増してきてる。地球連合が墜ちるのはもはや時間の問題だ。さらに言えばプレシア派の人間もかなり増えて武力もかなりな物になる」

「つまり……貴方が言いたいのは私達や

しょう君達が負けるって言いたいんだね？」

束は名瀬の言葉を理解し、真剣な眼差しで名瀬を見る。

「ご名答だ。でもよォ、このまま負ける訳にはいかないだろ？ 今日君達を呼んだのはこれを見せる為さ……ラフタ、アジー」

「OK！……ご対面〜！」

「開けるよ」

ラフタ、アジーはカーテンを開けた。

「……………！」

カーテンが開かれ窓の向こうにあった物……

それは黒い2機のロボットと白い1機のロボットが立っていた。

「あれはMSなの……………」

「？」

東は名瀬に質問をぶつけた。だが、東自身も

そのロボット3機がMSとは思えなかった。大きさは大体17メートル〜20メートルだと考えられる。

「違うな。あれはお嬢さんの作ったISと

戦闘機をヒントにテイワズが作り出した機体、

その名も『戦術機』さ」

「戦術機……………」

「戦術機は戦闘機とISをヒントに生み出した

MSとは違う新たなロボットと言った所だ」

「私のISをヒントに……か。なかなか面白そうだね」

束は頬を緩ませ、興味津々な眼差しで戦術機を見る。

「それで頼みがあんだが……俺のハニー達と

模擬戦をしてくれないか？」

名瀬が束達を呼んだ本当の目的、それは

戦術機との模擬戦の相手を努めてほしいという

物だった。



PHASE・88 「翔真ガールズ対名瀬ガールズⅡ」

「ラフタッ！そっちに行っただよッ！」

「さすがはガンダムね。でも……私と不知火を

甘く見たら怪我するわよッ！」

「なかなかやるね！だけどッ！」

「負けないから！」

テイワズが開発した新たな機動兵器『戦術機』。

オルコット邸から少し離れた演習場ではラフタと

アジーが試作型の戦術機に乗り、シャルロットと

なのはと戦闘を行っていた。

ラフタは『XFJ・01a 不知火・式型』に搭乗し、

アジーは『MiG・21 バラライカ』に搭乗している。

不知火・式型は突撃砲を構える。シャルロットの操るエクシアは、シールドで突撃砲から放たれる弾丸を防ぐ。

「やっぱり：：なら、接近戦かな」

網膜投影に映し出されたエクシア。ラフタは突撃砲では無理だと悟り接近戦へ移行する。

長刀を構えて横に一閃。エクシアが衝撃で揺らぐ。

「ッ！」

だが負けじと、シャルロットはエクシアを前進。

そしてGNソードを構えて長刀に刃を当てる。

「へ、へえ：：なかなかやるじゃん」

「ボクだって、翔真に鍛え上げられたんだよ。

特に、接近戦はね！」

押されてゆく不知火。エクシアがそのまま圧倒する。

一方その頃、なのはは白色に塗装された戦術機――

『武御雷』を駆り、アジが駆るMiG-21と戦っていた。

「はぁ！」

「ッ！」

MiG-21は120mm突撃砲を射ちながら武御雷を牽制。

対する武御雷は長刀で弾丸を避けながら前へと

進む。アジは接近を許すまいと更に射ち続ける。

「(射撃戦重視みたいだね……なら)」

長刀を背部へマウント。そして両マニピレータに

突撃砲を装備し射撃戦へ入る。二機の攻防は更に

激しくなつてゆく。戦闘の様子を遠くから見ている

名瀬はアミダと共にいた。

「戦術機……どうやら、多少戦力にはなるな。」

だが問題はビーム兵器の搭載が出来ない所だな」

「仕方ないさ。ビーム兵器を搭載したら

バッテリーが早く消耗されるし、実弾の方が

有利になる可能性だってあるんだから」

「だな」

名瀬は手元にある不知火、MiG-21の資料を見ながら模擬戦を見続ける。

場所は変わりへブンズベース。戦闘は激化していた。迫るデストロイガンダムに筈のデステイニーが接近。光の翼を輝かせ、コクピット部分をアロンダイトで破壊する。

「これで終わりだアアア!!」

デステイニーはウイングダムを次々に撃墜していった。湊の操るレジェンドガンダムはビームシャベリンでダガーやレイダーを倒していた。

「熱源……しつこいですね貴方達も」

レジェンドは地上へと降下。着地すると前方に

MSMA ザムザザー、ユークリッドが迫っていた。

「MSMA部隊は私に付いて来て支援をお願いします」

『『了解ッ！』』

レジェンドの後方にグフやバビの部隊が支援に向かう。ヘブンズベース崩壊はあと少しで始まるうとしていた。その光景をミネルバのブリッジで眺めるプレシアは笑みを浮かべていた。

「(邪魔者は消えたわね。次は貴方達よ……」

ソレスタルビーイング。でも……」

プレシアは手元にある端末を起動させた。そして小さいディスプレイにある少年が写し出された。

「まずは、私のナイトを手の中に収めないと。」

マルス・レディーレ……いずれ貴方は……ふふっ」

壊滅のカウントダウン。ヘブンズベースはザフトの

大規模な戦力により崩壊してゆく。地球連合のMS

MAは次々に撃墜され、連合側は降伏を宣言した。

燃え盛る炎の大地。デステイニー・レジェンドを始めザフトのMS部隊は燃え盛るヘブズベースを見届けた後撤退するのであった。

「基地にいた連合の上層部は皆、救出したわね？」

「はい」

基地にいた連合の上層部の女性達の安否を確認しプレシアは立ち上がる。

「……次はソレスタルビーイング……並びに支援する組織を壊滅させないとね」

プレシアの呟き。それが後に現実で起ころうとは知るよしもない。

## 第六章 黒き復讐者と蘇る赤き正義

PHASE・89 「違和感と赤き少年」

トレミーの部屋の一角。ツバサはこの部屋で

調べ物を行っていた。調べ物……それはこの世界だ。前に調べた時に妙に噛み合わない節があると感じたツバサはこの世界について調べていた。

「やっぱりか……だが、何故こんなにも……」

「ツ・バ・サ！」

「おわ!? ね、ネプテューヌ!?!」

「もうう! どこに行ったと思ったたらこんな所に居たんだね……ネプウ」

「あはは……」

頬を膨らますネプテューヌ。ここ最近調べ物ばかりしていたツバサが構ってくれない事にお怒りのようだ。

「ごめんねネプテューヌ。ただ、どうしても

ハッキリさせたい事があったんだ」

「ハッキリさせたい事？」

「うん」

ツバサは調査の中で調べ上げた全ての情報を

記した資料をテーブルの上に置いた。

「実はこの世界についてなんだけど……」

まずツバサの感じた違和感はMSや施設の急増率だ。

二年前までは全く配備されてないどころか施設も

なかった。だが、この二年間でIS世界は急成長して

いったのだ。なにかがおかしい——。そう思い  
ツバサは色々調べていたのだ。

「現在配備されているMSの数は確認されている  
だけで8500機はある。二年前まで技術は発展せず  
精々ISを作る技術のみだった。でも……」

「何故かMSを生み出すものにまで成長したって訳？」

「ああ。けど、元はMSとは何も関わりがなかった  
はずなんだ……恐らく、黒幕がいる」

「それって、フェイトちゃんのお母さんで……  
プレシアさんじゃないの？」

「違うね。恐らく……誰かがいる。この世界を  
変革させた人物がね……」

ツバサは資料のページをめくる。そしてある  
ページに目が止まる。

「MS……翔真、こいつはただ事じゃないぞ」

そのページには行方不明及び戦死を意味する

MIAと記された翔真の写真が取り付けられていた。

真剣な眼差しで資料を見つめるツバサをよそに

ネプテューヌはあるカタログを見つけた。

「ねえツバサ？ラスベガスってなに！」

「ああ。いや、数日後にマルスや皆で旅行に

行こうかなって思ってたね。ザフトは連合との戦いで

戦力を消耗してるだろうから、休暇をするなら

今がチャンスだと思ったんだよ」

だが、この時二人は知るよしもなかった。まさか

あんな事になるなんて——

場所は代わりホテルの一室。最上階から見る

夜景は美しく、全てを忘れてしまいそうな程に

キラキラと星が輝いていた。そんな夜景をバックにプレシアは部屋を訪れた一人の青年と話していた。

「俺は……戦えばいいの？」

「そうよウォーレン。貴方の背中にある忌まわしき力を使って戦えばいいの」

「忌まわしき……力……」

赤髪の青年は顔を上げる。そんな彼にプレシアは一枚の写真を手渡す。そこに写る一人の少年は

ツナギを着て、機械を弄るマルスであった。

「その子をどんな手を使ってでも連れて来て。」

初任務だからと言って、失敗は許されないわよ」

「分かった。何処へ行けばいい……」

「詳細は分かり次第通達するわ」

「……了解した」

赤髪の青年は写真を懐へ仕舞うと部屋を出る。

部屋には一人っきりのプレシアがいる。月の光が照らされたテーブルに一枚のウインドウが表示される。

—アレックス・ウォーレン 旧名 五反田 弾—

## PHASE 90 「悲劇の悪魔 I」

ぶっちゃっけガンダムビルドダイバーズのop結構好き。

世界情勢は徐々にザフトへと傾きつつあった。ヘブンズベースの一件以降

ザフトを支持する者は後を立たない。地球連合軍が過去に行った非道な人体実験  
が

明るみとなり連合軍は事実上解散まで追い込まれた。そしてザフト最高評議会議

長

プレシア・テストアロツサはソレスタルビーイングを徹底的に排除するという声明

を

発表。ザフトを良く思わない一部の者達はソレスタルビーイングを支援する組織

に

身を寄せて、新たな機動兵器『戦術機』でザフト軍と戦っている。そして今も・

：

『た、助けてくれエエエ!!』

『くそっ！ザフトの奴等アア!!』

「まだ来るのか。けど、この基地を壊滅させれば戦力を削れる。

バルバトス：行くぞ。マルスも行けるかい？」

《うん。エクシエスの状態は良好だ：行こうか》

被弾した量産型『不知火』が次々と後退する中、バルバトスとエクシエスが

ザクウォーリアの前に立ちはだかる。ザクウォーリアは50機。ツバサは獲物を

狩る虎のような眼差しでバルバトスを動かす。バルバトスは巧みな動きで

ソードメイスを振り回す。メイスの固さはビームも弾く程だ。簡単には破壊出来

ず、

その武器は容赦なくザクウォーリアをガラクタへ変えてゆく。マルスやハロ達の整備もあり、ツバサのバルバトスは『ルプス』となり機体性能も上がっている。

「邪魔だよ」

「こいつウウウ！」

「舐めやがってッ！」

バルバトスルプスの背後に頭部にブレードアンテナが付けられたザクがライフルを

撃ちながら接近していた。ルプスは即座にソードメイスを振り回してビームを斬る。

そのまま近づくザクウォーリアを吹き飛ばす。

『あの機体……悪魔か』

『なんであるうと……倒すッ　　！』

「……！」

続くと言わんばかりにエクシエスもバルバトスに続く。ロウから送られたパーツをインハルトやハ口達が組み込んだことでエクシエスは本来の姿

《ガンダム・エクシエス》として姿を変えていた。ビームソード《スケルトウス》

を

2本持ち、二刀流でザクウォーリアを斬り伏せてゆく。だが背後からバクウが現る。

「……いけ ー！」

新たに追加された兵装『量子通信浮遊攻撃砲台ドラグ・ファング』で迫る敵を一掃する。パワーを半分消耗するが再びスケレトウスでザクウォーリアを撃破してゆく。二機の悪魔はザフトMSを撃破していき、基地勢力を壊滅させた。

「ゴク、ゴク………旅行に ？」

「うん。マルスはこの頃働いてばかりだし、たまには休みも必要だ」

トレミーに帰還して、パイロットスーツを脱ぎながらツバサはマルスに休息という名目で旅行に行こうと提案した。マルスはパックに入った

栄養ドリンクを全て飲み、ツバサに再度聞くことにした。

「なんでいきなり？」

「最近クリスやアインハルトから相談されたんだよ。エクシエスが完全な形を取り戻した以降から、いつもマルスが疲れたような表情してるってさ」

「そ、そうかな」

「僕達だって人間なんだ。疲れることもあるさ。たまには休息で体や精神を休めるのも大事だからね。マルスはもう少し自分を大切にするんだ」

バルバトスを操る反面、医師としての意見を述べたツバサはマルスにそう言った。マルス自身もここ最近エクシエスに搭乗する度に脳裏に自分に似た同年代の少年が姿が過るのだ。同時に幻聴も聞こえることがたまにある。マルスは指摘の通り、自分は疲れているのかと考える。

「今度の日曜日はどう？ちなみに僕とネプテューヌも一緒に行くよ」

「……でも、大丈夫なのかな　　？トレミーを空けて……」

「それは心配いらぬ。なのはさんや一夏、リンネだっているしある程度戦力は備わってる。マルスは気にしなくていいからさ。」

ささ、スーツを脱ぎ終わったら支度の準備してきなよ」

「うん……」

「あ、ちなみに旅行にはソーナさんやセラさん、千冬さんも同伴で来るから」

「ええ!？」

ツバサはそれだけを告げるとマルスを部屋から出して旅行の準備に行かせた。

## P H A S E 91 「悲劇の悪魔Ⅱ」

ツバサ達が淡々と旅行の準備を始めている頃、ミネルバ隊に

新たな人員が組み込まれたのだが、箒にはある意味厄介なファンが付いた。少女の名は『ロランツイーネ・ローランディフィルネイ』。

専用機用に改造されたザクウォーリアーと共にやって来た彼女だが

エース級の腕ではあるのだが、同性にしか興味を示さず99人の恋人……

全て女子と付き合っている。連日の報道で箒の活躍を見て、彼女に

恋心を抱いていた。そして、タイミングよくザフトからスカウトされ

戦果を幾つも上げて、このミネルバ隊に着任となった。

「だからロラン、気持ち嬉しいのだが……その……」

「もう我慢ならないよ箒。私は我慢してきた。毎日のようにテレビや雑誌で君のを見てきて、私は遂に気付いたんだ。

僕は君の虜なんだ……この日をどれだけ待ちわびたか……」

「だ、大丈夫か？なんか息が荒いが……」

昔の箒なら簡単に退かすことは出来たが、箒自身も女子と付き合っている身分簡単に退かすことなど出来ない。それに

嬉しかったのだ。自分を慕ってくれていることに。初日に

いきなり告白され、アリシアが機嫌を悪くしたのはまた別の話。

「箒……もう離さない『何してるのッ』!!『ちっ!』」

「あ、アリシア？」

部屋に突入して来たのはアリシアだった。舌打ちするロランはそっと箒を背後に行かせて、アリシアの前に立つ。

「ロランツイーネさん？……生憎だけど、箒は私の物なの。

勝手に口説くのやめてもらえないかな？……ねえ」

「おやおや。箒は確か君と付き合っているんだったね？」

でも世の中には略奪、NTR（寝取られ）も存在する。私が本気を出せば、箒もメロメロになるさ……」

「くっ！お母……議長に期待されてるからって……！」

ロラン、アリシアの二人の間で火花が散る。どちらが箒に相応しいか……負けられないのだ。

「ま、まあまあ二人共。それより明日、私とロラン、アリシアの

三人でラスベガスに行かないか？知り合いからチケットを貰ってな」

「ラスベガスか！いいじゃないか！100万ドルの夜景をバックに

ドレスを着た箒……ああ、想像したら涎が止まらない」

「この人と一緒に食わないけど……まあいいや。

いいよ！それよりそのチケットはなんなの？」

「ああ。これは……」

箒は二人に色々と説明した。一方でひっそりとこの世界に帰還した

翔真はブラジルにいた。翼やフェイト、夜架の三人と屋台を開いていた。

早くトレミーへ帰還すればいいのと思うが……

〔夜架の事……なんて説明したら……なのは達が怖い〕

〔翔真様、焼きそば2人前追加ですわ〕

〔お好み焼き、5人前追加〕

〔翔真、ビールとジュースを頼む〕

〔了解だッ！〕

ウエイトレスの夜架達に言われ、翔真はペースを早めた。

〔あれ？……もしかして翔真君　!?!〕

〔へいまい……ぐ、グリ姉　!?!〕

やって来た一人の少女。その少女に翔真は見覚えがあった。

## PHASE 92 「悲劇の悪魔Ⅲ」

機体を隠して、ラスベガスへとやって来たツバサ達。やはり夜になると

街の灯りはガラガラと輝いていた。ツバサとネプテューヌはスーツとドレスに身を包んでおり、他のメンバーはマルス、アインハルト、ノーヴェ、クリス。

付き添いに千冬、ソーナ、セラフォルがいる。マルスもスーツに身を包んで、ノーヴェ達も自分達に合ったドレスを着ている。

「ねえねえツバサ！ 私あそこに行きたーい！」

「えええ…いきなりギャンブルかい？」

「だって楽しそうだし、せっかくラスベガスに来たんなら

メインを楽しまないとね！ちっふー達もそう思うよね？」

「まあ…そうだな。本来ならこんなこと言うべきではないが

たまには戦いを忘れて、遊びを楽しむのも悪くない」

「僕は…行ってみたいです。前に翔真さんから聞いたことがあって

ラスベガスの醍醐味……でしょうか？　カジノとかに少し興味もありますし」

「だ、ダメですよマルス!? そんな年齢からギャンブルを覚えたら

ロクなことになりませんよ。マルスは若いんですから、こういう事は……」

「別にいいじゃねーか。アニキが興味あるなら、やらせれば……」

ギャンブル反対派のソーナに対してクリスはマルスが興味があるなら……と言ったものの、直後に冷たい眼差しが突き刺さったのは言う間でもない。

セラフォルとツバサの説得により、ソーナは今回だけという条件のもと許可した。アインハルトはデバイスにより大人モードへ変わり、マルス達と施設の中へ。ネプテューヌもまた女神化して、パープルハートへと変わる。

「ねえツバサ……マルスは大丈夫……なのよね　？」

「それは分からない。何時記憶が甦るか分からないし、願わくば

マルス・レディーレのままでもいいと思う……やっぱり話すべきか」

「でも、それを話してノーヴェ達が納得するの？」

「それはごもつとも」

ツバサは時空管理局のデータベースにハッキングしてマルスの過去を

調べた。だがそこには悲惨な詳細が載っていた。更に管理局のデータには行方不明者リストに載っており、名前も違っていた。

「(マルスという名前は恐らく偽名なのか……けど、

そう思える確信がない。まあ今は忘れよう)」

場所は変わりカジノ施設。可愛い私服に身を包んだ箒はロランとアリシアとダーツを楽しんでいた。ロランはダーツで荒稼ぎしていた。

「すごいなロランは」

「どうだい箒？惚れてしまうだろ」

「あのね！箒は私が好きなの！いい加減に諦めなよ」

「君もうるさいね。私は箒に対して喋っているのだが？」

「ま、まあまあ……二人共少し落ち着いてくれ」

今にも喧嘩しそうな二人を宥める箒。

「(？……あれは……)」

視線を外すと、見覚えのある顔があった。それは前にホアシンとして出会ったマルスの顔。更には、自らが倒す寸前だった千冬がいることに驚く。

「(ち……千冬さん……くっ　　！)」

『全員動くんじゃねエエエエ』』

箒が手を伸ばそうとした時、武装した複数の男達が施設へと入って来た。

## PHASE 93 「悲劇の悪魔 IV」

迂闊だったとツバサは後悔していた。武装したテログループによりカジノ施設が占拠された。ツバサやマルス達、箒達もこの騒ぎに巻き込まれ人質となっていた。覆面を付けた複数の男達はスナイパーライフルや拳銃を人質達に向けている——更に外にはMSが配備されている。

「全く……こんな事する奴等……生かしておくわけにはッ……！」

「熱くなるのは勝手だけど、私達がいることも忘れないでね？」

「見えた……！翔真、グリフィンさん、夜架、翼……敵が来る」

「あの機体は……！何故ザフトのMSが！」

「やはりザフトが関連していますわね翔真様」

「そうらしいな」

テログループの一件をいち早く察知した翔真は再会したグリフィンと

愛しい彼女達であるフェイト、翼、夜架達を連れてラスベガスに来ていた。

翔真達が駆る『GNX-604T アドヴァンスドジnkクス』は前方から迫る

グフの攻撃を紙一重で交わす。場所は戻り、カジノ施設。一方のツバサはネプテューヌ共々拘束されていた。マルスやソーナ達も身動きが取れない。

「(こいつら何が目的なんだ……？ 金銭を奪うわけでもない……)」

「(さっきから人を探しているみたいね)」

ツバサは耳元でネプテューヌと話していた。バレないように静かに口を開く。  
「たく！ こんな紙ひとときれでどうしろって言うんだ!？」

「アレスとかいう小僧は何処にいやがんだ？」

「(アレス……!?!まさか……!)」

テロリストの一人が口にしたアレスという名前に動揺を隠せないツバサはマルスに視線を移す。マルスは怖がるアインハルトに寄り添っていた。

傍らには様子を伺う箒達の姿……そんな時、ソーナとセラフォールが突然立ち上がった。彼女達の眼差しはテロリスト達に向けられる。

「ちっ！ 立つんじゃねー！」

「殺されたいのか？」

「その器用な日本語から察するに、私達と同じ日本人ですね？」

今すぐこんなバカげたことはやめなさいッ！今ならまだ間に合います」

「こんな事したって何もならないでしょ!？」

「うっせー女共だ……だが……」

主犯格の男がソーナやセラフォルーの体を、まるで舐めまわすような

視線で見る。そして何か面白いことを考えたのか、リーダー格の男は笑う。

「お嬢ちゃん達いい体してんねえ？……せっかくだし、

お嬢ちゃん達の体を隅々まで堪能しようかね？……オイ」

「「はい」」

「ちよ!?は、離しなさい！ソーナたんは関係ない！」

「くっ！」

「ッ！やめろ……やめろ　　！」

「ひっこんでろガキがッ！」

「がッ!」

「ま、マルスさんッ！」

二人を助けようとしたマルス……しかしテロリストの一人に蹴飛ばされる。

彼の元に駆け寄るアインハルトは、ツインテールの髪を揺らしマルスを庇う。

「嫌……！嫌アア！」

「マルス……！」

「（……ソーナさんが……セラフォルーさんが……助けなきや）」

みぞおちにずきずきした痛みが走るが、それでも立ち上がるマルス。だがそれに気付いたリーダー各の男は拳銃をマルスに向けた。

「動くんじゃねーぞ！さもなくば、そこにいるガキを……！」

「彼女達は関係ないッ！ソーナさんを……セラフォルーさんを離せ……！」

床に落ちていたサバイバルナイフを手に取り、マルスはテロリスト達に

突っ込む。腕や足を斬り、血を浴びながらもソーナとセラフォルーを助ける。だが、その行動が仇となり、リーダー各の男は拳銃をアインハルトに向けた。

「くそ野郎かッ！まずはガキからだ！」

「っ！アインハルト！」

アインハルトの元へ向かおうとした時、脳裏にある出来事か過る。



## PHASE 94 「蘇る悪魔の騎士」

あの日から僕は『俺』になった。楽しかったあの日常が嘘のように碎かれた。数発の弾丸がじいちゃん、母さん、妹のハーティ、姉のノインの身体を貫く。目の前で起きた光景が……嘘で欲しいと願った。だが現実は……残酷で、あまりにも酷かった。《アイツ》らの判断が間違っていなければ、家族が死ぬことはなかった……さあ、変われ……マルス・レディーレ……

お前は

もう死んだ。俺は全てを取り戻した……目的を思い出した……そう……

俺は《アレス・ルセデイス》なのだから……奴等に復讐を果たす為なら……

例え、命に変えても——やり遂げないとならないんだ。

——  
数年前。

新歴75年。クラナガン南部に位置する次世代エネルギー開発研究所で事件は起きた。いつものように研究所に訪れていたアレスだったが、突如として

顔を覆面で隠し、武装した男達が研究所をジャック。

『俺たちをテロリスト？そのような要求に屈しないだと？ふざけやがって！』  
『くそッ！俺たちの要求を飲まないとは！何を考えてやがる』

要求に応じなかった苛立ちから椅子を蹴り飛ばす男。この武装集団はかつて綾崎翔真・Gspirits隊たちとの戦いにより敗れ、今は残党の集まりではない

地球蒼生軍だ。彼等は様々な悪行を繰り返しており、Gspirits隊や管理局が

行方を追っていた。この研究所を制圧し、職員100人余りを人質に取っていた。制圧してから数時間が経過。既に半日は経過していた……研究所の外には管理局

地上本部提督『大東貫一』やニック、和馬達Gspirits隊の姿があった。

武装集団のリーダー格の男は人質解放の条件として、捕らえられ、投獄された地球蒼生軍の上層部のメンバーやその他者達の解放を要求する。本来ならば、このようなジャックなど容易く、すぐに解決するだろうと思われた……

しかしこの研究所は鉄壁の守りに加えて、独立したセキュリティが完備されまさしく要塞と化していた。G S p i r i t S 隊はどう突入するか、考えていた。

そんな中で武装集団から人質解放条件が出され、逃走経路や大東貫一の即時地上本部提督退陣の追加条件も出された。もしこの条件を飲まなければ人質を一人づつ射殺するという通告もあった。そして内部のL I V E 映像が映し出される。

『どうするんだ提督!? ……なに!? 何故提督ではない

貴方が指揮を取るんだ! 副指揮官』

『提督は少しお疲れなのだよ。だからわたしが変わったのだよ。もう少しで

セキュリティローックが解除される。彼等の条件を簡単に飲めば……  
最悪の事態は免れない』

何故大東ではなく、副指揮官が現場の指揮を取っているのか、ニックは謎だった。せっかく手に入れた平和を碎かれる訳にはいかない。場に沈黙が流れる中、セキュリティローックが解除。待機していた魔導師達と兵士達は突入の準備に掛かり、副指揮官は武装集団に『テロリストのいかなる要求にも屈しない』その言葉を告げた。だが……悲劇は起こってしまった。武装集団は報道機関に

研究所内部のLIVE映像を配信。要求を飲まなかったとして五人の人質が前に差し出され、男は銃を構えて発泡。

老人——三十代前半の女性——十四歳の少女——九歳の少女が次々と撃たれた。  
少年……アレスにも銃口が向けられる。殺されたのはアレスの家族だった。

血だまりが出来る中で、アレスは目の前の光景を受け入れられなかった。

『恨むなら奴等を恨めよ小僧。心配するな……寂しくないように

こいつらの後を追わせてやる。あばよ』

『動くなッ!』

『なに!?……くっそオオオオオ』

あと一步のところでニック達が突入した。武装集団は捕まり連行され、殺された人質の身柄も回収された。だが……アレスは心に大きな傷を負った。

『(どうして……じいちゃんや母さんや……ノイン姉やハーティが……

死ななきゃいけなかった!?……アイツ等の突入が早かったら……

・  
』

そこから全てを思い出した。エクシエスという剣を手に入れたことと  
義妹クリスとの出会いやあの世界で戦った記憶……アレスは思い出した。

「……貴様等雑魚を相手にしてる暇はない」



## PHASE 95 「交差する者達 I」

翔真は前面のモニターに映し出されたエクシエスに警戒を強める。

機体から溢れ出す殺意に身が凍る程に、体が震える。しかしこちらにも譲れない事情がある。翔真はエクシエスによって大破したアドヴァンスドジンクスから、シャルロットによって届けられた深紅の正義……………

『ZGMFX09A ジャスティスガンダム』に乗り換えている。

「マルス……正気なのか　？」

『俺はマルスじゃないッ！マルスは死んだ……今ここにいるのはアレスである俺だ。貴様も邪魔をするなら倒すッ！』

「翔真ッ！」

「シャル、しっかり掴まってろよ」

シャルロットを膝の上へと乗せて、翔真は機体を加速させる。かつては封印されたジャスティスは、再び荒れ狂う空を駆け巡る。そしてアレスは

エクシエスをジャステイスへ向かわせる。

「『はああああアアア!!』」

交差する叫び。同時にジャステイスとエクシエスが交差する。

時に人は己の考えを優先させようとする。時に人はどんな状況下でも

非情になり悪魔となる。アレスの心の傷となった立て籠り事件には

もう1つ隠された真実があった。立て籠り事件発生直後に、現場の指揮を任されていた大東貫一。彼はテロリスト達の要求を聞き、策を講じていた。

しかしその時であった……大東は現場の副指揮官により身を拘束される。

「なにをする!?!」

「いやいや。司令がお疲れだと思ひましてね。ですから

我々が用意したこの部屋で身を休めてください」

「その割には……真っ暗で、拘束椅子があるんだね　？」

「おい」

「ハッ!」

以前から大東の活躍に嫉妬していた副指揮官は部下の二人に大東を拘束、及びに所持品を全て取り上げさせた。何も出来ないまま大東は拘束され真っ暗な空間に閉じ込められた。

「(全く……わたしとしたことが。作戦を話すべきだったかな　)」

テロリスト達の要求……それを承諾することは出来ない。そこで大東が考えていたのは要求を敢えて飲み振りをして、逃走経路までやって来るテロリスト達を *G s p i r i t* 隊の総力をもって叩き上げるという策を考え、まず先に自分が偽装退陣するという行動を起こそうとした。しかし作戦を話さなかった誤算により、今に至る。

「司令ばかりにいい顔させてたまるものか」

時間は徐々に迫り来ていた。条件を飲まなければ人質達が殺される……誰もが不安を抱く中、副指揮官は信じられないことを口にした。

「我々はテロリストのいかなる要求にも屈しない！これは

大東司令のお言葉だ！テロリスト共、貴様らに自由の選択などない」

この発言に誰もが唾然とする。

「（あとのことは司令に擦り付ければいい。ミッドチルダの平和の為、蒼き清浄なる世界の為に……人質達には平和の糧となってもらおう）」

『正気なのか!?!』

突如として通信が繋がる。声の主はニックだった。ニックは当時突入部隊で

大東の指示を待っていた。しかし副指揮官の発言にニックもまた動揺する。

『大東司令は何処にいる!? 何故貴方が指揮を!』

「司令はお疲れなのだよ。だからわたしが指揮を取っている」

『ッ!……さっきの発言、大東司令なら絶対に言わないぞ。』

そんな事言って、人質が殺されたらどうするつもりなんだ!？」

「そこは君達の頑張り次第だよ。例えば人質が殺されても、責任は

君達にあると思うがね。時間に猶予があつたはずなのに人質を

見殺しにした G s p i r i t 隊：：と言われるかもしれんぞ ？」

『だったら今すぐに突入許可をください!』

「それはダメだ。奴等が人質を殺す瞬間がチャンスなんだ。

許可は出来ない。そのまま待機している」

ニックは渋々了解と返答。大東の安否を心配するも、事件は悲惨な形で

終わってしまった。作戦終了後、ニック達は副指揮官を拘束した。

もちろん悲惨な形で終わったという後悔に、大東は何も出来ないまま

己の無力さを感じた。

もしあの時……現場の指揮を大東が取っていれば……  
アレスが家族を失うことはなかった。

今回はサイドストーリーに合わせています。それにあわせて前話を修正。

戦闘回は次回です！引き伸ばしてすみません！変わりにこの写真で許して！  
「翔真がいけないんだよ。素直にならないから」



## PHASE 96 「交差する者達 II」

ラスベガスでの戦闘は続く。翔真達の駆るアドヴァンスドジンクスは

上手く連携を取りながら敵機を翻弄してゆく。翔真は精神を研ぎ澄ませ戦いに集中する。翔真のアドヴァンスドジンクスはGNランスで機体を貫く。

「コイツら、しつこいッ！」

翻弄される中で、新たな敵機出現を知らせるアラート音がコクピット内に響き渡る。コンソールパネルに手を伸ばし索敵を開始する。見つけたと同時に翔真は驚愕する。何故ならそこには……エクシエスがいたから。

「マルス……？」

通信を繋げようと瞬間——エクシエスが襲い掛かる。

「なに!? まあ、マルスから見れば敵機に見えるか……」

音声通話を繋げ、翔真はマルスに話し掛ける。

「俺だマルス！ 翔真だ……綾崎翔真だ……！」

『……だからなんだ』

「……ッ　　!？」

普段とは違い、ドスの効いた声でそう返すマルスに翔真は驚愕する。

そしてエクシエスはビームソードスケルトゥスでジンクスの武装と

レフトアームを破壊。容赦ない攻撃がジンクスに与えられる。

「マルス分らないのか!?俺だ!」

『綾崎翔真……知ってるさ。だが……』

エクシエスは旋回してジンクスの背後を取る。だがその戦闘を見ていた

夜架が敵機を蹴散らし、翔真の援護に入る。しかしエクシエスは攻撃を交わし

二機のアドヴァンスドジンクスを翻弄させる。対する翔真はランスが破壊され

ビームサーベルで対応するが、隙を突かれメインカメラを撃破される。

『お前も許さない。俺は奪われたんだ……全てを。あの日から誓ったんだ』

「な、なにを……マルス」

『俺はマルスじゃない。俺はアレス。マルス・レディーレはいない。』

これが本当の俺さ……はああアア

『三』

「(アレス…… ? それにエクシエスが変わっている?)」

《翔真様ッ！ 攻撃が来ますわ！》

夜架の声で我に返り、エクシエスの攻撃をギリギリ回避する。夜架は

主である翔真をやらせまいとビームライフルを放つ。エクシエスは高機動な

素早い動きで砲撃を回避してゆく。

「……」

「……」

「貴様も、俺と同類か？」

「なんのことでしょうか？」

「俺には分かるさ」

「……」

エクシエスは量子通信浮遊砲台 ドラグ・ファングを飛ばす。夜架が操る

アドヴァンスドジnkスはファングを交わしながら砲撃を繰り返す。

翔真は一度、地上に降りようとした。その時、3機のG兵器が前方に出現。

反撃が出来ない翔真は一瞬冷や汗を掻く。

「(どうする……？ 奴等が敵なのは分かる。このまま逃げれば的になるし

かといって戦える状態じゃない……やれやれ……バチかな

」

『イノベイター』の能力で、前方の3機のG兵器を操るパイロット達が

味方ではない事は把握出来ている。敵意を感じる翔真は次の一手を慎重に

考え、思考を巡らせる。だが、そのG兵器の内の1機から通信が入る。

「(国際救難チャンネルでの通信だと?)」

『そちらのジnkクス。動くな……貴方に問うことがあるわ』

「なんだ?」

『ソレスタルビーイング所属の……綾崎翔真ね?』

「だとしたら?」

『そう、どうやら正解のようね。調、切歌行くわよ』

『うん』

『アレス隊長を、返してもらおうデース!』

「マジかよッ!」

3機のG兵器……ガンダムが襲い掛かる。だが次の瞬間、一筋の緑の

光りが3機とアドヴァンスドジnkスの間を遮る。

《翔真には、指一本触れさせないよ》

「ジャステイス……それにその声……シャル　？」

ジnkスを守るように現れたのは、真紅の正義……ジャステイスガンダム。  
それを操るのは、翔真も知る人物……シャルロット・デュノアだった。

## PHASE 97 「交差する者達 III」

取り敢えず、今年最後の更新です。少しお早いですがよいお年を！

---

背後から鳴り響いた銃声と衝撃でアインハルトは固く目を瞑った。

しかし痛みは感じない。代わりに生暖かいナニカが彼女の頬に落ちる。

アインハルトはそっと目を開けた……

「マルス……さん……？」

「……」

視界に入ったのは自分を守るように立つマルス。血にまみれた手を見てアインハルトは顔に頬に頬に落ちたナニカが血だという事を悟った。慌てて傷口を止めようとしたが、アインハルトは固まる。

「これは……」

「まさか……アインハルトッ !!」

ツバサはまずいという表情を浮かべた。しかしアインハルトは目の当たりにしてしまった。色取りどりの配線から生まれる火花と血に染まる金属的なフレームが顔をのぞかせている。顔を俯かせるマルスの赤いメッシュを除き、艶のある黒髪が白へと染まる。同時にアインハルトの脳裏にイメージが過る。  
 ……うぐ……ッ  
 !……

血塗れになった老人、女性、そして自分と年は変わらないであろう女の子と小さい女の子を前に泣きじゃくる小さな男の子の姿……アインハルトはその男の子がマルスだと分かった。

「……消えろ」

「…… !?」

冷酷な口調でそう告げたマルス。次の瞬間テロリスト達の懐に飛び込んで

一瞬の内に仕留めてゆく。血の雨を降らしながら、蹂躪してゆくその姿に人質達の多くは悲鳴を上げる。

「ダメッ！マルス……ダメッ　！」

ソーナの悲しい声がマルスを引き留めようとする。だが今のマルスにそんな余裕はない。タイミングを見計らい、箒達はすぐさまザフトの暗躍部隊に助けられ

会場から姿を消していた。ツバサは縄をほどこうとするが、なかなか上手くない。ない。

「(来いエクシエス……　！俺はここに……ここに……ここに……)」  
場所は変わりトレミー。誰も搭乗していないはずのエクシエスが勝手に動き始める。

束やシャル、ティアナが何事なのかと、急いでMSハンガーへやって来た。

「シャルちゃん！急いでハッチ開けてッ！じゃないと……」

束がそう言い掛けた時、エクシエスの周りに魔法陣が出現した。魔法陣はエクシエスを呑み込み姿を消した。束はただならぬ雰囲気を感じた。同時に

ある存在を確認した。

「シー君？……まさか　　！」

「どうしたの束さん？」

「シャルちゃん、今すぐラスベガスまで行ってくれる？」

「え……？」

「シー君がいる。シー君が帰って来たの！」

「ッ！」

「ジャステイスを……シー君に届けて。ティアナちゃん、ハッチを開けて」

「はいッ！」

束はハンガーに納められた紅い機体……ジャステイスを見てそう言った。

シャルロットはすぐに行動を開始した。パイロットスーツに着替える。

ジャステイスに乗り込み機体を稼働させる。

「(そう言えば久しぶりだねジャステイス。また、力を貸してね)」

語り掛けるようにシャルロットはそう心の中で呟いた。ジャステイスは

応えるようにデュエルアイを光らせた。そしてカタパルトデッキへと移動し

ジャスティスガンダムは発進準備になる。

《システムオーラグリーン、ジャスティス発進どうぞ！》

「ジャスティス、シャルロット・デュノア発進するよ！」

トレミーから出撃するジャスティス。ジャスティスは再びIS世界を舞う。

一方でテロリスト達を仕留めたマルスの元に、天井を突き破りエクシエスが姿を現した。ツバサは機体が来る前に縄をほどき人質を解放して、外に出ていた。

「ツバサッ！」

「マルス……まさか君は。くそっ　　！」

「マルス……さん……」

「一体どうしちゃったんだよ……マルス」

「(まさか兄貴……記憶が戻ったのか　　!?)」

ツバサとクリスはすぐさま自分達の機体へと走る。人込みを掻き分けながら

ツバサはバルバトスに急ぐ。ふと上空を見上げる……すると、真紅の機体が

ジェガンを相手に戦っていた。真紅の機体は次々と迫り来るMSを撃墜してゆく。

「なんだあのガンダムは……」

別の空域。3機のグフイグナイテッドを連れて、レジェンドはラスベガスに到着する。レジェンドを操る湊はコンソールを操作して、状況を確認する。

「(どうやら目的は達成したようですね。ならば)」

レジェンドはそのまま戦闘区域に移動を開始する。プレシアの指示通りに計画は進んでいた。だが、湊はある者の存在に気付いた。

「(このプレッシャーは……綾崎翔真……)」

計画は順調だ。だが、ここで邪魔される訳にはいかない。気配を辿りながら湊はレジェンドと共に向かう。



## PHASE 98 「交差する者達Ⅳ」

翔真はジャステイスへと乗移り、コクピットへと座りシステムを確認する。シャルロットを抱き締めて、モニターに映るエクシエスに視線をやる。更にマルスの攻撃で、夜架のアドヴァンスドジnkスは地上へと落下していた。だが夜架が無事であることを感じた翔真はフェイトに彼女の回収を頼む。

「翔真！……翔真……」

「シャル。さて、再会の喜びは後にしないとな」

「一体どうなってるの？ どうしてマルス君が……」

「アイツは……マルスじゃない」

そう言い切った翔真。ジャステイスはラケルタビームサーベルを連結する。そして薙刀のように振り回し、エクシエスに一閃。アレスは一瞬で交わしエクシエスの武装である量子通信浮遊攻撃砲台ドラグ・ファンクを使用する。

だが、翔真は敢えてエクシエスに近付き至近距離でファトゥム00を飛ばした。

「ぐっ……！」

「(コクピットは避けないと……！)」

ドラグ・ファンングを交わし、そしてシールドを盾に猛攻を交わす。読めない攻撃にアレスは追い詰められる。翔真はコクピット以外のパーツを狙おうと破壊を試みる……だが、新たな機影が現れる。

「ッ！また敵か！」

「アレス・ルセデイスは渡しませんよ……綾崎翔真」

「レジエンド……くそ、過去を思い出すような機体だな　！」

湊の駆るレジエンドがジャステイスに近く。レジエンドはビームジャベリンを抜き

襲い掛かる。連結したラケルタビームサーベルを離し、二刀流で応戦する翔真はイノベイターの力を解放する。

「シャル……しっかり掴まっているよ　！」

「うん！」

「アレス・ルセデイス、今の内に退却してください。貴方を待っている人がいます」  
 翔真操るジャスティスと戦う湊は、アレスに通信を繋げ、指定されたポイントへ  
 アレスへ送る。レジェンドはエクシエスを守りながら戦う。

「感謝する……マリア、調、切歌聞こえるな　？」

『『隊長！』』

「これより指定されたポイントへ向かう。付いてこい……ん　？」  
 エクシエスに近づく機影……それはツバサの操るガンダムバルバトスルプ  
 ス。

アレスはそれを気にせず、エクシエスを動かそうとした……その時だった。

『アニキ！』

「……ッ　!？」

通信越しに聞こえるクリスの声。バルバトスルプスからの音声通信……クリ  
 スは

ツバサと一緒に搭乗しているのだ。クリスはアレスを呼び止める。

『アニキ……置いていかなくてくれ……私や……御門達は

どうすればいいんだよ…… !アニキ……』

『マルス……いや、アレス・ルセデイス……君はどうする気なんだ。』

復讐の為に、自滅の道を歩むのか?』

「なにを……言っている…… !」

『君のことについては調べている。これだけは言っておくよアレス。』

憎しみは憎しみを呼ぶぞ……それを分かっているか ?』

「……ッ !」

ツバサの言う事に、アレスは初めて動揺を見せた。しかし、今更止まるわけには  
 いかないのだ。エクシエスはバルバトスルプスから離れてゆく。クリスは消えて  
 ゆく

エクシエスを、ただ見ることしか出来なかった。湊と真紅の機体をアレックスは  
 互いに任務を達成し、戦闘区域から離脱する。ラスベガスでの戦闘は急遽として  
 終わりを告げた。



「やれやれ、この世界もなかなか面白いことになってるな」

「ヰシヨウマさんヰ、呑気なこと言ってる場合じゃないよ！私達も

ミナトさんに合流しないと！」

「まあまあ。しばしの休息は大切だぜ『リーズ』」

とある喫茶店。リーズと呼ばれた少女は頬を膨らませ『シヨウマ』に視線を向ける……黒い服装に身を包んだ青年は翔真に似ていた……いや似ているのではない。

「(並行世界の俺と戦うことになるか……面白そうじゃないか )」

なにを隠そう、この青年は並行世界からやって来た綾崎翔真なのだ。そうプレシアが用意した最大の切り札は自分自身なのだ。

おまけ。  
撃っちゃうんだな、  
これが!!

---





## 第七章 3機のZ/世界を変えたシステム

### PHASE・99 「切り札」

3話程度ザフト側のお話。

---

の  
ラスベガスの事件後……アレスと彼の部下であり、D i V Aとしてアイドル  
活動をしていたマリア・切歌・調は湊の案内によりプレシアが待つミネルバへと  
やって来た。アレス達がブリッジへ入る……そこにはプレシアと黒いフード  
に

身を包んだ二人がいた。

「なんだ……あいつらは……もう 1人の奴の気配……いや、

そんなはずない。綾崎翔真なわけがない……」

「久しぶりね？アレス」

「P・T……」

「随分探したわ。さあ、皆揃っているわね？」

ミネルバのブリッジには箒・ロラン・アリシアがいた。後から楯無も合流し艦に所属するガンダムチームが揃う。そしてアレスが率いるガンダムチームも揃っている。プレシアは微笑みながらアレス達の方へと振り返る。

「アレス・ルセディス……単刀直入で悪いのだけれど、私達の元へ、ザフトへ来てくれないかしら？」

「……!?!」

プレシアの発言に驚く筈達。マリア達も突然のことで嘖然とする……しかしアレスは周りとは違い冷静だった。更にプレシアは話を続ける。

「貴方が進めている計画は知っているわ。ザフト側に来てくれれば貴方の計画を全面的に支援することが出来る。機体の整備や、貴方の部下の保証も私が責任を持つわ。悪い話ではないでしょ？」

「……なるほど。だが……『少し宜しいですか？』」

アレスの言葉を遮ったのは箒だった。さすがにプレシアの発言に不安を感じたのか、手を挙げてプレシアの方へと視線を向ける。

「あら、どうしたの箒？」

「アレス・ルセデイス……彼は、ソレスタルビーイングにいたはずですよ。」

敵であるはずのルセデイスをザフトに置くのですか？」

箒の言うとおり、アレスはソレスタルビーイングにいた。しかしそれは

《マルス・レディーレ》だった時の話だ。プレシアは微笑みを崩さずにアレスについて話を始める。

「彼にはソレスタルビーイングに潜入を依頼していたのよ。元々

この子は私が元々ザフトにスカウトしていたの」

そうは言うがプレシアの言葉は全くの嘘である。ソレスタルビーイングに

身を置いていたアレスを箒達が受け入れないという事態を想定して敢えてこう発言した。だが、1人だけ納得いかないかと手を挙げる者がいた。

「ちよい待ってもらおうか。そんな理由で、いいのかね議長」

「貴方は黙っていろと言ったはずよ……バジーナ」

「さすがに聞き捨てならんでしょ」

フードを被った1人の青年が素顔を露にした。次の瞬間……箒や楯無・マリア達

アレスは動揺する。何故ならその青年の素顔は『綾崎翔真』だったのだ。だが彼は翔真であって、翔真じゃない……。

「驚かせてすまない。わたしはショウマ・バジーナだ。階級は大尉だ。

乗機は≡シナンジュ・スタイン≡。好きな食べ物ピザだ」

「こうなったら私も紹介しときますか。初めまして皆さん。私はバジーナ大尉の補佐を務めている、≡リイズ・ホーエンシュタイン≡です。階級は少尉です。でも気軽にリイズとか気さくに呼んでくれても構いません。乗機はギャプランです！

周りの空気を気にせず、ショウマとリーズは自己紹介を終えた。

## PHASE-100「シナンジュ・スタイン1」

プレシアから紹介された二人……その内の一人は箒・湊・刀奈・アレスにとつて

因縁がある相手、綾崎翔真……またの名をショウマ・バジーナ。ショウマはリイズと共にこのミネルバに特別枠として所属することとなった。プレシアが去り、ブリッジは異様な空気に覆われていた。

「何故お前がここに……ッ　　！」

最初に口を開いたのは箒だった。かつてこの世界を救った英雄の一人……しかし

今では私設武装組織ソレスタルビーイングのリーダーであり要注意人物に認定され

ザフトでは警戒されている。箒は複雑な表情でシヨウマに向かう。

「篠ノ之 箒さん……貴方は誰かと勘違いしていませんか？」

「なに……」

「わたしはシヨウマ・バジーナです。それ以上でも、それ以下でもありません」

そうは言うものの、シヨウマの顔は翔真に似ているのだ。声も容姿も何もかも同じ。

箒などは翔真だと信じている様子だが、アレスや彼の部下であるマリア・調・切

歌は

シヨウマ・バジーナが、綾崎翔真でないことを確信していた。

「シヨウマ・バジーナ……」

「シヨウマさんに質問するなら、代わりに私がお答えしますよ」

アレスの前に、シヨウマの部下であるリイズ・ホーエンシュタインが割って入る。

「貴様等は何が目的でミネルバに来た？」

「その言い方から察するに我々を信じていないようですね」

「リーズ仕方ないさ。俺達は本来存在しないのだから、アレス君や

箒さん達が戸惑うのも無理はない。アレス君、君の質問に答えよう。

わたしはリーズと共に傭兵業を営んでいてね。我々の実力を買ってくれた

プレシア議長がソレスタルビーイングに対抗する為にわたし達を雇ったのさ」

「本来私達はザフトに属していませんが、議長の計らいでザフトに籍を置いて階級まで頂きました。もちろん、議長の為に働くつもりですのでご安心を」

「……」

ショウマ・リーズの言葉に異論を唱えようとした時、敵の接近を知らせるアラートが

艦内に響く。オペレーターの一人が声を上げる。

「連合軍の残党がこのヘヴンズベースに接近中です！」

「……丁度いい。君達に信用してもらおう為にも、わたしが直々に出よう」

「私とショウマさんのステージだね！」

「そうだな。アレス君、箒さん達、ここは我々に任せてくれ」

ショウマはリーズを連れて格納庫へと向かう。途中でパイロットスーツを着用し二人はそれぞれの専用機へ搭乗する。ショウマはMSN・06・2 シナンジュ・スタイン。

リーズはORX・005ギャプランリーズカスタムに搭乗する。

「やはり簡単には我々を信じないか。まあ、信用を得る為には役者を演じる必要がある。プレシアのオバサンにも気に入られないとな」

《ショウマさん、先にどうぞ！》

「あいよ。ショウマ・バジーナ、シナンジュ・スタイン出るぞ」

へヴンズベースに設けられた格納庫からシナンジュ・スタインが飛び立つ。

続いて、リーズのギャプランがMA形態で出撃。スタインはバズーカ砲を装備、

そのままハイ・ビーム・ライフルを構えて発砲。連合軍の残党軍が駆るMS

ウインダムを撃破する。バズーカ砲を連射して機体を次々撃墜させ、更に

コクピット目掛けて、ビームサーベルを展開して、投げ放つ。

「さあ、始めようか……」

「私達のステージを」

ライズはギャプランをMS形態に変形させ、スタインに続く。

## PHASE 101 「シナンジュ・スタイン 2」

こっちだって仕事やら色々あるのに……こっちの気持ちも考えてほしい。

「数ばかりごちゃごちゃと！」

アレス達が見ている手前、不審に動くことは出来ない。シヨウマのシナンジュ・スタインはハイ・ビーム・ライフルを構えて発泡。迫るウィンダムを簡単に撃墜してゆく。そしてビームサーベルを左に構えて振り上げる。真つ二つに切断されたウィンダム……内部から電流が放出されそのまま爆散。

「ええい！まだ来るか！」

《我々は認めぬ！地球連合が掲げる女性主義を！》

《邪魔者は消す！》

「どうやら……君たちとはお友達になれそうにないな」

スタインはバーニアを吹かして、ウインダム2機の背後に回り込む。そしてビームサーベルを横に一閃。コクピットを斬り刻み、更にはビームライフルを発泡する。爆発がまた発生する中で、スタインの背後にもう1機のウインダムが迫る。ビームサーベルを抜刀し、スタインに襲い掛かる。

《へっ！偽善者集団が！》

「こいつもっ！」

ウインダムのパイロットは技量で機体性能を補い、スタインと同等に立ち振舞う。サーベルでの激しい打ち合いは激しさを増し、火花を散らしてゆく。

《これ以上ザフトの自由にさせるかい！はああアアア》  
「くっ！やられよ！」

ギリギリで交わした斬撃をサーベルで振り払うスタイン。

「死ねッ！」

《な!?…ああアアア ！》

コクピットに目掛けて、サーベルを突き刺す。それを何度も繰り返し、機体が爆散すると同時にスタインは戦闘区域から離れる。シヨウマはサブモニターでリーズの戦闘を見る。

「ああもう！本当にしつこなア！」

MA形態のギャプラは人型に変形し、ビームライフルを放つ。迫るウィンダムを

撃墜。ビームサーベルを二刀流に構えて、ウィンダム2機を同時に斬り伏せる。真つ二つになった機体は爆発。スタインはMA形態に戻ったギャプランに乗りそのまま格納庫の基地へ向かう。

『シヨウマさん、あの人達少しは私達のことを信用してくれましたかね？』

「どうか。恐らくアレス君や箒君はまだ信用していないだろうな……」

『ふーん……道のりは長いな』

リーズは通信を切る。再びコクピットに静寂が戻ったのも束の間……また通信が入る。sound onlyと表示されたと同時に、通信の主が口を開く。

《やあやあシヨウマ・バジーナ君。わたしが調整したスタインの

調子はいかがかな？ちなみにギャプランも》

「ドクターD……俺の相棒はもちろん、リーズのギャプランも

いい調子ですよ。さすがは変態と呼ばれることだけはありますね」

《やめてくれよ。それはもう昔の話さ……さて、議長に

盗聴されるとまずいからそろそろ通信を切るよバジーナ君

「はいよ」

《それと……くれぐれもテストタロッサ議長には気を付けたまえ。

彼女は良からぬことを考えている……慎重に行くんだ》

◇ドクター D◇……彼の通信が終わり、ショウマはサブモニターに視線を向けた。

「やれやれ……また厄介なことが増えそうだな」

## PHASE-102 「和解と3機のゼータ1」

薄す暗く、どこかにあるMS開発施設。ハンガーには3機のMSがあった。それぞれ外見に違いはあるが、3機にはそれぞれある施しがされている。白をメインとし、一部紫がペイントされたMSは『NT』専用が開発され赤いMSは『純粹種イノベーター』専用、黄色いMSは『Xラウンダー』用に調整されて、3機は完成を間近にしていた。

「ふう……ようやく出来たよ」

黒いマスクを身に付けた男性は椅子に腰を掛ける。彼はショウマとリーズに指令を送っている◇ドクターD◇。ドクターは3機のMSを見上げ、手元にある書類に視線を移す……『MSZ-006ゼータ』に関する情報に視線を移す。

「(和馬や翔真君、そしてニック用に作り上げることが出来たが……ふむ)」

『ホワイト・ゼータ』『レッド・ゼータ』『バスター・ゼータ』…… 3つの鼓動は次第に動きだし、NT・イノベーター・Xラウンダーの為に3機のZは覚醒する。

場所は戻りトレミー。アレスの一件以降翔真はフェイト達を連れて帰って来たが夜架の存在で、激おこな束達にはO☆HA☆NA☆SHIされ、ヴィヴィオや椿からは

泣かれて、妻達と娘二人をどうにか宥めた。翔真は現在ツバサと食堂にいた。翔真はヴィヴィオを膝に乗せて、頭を撫でている。

「……以上がアレスについての情報だ」

「そうか……まさかあの事件の被害者の子だったなんてな……」

「知ってたの？」

「和馬さんから聞いたことがあったんだ。相当悔やんでたみたいでな……」

翔真もクラナガンで起きた、エネルギー研究所での立て籠り事件は和馬やミイリスから聞いていた。あの事件である家族が犠牲になってしまった事も聞いていた為、翔真も当時は歯痒い思いをしていた。

「翔真パパ！次は髪結んで欲しいなー！」

「あいよ」

「翔真……呑気にしてるけど、状況分かってんの？」

「よっと……分かってるさ。ザフトの勢力が上がってるし

この世界のパワーバランスが乱れてることもな……」

テーブルには複数枚の紙がある。それにはこの世界についての事が書いてあった。

ヴィヴィオの髪を結び、翔真は紙に掲載された情報を読み取る。読み終えた翔真

は

ツバサに再び視線を向ける。

「……確かに俺達がいた数年前の世界と、今が違うのは分かった……

：

ザフトは勢力を拡大して、俺達ソレスタルビーイングを支持している勢力は徐々にザフト側に吸収されているか……」

翔真はヴィヴィオを抱っこしてツバサと共に、トレミー内部にあるバーに入る。だがそこには意外な人物がいた。

「噂をすればなんとやら……ですね」

「……久しぶりというべきかな　　？翔真……」

「本当ですね……　　♪大東さん♪……」

「翔真パパ？……」

「(大東貴一……G s p i r i t s 隊を立ち上げた……)」

バーのカウンターにはカクテルを楽しんでいた大東貴一と、グラスを一生懸命拭いていたシュテルがいた。

## PHASE-103 「和解と3機のゼータ2」

「任務……でありますか」

『ああ。完成した機体を翔真君達の元に届けて欲しいんだよ』

『《世界の盆栽》という本を読みながら、シヨウマ・バジーナはイヤホン越しからドクターDの指示を受ける。内容はそれぞれに特化した3機のゼータガンダムを』

輸送して欲しいとのこと。しかし、今現在バジーナはザフトに身を置いている。易々とミネルバから出る訳にはいかない。

「ま、ドクターの指示なら仕方がないか……よし」

とある連絡先に電話。すると数秒でその主は出る。

『はいはい！シヨウマさん……もしかして任務ですか ！？』

『ああ。今からある指示ポイントを送る。≡響……君に』

ある任務を託す。大丈夫かな？」

《任せてくださいッ！なんでもやっちゃいますよ！》

「そう言って貰えると頼もしいな」

響と呼ばれた少女はテキパキとバジーナの指示に従い、機体を受け取りに

ドクターDの元へ。一方でニックは数週間、フォン・スパークとハナヨと共に

地方を渡り歩き、ザフトの裏側を知る。

《が、ガンダム!?》

《たかが1機のガンダムに!》

「民間人を戦わせる軍人がいるか！人の弱味に漬け込んで

汚い手段を使って……お前ら、それでも軍人かッ !!」

《黙れ！お前だって、結局何の目的の為に戦っていやがる!?

大体なァ！こいつら貧相民は、俺達ザフトがいなきゃおまんまの

食い上げなんだよ。そいつを分かれッ!》

ニックはフォンとハナヨの手によって取り戻された愛機ガンダムDXで  
ザフト軍と戦っていた。紛争地域で、金に困った貧相な民間人をMSの

パイロットとして戦わされているのを目撃したニックは、ザフト軍MS  
ゾノやグリーンを相手に戦っていた。

「(ちきしょう……何処に行っても、犠牲になるのは  
戦いとは無縁の民間人なんだ……！)」

ガンダムDXは満月をバックに、ハイパービームソードを華麗に抜刀する。

翔真はヴィヴィオをツバサに任せて、大東と互いの状況について話し合う。二人はお酒を片手に戦いやこの世界について出来る限り話し合った。

「ふう……ま、今更昔の事を掘り返しても仕方ない。

翔真君……確かに、君の言う事は分かる。だが君のやり方は間違っている。ソレスタルビーイングと同じようなやり方では新たに争いを生むだけなんだよ」

「今となっては……後悔もしています。でも……でも、この世界が争いに満ちていくことだけは嫌なんです。束や……シャルや、真耶が育ったこの世界だけは絶対に守りたいんです……」

「……………」

「俺や、明日菜が……この世界を変えてしまった。半端な気持ちでモビルスーツを生み出して、箒達もガンダムに乗って……訳わかんねーよ。もう……ダメなのかな」

翔真も精一杯だった。変わってしまった世界……それはまさしく C.E 73年の事件を再現したような状況に陥ってしまったIS世界。自身の存在で生まれたクローンや箒達ザフトの存在……翔真はもはやどうしていいか分からなかった。

そんな翔真に、大東は彼の肩に手を置く。

「わたしが若い頃……ある人に言われたことがあったんだ。彼はね

世界に失望したと。誰も彼もが真実や本質を見失っている……

誰も変わろうとしない世界を、自分は見限ったと。だが翔真……

君には対話する為の力が備わっているじゃないか」

「……………」

「人は争う生き物だ。それは紛れもない事実さ……………けどね、

人は分かり合える。純粹種の君とクアンタなら、奇跡を起こせる……………」

「お、大東さん……………!?」

「ッ！」

話の途中で、大東は手を滑らせ、グラスを割り床に倒れ込む。翔真とシュテルは大東を起き上がらせる。

「大丈夫なんですか！」

「だ、大丈夫さ……………いや、最近頭痛が酷くてね……………」

「大東さん……………貴方は」

脳量子で何かを感じ取った翔真だったが……………

「本当に……………何でもないんだ……………」

「……」

「翔真。明日、わたしに付いて来てくれるかい？」

「明日ですか……」

「今はこんな状況だ。ま、仲直りといこうかな……」

冷や汗を拭い、大東は再びカウンター席に戻る。翔真は脳量子で  
大東自身の変化を感じ取り、なんとも言えない気持ちで隣の席に  
座り直す。

## PHASE 104 「和解と3機のゼータ3」

「俺専用カスタムマイズされてるのか？」

「マジかよ……しかも Xラウンダー専用って」

「翔真、ニック！敵が来るぞ！」

「同じのが3機居たところで！」

「倒すのみ！」

『はああああアアア三三三』

長瀬湊が送り込んだ刺客。Xラウンダーで構成されたトリプルシスターズ。

専用カスタマイズされたグフイグナイトの3機がゼータ達に迫る。

翔真が駆るレッド・ゼータとニックの駆るバスター・ゼータが迫るグフに

ビームサーベルで応戦する。和馬の駆るホワイト・ゼータは光りに包まれ

やがて高速に移動し、残像を残してゆく。

『な、なに!?質量を持った残像だというの!?』

遡る事数時間前

——大東に連れられ、翔真はある場所を訪れていた。

イギリスにある MS 運用試験施設。翔真は真耶に付き添われ、施設へ入る。すると翔真達の前にある人物達が姿を現す。

「久しぶりだな……翔真」

「和馬さん……」

「真耶さんこんにちは」

「あ！こんにちは……ギンガさん達もこの世界に？」

真耶がそう尋ねる——二人は頬や額に治療を施されていた。

「うん。色々ね……ほらカズ。翔真君に言うことがあるでしょ？」

「ああ。翔真……」

和馬が何か言い掛けた時——大東が二人の間に割って入る。

「二人共。君達が話し合う前に、やって欲しいことがあるんだ」

「「やって欲しいこと……？」」

翔真と和馬の二人は大東の案内で MS が納められた格納庫へ入る。入るなり

ライトが点灯する。光りに当てられ、姿を現したのは2機のMSだった。

「こいつは……ガンダム MkⅢじゃないか……」

「左にあるのはガンダム MkⅡ……」

二人の視界に入ったのはRX-178ガンダム MkⅡとMSF-007ガンダム Mk

### Ⅲ。

この二機はソレスタルビーイングを支持する組織とミティワズミの技術力で完成したものだ。大東の話によれば、この2機を試験運用し欲しいとの依頼を受けたのだ。ザフトに対抗する為のガンダムというコンセプトを元に建造された2機。翔真はMkⅡへ、和馬はMkⅢへ乗り込む。それぞれ機体を稼働させ、システムや機体の調整を確認する。

「和馬さんとの模擬戦しろって、あの人は何考えてるんだ」

「やるからにはきっちりやらないとな」

やがて2機のメインカメラのデュアルアイに光りが灯る。翔真と和馬は

前方に互いを捉えると、ビームライフルを向ける。ギンガと真耶が見守る中大東の合図で、試験運用を兼ねた模擬戦が開始される。

「はああ!!」

「遅い!」

MkⅡはビームライフルを構えて発泡する。対するMkⅢはシールドで

砲撃を防ぎ、ビームサーベルを抜いて翔真の操るMkⅡに近づく。

翔真は機体を上昇させ、ハイパーバズーカを放つ。

「ちい!」

砲弾が地上にぶつかり、その衝撃によりMkⅢの姿勢が崩れる。

「……」

「……」

着地したMkⅡはビームサーベルを抜く。同時にMkⅢも姿勢を立て直しビームサーベルを構える。やがて二機は再びぶつかり合う。



## PHASE 105 「和解と3機のゼータ4」

翔真と和馬が模擬戦を開始して1時間後。イギリス上空に接近する

機影がある。Xラウンダー適性を持つ三人の少女達が操る専用機

ゼダス改は華麗な動きで徐々にイギリスの空域に入る。

『姉様、湊様が言ってた指定ポイントに到達するよ!』

「分かっているさ。さあて、湊様の為にもやらないとね」

『あっははは!今日は何人殺せるかな!?!』

一方で、模擬戦から1時間が経過していた。翔真は和馬の操る Mk-III に

苦戦を強いられていた。機体の性能差やパイロットの技量が原因ではなく、

単に翔真は迷いを抱えたまま戦っているからだ。気の迷いが一瞬の隙を作る。

「お前は理想だけで、世界が変えられると思っっているのか?」

「そうでもない、人はまた過ちを犯す……だから!」

翔真の操る Mk・II はビームサーベルを振るい、Mk・III のシールドを払い除ける。だが和馬も、ビームサーベルで Mk・II のメインカメラを傷付ける。

「翔真……お前達のやっている事は間違いだ。確かにこの世界は歪んでる。

だがな、正規軍でもないお前達が出た所で、戦場を混乱させるだけだ！」

「そうなのかもしれない。けど、これ以上この世界を……焼いてしまったら

本当にそれこそ！宇宙世紀や C・E の二の舞になるだけだ！こんな事になったのも、

俺が……俺が……！」

「……ッ　！(ちきしょう……振動が響く　！)」

ビームサーベルを縦に一閃。Mk・III のレフトアームを斬り落とす——しかしビームライフルを構えた Mk・III が Mk・II のメインカメラに狙いを定める。

更に、機体の振動により和馬の身体に激痛が走る。ある襲撃に合い、

そのせいで怪我を負っていた。

「これで！」

「まだだアアア……」

二人の戦いが終わりを迎えようとしていた時——天からビームが降り注ぐ。

同時にコックピットにアラート音が鳴り響く。上空から3機の漆黒の機体が舞い降りる。二人はその3機に見覚えがあった。

「あれは……ヴェイガンのゼダスカ」

「ゼダスって、確かXラウンダー専用機じゃ……」

「そうだ。だとすればアイツ等は……」

「……ッ　！来ます！」

瞬時に翔真と和馬は殺意を感じると、機体を浮上。ゼダスは武装である尾に装着されたソードで襲い掛かる。

「恨みはないが、アンタ等には消えてもらおうよ！」

「たかがイノベーターとニュータイプに、負けやしないよ」

『死んじゃえエェ！』

「来るぞ翔真！」

「後ろには真耶や大東さん達が……！」

1機のゼダスが真耶達に向かっていった。翔真はそれを見逃さず機体を動かす。Mk-IIは真耶達を守るように、覆い被さる。ゼダスの攻撃を受けながらも機体は真耶達を守る。

「翔真君……！翔真君！」

「真耶さん！今は逃げましょう！」

「で、でも！」

「翔真や和馬の戦いの邪魔になる」

「大東さんの言うとおりで……だから今は……私達も戦場から立ち去るのよ！」

「……はい……！」

ギンガは真耶の手を引いて、大東と共に戦場から離れて行く。

『終わりねえ！』

「ここまでかよ！」

コックピットにソードが向けられる。死を覚悟した翔真は目を瞑る。

「ちい！なにやってやがんだアア！翔真アア！」

ゼダスを蹴り飛ばした機影。それはニツクのガンダムDXだった。

## PHASE 106 「和解と3機のゼータ5」

「ニック……お前……！」

「ニックさん……」

「翔真、和馬……俺にだって守りたいものはあるんだよ。

お前達にだって守りたいものがあるだろ？ だったら……分かるな？」

「へっ、いきなり出て来て……偉そうに言ってくれんなニック！」

「戦いたのは山々だけど、俺や和馬さんの機体は……！」

ゼダス3機による攻撃で翔真のMk-IIと和馬のMk-IIIは中破していた。

再びゼダス達が近き、ニックの操るガンダムDXが二人を守ろうと盾になろうとした時——複数の機影がDXに近付く。

「うっひょー！ ショウマさんの言うとおりだよ！ もう、ザフトの人達って結構乱暴なのかな？ まあいいや！」

≡ZGMF-X42S REVOLUTION デスティニーガンダム≡…それ  
はかつて

ある人物の為に建造されたデスティニーガンダム。しかしその人物が  
戦死した事によりこのX42S REVOLUTIONは事実上封印されていた。  
筈の駆るデスティニーと違い、オレンジの装甲が目立つデスティニーを  
操るのはショウマ・バジーナの右腕として、あちらこちらで暗躍する  
傭兵である少女≡立花響≡。

「さて、お届けものだよ三人共！」

「…！」

「私が引き付けている間に、三人は早くに機体に乗るなよ？」

『何処の所属だ。それに君は…ザフトなのか？』

「神宮寺 和馬さんでしたっけ？…詳しい話は後でします。

だから今はあの機体に乗ってください！では！」

「お、オイ！……」

和馬の通信を切り、響のデステイニーは槍型の武装《ガングニール》を構え迫るゼダスを払いのける。ガングニールを振り回し、それを投げ放ちゼダスを翻弄してゆく。

「ニック、翔真。取り敢えずあの機体に乗るぞ」

「信じるのかよ和馬」

「今はあのデステイニーのパイロットが持つて来た機体に乗るぞ。」

ニック、翔真も今はそれだけを考えろ……俺だって、いきなりで

訳わからんが……仕方ない　！」

色がそれぞれ違う3機のゼータガンダムは自動操縦でウェイブライダーからMS形態へ変形する。和馬は白いゼータ・ニックは黄色いゼータ・翔真は紅いゼータへと乗り込んだ。

「あのデステイニーのパイロット……今は味方だと信用するしかねえ。」

ニック、翔真……フォーメーションでゼダスを叩くぞ」

「仕方ないか」

「……来ます　　!」

翔真の操るMSZ-006P2\3C レッド・ゼータはウェイブライダーへと変形し空へ。

響のデステイニーを追い越し、ゼダス3機を追いかける。

「ちよっと!? 何よあのスピードは!」

「ちい! 私達を舐めるんじゃないわよ!」

「来る……!」

ゼダスが迫る中、レッド・ゼータは素早く変形しビームサーベルを抜刀する。

そして、和馬の操るホワイト・ゼータとニツクの操るグレイ・ゼータも空へ上がり

ゼダス3機と対等する。

「よし、ゼータは無事送り届けたし大丈夫かな。せっかくだけど私は

次の任務があるからそろそろ行かなきゃね。≪未来≪とのデートもあるし!」

響はゆっくりと戦線を離脱してゆく。それを知らない翔真達は戦闘に入る。

## PHASE 107 「対等」

和馬、翔真、ニツクの3人はそれぞれは自分の能力に適応したゼータを操り、ゼダスを追い詰めてゆく。ニツクが操るバスターゼータは専用の武装である大型のビームランチャーを放ち牽制してゆく。

「あんたもXランダーなんでしょ？ だったら、同じ

Xランダーに殺されても文句ないでしょ、ええ!？」

「…悪いな」

大型ランチャーをしまい、バスターゼータはビームサーベルを高速抜刀。即座にゼダスのコクピットに突き刺す。

「そ…ん…な…」

「戦いを遊びとしか感じないお前等は生きるべきじゃない。

ザフトに利用される前に、俺が葬る」

「くッ！くそがアアアアア…」

パイロットの少女は叫び、やがて機体と共に散ってゆく。翔真もまた対等していたXラウンダーの操るゼダスを撃破する。しかし、翔真達に近く機影が姿を現す。モニターに表示された型式番号は――

「ZGMFX666S レジエンド……」

《翔真、お前はレジエンドを頼む》

《俺と和馬が残りのゼダスを相手にする！行ってこい！》

「……了解　！」

翔真が操るレッドゼータはビームサーベルを抜刀。対するレジエンドもまたデファイアント改ビームジャベリンを引き抜き、レッドゼータに振り下ろす。レジエンドと対等した翔真は、ぶつかり合う瞬間妙な気配を感じた。

「なんだ……この感じ。俺は知っているのか……　？」

「貴方には分かるはずですよ。なにせ私は……」

「誰だ……誰なんだ君は　！」

「私は…… ♪白雪明日菜♪ですから。忘れるはずないでしょ？」

「な…… !？」

レジェンドのパイロットの少女は確かに♪白雪明日菜♪と言った。しかし

明日菜は既にこの世にはいない。翔真が困惑する中で、レジェンドのパイロット

長瀬湊は続ける。

「私は彼女の仮の肉体として作られたクローン。貴方には分かる」

「(そんな……やっぱり俺や明日菜が……いらない介入ばかりしたから

生まれるはずのない子まで生まれてしまった……)」

「議長は私を救い、救済の手を差し伸べてくれた！議長の行く手を

阻むなら、せめて白雪明日菜の器である私が葬ってあげましょう！」

レジェンドが迫る。レッドゼータはビームサーベルでジャベリンを受け止め  
機体を突き放す。

「もうすぐ世界は作り直される。その世界に貴方の居場所はない！」

「くっ……！」

「これで……！！……何　！？援軍！？」

レジェンドの背後に、イギリス軍が所有する量産型MSリゼルの部隊がレジェンドに対して銃口を向けていた。

「ここまで……ですか　！」

「待てッ！」

去るレジェンドを追い掛けようとした翔真。だが和馬やニックに止められた。

今回の戦いを引き金に、遂にザフトはソレスタルビーイングを匿うイギリスを反乱勢力とみなし、イギリスに攻めこもうとしていた。誰かによって仕掛けられた

イギリスが所有する超高出力レーザー衛星によるザフトの基地壊滅とい惨状にプレシア・テスタロッサは、怒りを露にし直接指揮を取る。彼女が作った最強のエース部隊「フィーネ」と共にザフト最大規模の戦力が翔真達に迫る。



## PHASE・108 「イギリス防衛戦 1」

「アレスッ！お前……本当に何を討とうとしているのか

分かっているのか!?御門さんや、クリスちゃん、ノーヴェの

お腹の中には新しい命が宿っているんだぞ!?それでも討つというのか!」

「な……くっ……!」

銃口がプロレマイオスに向けられる。しかしエクシエスの前にナガスミの操るウイングガンダムフェニーチェリナーシタ(バード形態)に乗ったバルバトスが立ちはだかる。

「箒ッ……ザフトっていうのは、国民を平気で虐殺する奴等が

本当に正しいのかよ!?答えろ……箒ッ     !!」

「違う……違う     !こんなの違う!」

「行きますよ皆さん」

「アレス隊長の為に、死になさい!」

「セシリアの母国を焼かせるかよ!翼!」

「ああ。SAKIMORIの意地……貫く。例え相手が平行世界の  
マリアであろうとも、揺るぎはしない……！」

一夏と箒——翔真・翼の想いが戦場交差する。

この不測の事態に、翔真達は動揺していた。更に悪い知らせというべきか  
セシリアの専属メイドであり、MSパイロットでもあるチェルシー・ブランケッ  
トの

妹である《エクシア》が制御生体ユニットとして組み込まれている姿がザフトの  
衛星施設が捉え、イギリス政府に批判が相次ぐ。しかしそんなことをセシリアが  
するはずもなく、セシリアは女王陛下から事実の違いを証明する。女王陛下は  
国民に対して報道された事実とは異なると話した。だが、それを間に受けた  
国民は嘘やデッチ上げだと批判する。更にはソレスタルビーイングを匿ったとい  
う

一件が完全に火を付け、イギリスの国民は怒りを押さえられなかった。

数週間後。ミネルバを先頭にザフト艦隊がイギリスに迫る。再度対談の場を持ち掛けたが、ザフト側はそれを拒否。ソレスタルビーイングを匿う時点で

反乱勢力と断定されてしまった以上、戦闘は免れない。翔真達はセシリア率いるイギリス防衛軍、そして大東率いる G S p i r i t S 隊などと協力し、イギリス防衛に

徹する。翔真・セシリア・大東は今現在、ザフトにどう対応する話し合っていた。

「状況は油断出来ませんわ。今現在、ザフト艦隊はこちら側に

向かっています。恐らくミネルバも来る可能性は十分にあります」

「それは非常にまずいな。翔真、確かミネルバには……」

「ええ。箒、長瀬湊など、エースパイロットがいるはずですよ。」

「そしてアイツも来るはずですよ……」

「アレス君……か」

大東が険しい表情を浮かべる。ザフトの戦力は今最大規模であり、正直なところ

勝てる確率は低いと翔真は計算している。三人はザフトに対抗する編成を決める。

まずミネルバのエースチームに対抗するのは、翔真・風鳴翼・和馬・ギンガ・ニック・ティアナとイギリス空戦部隊が前衛となり、後衛になのは達を回す。戦闘開始の時間は迫り、各自配置に付く。一方で、千冬もまたイギリスを守る為に戦うと協力を申し出ていた。そして、千冬は今セシリアに連れられる場所へと来ていた。

「オルコット……これは……」

「ORB 01 アカツキですわ。この機体は貴女が乗るべきです織斑先生」  
「だがいいのか？ 私は元ザフトだぞ。さすがにこの最新鋭の機体を……」

「昔の事はいいです。ただ今は、わたくしの祖国を守ってください。」

「お願いします……織斑先生……」

「……」

「今わたくしが出来ることは……愛する祖国を守ることですわ。」

「例え国民に嫌われようと、この国を焼かす訳にはいきません……」

セシリアは頭を下げた。その姿に、千冬は折れてアカツキへ搭乗する。

アカツキの背後にはガンダムタイプの機体が3機程待機していた。

「ふん。ブラウカラミティ……どれ程のものか

見させてもらおうケダ。よし……」

「あーしのMSがガンダムなんて最高！」

「やれやれ。二人共、わくわくするのはそこまでにしておけ。

もうすぐイギリスは……戦闘区域になるんだからな」

ミブラウカラミティミミゲルプレイヤーミミロードフォビドゥンミは

ツインアイを灯らせ、次第に稼働してゆく。



## PHASE 109 「イギリス防衛戦 2」

『近い未来……俺は既にこの世からいないだろう。俺の名前は綾崎翔真……もし君が

戦う事を選ぶなら、自分に起こる運命を受け入れろ。東達の世界と、俺と知り合  
い

一緒に戦ってくれた仲間の事を頼む。自分の運命と共に』

やがて起こりうる未来を見た翔真。その録音したメッセージを≡金色の不死鳥≡に  
残す。

そう……新たに転生した ≡自分自身≡に。

「いよいよよか……」

「翔真……」

海岸からザフトの艦隊を直で確認した翔真はシャルロットを抱き寄せ次第に迎えるであろう戦いに挑もうとしていた。翔真の表情は暗く、

シャルロットは心配そうに覗き込む。

「お願い翔真。ちゃんと帰ってきて……もう離ればなれは嫌だよ」

「もちろんだ。俺はちゃんと帰るさシャル……だから」

「うん……」

二人は抱き合い、互いに唇を合わせた——イギリス軍が防衛を固める  
中で

ザフト艦隊を引き連れた形で先行するミネルバでは新たな艦長が着任していた。

「本日付で、ミネルバ艦長に就くことになったㄥ篁唯依ㄥだ。貴様達の噂は

聞いています。私も艦長という任には不慣れな故、皆には迷惑を掛けるかもしれない。

これからは共に戦う仲間として、宜しく頼む」

プレシアの推薦によってミネルバ艦長となった篁唯依特尉。イギリス戦に備え唯依は不慣れながらも、箒達に作戦プランを提示してゆく——やがて出撃準備になり

皆が急ぐ中で、シヨウマ・バジーナはただ一人くつろぎ本を読んでいた。

「出撃前に読書か。なかなかの余裕ぶりだな」

「君は……アレックス・ウォーレン君か」

「馴れ馴れしく名前を呼ぶんじゃないやねえよ」

「(……一体何事　?)」

読書するシヨウマに噛み付いたのはアレックス・ウォーレン……またの名を五

反田弾。

彼はシヨウマ・バジーナという青年が気に入らなかった。それこそ、この世界を変えた

一人である綾崎翔真に似ているから。二人をたまたま目撃したマリアはそのまま物陰に隠れて、話を聞く。

「アンタが翔真と別人だったのは分かるさ……けど、やっぱり割り切れねえよ」

「……」

「こんなはずじゃなかったんだ……でも、この世界はあつという間に

変わっちゃった。家族も何もかも失って……　！だから！」

「1ついいかね？」

「なんだ！」

「仮に、この世界を変えた元凶が綾崎翔真と織斑一夏だとしよう。君は

彼等を恨んではいるが、君はどうかね？恨んでばかりでは、道は見えない」

「な、何を……」

「君が彼等の立場だったら、君はどうなんだね？アレックス君や

他の子達にも言える事だが……君達は彼等の気持ちを考えてことがあるのか　？

「

なに!？」

「彼等とて、こんな世界にしたくなかった筈だ」

「アンタは……翔真と一夏の味方をするのか　？」

「いや。彼等がやっている武力介入は間違っているのは確かさ。

それで戦火が拡大したのは事実だからな」

シヨウマ・バジーナはアレックスに一冊の本を手渡し、そのまま格納庫へ向かう。

「オイ！この本は!？」

「今の君には必要だ。持っっている」

格納庫へ着くなり、箒や湊達の機体は既に発進シーケンスに入っていた。

「篠ノ之箒、デステイニー出る！」

「長瀬湊、レジェンド発進する」

「悪いわねセシリアちゃん。これ戦争なのよね……だから。」

更識楯無、コアस्पレンダー出るからね！」

箒のデステイニーが——湊のレジエンドが——楯無の操るコアस्प

レンダーは

すぐさまチェスト・レッグフライヤー、フォースシルエットと合体した姿……

……

フォースインパルスがイギリスに向けて加速する。そして艦隊からも複数の量産型MSが出撃する。

## PHASE 110 「イギリス防衛戦 3」

「これよりヰファイネヰ所属のパイロットは私の指示で動いてください。

箒さん、楯無さんは私と共に前衛にいるリゼルを一掃。アレスさん、マリアさん達はそのまま私達に続いてイギリス本部を攻めてください」

プレシアの推薦メンバーで構成されたエース部隊ファイネ。部隊の隊長を任されたのは湊であり、各パイロット達はそれぞれ指示に従い箒のデステイニー、楯無のフォースインパルスが砲撃を始める。

「そこを退けェ！」

「はぁアア！」

デステイニーとインパルスは交互にビームライフルを射ちながら

近付くりゼルをフラッシュエッジブーメラン・ヴァジュラビームサーベルで斬り伏せ、爆風を払いながら突き進む。

『ちい！ザフトのエースかよ!?!』

『私達は無実だ！貴様等ザフトは、そうまでして

私達を排除しようというのか！』

「黙れッ！貴様等とて、衛星で基地を焼いたクセにッ！」

2機のリゼルがビームサーベルを振るう。対する箒のデステイニーはそれ等の攻撃をアロンダイトで受け止める。やがてインパルスがビームライフルで狙い撃ち、リゼルは撃墜される。

「楯無さん！」

「忘れてたア？私も赤なのよ……ん　？あれは……」

「……！ガンダムタイプ……まさか」

デステイニーとインパルスに迫る新たな機影——自分専用にかスタマイズし  
新たなる機動性と運動性能を手に入れた、風鳴翼専用　アヴァランチエクシアと  
イノベーター専用機である翔真操るレッド・ゼータが二機に立ち塞がる。

「防人として……戦士として……貴様等を通す訳にはいかないッ　！」

「デステイニーは箒、インパルスは楯無さんか!? やるしかない」

翼操るアヴァランチエクシアは GN ソードを構えてデステイニーに向かう。箒はフラッシュエッジブーメランを放ち、立て続けに高エネルギー長射程ビーム砲を射つ。

エクシアはフラッシュエッジを粉碎し、ビームを避ける。

「くっ!? あの実体剣、とてつもない破壊力を秘めているのか!?」

「防人の歌、聞くがよいッ!」

エクシアが GN ソードを振りかざす——だが、デステイニーの目の前に

ある機体が立ち塞がり、エクシアの斬撃を食い止める。

《やるわね。貴女の剣……なかなかだわ ！》

「!? ……馬鹿な……何故、何故 ……マリアの声が!?!」

音声通信——その声は聞き馴れた者の声だった。

《貴女……私を知っているの ……? でも、私は貴女を知らないわ!》

「(クリス同様に、並行世界同一人物のマリアか……！  
全くッ！戦いづらい相手だ……！)」

デステイニーの前に現れたのは、アレスの部下であるミマリア・カデンツァヴァ・イヴ。

翼にとっては自分の世界では仲間の一人……しかし、今日の前にいるマリアはクリス同様

並行世界同一人物だ。翼は再び、機体を加速させる。

「例え並行世界のマリアだろうと、防人の剣は下げられないッ!!」

「面白いわね。敢えて挑んでくる心意気は良しッ！」

バルバドスに似たフレームを持つ機体、ミガングニールミがエクシアに立ち向かう。

一方でフライトユニット乗ったザクウォーリアを次々と撃墜していた和馬とギンガ。

そんな二人にも、新たなる者達が迫る。

「見せてもらおうか、神宮寺君の実力とやらを」

「悪いけど、通してもらおうから！」

「和馬！」

「あの機体は……シナンジュ・スタインか　！それにギャプランか!?」

ギャプラン（MA形態）に搭乗したシナンジュ・スタインが近付く。スタインを操る

シヨウマ・バジーナは笑みを浮かべ和馬の操るホワイト・ゼータにライフルを向ける。

## PHASE 111 「イギリス防衛戦 4」

「はあアア!!」

「ちい!」

シヨウマ・バジーナとリーズは和馬やギンガを翻弄しながら前進し、その後にはアレスの部下である、ミ暁切歌ミとミ月読調ミの操るMSが現れる。

和馬の操るホワイト・ゼータはそのままウエイヴライダーへ変わり

切歌が操るMSミイガリマミからの攻撃を交わしていた。しかしイガリマの肩部に設けられた高出力バーニアが火を吹かし、MA形態のホワイト・ゼータを追い越し機体に近づく。

「速い!？」

「もらったデスよッ!」

「ふっ……それはどうかな!」

イガリマは専用の武装である推進器内蔵大型鍛造鎌斧《ザババ》を振り下ろす。

しかし瞬時に、MS形態へ戻ったホワイト・ゼータはビームサーベルで直後を防ぎ、イガリマを蹴り飛ばす。

「キャアアア!?!」

「切ちゃん!ちっ……!」

「(あのスタインを逃がす訳にはッ!!)」

「貴女の相手は私」

「邪魔をしないでッ!!!」

ギンガが操るレギルスはシールドからビットを多数放ち、調が操る MS

《シウルシャガナ》は向かって来るビットを頭部に連結されたテイルコンテナに納められた小型鋸刃チャクラムで一掃。そのままレギルスに向かう。

「やるしか……ないの?」

「オルコットの故郷を、焼かせはしないッ！」

千冬もまた戦場にいた。セシリアから渡されたMS 『ORB-01 オオシワアカツキ』は

迫り来るグフイグナイテッド・ザクウォーリアを次々と撃墜してゆく。更に機体に

装備されたミヤタノガガミはビームを反射し、そのビームを放った敵機に返し機体は爆散する。

「……ッ　!?!……デステイニー、篠ノ之か　!」

「あなたが大将機か。金色だからといって！」

箒操るデステイニーがビームライフルを向けて射つ。しかしアカツキはそれを跳ね返す。

「ビームを弾く!?!ならばッ！」

アロンダイトを構えて、そのままアカツキに接近。アカツキも双刀型ビームサーベルを

取り出しデスティニーの攻撃を防ぐ。千冬はそのまま通信を繋いだ。

「篠ノ之ッ!!」

「!?…馬鹿な、何故千冬さんがッ　!?」

「貴様ッ…本当に今、自分が何をしようとしているのか

分かっているのか!? お前は、軍に命じられるまま従うのか!?」

「何を言って!」

「惑わされないでください箒さん!」

「…!!」

アカツキとデスティニーの間に入ったのは、湊のレジェンドだった。

「死に損ないの裏切り者が、何をのこのことッ!」

「長瀬ッ!」

「箒さんは右に回り込んでくださいッ! そうすれば…　!」

湊が箒に指示を出した直後——上から一筋のビームが降る。箒、湊、千冬

が

上に視線をやる。ビームを放ったのは、青い翼を持つ機体だった。

「ふ……フリーダムだと　!?!」

「やめろ箒ッ！本当に後戻り出来なくなるぞ！」

一夏操るZGMF・X20A ストライクフリーダムがデスティニーの前に立ち塞がる。

# PHASE 112 「イギリス防衛戦 5」

「一夏ッ！お前なんだな！」

『ああ。それより千冬姉はイギリスの本土を守ってくれ！

デステイニーとレジエンドは俺が相手をする！』

「すまない一夏……頼むぞ　！」

オオシワアカツキが後退すると同時に一夏の操るストライクフリーダムが  
箒のデステイニーと湊のレジエンドに近付く。ビームサーベルを引き抜き  
デステイニーに襲い掛かる。

「箒さん！」

「ちっ……また落とされたいのか……一夏」

アロンダイトを構え、ストライクフリーダムのビームサーベルをそのまま  
防ぐ箒。湊はそのままフリーダムの背後に回る。

「貰いましたよ！……きゃっ　!?」

「一夏は……やらせないわよ」

レジェンドの背後を攻撃したMS——それは白いガンダムエピオンで操縦者はメガーヌだった。フリーダムとメガーヌ専用のエピオンは、デステイニーとレジェンドに襲い掛かる。

一方で翔真は、レッド・ゼータで敵機を撃墜していた。パイロットを殺さずにメインカメラや武装を破壊して無力化してゆく。自身の力を全開にして、機体性能を上げていきながら敵機を無力化する。

「(そろそろEパックのストックが無くなってきたな……」

一度補給に……ん　？、こちらに接近する機体が……)」

「へえ……私のアメイジングゼータにそっくり……ハロ　　！」

《イツデモ、イケル！イケル！》

「な!? あれは！」

接近する機体、それはかつてこの世界で共に戦い愛する女の為に

命を散らした《速波隼人》の愛機、ゼータガンダムの改良型。

翔真はコンソールを操作するが、どれも該当する機種はない。

「(ゼータ対決ということか……)」

「まずは貴方から！」

レッド・ゼータはウェイブライダーへ変形し、そのまま加速。

対するアメイジングゼータはウェイブライダー形態のまま武装である

ツインハイパーメガランチャーを放つ。混乱する戦場を駆け抜ける

二つのゼータは激しいドッグファイトを繰り広げ、アメイジングゼータは

ライフルの銃口を向ける——しかしレッド・ゼータはそれを回避して

そのままMS形態へ変形する。

「悪いな！」

「ッ！……なんとオオオ　　…三」

アメイジングゼータもそのままMS形態へ変わり、互いにビームサーベルで

ぶつかり合う。ゼータ同士による激しい攻防の中で翔真はある気配を察知する。

「このゼータから感じる気配……フェイトに似ている　？」

「はあアア！」

「ちい！ どうしてこうも！」

一方でツバサはバルバトスを操り、イギリス本土に上陸するダガーやザクなどをソードメイスで撃退していた。ナガスミもウイングガンダムフェニーチェリナーシタで敵機を撃墜する。

「数が多すぎる！」

「全くだ……帰ったらクリスや御門の尋問がまだあるからね。」

僕はまだまだ大変だが……ちい　！」

一度に複数の部隊が上陸する。しかしいくらバルバトスやリナーシタでも相手に出来ない——しかし複数のビームが飛来しダガーやザクウォーリア

の

ボディーを貫く。

「ヰカリオストロヰ、ヰプレラーティヰ……我々も加勢するぞ」

「うっふふ！あーしのゲルプレイヤーちゃんがよく活躍ね」

「ふっ、ザフトも本気ってワケダ」

バルバトスとリナーシタの後方に、ゲルプレイヤー・ブラウカラミティ  
ロードフォビドゥンが現れ、そのままツバサやナガスミの加勢に入る。

## PHASE・113 「イギリス防衛戦 6」

ザフトのMS部隊がイギリス本土へ上陸してゆく。上空ではニックがバスターゼータで

MS部隊を率いてザフトのMSを撃破してゆくが、次々と上陸するザクウォーリアー

や  
 ダガーなどが本土へ上がる。地上部隊はサンジェルマン達の加勢もあり、なんと  
 か

押していたがザフトが侵攻を緩めるはずもなく、戦況は厳しくなる。

「(…仕方ない。ネプテューヌごめん…約束を破るよ)」

ツバサが操るガンダムバルバトスルプスの前方には新たなMS部隊。操縦レバーを強く握り、ツバサはバルバトスに語り掛ける。ネプテューヌによって止められてい

た

最後の切り札をツバサは使う為に彼女によって掛けられていた封印を解く。

「オイバルバトス…鎖を外して…お前の力を解放してやる。見せてみる。」

：

お前の持てる力全てを、破壊してみせろ！…ぐっ　!？」

バルバトスのツインアイが赤く輝き、肩部アーマーからは蒼き炎が吹き出す。

自身の身体にある~~ゞ~~阿頼耶識~~ゞ~~を介して、バルバトスと一体化を感じるツバサは目や口から血を流しながらも前進する。

「はああああアアアア~~…~~」

『なんだあの早さは！うわああああ!？』

『お、お母さアアアん!』

「うるさい…ナア　~~…~~」

迫るグフイグナイテッドに飛び掛かり、コクピットをえぐりだすバルバトスは更に機体をソードメイスで破壊してゆく。ソードメイスを一振りし、次々とMSをなぎ倒すツバサ……しかし、接近する機影があるのをバルバトスが警告する。

「……アレスカ」

「……バルバトスルプス……ツバサか」

悪魔を見下ろす悪魔——エクシエスはバルバトスを見下ろしていた。もちろん

操縦者はアレスだ。ツバサのバルバトスはデュアルアイを煌めかせ、ソードメイスを

担ぐとそのままエクシエスに襲い掛かる。

の  
一方の翔真はアリシアと未だに交戦中であった。弾薬もそこを尽き、機体も複数

打撃を受けて装甲は歪み各部から電流を放っていた。イノベイターの力を機体に流し込むことで機体性能を格段に上げたレッド・ゼータ。しかし、アリシアのアメイジングゼータと十援軍の一斉射撃によりレッド・ゼータは中破してしまふ。

「今の私じゃ、勝てないのは分かってる。でもね、数で圧倒すれば  
例え強いパイロットであろうと大人数で攻めれば楽勝なんだよ」

「ちい」

「翔真アア！」

す。  
マリアをなんとか退けた翼のヴァランチエクシアがアリシアの機体を蹴り飛ばす。

しかし今のエクシアには蹴り飛ばす以外に武器はなかった。マリアの機体によつて

全て失ったエクシア——それを見た翔真はとっさに翼に通信する。

「翼、今から俺が指定した座標を送る。お前は一時離脱しろ」

『だがしかし!』

「ふっ……お前専用建造された機体が完成したらしい……早く行け！」

武装を失ったエクシアじゃどのみち対抗出来ない!」

『……分かった。すぐに戻る……だからそれまでは持ちこたえろ！』

「防人にそれ言われたら、持ち堪えなきゃな……」

翼の操るアヴァランチエクシアが一時戦場を離脱。アリシアのアメイジングゼー  
 タが

体勢を建て直し、銃口を向ける。

『翔真！早くこれに！』

「フェイト!? それにダブルオーライザーか！」

「まさか!?!」

《敵機セツキン！敵機セツキン！》

「早く翔真君はダブルオーライザーに乗り換えて！ここは私が防ぐから！」

フェイトが操縦するダブルオーライザーがレッド・ゼータに近づく。更に後方から

なのは専用のフリーダム——フリーダム・ディーバがハイマツトフルバーストを発動。



## PHASE 114 「イギリス防衛戦 7」

「何故落ちないんだ！」

「箒……！」

箒のデステイニーガンダムがアロンダイトを構えて斬り掛かる。デステイニーはフラッシュエッジブルーメランを一夏の操るストライクフリーダムに対して投げ放つが、腰部にあるクスイフィアス 3 レール砲により破壊される。

「これがビームだったら……！」

「……」

「もう終わっているとっ！ そう言いたいのか一夏っ！」

箒は SEED を発動させる。力を解き放ちデステイニーは凄まじい速さでフリーダムに接近する。しかし一夏も SEED を開化させ、ストライクフリーダムもビームサーベルでデステイニーのアロンダイトを受け止める。

「邪魔させないっ！」

「たかがガンダムタイプのMS1機に私の部隊が半壊だなんて！」

メガースが駆るガンダムエピオン・クイーンはストライクフリーダムとのコンビネーションによりフライトユニットに乗ったザクやダガーなどを撃墜していた。湊も予想以上に苦しめられ苦戦を強いられていた。

「箒さん、一度撤退しましょう！デステイニーもレジェンドも補給を受けなければ戦いに負けます。行きますよ箒さん！」

「ちい！しかし……アリシアは」

ストライクフリーダムをなんとか退けた箒は湊と共に補給の為にミネルバへと戻る。しかし入れ替わるように1機の赤いMSがストライクフリーダムに近づく。

「赤いMS!？」

『その声……一夏だな ！』

「！……弾……なのか ？」

一方で宇宙では高出力レーザー衛星の制御生体ユニットとして囚われているエクシア救済の為にシグナム率いる宇宙部隊がレーザー衛星に向かっていた。

「熱源……ち、モビルドールか ！」

「各機はモビルドールとの戦闘を維持。このままエクシアくん救出に向けて私が先行する」

「大東さん……」

「後は任せてもらうよ。おじさんにも少しは格好を付けさせてくれ」

大東は操縦桿を握りしめ、百式をベースにF91などのMS技術をフィードバックしあらゆる面でもオールマイティに動けるよう開発された専用機△千式（デルタサウザント）△を加速させる。恐らくザフトが開発したモビルドールビルゴIIが衛

星を守るべく守備を固める。

「やらせはしないさっ！」

千式はクレイバズーカを構えて射出。ビームは防げても弾頭は防ぎ切れないビルゴIIは爆発し、クレイバズーカによる射撃でビルゴIIを撃破してゆく。だが、衛星から更に有人MSであるグフイグナイテッドが出現する。

「隊長をやらせはしませんよ！」

『はっ！たかが増援が増えたからって！』

『関係のない奴は引っ込んでな!?!』

「確かに……わたし達は関係ないのでしよう。ですが、それを黙って見過ごす程

臆病ではありませんよっ！PXシステム起動！」

ミイリスが操るガンダムグリーンプタキオンが光りを放つ。そして瞬く間にグフを

瞬殺し、千式と共に衛星内部へと侵入してゆく。第二射から数分が経過し、ミリリスと大東は機体を加速させてエクシア救出へ向かう。

## PHASE・115 「イギリス防衛戦 8」

迫り来る赤いMSがストライクフリーダムに近づく。バルバドスと同じガンダム・フレイムと見られるMSが手に装備したメイスを振り上げる。対するストライクフリーダムはビームシールドを展開して防ぐものの、いくらVPS装甲であっても打撃を何度も喰らっては装甲が歪んでしまうのも時間の問題。だが一夏にとつてそれだけが問題ではなかった。

「お前弾なのか!?なんでMSになんか乗ってるんだよ!?どうしてザフトに!」

『なんでだと?はっ…自分の胸に聞けよ一夏アアアア!!!!』

「止めてくれ弾!俺達は…」

『今更友達とかほざく訳じゃねーよな?…お前等のせいだ…あの戦いで、

お前と翔真達のせいで家族をバラバラにされた!』

「何があった!」

『何がだど？……いきなり居なくなつた奴に話すかよ。爺さんや、親父とお袋を死なせ』

蘭も居なくなつた……なにもかもお前等のせいだアア　　！』

「何も知らないクセに、私の旦那を責めないで！」

ストライクフリーダムと弾が操るミアスタロトブレijingグの間割って入るのはメガーンのガンダムエピオン。エピオンはヒートロッドを振るい、アスタロトの装甲に打撃を与える……メガーンはヒートロッドでの攻撃を止め、アスタロトにビームソードを向ける。

「一夏は、散々戦つて沢山のものを犠牲にしたの！そんな事があつても、一夏は私やルーテシア達に幸せをくれた。自分が傷付いても、決して弱い所なんて見せない……　　！私の自慢の旦那様なのよ！」

『ほざけ！自分達が良ければそれでいいのか!?!』

「弾……確かに、俺や翔真のせいでの世界が可笑しくなつたのは否定しない。」

けど」

エピオンの背後からストライクフリーダムはクスイファイアス3レール砲を展開して発射。アスタロトはレール砲の砲撃を受けて吹き飛ばされる。そしてフリーダムは腹部に搭載されたガリドゥス複相ビーム砲を放つ。

『ぐっ!』

「だからと言って、友達であるお前に戦って欲しくない。戦場でこんな事言うのは間違ってるのかもしれない。弾……すまない」

『なに!』

ガリドゥスを避けたアスタロトだったがストライクフリーダムは近付いてメイスを蹴り飛ばすと、シュペールラケルタビームサーベルを抜刀して二刀流でアスタロトに斬り掛かる。SEEDを発動させたままの一夏は装甲の隙間を狙い、アスタロトの腕を破壊する。

『くっ!』

「……」

鬼神のような勢いで、ストライクフリーダムはビームサーベルを振るう。シュ

ペールラケルタビームサーベルをハルバードモードにすると、アスタロトのメインカメラに突き刺さうと

迫る。

『舐めるなアアアアアア』

だが、アスタロトはデュアルアイを赤く輝かせるとストライクフリーダムへの攻撃を退ける。

そしてまるで生き物のように動きが素早くなったアスタロトにストライクフリーダムは再び追い込まれる。

「もうやめなさい！ そんな事すれば貴方の体は持たないわ！」

エピオンがアスタロトの装甲を掴み、そのまま突き飛ばす。メガースはエピオンをバード形態にするとストライクフリーダムを連れて戦域から離脱する。

「メガースさん!？」

「今はイギリス防衛が先よ。今はそれだけに集中でしょ？」

「…分かりました　！」





## PHASE-116 「イギリス防衛戦 9」

「風鳴翼……！クアンタ・アメノハバキリ、いざ参る！」

「各員下がれ！アメノハバキリが出るぞ！」

リーダー各の整備員の合図で全員が機体から離れる。翼専用が開発され、調整した機体ダブルオークアンタ・アメノハバキリ。クアンタをベースに改造された専用機。翼はゆっくりと目を開けて正面コンソールパネルにある差し込み口にペンダントを入れた。そうこの機体はある人物が造り出したミシンフォギアシステムを搭載していた――

「――Imytaus Amenohabakiritron――」

ミ聖詠と共にアメノハバキリの装甲が再構築され、両腕に鋭いソードブレードが装備され脚部にはバーニアやホバー機能を備えたブレードも装着され、背部にはウ

イングの機能も備えた4つのソードが装備された。

「(シンフォギアシステムか……なんとか使いこなしてみせる )」

「あら、再びといったところかしら」

「マリアか……」

クアンタ・アメノハバキリの前にマリアの駆るガンダム・ガングニールが立ち塞がる。彼女の機体も≡シンフォギアシステム≡を使用し、外見も変わっていた。背部にある二本のソードブレードを構え、アメノハバキリはガングニールの攻撃を交わす。

「くっ！」

「まだだ！」

両手に持ったソードブレードを連結。それをガングニールに向けて振るうアメノハバキリ。

## ——蒼ノ一閃——

「衝撃が!？」

「例え、お前達が塞がろうとこのまま引くわけにはいかない。行くぞマリア！」  
「まさか、私がここまでやられるなんて……けど、アレス隊長の為にも　！」

ガングニールは槍を向け、対するアメノハバキリもソードブレードを構えた。

場所は変わり地上ではナガスミのウイングガンダムフェニーチェリナーシタがアレスの操るガンダム・エクシエスにより苦戦を強いられていた。

『退け、お前を相手にしてる暇はない』

「マルス……いやアレス　！お前は間違ってる！こんな事してお前の家族が喜ぶのか!？」

『何故貴様がそれを……』

「ツバサ先輩から聞いたんだ……お前が家族を失って、変わってしまったことを。

けどな、復讐したって何もならないんだぞ！戦いは辛いだけだ……それにお前が今やってることは、お前の家族を殺したテロリスト達と何も変わらねーぞ！」

『ッ!? 黙れ……お前に何が分かる……目の前で家族を殺され、名ばかりの正義を語る奴等は誰も救ってくれなかった……綺麗事ばかり……並べるな……!』

「なに!？」

リナーシタのコクピットにドラグ・ファングが激突し、コクピットを半壊する。

「ぐああああああ!？」

「ナガスミ……!」

コンソールが爆発し、ナガスミは爆発の際に機器の破片が片目に突き刺さり声を上げる。そしてエクシエスの攻撃でリナーシタは大破し地上へ落下する。

「アレスッ！」

『はあ……はあ……』

ツバサのバルバトスルプスが飛び掛かろうとした時、ダブルオーライザーがエクスエスの前に立ちはだかる。

「アレス……お前の相手はこの俺だ」

『綾崎翔真……！』

だが、アレスと翔真の他にもう一人の介入者が現れる。

『熱源！……ッ……！』

「やあアレス君、初めてましてじゃないね……久しぶりだね」

「大東さん……」

ダブルオーライザー、ガンダム・エクシエス、千式はそのまま対等しつつも動くとはしない。

## PHASE・117 「イギリス防衛戦 10」

「やれやれ、あの手この手でどちらも譲らないか」

「なんだか滅茶苦茶……ていうかシヨウマさん　!? 私達呑気にしていいの!?」

「わたし達の目的はソレスタルビーイングと戦うことじゃないぞリーズ」

シヨウマ・バジーナとリーズはMSを行動不能にさせたあと密かに戦闘区域から離脱し海を眺めていた。リーズはアレズ達にバレてはいけまいと戦闘に戻ることを促すが、シヨウマはコーヒーを飲み干しコンソールを操作する。

「ここでやられるならそれも良しだ。だが、この世界を元に戻す想いがあるなら彼等には選択すべき権利がある」

「まさかシヨウマさん……あれの位置情報を送るの　?」

「ああ。直にドクターDも動くだろう。こいつを送ればわたし達の任務は終了さ」

シヨウマ・バジーナは翔真に向けてある情報を送る。

「やるわね！」

「マリア！」

「月読か!？」

「私もいるデスよ！」

「暁まで！だが！」

クアンタ・アメノハバキリはソードブレードでシユルシャガナとイガリマの攻撃を食い止める。しかし調と切歌はコンビネーションアタックを仕掛ける。

——災輪・TいN渦あBエル——

——β式獄糸乱舞——

「ぐっ！はああああアアアア三三」

——蒼ノ一閃——

アメノハバキリとシウルシャガナ、イガリマの間に衝撃波が生まれ周りにいたMSは勢いで飛ばされてゆく。一方でイギリス防衛戦は激しさを増し死人も多く出し、ナガスマを含む怪我人も多く出ており戦力は減るばかりだ。和馬やG S p i r i t S隊の面々も体力や精神を消耗し、休憩や補給を終えては出撃を繰り返していた。翔真は大東からイギリスの防衛に入るよう指示を受け、ツバサと共に戦闘区域へ向かっていた。

「憎しみが……悲しみが……頭に響く」

イノベイターの能力もあり、無惨にも散っていった兵士達の残留思念が翔真の頭に響く。全てはあの日から始まってしまった——自分が身勝手にしたばかりに、今この世界は波乱に満ちた状況に陥ってしまったている。

「くそっ！」

ガン！とコンソールパネルを叩いた翔真。ザフト側と大東側はせめぎ合ってい

る……しかし戦況は依然として油断を許さない状況にある、エクスカリバーはエクスピアが不在の中動き出し、とうとう時空管理局の方にまで被害が出てしまったことに翔真は歯を食い縛る。

「これ以上悲しみは沢山だ……」

迫るグフやダガーを行動不能にしつつ、翔真はダブルオーライザーをミネルバの方へ向かわせる。それに気付いたツバサが通信を送る。

『翔真どうする気だ！』

「ザフトに投降する」

『……！』

「このままじゃいずれ、戦いは終わらない……ツバサ、なのは達には悪いが……」

翔真がツバサに何か言うおとした時、匿名からの通信が翔真とツバサに届く。翔

真はその情報を開き驚愕する——月にある代物を見た翔真はツバサに指示を送る。

「ツバサ、見たな」

『うん。まさかこれがあるなんてね』

「ツバサ、お前は皆を引き連れて宇宙へ上がれ」

『……！』

「そうすれば、この世界を元に戻せる！」

『だけど翔真……君は……！』

「心配するな……必ず戻ってくる。なのは達にそう言ってくれ……それに俺が

ザフトに投降すれば、少しは時間稼ぎにもなる……あとは頼んだぞツバサ　！」

『……分かった　！』

ツバサはナガスマスのリナーシタを回収しトレミーへ向かう。そして翔真は全回線に通信を繋ぎATAG艦艇に指示を飛ばしていたリーンホースとミネルバの間に

割って入る。リーンホースから放たれるビームをGNソードIIIで叩き切る。

「何故だ!? 何故ダブルオーがミネルバを守る!?!」

「特務艦ミネルバへ。ソレスタルビーイング、綾崎翔真は貴艦に投降する」

『……!』

「ミネルバ艦長、篁唯依だ。ソレスタルビーイング所属の綾崎翔真でいいんだな  
?」

「はい」

「投降するならば……やる事はあるはずだ」

「もちろん。攻撃意思はないですからね」

翔真はそう告げると武装解除し、ミネルバのカタパルトデッキへ機体を着地させる。  
る。

「これでいい……だから、あとは頼んだぞツバサ」

——ザフト軍に通達、ソレスタルビーイング 綾崎翔真は投降しこれ以上の戦闘は無意味である。よってイギリスからの撤退を命じる、特務艦ミネルバ艦長 篁 唯依 ——

ミネルバから信号弾が放たれ、ザフト軍はイギリスから徐々に引いてゆく。一夏やなのは達は翔真を追いかけようとしたが機体の損傷も激しく追撃することは出来なかった。こうしてイギリス防衛戦はソレスタルビーイングの敗北で終わりを告げた。

## PHASE 118 「戦後の希望」

戦いから1日経ったイギリスでは復旧作業が始まっていた。高出力レーザー衛星 $\times$ エクスカリバー $\times$ でザフト基地を壊滅させたとして翔真は国民の敵という認識になり、その黒幕を捕まえたザフト軍は更に信頼を高めていた。

「すいません束さん。僕が不甲斐ないばかりに」

「ツバサくんのせいじゃないでしょ？それにシー君なら大丈夫だよ」

$\times$ 阿頼耶識システム $\times$ の影響で左腕が動かなくなったツバサは束に事の経緯を話して彼女に謝罪していた。最初はザフトに投降したと聞いた束達は明け方まで泣いていたが、今は復旧作業を優先にして現場で働いている。

「夜架ちゃんが、ザフトに潜入してるからきつとシー君を救ってくれる」

「彼女って一体何者なんですか……」

「東さんも会って間もないけど、根はとて面白い子だよ！」

「はあ……それよりも例のあれ、東さんは読みましたか？」

「うん。月の裏側……そこに　　ヰジェネレーションシステムがあるんだよね？」

「……はい」

ヰジェネレーション・システム……という経緯でそれがあるのかは分からな

いがツバサと束は明らかにこの世界が変化した要因だと確信していた。今現在の  
の数・施設など到底　2年で建造出来るものではなく、恐らくプレシア・テストロ  
ッサがこのジェネレーション・システムを使いガンダム世界の技術やMSなどをこの  
世界にもたらしたと推測出来る。

「(だけどここのジェネレーション・システムに世界を変える力なんてあるのか？

だけど、プレシア・テストロッサならそれが可能な手段を知っていた……)」

「トレミーの修理はいつ頃完了出来るかな？」

「恐らくですが、あと1日もあれば大丈夫です。それが終われば……」

「うん。束さんも一応この世界を変えちゃった本人だから……せめて

箒ちゃんやちーちゃん達が幸せに暮らせる世界にしたいな」

「……なら僕は翔真の為に ♪クアンタフルセイバー♪の最終調整に入りますね」

「ううん。それは束さんがやるよツバサくん。このクアンタの調整は束さん達に任せて」

場所は変わりミネルバ。居住区の奥にある部屋に翔真は身柄を拘束されていた。しかもその部屋には意外な二人もいた。

「本当、運命で悪戯よね」

「ですがお兄様、元氣そうで何よりです」

「お前達はいいよな。自由に身体を動かさせてさ」

ミネルバから脱走しようとした鈴、ラウラがいたのだ。実に数年ぶりの再会を果たした翔真は二人と世間話をしていた。

「鈴、ラウラ：：わりいな：：こんなことになっちまってさ」

「あんたのせいじゃないわ。ただ：：状況が悪くなっただけよ。それよりも、本当に一夏は生きてるんでしょね？嘘だったら承知しないから」

「心配するな。アイツなら元気だ」

「そうか：：嫁：：」

ラウラが安堵する中、部屋の扉が開く。

「君が綾崎翔真君だね？」

「！：：俺の声　!？」

「すっごーい！本当にショウマさんにそっくり！」

「申し遅れた。わたしは特務艦ミネルバ所属のショウマ・バジーナだ。よろしく」

ショウマ・バジーナは翔真に手を差しのべる。翔真が困惑する中でバジーナとリーズに連れられある場所へ向っていた。

「何処に向かっているんです？」

「君に会いたいという人物がいてね……ほら、噂をすればなんとやらだ」

「……」

「アレスカ……」

翔真を待っていたのはパイロットスーツを着用したアレスカだった。



最終章 君は僕に似ている——future Destiny

PHASE 119 「プレシア・テストロッサ」

ようやくクロスレイズ半分クリアした〜！ウイングガンダムゼロカスタムはやっぱりカッコいいね。

「随分と久しぶりだなアレス」

「…呑気に話し掛けるとは、相変わらずだな」

「用件はなんだ？…そこにいるのは分かってるんだぜ、プレシア議長」

翔真がそう言うのと、物陰からプレシア・テスタロッサが現れる。翔真はアレスに連れられプレシアと共に基地内にある応接室に場所を移した。翔真は両手首を拘束され身動きはあまり出来ない。

「こうして会うのは初めてかしら」

「そうだな。それで、俺をどうするおつもりで？ 民衆の前に晒して俺を処刑しますか？

戦場を混乱に陥れたソレスタルビーイングの要でもある綾崎翔真を……俺をね」

「それも案外悪くないかもね？ けれど、私としては貴方を騎士としてザフトに入っ  
て欲しいわね」

「議長、今なんと……聞き間違いじゃなければ綾崎翔真をザフトに入れたいと聞  
こえたのですが」

「アレスは少し黙りなさい……異論があるのは分かるけど、今はその時じゃない

わ

プレシアは翔真に視線を向ける——

「私としては貴方やアレス、それに箒達もいればこの世界を革新出来ると信じているの。

イノベーターの力とSEEDを持つ者達やニュータイプによる新世界を……その為に貴方が欲しいわ」

すでにプレシアは翔真自身が純粹種のイノベーターである事を把握し、更にはあまり解明されていない $\text{\textless\textless SEED\textless\textless}$ や、ニュータイプまで把握している。翔真が警戒を強める中でプレシアは笑みを崩さず更に話を続ける。

「この世界には、私が知る限り15万人程がSEEDやイノベーターになる可能性を秘めているわ。特殊な力を持つ者達が造り出す世界を私は実現させるの……そ

の為に貴方の力が必要なの……綾崎翔真」

「残された人達はどうなる？」

「残された人達……ああ、オールドタイプと呼ばれる者達に居場所なんてないわ」

「なん……だと　？」

「オールドタイプの間人間がいたところで何が出来るの？何の取り柄もなく、ただ潰し合う劣等種など不要なの。その点、能力を持つ者達が覚醒し、共に分かり合えば争いのない世界なんて簡単に作り出せる……私は、その世界を造る為に私なりの『デステイニー・プラン』を実現させるの」

「デステイニー・プランだと!？」

「けど、かつてそれを提案したギルバード・デュランダルとは違う仕様よ」

ミネルバが補給を受けているジブラルタル基地。シヨウマ・バジーナとリイズはある者達と連絡を取っていた。二人はザフトの赤服ではなく黒い服装に身を包み、ある物が飛来するのを待っていた。

「短い間だったけど、仕方ないですよね」

「箒君達には悪いが、我々も……いや、俺達とて議長のやることには反対なんで

ね」

「……あ　！　ショウマさんあれ！」

「来たか。さすがは響、仕事が早いな」

　見えざる傘を解除し、荒波を立て接近する2機のMS。二人が待つ海岸に到着したのは海賊仕様に開発されたガンダムAGE-2ダークハウンドとG・バウンサー改めG・サイフォス。二人はそれぞれの機体に取り込み、機体を起動させる。

「さあ、最後の任務と行くか。ここで騒ぎを立てさせてもらおう……」

　時空海賊ビシディアンの首領として、立ちほだから！　ショウマ・バジーナ

　ガンダムAGE-2ダークハウンド発進する」

「G・サイフォス、いっくよー！」

　2機は同時に立ち上がる——それと同時に複数のビームがジブラルタル基地に飛来する。

「よし、未来行くよ！」

「うん。響と一緒になら！」

複数の機体を引き連れ、時空海賊ビシディアンがジブラルタルに強襲に出る。

## PHASE・120 「ダークハウンド対エクシエス 前編」

時空海賊ビシディアン——時空管理局や地球圏連合軍が行方を追っている海賊組織。構成員は管理局や地球圏連合軍の元兵士達で構成された組織であり、汚職や武装の横流しや横領、MS強奪などに関与した政治家や部隊などをターゲットに強襲を繰り返しては戦いに必要な物資を両軍から奪取し、挙げ句には戦闘部隊を壊滅させた実力を持つビシディアン。中でも要注意人物とされているビシディアンの首領シキヤプテン・アツシュ。

「どうした？その程度か！」

かつて地球圏連合軍が救世主計画として開発した機体。ビシディアンによって奪取されたAGEシリーズの1機、ガンダムAGE-2。それを海賊仕様に改修したガンダムAGE-2。ダークハウンドはビシディアンの象徴として恐れられてき

た。キャプテン・アツシユ……いや、シヨウマ・アツシユはバジーナという偽りの名前を捨て、本性を現す。

「そらあ！」

武装の1つであるドズランサーを突き放ち、ザクウォーリアやグフなどの武装やウィザードパックを粉碎してゆくダークハウンド。基地から次々とMSが出撃する中でシヨウマ・アツシユは怖じ気ない……そしてダークハウンドは上空へ飛翔しバビの部隊に突っ込む。

『なに!? 撃て!』

『なんて動きだ!』

『マニユアル通りの戦いだと思うなよ』

リアスカートからビームサーベルを瞬時に抜刀し、一瞬にしてバビ数機を粉々にするダークハウンドは立て続けにドズランサーを振るう。

「リーズ、響はダブルオーの奪取。未来は俺と一緒に基地を出来るところまで壊滅させる」

『了解！』

『そうと決まれば行くよー！リーズちゃん！』

『はい！』

響の操るデスティニーガンダムとリーズの操るG・サイフォスはダブルオーが運び込まれた施設へ。そしてダークハウンドと未来の駆るガイアガンダムが再び攻撃を始めようとした時前方から砲撃。

「未来！」

「はい！」

ダークハウンドとガイアは砲撃を交わす——だが、砲撃が止むと同時に2つの機影が二機に迫る。

「ち、進入を許すとは……」

「全く、酷いじゃないか。折角お楽しみだったのにさ」

「アレス君か……面倒だな」

行く手を阻んだのはアレスのエクシエスとロランのウーンドウォード・ラーII。ガイアのパイロットであり、元は地球圏連合のパイロットだった小日向未来は、ガイアをMS形態へ戻すと、ロランのウーンド・ウォードに斬りかかる。

「お願いだから、引いて……！」

「くっ！これは確か連合軍に強奪されたガイアガンダム!?なぜそれがある！」

「シヨウマさん、こっちは私に任せて……早く……！」

「すまない未来。さあ、アレス君来たまえ！」

「……」

上昇するダークハウンドとエクシエス。二機はやがて対等に向き合い、ダークハウンドはドッズランサーを構え、エクシエスはビームソードスケルトウスを構えた。

「やはり裏切ったか……シヨウマ・バジーナ」

「気づいたか。悪いね……俺も、彼女の言う世界とやらには興味がなくてな」

「(チィ……戦闘後を狙って来たか……増援は望めない……やってくれろ

」

## PHASE 121 「ダークハウンド対エクシエス後編」

「やはり裏切ったか、シヨウマ・バジーナ！」

「裏切る？人間ってのは何時いかなる時も有利な方に付くんだ」

ダークハウンドはドツズランサーを構え、エクシエスに突撃する。対するエクシエスはビームソードスケルトウスでトウズランサーを抑えつけそのままの位置でドラグ・ファンングを放つ。ダークハウンドはエクシエスを蹴り飛ばし、迫るドラグ・ファンングにアンカーショットを放つ。

「くっ！」

「海賊には、海賊なりの戦い方があるんでね！アレス君、君のエクシエスと俺のダークハウンド……どちらが強いか試そうじゃないか」

「MSの性能が、戦闘の有利を決める訳じゃない……それを証明してやる」

フック型のアンカーを操りドラグ・ファンクを押し退ける——しかしアレスは周りに倒れた量産型MSを複数機あるのを確認するとコンソールパネルを操作する。

「ザフトでは噂程度で聞いていた。あらゆる時空に足を踏み入れ、強奪を繰り返す海賊がいると。まさかビシディアンの首領が貴様とは想定外だが……俺の邪魔をするなら

容赦はしない……ショウマ・バジーナ、消え去れ ！！」

「なに!？」

—— vampire territory ——

ダークハウンドの周りに先程戦闘不能にしたはずのグフやザクウォーリアーが集

まり、やがてそれ等の機体は一斉にダークハウンドに襲い掛かる。シヨウマは応戦しつつ機体をストライダー形態へ変形させ追っ手から逃げる。

「さすがに数が圧倒的では……ん　？」

「逃がさん！」

「ふん。ところがぎっちゃん……てな　！」

目前にエクシエスが現れる。ダークハウンドはすぐにMS形態へ戻るとビームサーベルを引き抜き応戦する。だが背後にエクシエスの特殊機能《vampire・terror》によって操られた機体達が迫る。

「シヨウマさんはやらせないよ！」

しかしリイズの操るG・サイフォスがザクやグフを次々と撃墜してゆく。高出力ヒートソードでコクピット以外の箇所を破壊していきながら、ダークハウンドをフォローする。

「リーズ何故戻ってきた!? 翔真君達は！」

「心配しなくても、私達以外の人も翔真さん奪還の為に来てくれたので大丈夫です  
！」

「なるほど……ふっ　！」

ドツズランサーとビームサーベルを振るい、エクシエスを追い詰めるダークハウ  
ンド。

「ちい……　！」

「アレス君、君は確かに強い。だが、強さを手に入れても何もならんぞ！」

「なに？」

「強さを手に入れてそのあとはどうする？……君のおこぼれに群がる小者達を従えて

お山の大将を気取るか？飯や服や寢床はどうする？それ等全ても君の持つ強さでも何もかも

取り上げるか……」

「何が言いたい」

「復讐して、力を手に入れて何も変わらない。過去を受け入れない限り

君は明日へ踏み出せない……そう言いたいのさ　！」

「！……知ったような事を……貴様に何が分かる　!?あの日全てを奪われ、誰

も俺の家族を助けてはくれなかったんだ！大東や綾崎翔真も！だから俺は誓ったんだ……自分の力で、全てを変えると　！立ち塞がるなら、貴様を殺す！」

「くっ！まだわからないのか!？」

ダークハウンドはアンカーを射出。アンカーはエクシエスの腕に巻き付き、それを確認した翔真はコンソールパネルを操作。するとアンカーから高圧電流が流れ、エクシエス全体に流れ込む。エクシエスは一時的にコントロールが不能となり地に着く。

「なに!? 動けエクシエス!」

「しばしの時間稼ぎだ……!」

ダークハウンドはストライダー形態へ変形しその場を去る。

## PHASE 122 「セブンスードとガイア」

時空海賊ビシディアンと基地に所属するザフト軍の戦いが激化する中で翔真・鈴・ラウラはこの騒ぎを利用して逃走を図っていた。兵士から銃などを奪い翔真達はMS格納庫へ走る。

「鈴、ラウラ！あと少しだ！」

「ちょっと待って！あれ見なさい！」

「先回りされていたのか!？」

「生まれ！さもななくば撃ち倒す！」

翔真達の前に兵士達が立ちほだかる。しかし格納庫から大きな爆発が起こり、兵士達は吹き飛ばされる。やがて砂埃が晴れると翔真達は走り出す——

『翔真様、お待ちしておりましたわ』

「!?ダブルオーが！それその声……夜架ちゃん　!？」

格納庫へ入るとダブルオーはセブンスードGに換装されており、側にはオーラ

イザーがスタンバイしていた。翔真を見つめるなり夜架はコクピットから姿を現し華麗に降下した。

「わたくしが出来るのはここまですわ。翔真様……」

「ありがとう夜架。すまない夜架……頼みがある」

翔真は夜架に鈴とラウラを頼み、翔真はダブルオーへ乗り込む。やがて夜架達もオーライザーに乗り込み一味先にイギリスに向けて発進する。

「ダブルオーセブンソード、発進する」

ダブルオーガンダムセブンソード、Gはそのまま出口へ。しかし全面に赤いMSが現れる。

「逃がさねーぞ……綾崎　！」

「こいつは……確か、ガンダムアスタロト……だっけ」

「くっ  
!？」

『ふん。あまり動くと衝撃が酷くなるだけだよ？』

ビシディアンの一員である未来はガイアガンダムでロランの操るウーンドウオー

トに対抗していた。ウインドウォートがメガ粒子砲を放ち、対するガイアガンダムは四脚獣形態へ変わり砲撃を交わしていくがメガ粒子砲の威力で地面が揺れ、ガイアは体勢を崩す。

『どういう経緯でそれがあるのかは知らないが、返してもらおうよ!』

「悪いけど、そうはいかないんだ」

ガイアは咄嗟にMS形態へ変わりビームサーベルを抜いてウインドウォートの攻撃を振り切る。そしてそこに一部装甲がオレンジ色のデスティニー……ZGM F・X42S REVOLUTION デスティニーが迫る。

『箒のデスティニーじゃない!? 一体なんだい!』

「それはちょっと話せないですね……我流正拳突き　!」

元は時空管理局に属し、今はビシディアンのエースとして戦う立花響はニヤリと笑みを溢しつつ、ウインドウォートに打撃を食らわせる。

『ぐっ！』

デステイニーがウインドウォートに対してストレートパンチを決め込み、更にフラッシュエッジビームブルーメランを放つ。しかしウインドウォートはヒートブレードでビームブルーメランを一閃し、そのままデステイニーへ近付く。

『もらったよ！』

「甘いですよ！」

こちらに突っ込むウインドウォートに対してアロンダイトを展開して向け、そのまま振り下ろす。

『しまっ：！』

「終わりです！」

デステイニーの掌が迫る——だが2つのビームがデステイニーに迫る。

「とお！」

『くっ！デステイニーがもう1機あるのか！』

『箒！油断しちゃダメだよ！』

『今はデステイニーが使えないのが苦しいが仕方ない……デステイニーインパルスR！』

篠ノ之箒、いざ参る！』

『箒に続くよ！アリシア・テスタロッサ、アメイジングZ行くよー！』

箒のデステイニーインパルスRとアリシアのアメイジングゼータが響のデステイニーに攻撃を仕掛ける。

## PHASE 123 「緊急脱出」

「やめてくれ！なるべくなら、戦いたくはない！」

『綾崎……お前のせいだ。こんな世界になったのも……！』

「その声!?!……お前、五反田弾か！」

『ああそうだよ……テメーのせいで、全てを奪われた……！』

「(弾も……俺のせいで歪んでしまったのか……)」

聞き覚えのある声に翔真は操縦桿を強く握り締め、事の重大さに気付く。箒やセシリア……更には弾の人生までも歪ませてしまったと悟る翔真はコンソールパネルを操作する。

「すまないな弾。必ず……必ず……この世界を元に戻す。だからそれまで待っていてくれ！——トランザム！」

ダブルオーが紅い輝きを放ち加速。弾の操るアスタロトを遮り、基地の外へ出る。やがてダークハウンドがストライダー形態でダブルオーの前に現れる。

『早く乗れ！このままバロノークまで向かう』

「分かった！」

『よし……各員に通達。綾崎翔真を無事保護……これより撤退を開始せよ』

ショウマ・アツシユの言葉に従い、ビシディアンのMSは撤退を開始する。響も撤退しようとはバロノークへ向かう。だが迫り来る筈のデスティニーインパルスRとアリスアのアメイジングゼータは響のデスティニーを囲む。

「くっ!?!」

『逃がさないと言った！』

『これで！』

「へえ……けど……！」

迫るデスティニーインパルスRにフラッシュエッジブルーメランを放ち、アメイジングゼータにはパルマフィオキーナを浴びせた。

『キャアアア!?』

『アリシア! くっ!』

「大丈夫。コクピットは避けましたから」

響のデスティニーは光の翼を広げ、未来のガイアを抱きかかえバロノークへと帰還する。ビシディアンの襲撃によってジブラルタル基地は壊滅寸前にまで陥り、ショウマ・バジーナの狙い通りある程度時間は稼いだ。ビシディアンは次にザフトが所有するマスドライバー施設を強奪し、MS用ロケットブースターにダブルオーを搭載した。

「ありがとう…助かったよ」

「気にすることはない。さあ急ぎたまえ…君の仲間も先程宇宙へ向かったそう

だ」

「分かった。えと……」

「キャプテン・アッシュだ。好きに呼んだらいい」

「……助かったよキャプテン・アッシュ。この恩は絶対に忘れない」

「別にいいさ忘れても。これから行く先わたし達は君達を手助け出来ない。

あと自分次第だ……」

「……了解した」

翔真はダブルオー\ロケットブースターへ乗り込む。そして――

「ダブルオー・ロケットブースター！ 行きますす！」

ロケットブースターを装着したダブルオーはマストライバーを走り、やがて空高く上がる。だが一部生きていたMS部隊が追撃しようとしたが、響のデステイニーがそれを阻止する。

「さて……最後の仕事だ」

シヨウマ・バジーナは空を見上げる。すると1機のMSが近づく……その機体は白と青のツートンカラーが目立つガンダムタイプのMS。ダークハウンドの横に着地し、機体のコクピットが開く。

「終わったか」

「ふっ、待たせたね……」  
※叢雲効※。行くんだろ？あそこに」

「ああ。大東貴一護衛任務の為、お前の力も必要だキャプテン・アッシュ」

「やれやれ……まだ休暇は取れそうにないか」

肩をくすめ、やれやれと言わんばかりにシヨウマ・アッシュは新たな戦場へ向かう。そして傭兵部隊サーペントテールの叢雲効は愛機のブルーフレームと共に※ダカール※へ向かう。



PHASE 124 「女神」ダカール演説 1

「くっ！」

イギリスから発進したトレミーIIやリーンホースIIは月に向けて既に最速で向かっており、翔真もそれに追いつこうとしていた。やがてダブルオーは大気圏を突破してブースターをパージする。

「このままトランザムで飛ばして——『そうはいかねえよなア？』！」

「見つけぜエ……綾崎翔真ア……テメーの力、どんなもんか

オレ様に、見せてみる！あげやあげやあげやあげや！」

「アストレア……ノーヴェじゃないな——！」

ダブルオーセブンソードGの前に、フォン・スパークのアストレアが立ち塞が

る。一方で時空海賊ビシディアンは次の戦場へと来ていた。今回はザフトの裏を暴き、世論を味方につけるために大東貴一はダカールにて行われるザフト支援派による議会を占拠し、演説しようとしていた。ショウマ・アッシュ率いるビシディアンと大東が雇った傭兵、サーペントテール叢雲効は今回演説の邪魔をされないようにする為の警備の役目を指示されていた。

「ショウマ・アッシュ、ダークハウンド出るぞ！」

「叢雲効、ブルーフレームD出撃する」

バロノークからダークハウンドとブルーフレームDが出撃する。今回の舞台となるダカールはザフトと友好的な関係を築く国であり、その為ザフト基地も存在している。やがてダカールの議事堂では既に会議が始まり、警備も開始されていた。

「うっひゃー…結構いやがるな。まあ、アレス君達がいなくてもまだマシかな」

『アレス?』

「おや、洩れていたようだね。すまない」

『気にするな。アレスとは……知り合いか?』

「ああ。あの若さで、しっかりしている……彼の  
MS エクシエスもかなりのもん  
だ」

『……エクシエス……すまないがアツシユ、もう少し情報をくれないか』

「ん?何か思い当たる節でもあるのかい?」

『少しな』

「その前に今日の主役のご登場だな」

地上を見ると一人の男がいた——  
ダークハウンドは地上へ降りるとその男  
をコクピットハッチへと招き入れる。

「やあまさか、時空海賊ビシディアン  
の首領が翔真君のそっくりとはね」

「正確には並行世界同一人物ですけどね。  
つうか、大丈夫なんでしょうね?」

今回はダカールでの演説ですけど、上手くいく確率はあるんですか？」

「正直自信はないよ。けどね、こうやって誰かが前に出て真実を語らなければ

いつまでも世界は変わらない。だからこそその決断だよ」

「なるほど……そろそろ議事堂に到着する。叢雲効、頼む」

『了解だ』

ダークハウンドは議事堂の前に降り立ち、大東を降ろす。警備が何事かと駆け付けようとしたがビシディアン の者達とghost隊により阻止され大東は二人の護衛と共に中へ入る。

「さてと、お仕事開始だ」

ダークハウンドはこちらに向かってくるザフト派に属する元地球連合軍のMS部隊ウィングを相手に立ち向かう。

『議会で、何をしようというか！』

黒くペイントされたウインダムジェットストライカー装備はビームライフルを連射する。ダークハウンドはアンカーを振り回しながらビームを打ち消し、ビームサーベルを抜刀して襲い掛かる——しかし、黒いウインダムはビームサーベル二刀流でダークハウンドの剣撃を受け止める。

「ちい！」

『ガンダム……どんなものか、見せてもらおうか　！』

## PHASE-125 「女神/ダカール演説 2」

他者より強く、他者より先へ！

---

「全く面倒だな！」

「余裕にしている暇はないぞ」

ダークハウンド・ブルーフレームDの二機は次第にウィンダムやグフなどに囲まれてしまう——しかし、ザフトの信頼を無くす為には大東貴一は命を賭けてまで演説を行おうと単身乗り込んでいく……ショウマ・アッシュと効は彼の行動を無駄にするものかと、断じて引こうとは思わない。次第に増えるザフトのMS部隊にビシディアンのMS部隊も苦戦を強いられる。

一方で大東貴一は単身会場へと来ていた。ザフト支援派が多数いる議員達は彼に對してヤジを投げるが大東はそれに動じることはない。テレビ局のリポーターに変装しているリイズとカメラマンに扮した響は大東に向けてマイクとカメラを向けた。

「議会の方々、このテレビを見ている視聴者には突然のご無礼を許して頂きたい。わたしは地球圏統一連合軍大東貴一であります。突然知らないおじさんが何言ってるんだと思うかもしれないが、わたしはザフトに對して言いたいことがあるのです」

「響さんカメラズームズーム！」

「分かってるよリイズちゃん……これで OK！」

議員がヤジを飛ばす中で大東は演説を続ける——

「ザフトはこの地球圏の平和を守り、紛争を根絶する私設武装組織ソレスタルビーイングをも倒したザフト……しかし彼等……いや彼女達は信頼を広げていく反面自分達の地位を

利用しザフトは自分達に従わない地域や国に対して武力による介入を行っている！これは許されるべきではない！」

大東のバックにあるスクリーンにはザフトの勢力下に従わない国々が焼かれる惨状が映し出される。ザクやグフ——数は200機だろうか、緑に包まれ平和を願うその国は一瞬にして焼野原となり、圧倒的な軍事力で次々に平和主義国を制圧する映像が流れ続ける。

「なんだこれは!？」

「オイ！ザフトは話し合いによる同盟を組んでいたのではないのかね!？」

「混乱するのは無理もないでしょう！しかし、これがザフトなのです！圧倒的軍事力を見せつけ、平和主義国を強制的に制圧し勢力に入れていく。こんなやり方があるものか！」

大東の演説は世界中に流されていた。ザフトによる軍事力での制圧——話し合ではなく力でねじ伏せるという映像は人々にそれなりに衝撃を与えた。一方で演説の中継を止めるように指示されたMS部隊は中継施設破壊へ向かう。

「行かせはせん」

『邪魔をするなァァ！』

ウィンダムがビームサーベルを抜刀し効のブルーフレームに切り掛かる。しかしブルーフレームはそれを避けてサイドスカートに装備されたソードドラグーンで

ウィンダムのコクピットを貫く——ウィンダムは爆散し、粉々となる。

「お前達は踊らされているだけだ。戦う意味さえ失えばそれは兵士ではない」

『はっ！どこの誰かは知らんがなァ！』

「っ！」

ブルーフレイムDの背後にウィンダムが迫る。ソードドラグーンを放ち、メイ  
ンカメラを破壊。メインカメラを失ったウィンダムはそのまま撃墜される。ダカ  
ールでの戦いはより一層戦いが激しさを増す。

## PHASE 126 「伝説」ダカール演説 3

ダカールでの演説が続く一方で、翔真はフォン・スパークの駆るガンダムアストレア type F と交戦に入っていた。力を試すというフォンに翔真は苛立ちを隠せない……一刻も早く月へ向かわなければならぬこの状況下で戦闘。月へ向かっている束達との距離も離れてゆき、翔真はフォンを倒してでも月へ向かおうとする。

「手強い奴か！」

『あげやあげやあげや…見せてみるよ綾崎翔真ア！テメーの力をオレ様になア!？』  
 「(トランザムは使えない……クソ　！)」

ダブルオーはGNカタールを両手に持ちアストレアに斬り掛かる。しかしそんな容易い攻撃でフォンがやられるはずもなく、プロトGNソードでカタールの刃を交わしてゆく。

『何を必死になってやがる？お前がいくら俺様を倒したところで何になる？』

「俺にはどうしてもやらなきゃならないことがある……」

『戦況がザフトに傾いてる状況でテメー等に何が出来る？無駄だと分かってもまだ戦うつもりか？』

「無駄だと決めつけるならそれでいい。だが、例え俺の身を犠牲にしても

この世界を……この世界に生きる仲間達を守る　！」

『言葉なら幾らでも言えんだよォ!!』

プロトGNソードがカタールを弾いて、ダブルオーのメインカメラに向かう。しかし間一髪のところ翔真は交わして、アストレアの背後を取る。

「そらぁ！」

『ちい!』

GNバスターソードを振り上げてアストレアを吹き飛ばしたダブルオーはそのま

まトランザムを発動しようとした——だが新たな機影が現れる。

『行かせない』

「ガンダム……」

『ヾガンダムアルテミーヾ、攻撃開始』

「ガンダムアルテミー!?!」

ガンダムアルテミーからビットが放たれ、ダブルオーはバスターソードを離して  
ビームサーベルで応戦する。しかし背後からフォンのアストレアが迫る。

『貰ったぜエ?』

「しまった……!?!」

「翔真アアアア!!」

あと僅かという時にビームがアストレアに向かって飛来する。モニターには翼の

クアンタと千冬の駆るアカツキシラヌイ装備が映し出される。

『綾崎無事か!?!』

『翔真! 無事なのか!?!』

「俺なら大丈夫……千冬さん、ダブルオーをトレミーに……」

『なに?』

「トレミーに届けてください。その代わり……アカツキを借ります」

『……訳は後で聞かせてもらおうぞ綾崎』

「はい……よっと」

翼のクアンタがアストレアとアルテミーを相手にしている間、翔真はアカツキへ乗り込む。千冬は翔真に託されたダブルオーをトレミーに届けるべく宙域を離れる。OSを書き換えて、翔真は力を解放する。

「クアンタの前に、こいつで慣れておく!」

背部に装備された宇宙戦闘装備シラヌイからヤタノカガミがコーティングされ

たドラグリーンが射出される。フォンとハナヨはドラグリーンから放たれるビームを回避する。

『翔真、新たな熱源が……これは　！』

「666S……レジェンドか　!?」

アストレア・アルテミーの後方からレジェンドが接近。レジェンドもまたドラグリーンを射出する。ドラグリーン同士によるビームの射ち合いの中で、翔真の駆るアカツキと湊のレジェンドがぶつかる。

『倒す……綾崎翔真アア　！』

『俺様も相手にしてもらおうか!?』

『フォンに……続きます』

「貴様達は私が相手だ！防人の剣、しかと受けよ！」



## PHASE・127 「伝説」ダカール演説 4

『純粹種でありながら、議長のやろうとすることに異論を唱えるなどと！』

「君は……！」

『やはり貴方は消えなければならぬ！生まれ変わるこの世界の為にっ！』

「くっ！だからと言って！」

レジェンドとアカツキはビームライフルを射ち合い、ドラグーンを放ちながらも攻防を繰り返す。湊は額の汗を払いながら翔真打倒の為に力を最大限発揮する。

『私は白雪明日菜の出来損ない……いや、黒雪明日菜さんと言うべきでしょうか。』

彼女の仮の肉体として生み出された私は適合が上手くいかずに、捨てられた……

・私と同じように境遇の子が沢山生まれ、適合がないと分かれば処分された……

！』

「……！」

『自分の肉体すら、金で買えると思った愚か者、黒雪明日菜を生み出したのは

貴方が原因です……さすれば、私は……！』

「やめてくれ！君は！」

『私には……どうしても抗えない……やはり私はクローンで……黒雪明日菜

の……』

胸に激痛が走り息も荒くなり、意識も遠のいてくことを感じる湊。湊の怒りを現すようにレジエンドの動きも素早くなりドラグーンがあちこちから翔真のアカツキにビームを放ち続ける。あと少しで倒せる———そう思った矢先、翔真のアカツキはビームを反射してレジエンドに近づく。

「それは違う！」

『……！』

「君は君だ！明日菜じゃない！」

「!?!?…な、何を言ってる…」

「命は誰にだって一つだ。君は明日菜が造り出したクローンかもしれない…だが君は君なんだ!?!?だから…」

アカツキはビームサーベル双刀型ビームサーベルを振るい、レジェンドに斬り掛かる。アカツキによるビームサーベルでの攻撃で腕や脚を破壊されたレジェンド…そのまま行動不能となり、パイロットである湊もそのまま気を失ってしまう。

「翔真! 戦域から離脱する!」

「すまないな翼。悪いがコイツも一緒に頼む」

「なに…そいつはザフトだぞ　! 翔真」

「悪い…訳は後で話す…だから今は…頼む」

「…仕方ない。トランザム　!」

翼の駆るクアンタ・アメノハバキリはトランザムを発動してアカツキとレジェン

ドを抱えて戦域から離脱してゆく。

『フォン……追わなくていいのですか？』

「どうせ今からじゃ間に合わねーよ。ま、奴の力はよく分かった……あとは』

フォンのアストレアはハナヨのガンダムアルテミーと共に別の宙域へと向かった。

その頃ダカールでは、未だに大東による演説は続いていた。ザフトによる武力介入や非人道的な決定的な証拠を提示したことで世の中の関心は次第に彼に集中していた。

『よくもそんなデタラメを！』

『そんなはずない！我らザフトは!?』

「分かったから……取り敢えず、黙ってる」

シヨウマ・アツシユの駆るダークハウンドは2機のグフによるフォーメーションにより苦戦していたがなんとか撃破することに成功した。だが、背後からまたもやウィンダムが現れ、更にはバビやディンなどのMSも一斉砲火を開始する。

「ちい……！」

「やれやれ……相変わらずだね。どこの世界でも過ちは繰り返されるのか」

「……！」

1機のウィンダムがビームサーベルを振るい、バビやディンを撃墜する——  
やがてそのウィンダムはサーベルを収めると、ビームライフルを装備する。

「さて、行こうか……慎重しくね」

コクピットシートに座り操作しているのは白衣を身に纏った男。かつてあの大戦でドミニオンと共に姿を消したその男は帰ってきた——偽りの仮面を外して。

「ディートリッヒ・エーベレスト……出る　！」

## PHASE 128 「最後のステージ」

「ドクターD……いや、ディートリツヒさん遂に仮面を外したか」

ショウマ・アツシュはドクターDこと、ディートリツヒの活躍ぶりをモニターで見っていた。ディートリツヒは偽りの仮面をつけて、この世界で様々な情報を採取しながら翔真や一夏達の世界を救うプランを考えながら密かにソレスタルビーイングを支援していた。

「さあて……柚月君、  
ミアレミを頼むよ」

『はーい！じゃあ行きますよ博士』

迫るバビを撃墜しながらディートリツヒのウィンダムは加速する。やがて飛来する機影がウィンダムに迫る。それは、かつてのミ厄災戦ミを最終させた英雄の駆り

し白き機体ヰガンダム・バエルである。ディートリツヒはコクピットハッチを開き、バエルへ乗り移る。

「ヰアグニカ・カイエルヰ…英雄の機体を操るなど、申し訳ない気持ちだが…

今だけは力を貸して頂きたい…我が盟友が命を賭けて演説しているんだ」

かつてあの戦いでディートリツヒは瀕死の重症を負った…だが、幸いにも

シヨウマ・アツシュ達により一命を取りとめ、数々の苦難を乗り越えながらも今戦場に立っている。自らの身体に施された阿頼耶識もまた、ディートリツヒなりの決意の証である。

「我が盟友であり、隊長の大東貴一に続く！」

ディートリツヒの駆るガンダム・バエルが双剣を構えて加速。目に見えぬ速さで

敵機を次々と撃墜してゆく。だが、未だにプレシアを信じるザフトMS部隊はバエル・ダークハウンド・ブルーフレームDに襲い掛かる。

『ザフトの信念を知らぬ愚か者がアアアア三プレシア議長に逆らう反逆者め!!』  
「彼女の支配下では、いずれ君達は苦しむだろう! だからこそさ!」

激突するグフイグナイテッドカスタム。パイロットはプレシアを信じる純粋な兵士——ディートリツヒは目付きを細めグフの両腕を粉碎する。

『馬鹿な!?こんなことが!?!』

「悪いね……!」

バエルはグフを蹴りとばす。ディートリツヒは通信を開き、大東の演説を聞く。

『我々人類は過ちをまた繰り返すというのか!?!今こそ我々は変わらなければなら

ない！

武力による制圧ではなく、人と人が分かり合う世界を造る為に！ザフトのやっていることはただ力を振るい、力でねじ伏せるだけの独立国家と同じである！』

「隊長、貴方は変わらないね・・・」

バエルを筆頭にダークハウンド・ブルーフレームDは敵勢力を圧倒してゆく。そして大東貴一の演説と証拠提示により世界中にザフトに対する不信感が募っていった。

「——どいつもこいつも邪魔をしてくるわね……  
……やはり貴方達は不要だわ……消し去ってあげるわ、なにもかも。だから……  
……！」

プレシアはパイロットスーツを着込み、自らMSに搭乗していた——彼女専用

にカスタマイズされたMS $\simeq$ MSN $\cdot$ 04 II ナイチンゲール $\simeq$ はゆっくりと浮上してゆく……虹色の不思議な空間に浮遊するナイチンゲールはビームサーベルを抜き、空間に亀裂を入れる。

「やらせない……やらせないわよ。これよりザフト艦隊は私に続け　！月に向かっているソレスタルビーイングをなんとかしてでも落とせ！ミネルバを筆頭に続け……この私に　！」

ナイチンゲールを先頭に、ミネルバなどの艦隊が次々と時空の空間へ入ってゆく。ザフト対翔真達の戦いは今まさに、最終局面を迎えようとしていた。

## PHASE 129 「願いと戸惑い」

ダカールでの演説により、世界中にザフトに対する不信感が募っている一方・

・翔真は無事にトレミーに帰還を果たす。娘や嫁達には泣かれたものの翔真は一瞬の平和を感じた。しかし安堵するのも束の間：プレシアはとうとう転移魔法による力でザフト艦隊ごと現れる。トレミー・リオンホースIIの行く手を阻む。

「翔真、まだクアンタの調整が済んでない！」

「分かっているさ。だから俺はこいつで出る！」

「ジャステイスガンダムで!?でもそれじゃ対抗が！」

翔真の視線の先には、束が独自に改修を施したジャステイスガンダムが鎮座していた。一応翔真専用にかスタムはされており、イノベーター用に対応している。

「シー君！」

「翔真パパ！」

「パパアア！」

「東、ヴィヴィオ、椿……」

翔真の元に東、ヴィヴィオ、椿が駆け寄る。

「シー君……この子達や私達がいること……忘れないでね……」

「もちろんさ」

「シー君……ジャスティスで出るのは？ダブルオーの方がまだ……」

「確かに、ダブルオーの方が性能は上だろ。でも、あいつは必ず俺との決闘を望んでる……純粋な戦士としてな。だから俺はそれに応えなくちゃならない」

「アレス君……マー君だよね……『待ってくれ　　！翔真！』」

東の言葉を遮ったのはクリスだった。クリスは翔真と東の間に入る……同時に翔真はクリスからある気配を感じた。

「クリス……お前、お腹の中に……」

「ああ……もちろん、お腹の子は兄貴との間に出来た子だ。翔真……頼む、兄貴を……兄貴を連れ戻してくれ！」

「——出来る限りのことはするつもりだ。だからクリス、お前は安静にしとけ。そろそろ行ってくる……！」

「クリスちゃん、離れるよ」

「あ、ああ……（兄貴……！）」

一方で、ミネルバ率いるザフト艦隊はトレミーとリオンホースⅡの前方に現れていた。そしてミネルバでは作戦についての話し合いがアレス・楯無・マリア・唯依によって行われていた。

「こんな作戦で大丈夫なの？アレス君」

「ああ。奴等の戦力は少ない……一気に正面から攻め込むと思わせ、艦を包囲して撃沈させる。その為にマリア、調、切歌を包囲する部隊に回す」

「ですが隊長、ソレスタルビーイングは確かに戦力は少ないと予測されます……ですが、奴等にはGspirts隊などもいるのですよ？」

「心配するな。そいつ等は俺が相手をしよう……篁艦長、俺は前方へ出る……構わないか？」

「勝算はあるのか？」

唯依が尋ねる——するとアレスは答えた。≪心配ない≪と……しかし、アレスにはどうしてもある未練が残っていた。それはトレミーに置いてきたクリスのことだ。妹のように可愛がってきたクリスは今敵艦にいる……更には彼女のお腹の中には新しい命が宿っている。

「何を迷っているんだ俺は……敵……綾崎翔真を倒せば全てが終わる……」

脳裏には悲しみに満ちたクリスの表情が浮かぶ——

『アルちゃん……ダメだよ』

「(ッ!? ね、姉さん! ……)」

ふいに背後へ振り向く。そこには自分の姉であり、あの事件により亡くなったはずのノインだった。

『アルちゃん……ダメ　！』

「黙れ……幻惑で……俺を惑わそうなど……あと少しなんだ……奴等を倒せば……　！」

アレスはふらつきながらも格納庫へ向かう――

## PHASE 130 「戦いの代償」

ツバサ・カミヤは動かない左腕に付けられたギプスを外して、パイロットスーツを着込む。そして修復されたバルバトスルプスの元へ向かう……するとある人物と出くわす。

「ナガスミ！」

「すいませんツバサ先輩。心配かけたみたいで……」

「お前……その右目……」

「コクピットでの爆発で、ヘルメットの破片が目に入ってしまった……でも、

阿頼耶識を使えば、一時的に目は見えますから大丈夫です！」

「ナガスミ……」

あのイギリスでの戦いで、アレスの駆るガンダム・エクシエスによって機体が破損しただけではなく、ヘルメットのガラス片が右目に入ってしまった失明したナガス

ミ。その右目には眼帯がしてあった。

「大丈夫つすよ先輩……それに、生ぬるい覚悟を持ってアレスに挑んだ俺が悪い  
ですから。だから今度は、ぜってえにアイツを止めてみせます！」

「まさか…… ヽヴィダールヽに？」

「ええ。それよりツバサ先輩……あれ」

「ッ！……ネプテューヌ……」

「先行ってますね」

ナガスミは気を利かせて先に格納庫へ。ツバサは下に俯いたネプテューヌ……  
いや、今は女神化しヽパールハートヽになった彼女はツバサに刀を向ける。

「ツバサお願い……バルバトスには乗らないで」

「……なんで？」

「……分からないの　？……もし、次にバルバトスに乗ったらツバサの身体は　!？」

お願い……だから……ツバサ……もう、貴方が傷付くのは嫌なのッ  
しても

行くなら……私を倒しなさい　！」

かつてある次元世界で戦場でしか生きること知らなかったツバサは、戦いの最中ネプテューヌがいる世界へ迷い込んだ。知らない土地で、平和な日常の中で愛機であるバルバトスと共にツバサは存在意義を見失っていった。だが、平和と愛・それを教えてくれたのは目の前にいる女神 ネプテューヌ……彼女が居たからこそ、ツバサは今こうして存在している。

ネプテューヌもまたツバサの悲惨な過去を知るからこそ戦いに出さたくない。それにバルバトスのリミッターを外せばどうなるかも知っている……

「ネプテューヌごめんね。けど……このままずっと見ている訳にもいかないんだ。それにこのままザフトの侵攻を許せば次元世界にも影響が出る」

「……ツバサ……」

「僕は君や……プラネテューヌを守る為に戦う……例え、身体の一部……いや……」

全てを犠牲にしても……だからごめん」

「ッ！行かないで……行かないでツバサアアアア」

「(ごめんねネプテューヌ。でも、僕は行くよ……)」

格納庫へ入ると、ナガスミの機体ヰガンダム・ヴィダールヰが丁度発進していた。ツバサも機体へ搭乗し、阿頼耶識システムの異常もないことを確認すると機体を動かす。

「バルバトス……もしかしたらこれが最後の出撃になるかもしれない。今までありがとうかな相棒……君は、よく頑張ってくれた。だから最後にもう一度だけ……」

・君の力を貸して。

ツバサ・カミヤ、ガンダムバルバトスルスプス……行きます　！」

トレミーから出る——既にザフトと交戦状態に入っており、シグナムや簪達も出撃して戦っていた。バルバトスはソードメイスを振りかざすと、そのまま敵軍へ突っ込んでゆく。

## PHASE・131 「開く扉」

ザフトと翔真率いるソレスタルビーイングの戦いは最終局面を迎える。プレシアはナイチンゲールから降りるとミネルバの一室で体を休ませていた。彼女もまたこの世界を変えようと努力してきた…… 世界を一新するために。

「明日菜……貴女は貴女の計画があったのかもしれない。けどね、人間は変わらない……己の命や死すら、金で買えると思った愚か者達は排除する……」

プレシアの脳裏に過る二年前—— 黒雪 明日菜と交わした約束。プレシアはコンソールパネルに手を伸ばして機体データを閲覧する。

「湊のレジエンドは消息不明……まあいいわ。所詮は明日菜の出来損ないに過ぎない」

プレシアはすぐに部屋を出てミネルバのMS格納庫へ向かう。一方で一夏が操るアメイジンストライクフリーダムはザフトMSと交戦に入っていた。

「当たれエエエエエ」

ストライクフリーダムの機動兵装ウイングからスーパードラグリーンが射出され、ドラグリーンが一斉にビームを発射して敵機の武装、メインカメラなどを破壊する。

『フリーダムか!?!』

『ちい!』

「頼む…邪魔をしないでくれ　!」

ストライクフリーダムはシュペールラケルタビームサーベルを抜刀し、そのまま敵機を半壊させる。共に援軍としてやって来たイギリス軍のリゼルが敵機との交戦に入る。

『一夏さん行ってください！』

『ここは我等が！』

『早く！月へ！』

『すまない！』

ストライクフリーダムはそのままザフトMSの壁に突っ込む。目標は月の内部にあるシステム……しかし、行く手を阻む者が一夏の前に立ちはだかる。

「敵機！……あれは      !? ジャステイス!？」

『』

ストライクフリーダムの前方に現れたのは、インフィニットジャステイスに似たMS。まるで騎士のような姿をしたインフィニットジャステイスは武装であるショットランサーを構えて激突。

「ぐっ!?」

』

「誰……なんだ……この感覚知ってる……だけど……」

『——当然さ』

「……!?この声は……!?」

白いインフィニットジャスティスから感じる気配……一夏が警戒する中でそのジャスティスから通信が入るが、その声は一夏にとって聞き慣れた声だった。

「千冬……姉……?」

『違うな……私はお前達を生み出す為に、失敗作として造られた織斑千影だよ』  
「生み出す?……何を言ってるんだッ!」

『知らないようだな?……なら、教えてやろうか——』

「織斑千冬と織斑一夏……お前達は造られた存在なんだよ。究極の人類を創造する織斑計画でなァ？」

「……な、何を……言って……」

『お前達という存在を生み出す為に、失敗作が数多く生まれた……その中の一人が私なのさ……この化け物』

「!?……そんなおとぎ話、誰が信じるかよ　!?」

『おかしいとは思わなかったのか？自分の身体能力に』

千景が言った言葉に一夏はあることを思い出した。過去に幾つもの怪我を重ねた一夏だったが回復力は異常なほど早かった。このことに関してはシャマルやツバサ

ですら解明出来ていなかった部分だった。

「俺が……造られた……存在　　？……」

『まるでキラ・ヤマトのようね？けど、貴方はキラ・ヤマトのように完全ではない……消えろ　！この世に織斑は複数人もいらぬ！』

白いインフィニットジャスティスがストライクフリーダムに迫る。

「一夏アア！」

『ほう？』

「ち……千冬……姉」

千冬の操るオオワシアカツキがビームライフルを射ちながら接近し、ストライクフリーダムを助け出す。

「千冬姉……俺達が造られた存在って……」

「！……何故それを……」

『私が教えたからだよ！』

「くっ！貴様アアアアアア…」

『来いよブリュンヒルデ！このガンダムジャスティスナイトで殺してやるよ!?!』

アカツキは双刀型ビームサーベルを引き抜き、ガンダムジャスティスナイトに立ち向かう。

## PHASE・1 3 2 「正義と運命 1」

PHASE・1 2 9 願いと戸惑いで、翔真の搭乗機体をアメイジングエクシアからジャスティスガンダムに変更しました。

『人類の夢、その素晴らしき結果織斑千冬！織斑一夏ア！ならばお前等は

消えなくてはならない！生まれ変わるこの世界の為に！』

「くっ！オイ一夏！しっかりしろ！……ダメか……！」

ジャスティスナイトはショットランサーを振り上げて千冬の駆るアカツキを叩きのめす。対するアカツキは双刀型ビームサーベルを駆使しながらジャスティスナイトの剣撃を交わしてゆくが、仮にも相手は≡一夏や自分≡と同じ存在。それ故に攻撃

も読まれてしまう。

『お前達は消えなくてはならない！私と一緒に！』

「ふざけるなァ！」

アカツキは迫るジャスティスナイトを蹴り飛ばす。

「……私や一夏は……確かに造られた存在だ。無論それを隠すつもりはない」

『なら——』

「だが私は戦う。自分の運命は自分で決める！……一夏ァ！」

「！……千冬姉……」

アカツキはストライクフリーダムに寄り添う。

「隠していてすまない。だが今は戦うことだけに集中しろ！まずは平和を取り戻してからだ……ちゃんと話をする。だから今は前を向いて戦うんだ一夏！」

「——そうだったな……そうだ……今は戦わなくちゃならないんだ  
 ! 鈴や

ラウラや皆を守らなきゃ!」

『足掻いたところでどうにもならないぞ! もはや世界は動きだそうとしている!』

「例え、そうだとしても!」

ストライクフリーダムはウイングを広げてドラグーンを射出する。ジャスティスナイトはビームの雨を避けながら二機に近付く。

『死ねエエ!!』

「「一夏嫁はやらせない!」」

ジャスティスナイトがショットランサーを振り上げた瞬間——ストライクフリーダムとアカツキの背後からビームが飛来し、ジャスティスナイトに被弾する。

「一夏!」

「全く！千冬さんも一夏も、あんな1機に手こずりすぎよ！」

「援護する！」

簪の操るG・セルフパーフェクトパック、鈴の操るアルトロンガンダムがジャスティスナイトに接近戦を仕掛ける。そしてイギリスで復元され改修されたネロブリッツを操るラウラは二人に続く。

「一夏行くぞ！」

「ああ！」

「数ばかりごちゃごちゃと……あれは　　！」

一方でナガスミとツバサと共に出撃して翔真はジャスティスガンダムで敵を薙ぎ払っていたがザフトのMSは次々と現れ苦戦を強いられる——しかし、束が独自

のルートで入手したフリーダム・ジャスティスガンダム用巨大補助兵装ミィアミィが現れ、ジャスティスガンダムはそのままミィアミィにドッキングする。

「さすがは束だ。ナガスミ！ツバサ！このまま突っ込む、掴まれ！」

《了解》

《分かりました！》

ミィアミィに掴まるバルバトスとヴァイダール……翔真はマルチロックオンシステムで一斉に敵をロックオン。そのままビーム砲やミサイルなどを一斉に射出し、敵機を次々と撃破してゆく。

「このまま行けば！」

《！接近する機体……デステイニーと……もう 1機はフリーダム!?》

「なんだと!?あれか……！」

『ジャスティス……翔真か ！』

『行くよ箒！見せてあげるよ！アメイジングストライクフリーダムの力をさ！』  
「箒か……」

ミーティアを加速させるジャスティスは二機にビーム砲を向けた——

## PHASE-133 「正義と運命2」

「お前等に構ってる暇はない！ツバサ、ナガスミ！」

《了解、ここは任せて！》

《行くぜ！》

ミーティアに掴まっていたヴィダールとバルバトスがデステイニー、アメイジングストライクフリーダムに向かう。しかし、新たな熱源が翔真達に迫る。

『行かせないデスよ！』

『同じガンダムフレームが相手なら！』

《くっ!?》

《ちい…退けよオ　！》

ヴィダールはライフルを発泡する。ミネルバからの増援で調と切歌のガンダムフレーム、シウルシャガナとイガリマがバルバトスとヴィダールを足止めする。ジャ

ステイスはミーティアで敵を一掃した後、ドッキング解除してステイニーとアメイジングストライクフリーダムに立ち向かう。

『ジャステイスで、このステイニーを倒せるものかッ！』

「舐めるなあ！」

デステイニーはエクスカリバーを二刀流が操り、ジャステイスに振り下ろす。ジャステイスはシールドで防ぎながらルプスビームライフルを射つ。

『私もいるんだよね！』

「ッ!？」

アメイジングストライクフリーダムがドラグーンを飛ばす。ジャステイスはステイニーを蹴り飛ばし、ルプスビームライフルでドラグーンを二基破壊し続いて肩部にあるバツセルビームブーメランでドラグーンを弾く。

『手強い!? 何故だ… 所詮は二年前の機体はずなのに ！』

「最新だから強いって訳じゃねーよ…」

『生意気！』

デステイニーとアメイジングストライクフリーダムはジャステイスから離れると一斉にフルバーストを繰り出す。

「連携も見事って訳かよ！」

《翔真！》

「ウイングゼロ!? それにその声… フェイトか ！」

《翔真！ お前はいいけ！ ここは私とハラウンで抑える》

「すまないフェイト、シグナム！」

増援に駆け付けたのはフェイトとシグナム。フェイトは翔真の愛機であるウイングガンダムゼロカスタムを駆り、シグナムはインフィニットジャステイスを駆って箒達に迫る。

『逃げるな！ くっ！ 邪魔をするな！』

『全くもう、次から次へと!』

《ハラオウン、お前はあのフリーダムを頼む》

「了解。それとシグナムさん……」

《なんだ?》

「絶対に無事でいてください。じゃないと翔真が悲しみますからね」

《……何を言い出すかと思えば……ハラオウンこそ、無事でいろ……いい

な?》

「もちろん。行くよ、ゼロ!」

『来るの!?!』

ウイングガンダムゼロカスタムがアメイジングストライクフリーダムに近付いた瞬間——ゼロシステムが反応する。

「数が多い！それほどまでに多いということか！」

《翔真無事か…てっ　！　なんでジャスティスなんだ!? クアンタはどうした!?》

《翔真、クアンタはどうした?》

「生憎、まだ調整が済まなくて…和馬さん、ニックさん」

翔真のジャスティスに、和馬のHi-レガンダムリベレーターとニックの新たな機体、ガンダムAGE-Xが現れる。三人は敵を蹴散らしながら月へ向かう——  
—だが、月から飛来するビームが3機に迫る。

《散開！》

和馬の指示で3機はビームを交わした。月からは量産型MSが次々と現れ、更にはガンダムタイプが確認されるが、和馬はあることに気付いた——

「気を付けろニック、翔真……これは」

和馬の視線の先……そこにはデルタプラス・AGE 1・エールストライクガンダムが存在していた。



PHASE 134 「正義と運命 3」

『もうやめろ！やるんだ！』

『近付けさせるかよ！』

『僕とガンダムならやれる！』

「ちい！ニューロか！」

「和馬さんとニックさんは下がって！ミーティアで一掃してやる！」

システムによって生み出されたニューロ。ストライク、デルタプラス、AGE-1がガフランやリーオーなど引き連れて接近する。時間をここで無駄に消費している時間などない翔真は再びジャスティスをミーティアにドッキングさせる。

「ターゲットマルチロック……！いっけエエエエ……」

フルバーストで再び敵を一掃してゆく翔真——しかし、後方からザフトMSが接近。更にはアレスの駆るガンダムエクシエスがいる……それもジャステイスのミーティアと同じようにMA？とドッキングしている。

「あの機体……やはり来たかアレス……」

『今度こそ終わらせてやる、綾崎翔真』

「来い。相手をしてやるよアレス……！」

『面白い』

ジャステイス+ミーティアとエクシエス・シユタベルは互いにビームソードを展開する。

「気を付けろナガスミ！」

「奴等も同じガンダムフレイムっぽいけど、負ける訳にはいかねーよな！」

『切ちゃん！』

『任せるデスよ！』

ナガスミの駆るガンダムヴィダールがバーストサーベルを構えて接近——切歌の駆るイガリマは武装である推進器内蔵大型鍛造釜斧ヰザバヰでバトルサーベルによる攻撃を食い止める。

「しゃらくせエ！」

『こちらにもあるデスよ！』

「マジかよ！」

ヴィダールが脚部にあるハンターエッジでイガリマを攻撃しようとした時、イガリマもまたヒールブレイドでハンターエッジによる蹴撃を食い止める。

『貴方達を逃すことは出来ない』

「悪いけど、君達は倒させてもらおうよ……バルバトス　！」

『行くよ……シウルシャガナ』

バルバトスルプスとシウルシャガナは互いの主に反応するかのようにならぬようにデュアルアイを激しく光らせ、そのまま激突する。バルバトスルプスはソードメイスを振り上げてシウルシャガナに打撃を与える。

「粉々にするよ」

『獣め……！』

バルバトスルプスが獣なら、シウルシャガナはバレリーナのような動きで対抗す

る。バルバトスルプスを背部にあるスラスタ―兼鍛造可変チェンソーで弾き、蹴りをお見舞いする。

「やる！バルバトス…あんな奴に負ける訳にはいかないだろ…だからさア」

『…………』

場所は変わり一夏がいる宙域ではプトレマイオス2とミネルバが戦っていた。

「ミネルバか…！邪魔をするでない！シュテル、小鴉（はやて）は!?」

「はやてさん達も戦っているみたいです。援軍は望めませんね」

「やるしかあるまい。GNミサイル発射！」

プトレマイオス2（以後トレミー）はミネルバに狙いを定める。

「艦長！敵艦がこちらを！」

「あちらもやる気ということか。ミサイル発射管用意、ナイトハルト射てエエ！」

ミネルバもまたミサイルを発射。トレミーから放たれたミサイルは破壊したが、次はビームが飛来し艦に直撃するもミネルバも反撃に出る。ディアーチェと唯依は次の一手を考えながら攻めてゆく。

「ミネルバか……落とす　　！」

『おっと、ここから先は行かせないよ？』

「この声は！……イギリスで戦った奴か　　！」

『また会えて嬉しいよ、ストライクのパイロット君』

「っ……」

ルウエンのストライクノワールの前にロランの駆るハイゼンスレイ・ファイバーが立ち塞がる。



## PHASE-135 「正義と運命 4」

『わ、私が負ける……!? そんな』

「ラウラ！」

「任された！」

鈴のアルトロンガンダムとラウラのネロブリッツはジャスティスナイトの両脚を破壊。そして簪のG—セルフがビームサーベルでメインカメラを破壊する——

『くっ!?』

「はああああ！」

一夏の操るストライクフリーダムはシュペールラケルタビームサーベルでコクピットを突き刺す。激しい火花を散らしたジャスティスナイトは爆散する。一息つく間もなく一夏達に新たな敵が接近していた。

『見つけたぞ！一夏ア！』

「弾か！」

《ちょ!?なんであいつまでザフトに居るわけ!?》

「鈴、知らなかったのか?」

《ええ。まさかこんなこと…》

「ツ…インパルス…楯無さんか。簪、頼めるか　?」

《うん。お姉ちゃんがインパルスにいるなら…》

《それならば別れるぞ!私はトレミーの護衛に、一夏と凰は赤い機体を、ボー

デヴィツヒと更識妹はインパルスを…皆、必ず無事でいろ　!》

「了解!」

《了解!》

一夏と鈴は弾が操りガンダムアスタロト・ブレイジング改に向かう。

『今度こそ落とす!』

「この馬鹿…あんたまで、なんでそんなのに乗ってんのよ　!」

鈴のアルトロンガンダムがドラゴンハングで攻撃するもアスタロトはそれをメイ  
スで弾き、鈴と一夏に接近する。

『はっ！鈴か……簡単な話さ。俺の全てを奪ったのは一夏や翔真だからだ　！』

「あんた正気で言ってるの!? 一夏や翔真がいなけりゃ、私やあんたは生きてない  
のよ！」

『黙れ！俺は奪われたんだ……蘭を……家族を　！』

「蘭……ですって……」

『退けよ鈴……俺が用あるのは……一夏だ　！アスタロトツ！一夏から……』

あいつから全てを奪ってくれ！』

アスタロトのデュアルアイが赤く光る。対するストライクフリーダムはスーパー  
ルラケルタビームサーベルを二刀流に構える。そして一夏はコンソールを操作す  
る。

「(翔真……お前の力を借りる。阿頼耶識に対抗するにはこれしかない……」

親友から借りた力——一夏は打ち込む。≪CORD ZERO≫と。

「ゼロシステム：：使いこなしてみせる　！」

『動きが変わりやがった：：そっちもやる気って訳かよ』

「鈴、手を出すなよ。ここからは俺と弾の勝負だ」

『おもしれえ：：』

「一夏！」

鈴のアルトロンを退かして、ストライクフリーダムはドラグーンを射出。ドラグーンから放たれるビームをアスタロトは防御しながら近付く。しかしアスタロトの動きを予測した一夏はそのままクスイフィアス3レール砲を放つ。

『がっ!?!こんのオオオ！』

アスタロトはスレッジハンマーをストライクフリーダムの左翼に目掛けて投げ放つ。スレッジハンマーが直撃し、左翼が歪み体勢を崩すストライクフリーダムにアスタロトはもう1つのスレッジハンマーで殴りに掛かる。1発、2発、3発とダメージを与え、VPS装甲でも大きな打撃を防御することは出来ず右肩と右腕が爆

発を起こし大破する。

「『弾／＼夏ア！』」

ストライクフリーダムはアスタロトとぶつかり合いながら宙域を加速する。

PHASE 136 「妹よ」

『一夏アアアア…』

アスタロトが殴る——

「はああああアア…」

ストライクフリーダムもまた殴り返す。

二人の白熱した戦いはヒートアップしていた。ザフトの艦にぶつかり味方を巻き込みストライクフリーダムとアスタロト・ブレイジング改の戦いは激しさを増していた。左翼が歪み、右肩と右腕が破壊されたストライクフリーダムとメインカメラが半分程破壊され、所々小破したアスタロト・ブレイジング改…互いに距離を

取り再び殴り合う。

『俺はお前等が憎い！憎い憎い憎い憎い……！！』

「だからって、お前が戦って何か解決するのかよ弾！」

『うるせエエエ……』

「ぐっ！がっ!？」

『なら返してくれよ!？蘭を……皆を……！！』

「弾……」

アスタロトはリナノラミネートソードを持ちストライクフリーダムの右翼を切断  
 ——やがてコクピットにそれが向けられる。

『死んで償えよ一夏……！！』

「ここで……やられてたまるかアアアアア……」

ここで一夏は『SEED』を発動した。大破寸前のストライクフリーダムはアスタロトを蹴り飛ばすとガリドウスを発射。それを何回も発射し、小破していたアスタロトのメインカメラを破壊する。しかしアスタロトはバンカーブレイド……それも火薬式ダインスレイブを使う。

「ッ！」

『い、いち……か……！』

「なに!?(ここで死ぬ訳には……！)」

『(虚……俺は勝つ……そして……！)』

左腕が貫通し、爆発を起こすストライクフリーダムはそのまま体勢を崩してゆく。次に脹ら脛部分に収納されたビームピストルを取り出し、連射。もはや反撃すら出来ないストライクフリーダムは様々な場所に被弾しやがてフェイズシフトダウンとなる。しかしアスタロトはリナノラミネートソードを持ち、ストライクフリー

ダムのコクピット付近に投げる。コクピット内部に小さな爆発が起きて、一夏は破片が刺さったことで出血し気を失う。互いにポロポロになった両機は動かない。しかし……アスタロトはゆっくりと動き大破したストライクフリーダムに近づく。

『は……は……は……ようやく……仇を取れる……これで……』

———お兄ィ！ダメエエエエエエエエ三三三

『蘭……今の声は ……!?』

「もうやめてよお兄……こんなこと……しっちゃ……」

『嘘……だろ……』

大破した二機の前に現れたのは緑色の光を発した◇RX-0 ユニコーンガンダム◇。  
：一夏の愛機であり、操縦しているのはかつて生き別れになりティワズで身を寄  
せていた弾の妹◇五反田蘭◇だった。

「もうやめよ？お兄……私はここにいます。ここにいますから……」

『ら……ん……』

蘭はユニコーンを一夏に届ける為に自らの危険を省みず、この任務を引き受けた。だが蘭も蘭で困惑していた：：かつては親友同士だった二人が戦場で戦っていたのだ。それも本気の戦いであり、蘭は密かに聞いていた：：戦闘中の会話を。

『嘘だ：：蘭は：：蘭は　　！ああああ』』

「お兄！：：今は取り敢えず一夏さんを助けないと　！必ず待っててお兄：：迎えに行くから！」

弾は目の前に現れ生き別れになった蘭に混乱し宙域から去る。蘭はひとまずユニコーンから降りると一夏の手当てを開始する。一方でゼロシステムによってあるものを見せられたフェイトはアメイジングストライクフリーダムのパイロットの正体に驚愕していた。

「お姉：：ちゃん：：」

『はああああアア：：』』

「こんなのって……！」

アリシアが駆るアメイジングストライクフリーダムはビームサーベルを抜刀し、フェイトのウイングガンダムゼロカスタムに迫る。

## PHASE-137 「ハシュマルの目覚め」

『がっ！やる……！けど！』

「がら空きだよ！」

バルバトスルプスはソードメイスをシウルシャガナに振り下ろす——しかしシウルシャガナは頭部に連結されたティルコンテナをサブアームとして展開し、ルプスを退かすとそのまま月面へと蹴り落とす。

「邪魔をしないでもらえるかな？」

『それは出来ない……貴方達がやって来たことは、決して許されることじゃない』

「罰は受けるさ……君達を倒した後でね……！」

『な、なに!?!』

「もっとだ……全ての力を叩き込める力を……寄越せ、バルバトス……！」

赤く煌めくデュアル：・肩部アーマーから青い炎が吹き出したバルバトスルプ  
 スはソードメイスを構えてシウルシャガナに接近——ソードメイスで打撃を与  
 えて立て続けに腕部に搭載されたロケット砲を至近距離で放つ。

「はああアア三」

『ッ!? 阿頼耶識：・シウルシャガナから伝わる：・』

「へえ、あんたも阿頼耶識：・あるんだね。まあ関係ないけど：・」

『やられるつもりはない——Various shulshagana tro  
 n——』

聖詠がシウルシャガナから聞こえ、やがて機体は光りに包まれる。各部装甲が分  
 解し再構築されてゆきピンクと漆黒のツートンカラーに染まったシウルシャガナが  
 姿を表し反撃する。

『これで!』

— a 式・百輪廻 —

— β 式・獄糸乱舞 —

シウルシャガナから丸ノコが放たれ、バルバトスルプスはそれを小型メイスで弾いてゆくがシウルシャガナは立て続けに攻撃する。

「シンフォギアシステムか……厄介だけど……！」

『シウルシャガナ……バルバトスをやっつける力を……！』

バルバトスルプスとシウルシャガナが対等する中、ナガスミ操るガンダムヴェイダールは切歌が操るイガリマを相手にしていた。

「出来れば君みたいな可愛い女の子とは戦いたくないな！」

『な、ナンパデスか!? 悪いデスが、私には大切な人がいるデース!』

「よっと! 上手くはいかないか!」

『喰らうデース!』

「女の子と戦うのは気が進まないが！」

翔真イズムを大切にするナガスマは出来れば可愛い少女である切歌とは戦いたくないが、切歌は断然やる気満々である。ヴィダールはフロントスカートにマウントされたハンドガンを連射。

『効かないデース！』

イガリマは武装である推進器内蔵鍛造鎌斧~~ミ~~ザババ~~ミ~~を振り回して弾を弾く。ライフルやハンドガンの乱れ撃ちをするもイガリマはザババで弾を全て撃破する。

「……近接しかないか」

『ふふーん……来れるものなら……！』

「仕掛けてやるよ！」

ヴィダールはバーストサーベルでイガリマに突っ込む。一瞬の隙を狙い、ナガス

ミは腰部バインダーにある替刃を二本を同時に射出するとそのままイガリマに突き刺す！

『キヤアアアアア!?!』

「うらあ！」

『なんて野蛮な!?!』

「戦いに野蛮もあるかよ！」

『ならば——zeiosigalimarairizen tron——』

「なに……」

各部位装甲が再構築され、中破していたイガリマは緑と漆黒のツートンカラーに染まり機体は完全に復元されていた。

「マジかよ！」

『仕返しデース!』

「ちい！そんな訳がわからねーねガンダムに負けちゃ、ガンダムパイロットとしてつとらまねえ！はああ！『PPPPPPPPPP!』なんだ!?!」

『なんデスカ!?!』

『なにかが……来る　!』

「この感じ……まさか　!?!」

バルバトスルプスとヴィダール、シウルシャガナとイガリマは何かを察知する。各機体は赤くデュアルアイを点滅させ硬直する。やがて月面から飛び出したのは



「……  
　　≪ハシユマル≫」

長い尾を持ち、大きな翼を広げた鳥のようなフォルム……それはガンダム・フレームにとって最恐の天敵MA≪ハシユマル≫。機体は硬直したままでありハシユマルはバルバトス達を捉えると素早い速さで接近する。

「——来る！避ける！」

「ちい！」

「切ちゃん！」

「くっ！」

4人は自力で機体を動かし、バルバトス達はハシユマルの猛攻を交わす。



「(まさかMAが……それもハシユマルかよ…… !)」

4機のガンダムフレームはハシユマルを見上げる——やがてハシユマルの周りに子機プルーマが次々と出現する。



## PHASE-138 「集結、ガンダム・フレーム」

『なんなの……あれ……身体が……』

『強大なのデース！』

「ツバサ先輩、ありゃまさか！」

「そのまさかだよ……全く、厄介なものまでいるもんだ」



ハシユマルは頭部ビーム砲を発射。近づくザフトMSが一瞬にして塵となり、更には超硬ワイヤーブレードを操りバルバトスとシユルシャガナを蹴散らす。そして子機であるブルーマ達がヴィダールとイガリマに迫る。

『イガリマが……！動かないデース!?!』

「なにやってんだ！」

ヴァイダールはイガリマを抱えるとそのままライフルを発泡。プルーマの1機が弾かれるもプルーマの大群の勢いは止まらない。

『ちよつとなにするデスカ!?!』

「うっさい！今敵とか言ってる場合じゃない！いいか、よく聞けよ！あれはハシユマルっていうMAだ。全てを虐殺するMAだ……最悪、ザフトや俺達両方ハシユマルにやられる！あれはAIで動く無人機だ……尚更立ちが悪い！」

『!?!』

「その通り……ハシユマルは破壊と虐殺の限りを尽くす……」

『分かる。あれは危険……！』

「なら今は一時休戦にして、ハシユマルを共同で倒すよ。多分僕やナガスミだけじゃ足りない……協力してもらえるかな？　じゃないとハシユマルは止められない！」

『——分かった。切ちゃん、今は協力するよ』

『ちょっと調！本気なのデスカ!?』

『…あの MA はバルバトスのパイロットの言う通り、危険。もしあれを無視すれば隊長やマリア達が巻き込まれる可能性がある…』

『…分かりました…調が言うならやるしかないデース！』

「交渉成立かな。ナガスミ！分かっているだろうが…」

「はい。協力の間は攻撃しない…ですよね？」

バルバトスルスプス・ヴィダール・シュルシャガナ・イガリマは対等に並びブルマを迎え討つ。

「数ばかりうじゃうじゃと！ナガスミ！」

「ツバサ先輩は行ってください！阿頼耶識のリミッターを解放したバルバトスなら！」

「完全に殺れるか分からないけど…やる…」

『私も援護する、バルバトスのパイロット』

「そうかい。分かったよ」

バルバトスルプスはシュルシャガナを背後に乗せて走り出す。飛び掛かるプルーマをシュルシャガナが弾き、バルバトスルプスはソードメイスでプルーマを蹴散らす。

「行くぞ鎌のガンダム！」

『しょうがないデース！』

プルーマ達はヴィダールとイガリマに近付く。ヴィダールはイガリマと共にプルーマを駆逐してゆく。

「『ぐっ?!』」

プルーマを押し退けてなんとかハシュマルの元にたどり着いたツバサと調……





## PHASE 139 「最終決戦 1」

（貴女は誰！）

（貴女こそ誰なの!? ……姉さんはもう ……！）

ウイングガンダムゼロカスタムを操るフェイト。アリスアが乗るアメイジングストライクフリーダムと交戦していた。ゼロシステムにより明かされた事実にはフェイトは困惑していた……何故ならばアメイジングストライクフリーダムに乗っているのは≡アリスア・テストアロツサ≡だからだ。

「姉さんはいないはずなのに……！」

『邪魔ばっかりしないでよ！お母さんの邪魔ばかり……このオオオオ』

「行くよ、ゼロ。私は……翔真と一緒にこの世界を救いたい。だから ……！」

アメイジンググストライクフリーダムはドラグーンを放つ。ゼロカスタムはビームサーベルを二刀流に構えるとビームを弾きアメイジンググストライクフリーダムに近付く。蹴りをお見舞いし、サーベルを振るいレフトアームを斬り刻む。

『はっ!?!』

『もらった! 『アリシアアアアア』』 デスティニー!?!』

『よくもアリシアを!』

箒のデスティニーガンダムが光の翼を広げアロンドイトを構えて接近——し  
かし千冬の駆るオオワシアカツキがデスティニーのアロンドイトを防ぐ。

『千冬さん!』

『すまない。デスティニーは任せろ……お前はそいつを相手にしろハラオウン  
!』

『は、はい!』

《篠ノ之……！》

『何を今更！この裏切り者がアアアア……！』

アカツキとデスティニーが……ウイングゼロとアメイジングストライクフリーダムが激闘を繰り広げる中でラウラと簪は楯無が操るインパルスを相手に戦っていた。

「お姉ちゃん！——返事をして！ダメだ……通信に応じない！」

《もしかすると、インパルスには何か細工を仕掛けられている可能性がある。》

簪、インパルスを行動不能にするまで戦うんだ！》

「分かった。ラウラ、フォーメーションF32」

《了解！》

『何？そんな攻撃で！』

フォーseinパルスがビームライフルを射つ。しかしながらラウラのネロブリッ

ツはミラージュコロイドステルスにより姿を眩ませ、G・セルフがインパルスに攻撃をする。

『なんなのよ！この強さは！』

「お姉ちゃん……ちよつと痛いけど我慢して……ラウラ　　！」

《はああああアア三三》

『っ！しまった!?きゃああアアアアア!?』

インパルスはコクピット以外をG・セルフとネロブリッツによる連携攻撃により破壊され行動不能となる。簪はコクピットハッチを開きインパルスのコクピットを外部から開けた。

「お姉ちゃん！」

「!?……その声……簪ちゃん……なの　　？」

「うん……うん　　！」

一方で、アレスを近くで感じたクリスは自身の専用機であるニヤイアアストレイで出撃していた。迫るザフトMSを蹴散らしながら翔真とアレスが戦う宙域へと迎うクリス……

「(兄貴……！)」

『ソレスタルビーイングの仲間か！』

「ちい！しつけえな！」

再びザフトMSがクリスに近づく——だが、ニヤイアの前に黒いMSと青いMSが現れザフトMSを撃破する。

「なんとか間に合ったな……効さんよ」

「ああ……」

D  
だった。  
ニヤイアの前に現れたのはシヨウマ操るダークハウンドと効操るブルーフレーム

## PHASE-140 「最終決戦 2」

『この裏切り者がアアアア!!』

「篠ノ之、頭を冷やせ！議長は世界を……！」

『黙れ！裏切り者の言葉などに惑わされる私ではない！』

「この……分ならず屋がアアアア ……」

千冬のアカツキと箒のデステイニーがぶつかる。互いに譲らぬ攻防を繰り広げては言葉を投げ掛ける。デステイニーはエクスカリバーを失いアロンドイトで応戦・  
：しかしアカツキの双剣型ビームサーベルによって粉碎される。

『そ、そんな!?!』

「篠ノ之……私はお前に以前言ったはずだ。力はただ力……それを怒りに身を任せて振るうか、信念を貫いて振るうかと……」

『な、なにを！』

「今のお前はただ議長の言いなりになって戦っているだけだ……篠ノ之、お前なら私のようにはならないだろう……だが　！」

千冬の中でSEEDが開花する。琥珀一色となった瞳にデステイニーを捉えろと、アカツキによる一斉射撃を放つ。デステイニーはビームシールドで防ぐが勢いにより吹き飛ばされてしまう。

『ッ！あんたって人はアアアア！』

しかし箒もSEEDを発動——デステイニーは光の翼を羽ばたかせてアカツキに接近。パルマファイオキーナをアカツキのメインカメラに命中させ破壊。そしてフラッシュエッジビームブーメランで右肩を切り裂く。

『はああああアアアア!!』

アカツキとデスティニーは互いにビームを放ち、同時に爆発が起きた——  
方で月面ではハシユマルによる暴走は続いていた。ツバサ・ナガスミ・調・切歌・  
：そして事情を把握したマリア・カデンツァヴナ・イヴはハシユマル打倒の為に  
奮闘していた。

『も、もう力が……出ない……』

『私も……もうヘトヘトデース……』

「くっ……ツバサ先輩……」

ナガスミ、調、切歌は体力や機体から掛かる負荷によりぐったりとしていた。周  
りにはブルーマの残骸が沢山散らばっている。

「手強い……！」

『この……化け物がアアアア』

…三…

ツバサのバルバトスとマリアのガングニールが暴れるハシユマルに打撃を与え

る。二人は機体のリミッターを解除してハシユマルを相手にしているが、ハシユマルは未だに動いている。

『バルバトスのパイロット！これを！』

「ありがとう……これなら殺しきれる……！」

『貴方……大分疲労してるけど……大丈夫なの？』

「ふっ……僕の心配よりあれを心配した方がいいよ」

『ッ!? あれはアスタロト!?』

バルバトスルプスが指を差す方には大破したアスタロトが漂っていた。マリアはそこへ出向く為に機体を加速……そしてバルバトスルプスはソードメイスとガンダニールから借りた武装 エネルギー付加重機槍《グングニル》を構えるとハシユマルに向かう。

「これで逝けエエエエ……」

ハシユマルの攻撃を交わして、ソードメイスとグングニルの二刀流で打撃を与え続けてそこから内部に衝撃を与えるとケーブルや機器などを握り潰す。両目から、耳から、鼻から血を出しても……ツバサはハシユマルを潰す為に奮闘する。

《—————》

「チェックメイトだ」

バルバトスルプスは両手で殴り、ソードメイスとグングニルでハシユマルを大破させた……ハシユマルはその後ビクリともせず、そのまま倒れた。

「(つ……疲れた……か、体の感覚が…… )」

ポロポロになったバルバトスルプスもまたそのままゆっくりと倒れ、ツバサは意

識  
を  
失  
っ  
た  
。

## PHASE・141 「最終決戦 3」

『私は彼の為にこの力を捧げると決めただ！だからここで！』  
「くっ！ノワールのパワーが!？」

トレミーを守りながらロランツィーネ・ローランディフィルネイの駆るハイゼンスレイ・ラーII《ファイバー》と激戦を繰り広げていた。しかし出力や機動性も全てロランの方が高く、ルウエンは苦戦を強いられていた。

『終わりだね？』

「まだだ！」

フラガラツハ3ビームブレイドを持ちハイゼンスレイの攻撃を阻止するがノワールがパワー切れを起こす。フェイズシフトダウンを起こし、ノワールは動かなくなる……ロランのハイゼンスレイが近づく。

『これで終わりだァァ…』

「なに!？」

「やらせんはせん！」

ロランのハイゼンスレイがノワールにトドメを刺そうとした時、シグナムのインフィニットジャスティスが攻撃を防いだ。

「ルウエンここは任せろ。お前はトレミーへ」

「す、すまない…」

「気にするな。お前の相手は私が引き受ける」

『へえ…なかなか強そうじゃないか』

ザフト艦隊が半分消失していく中で未だに月へ侵入が出来ていないニックと和馬…だがそんな彼等の前方から新たな機影が現れる。それはプレシアのナイチン

ゲールだった。

「……！」

『邪魔はさせない……！』

ニュータイプ・Xラウンダーの能力でプレシアの存在を探知した和馬とニックはそのままプレシアの攻撃を回避する。

「ボスのお出ましか……ニック、お前は月へ向かえ……！」

「な、なに!?だがお前一人でどうこう出来る奴じゃないだろ!？」

「心配するなニック……それに誰が一人でナイチンゲールを相手にするって言ったよ？」

「なに……！」

和馬のHi-VガンダムリベレーターとニックのガンダムAGE-Xの後方から複数の砲撃。そこには大東貫一率いるGspirits隊とその他部隊であった。

「隊長！」

『ニックはスバル、ティアナちゃんと共に月へ向かえ！あとはわたし達が彼女の

相手をする！』

「ニックさん！私達と一緒に！」

「早くしないと時間が！」

「分かった：行くぞ二人共　！」

「了解！」

スバル・ティアナはGspiritsから支給されたMS クランシエ・カスタムを駆りニックのAGEXと共に月にあるGジェネレーションシステムへ向かう。大東達はナイチンゲールに一斉に立ち向かう。

『雑魚が！』

「一気に奇襲を掛ける！」

大東の駆る千式を筆頭に、プレシアの駆るナイチンゲールは部隊からの一斉攻撃を食らう。しかし元のナイチンゲールよりも性能や機動性は格段に上がっており、ナイチンゲールは射撃などを巧みな動きで交わす。

「君の身勝手で、世界を変えさせはせんよ！」

『そうは言うけれど、貴方は自分の心配をした方がいいんじゃないの？』

「……余計なお世話だね。だがね……わたしは  
！」

千式はナイチンゲールヘライフルを向けた。

## PHASE 142 「最終決戦 4」

仲間が次々と墜ちてゆく。ザフトやソレスタルビーイングの間では両軍が入り乱れ次々と墜ちてゆく……それはミネルバ隊にも言えることだ。箒、アレックスはシグナルロストで調達もまたハシュマル戦で疲労し動けない。楯無もまた最初は困惑していたが簪と一緒に戦うことを決めて今はトレミーへ。残るはアレスとアリシアのみだった……月の裏側では翔真のジャスティスミーツィアとアレスのエクシエス・シュターベルが激突していた。

「アレス、お前！」

『次こそは仕留めるぞ。この、エクシエス・シュターベルで』

「何度言っても解らないのか!? クリスや御門先生、ノーヴェのお腹の中には！」

『俺の前で……クリス達の話をするなァ』

「何度言っても解らないのなら……お前を！」

エクシエスとMAルシファーが合体した姿がエクシエス・シユターベルだ。エクシエスは高出力エネルギーブレード《ライオットザンバー》を展開し、ジャスティスもまたミィティアユニットの武装であるMA-X200ビームソードでエクシエスの斬撃を食い止める。

「アレス、お前の復讐はよく分かる……けどな、そんなことしたって何も戻らないんだぞ！ 俺達人間は分かり合えば『黙れ！』アレス！」

『綺麗ごとばかり並べても、所詮は偽善だ！ 俺はそんな言葉に惑わされない！』

・あの日、助けを求めても誰も俺の家族を救ってはくれなかった！』

「……………」

『お前に分かるかア！』

「(この戦い方……まるで俺じゃないか　！)」

エクシエスは武装の一つ脳量子誘導エネルギー浮遊砲塔ヴィリングブレードを展開して砲撃。ジャスティスはミィティアの加速を利用して交わすがヴィリング

ブレードによる攻撃でスラスターが大破……ジャスティスはミーティアから離れて、ラケルタビームサーベルを連結させアンビデクストラ・ハルバードにするとヴィリングブレードを破壊してゆく。

『はああああア!!』

「なに!？」

超高出力ガンマ線レーザー砲《エクスカリバー改》をエクシエスが発射——  
ジャスティスは回避出来ず右脚が完全に消し炭にされる。追い討ちをかけるようにエクシエスはジャスティスに近付く。

『終わりだ！お前達が何をしようが、もう結果は見えている！綾崎翔真！お前は俺にとって仇の一つだ……これで終わらせる！』

「くっ！もう誰も悲しませない！あの時……誓ったんだ。お前も俺のせいで歪んでしまったならお前を駆逐する！言っても解らないなら！」

ジャステイスはファトウム―00を放つ。しかしエクシエスはそれすらも簡単に破壊してしまう。エクシエスはジャステイスの右腕や左脚をもぎ取ってゆき、特殊鍛造鋼指爪アモンブレイドでコクピットを貫こうとした――

――ばあば――

「『…!!?』」

「アニキイイイイイイ!!!」

「翔真アア！」

二人の脳内に響く幼き子の声が聞こえたのと同時に、クリスのニヤイアとシャルロットが操る翔真専用の機体≡GNT0000\FS ダブルオークアンタフルセイバー≡が現れる。

「翔真は返してもらおうよ」

エクシエスから大破したジャステイスを引き離し、クリスのニヤイアがエクシエスの前に現れる。

『く……クリス…… ！』

「兄貴！兄貴なんだろ!?!」

『何故お前がここに……お前には来て欲しくなかった ……なのに』

「……兄貴」

『……クリス、退け……俺は奴を……綾崎翔真を倒さなければならぬ ……！』

「そんなことして……亡くなった兄貴の家族は喜んでくれるのかよ ……!?!」

『何故それを!』』

「ツバサから聞いたんだよ……全て……」

クリスはツバサから全て聞いていたのだ。アレスの過去と——そして

「兄貴と翔真はア！」

『くっ……喋るな……もう！』

「クリス避けろ！」

ニヤイアの背後から翔真が操るダブルオークアンタフルセイバーが近付く。エクシスはニヤイアを退かすとクアンタに向かう。

『クリスを盾にしてまで俺を倒したいか！』

「この分からず屋がッ！」

「翔真！」

「しっかり掴まってろよシャル！」

GNソードIVフルセイバーを構えてエクシスに振り下ろす——エクシスはそれを真剣白羽取りで受け止める。

『俺はここで倒れる訳にはいかない……』

「……そうかよ」

『だから……！』

「なら……」

クアンタとエクシエスが拳を交わろうとした時クリスは叫ぶ——やめてと：

・するとそんな彼女の想いに共鳴したかのように、黄金の不死鳥が姿を現す。青い光りが宇宙を駆け抜け、青い光りに触れたMSは次々と解体されながらもそれを気にせず黄金の不死鳥はクアンタとエクシエスの間に入った。

「ヰフェネクスだ……」

「確かあれってユニコーンだよね？」

「正確にはユニコーンガンダム3号機フェネクスだ……だが俺の知るフェネクスじゃない」

過去に一度フェネクスを見ている翔真はこのフェネクスが過去のやつとは違っていると確信していた。スラストターの役割を果たすアームド・アーマーDE二枚の後端にテール状のパーツが配されたスタビライザーがあるからだ。

「こいつは一体……」

「なんだお前は……！」

翔真とアレスが警戒する中で、フェネクスは次第に $\Downarrow$ NT・D $\Downarrow$ へ……すると二人の脳量子波が乱れる。

『がっ!? うああああアアアアアアアア……』

「兄貴!？」

「あ、頭が！脳量子波が……」

「翔真!? どうしたの!!」

フェネクスがデストロイモードになるとサイコフレームの光りがクアンタとエクスエスを包み込む。

## PHASE-143 「最終決戦 5」

フェネクスはエクシエスを抱き締める——サイコフレームの暖かな光りは  
 アレスの心の中に入り込む。

「やめる……！ 入るな……入るなアアアアア 三三三」

「兄貴!!」

あの日から全てが崩れ去った……家族を目の前で奪われ、エクシエスという復讐の力を貰い自らの目標の為にアレスは必死に生きてきた。ようやくソレスタルビーイングを追い詰めたはずだったのに、長年閉じ込めて来た心に何かが入り込む感覚にアレスは吐き気を覚える。

——にいに……ダメ——

「ハーティ!?!?!?! あ、ああ !?!」

——もうやめてアルちゃん！私達はそんなこと望んでない！——

「姉さん……入るな……来るなアア……」

——そんなことしたら貴方は戻れなくなる！——

「母さん……くっ　　!?人の感情などとっくに捨てているツ!!!」

フェネクスによって亡くなったはずの家族の幻影を見せられ困惑するアレスはフェネクスを退かすとクアンタフルセイバーに近付く。

「ここまで……来たんだ……　　!諦める訳にはいかないんだ!!!」

「アレス……お前は分からないのか　　!?お前には見えるはずだ!亡くなった家族はお前を止めようとしているんだぞ!」

「ッ!?」

クアンタフルセイバーの周りには次々と人の意識が集まる。明日菜やクー子、翔真の母親にアレスの家族達も……集まった人々の意識はクアンタに吸い込まれ、



ミネルバが次第に動かなくなり、トレミーもまた退艦を余儀なくされる。

「総員退艦せよ！……くっ、ミネルバの奴なかなかやりおる　！」

「王様？ ビシディアンから通達が来たよ。こちらの艦に移動せよ！ だってさ」

「うむ……分かった。ただし、退艦の順番は子供、妊婦を優先にするのだ　！　それだけを伝えよ」

「了解！」

動かなくなったトレミーの側にビシディアンの戦艦バロノークが現れる。だがそんな時トレミーのハッチが開く。それは動力源を粒子貯蔵タンクに代えたダブルオーライザーとエクシアを改修したアメイジングエクシアとクアンタ・アメノハバキリが次々と出撃する。

「椿ちゃん、ヴィヴィオちゃん、ちゃんと東さんに掴まってるんだよ」

「うん！」

「なのちゃんもね？」

「はい！」

「私達も翔真君と共に！」

「月へ向かう：：しっかりサポートを頼むぞ切姫」

「はい、お任せを」

東達もまた月へ目指す。

PHASE 144 「最終決戦 6」

「兄貴！」

「クリス！」

「どうしても……やめないなら ！」

ニヤイアアストレイ・イチイバル……クリスの願いにより強くなったニヤイアはエクシエス・シュターベルに攻撃を加える。

——CUT IN CUT out——

——BILLION MAIDEN——

「クリス……俺は」

イチイバルから放たれた砲撃はMAに対して放たれ、爆発が起きる

「お前達だけは無事でいてくれ……クリス……御門……ノーヴェ」

「くっ！こんな……！こんなことが!?!」

「わたし達を甘く見ていたな議長。いくら魔改造されたナイチンゲールでも、所詮はそこまでだ!」

「くっ……!」

プレシアはナイチンゲールでG S p i r i t S隊と交戦していた。ファンネルのビームの雨が降り注ぐ中で和馬達は大東に続いて連携攻撃でプレシアを苦しめる。ミネルバも…箒達も失い、今戦場にいるのはプレシアとアリシアと残存部隊のみだった。

「許せないわよ貴方達！貴方達だけはアア三三」

「オールドタイプだけを消し去る世界など！」

和馬のHi・レガンダムリベレーターはレフィン・ファンネルで一斉射撃、ミイリスのガンダムグリープタキオンが迫る！

「私は…私はここで終わる訳にはいかないのよ　！」

「なに!?残存部隊か!?!」

ナイチンゲールの背後からグフやウィンダムが現れG S p i r i t S隊に攻撃を

加え、プレシアは次第に戦闘区域から離れてゆく。だがその時サイコフレームとGN粒子の光りが戦場を駆け抜ける——

「な、なに!？」

「この光りは……ママ　！」

「アリシアしかない……アレスマでも落とされたというの　？」

アリシアの駆るアメイジングストライクフリーダムがナイチンゲールに近付く。しかしフェイトのウイングガンダムゼロカスタムがアメイジングストライクフリーダムを斬り付ける——そしてツインバスターライフルを向ける。

「投降して……姉さん……母さん」

「え……」

「その声……」

ゼロカスタムがツインバスターライフルを向ける——しかし一筋の光りがライフルを貫く。ツインバスターライフルが撃破され、フェイトは砲撃が来た方向へと視線を向けた。それはアレスのガンダムエクシエスだった。

「アレス君!？」

『邪魔は……させない……ここまで来たんだ……議長、今ならまだ——』

アレスがそう言い掛けた時、ナイチンゲールは大型メガ・ビーム・ライフルを構えて連射。腕と脚を片方が破壊され、エクシエスは大破して爆発を起こす。

「ッ!か、母さん!？」

「貴女は……」

『アレス。貴方はもう用済みよ……綾崎翔真すら止められないのなら用はない』

ナイチンゲールは中破しながらもそのまま月へ。フェイトは我に振り返りプレシアを

追いかけて、アリスアもまた二人を追いかける——月の内部ではニック、スバル、ティアナはシステムが造り出したニューロモビルスーツに苦戦していた。

「数が多すぎる!」

「キャアアア!」

「スバル!……この野郎がアア」

「三」

ニックのガンダムAGE-Xはレーザーブレイドで迫るMSを斬る——そんな中で、翔真のクアンタが来る。そしてフェネクスも現れ青い光り……サイコ・フィールドを放つとMSは次々と解体されて爆発する。

「翔真か!」

「——見つけたぞ……ジエネレーションシステム……お前が……お前が

この世界を変えた元凶なら……元に戻すまでだ　!　一夏……皆……クアンタ

ムバースト三」

『させない……させるかアア !!』

「プレシア・テスタロッサ!？」

「翔真安心して……ほら」

シャルロットの言葉に翔真は納得する——何故ならば東達がナインゲールに攻撃を加えようと集まっていた。

『な、なに!?!』

「邪魔はさせないよ! シー君の邪魔はさせない!」

ソレスタルビーイングとザフトによる戦いは次第に沈静化していた……しかしシステムが防衛しようと次々とニューロモバイルスーツを生み出す。

「効!」

「分かっている」

く。  
シヨウマ・アツシュと叢雲効は被害出ようにニューロモビルスーツを倒してゆ

## PHASE 145 「最終決戦 7」

「クアンタムシステムが始動出来ない!?…やはり破壊しかないか」

「システムを破壊したらどうなるの!?だってシステムがなきや世界は…」

「賭けるしかない。可能性を…信じるさ　　!クアンタ!」

翔真の声にクアンタが反応してデュアルアイを光らせてGNソードビットを展開してシステムの中心となる部分に攻撃を加える。やがてニック・スバル・ティアナや東のダブルオーも加勢に入る。

「くっそ!ダメーシが少ない!ならば…トランザム　　!」

「なのちゃん、ライザーシステムを!」

「了解!」

「サテライトキャノンなら!」

クアンタとダブルオーがトランザムによる特殊攻撃でシステムを傷付ける——  
しかしプレシアのナイチンゲールが翔真達に近づく。ナイチンゲールはサテライ  
トキャノン射とうとしているAGE-Xに奇襲を掛ける。

「ニックさんが！」

「スバル射つによ！ここでやられたらひとたまりもないわ！」

スバルとティアナの克蘭シエ・カスタムはナイチンゲールに向けて発泡。ナ  
イチンゲールはそれを交わしながら近づく……だが

「近付けさせんよ！」

「な、なに!?!」

「隊長!?!」

「「大東さん！」」

「プレシア：…時代を創るのはわたし達大人ではない　！次の時代を創るのは若い者達だ！」

「何を言ってるの!? そう言っても人は争うことをやめられない！ 何時かは、やがて何時かはと、そんな甘い毒に踊らされ結局人は争うことをやめない！ ならばこの世界にせめてもの手向けとして、オールドタイプを排除し革新者達による世界を造るのよ！」

「だがね、それを決めていい権限は君にないんだよッ!!」

「大東貫一：…　！」

ナインチンゲールはファンネルを飛ばして大東の駆る千式に攻撃を加える…

しかし大東は巧みな動きでファンネルのビームを回避する。しかしアリシアのアメイジングストライクフリーダムが千式に迫る。

「邪魔はさせないよ！」

「これまでね大東貫一！」

「まださ……まだ終わらんよ　！」

迫るアメイジングストライクフリーダムとナイチンゲール……しかしフェイトのウイングガンダムゼロカスタムが間に割って入る。

『お義父さん！翔真達の所へ！』

「感謝するよ……　！」

翔真の駆るクアンタはGNソードVにソードビットを連結させたGNバスターライフルを最大出力で放とうと構える。ニツクのAGE-Xもツインサテライトキャノンを構える。そして千式がメガバスターランチャーを構えながら二機に接近する。「ニツク、翔真！同時にシステムの中心を狙うんだ！そうすればきつとシステムが何らかの反応を示すはずだ！」

『分かりました』

『了解！……ツインサテライトキャノン……いっけエエエエエエエ』

『…』

『クアンタ……!!』

クアンタ、AGE-X、千式は同時に砲撃——するとシステムの中心部に直撃し、次第に大きな光りが翔真達を包み込む。月の近辺でも異変が起こり、ニューロモビルスーツが次々と消え去り、宙域全体が大きな揺れを起こす。

「次元震か?! い、一体何が!?!」

「これは……あれは」

月の近辺で戦っていたショウマと効は突如の次元震に混乱する……効はそんな状況下でアレスのエクシエスが漂っているのを見付けた。更にその近くにはランチがエクシエスに近付こうと接近していた。

「マルス……!!」

「が、効! くっ!?! 皆は!?!」

ショウマ・アツシユが辺りを見渡す……やがて次元震は激しくなりそのまま光  
りが宇宙全体に広がった——。

## PHASE 146 「名も無き歌」

MSの残骸が降り注いだ地球。各世界の海では残骸が浮かび上がっていた……

……日本にある某海岸にも MSの残骸が漂流していた。その砂辺に二人の女性がいた……それはアレスと共に戦ってきたマリア・カデンツァヴァ・イヴと、翔真と共に戦っていた風鳴翼だった。

「ねえ翼、貴女はこれからどうするの？」

「私はシグナムと共にこの世界でしばらくの間過ごすつもりだ。やることも沢山あるからな。マリアはどうするのだ？」

「分からないわ。私は……これからどうしていけばいいか分からないの……アレス隊長も行方が分からないし……」

「……」

あの月での戦いはソレスタルビーイングの勝利で終わった……それからという

ものザフトは事実上壊滅し、今は地球圏連合と時空管理局によって復興に向けて各地で奮闘している。だがあの戦いで綾崎翔真を含む行方不明者は多数いた……今でも懸命の搜索は続いているが見つかるかは分からない。

「貴女は心配ではないの？綾崎翔真は貴方の大事な人でしょ？」

「……心配などしていない」

「え……」

「翔真は生きています。私には分かる……アイツの命の鼓動は確実に聞こえています」

「………」

「その内帰ってくるさ」

「……そう」

マリアはあの戦いの後ビシディアンに保護され、その後はザフトの起こした数々の事件が原因で裁判へ掛けられるところだったが翼のおかげで今は調・切歌と共に

保護観察となっていた。

「マリア……歌を世界に届けてくれ」

「歌……」

「今世界は復興に向けて頑張っている……そこにマリア達の歌を届ければきっと……」

「今更……私に……私達に歌なんて……」

「歌はどんな時にでも元気を与えられるものだ……私は思う。マリア……お前達の力を貸して欲しい。私も防人として皆に元気を与えたい……マリア頼む」

「翼……」

大戦が起きたIS世界……それは綾崎翔真率いるソレスタルビーイングの勝利によってザフトは壊滅し、そこからザフトが秘密裏で進めていたDestinyニープラ

ンが世界中に流され、その内容に人々は驚愕していたが今はそんなことも忘れ復興に向けて皆頑張っていた。

「名も無き英雄はこの世界と造り出した世界の架け橋となったが……」

「それがハッピーエンドっていうんですか？」

「さあね」

ビシディアン の首領である ショウマ・アッシュ は ディートリッヒ と 盃 を 交わして いた。

「ドクター……あなたはこれからどうするんだい？」

「隊長の行方を探しながらこの世界で生きて行くよ。あの戦いで翔真君や束君達、隊長やニックも行方不明となった……アレス君はどうかね？」

「見つからない……あの後搜索はしてみたがいなかった。アレス……あの子こそ可哀想さ。復讐を理由にプレシアの道具にされ、挙げ句には捨てられた……」

「ふっ」

シヨウマは過去にミネルバに潜入した時に撮った集合写真を手放した——

## PHASE・147 「約束された世界」

ジエネレーションシステム……それを破壊したことで大規模な変化は起こっ

た。翔真はフェネクスの力を借りてIS世界とは別にもう1つの世界を造り上げた……そこは MSやISもない新しい世界。

「じゃあ行って来ます！」

「行ってくるねお姉ちゃん！」

「一夏君、簪ちゃんも行ってらっしゃい！」

更識の屋敷……過去に更識家に養子に取られた織斑一夏は簪と楯無と幸せに暮らしていた。

「あ、一夏君だ！ほら箒！」

「な!?ま、待て吹雪！まだ心の準備が！」

「お、箒に吹雪じゃないか！」

「おはよう二人共」

一夏と箒の前に学校のクラスメイトである箒と吹雪が現れる。特に箒は一夏に好意を寄せており彼を前にするとドキドキしてしまっていた。だが一夏の周りにはまだライバルが多い。

「一夏さん！」

「何してんのよあんた達！早くしないと学校に遅刻するわよ」

「早くしろ嫁！」

「わ、分かったって！じゃあ『一夏はっけーん♥』メガーヌさん!？」

更に一夏の背後から一人の女性、メガーヌ・アルピーノが現れる。傍らには彼女の娘ルーテシア・アルピーノがニコニコしながら見つめていた。一夏や他の皆にはあの日から始まった戦いの記憶は無くなっていた……一夏達はあの辛い世界から新たなに造られた世界で元気に過ごしていた——

「このやり方が間違ってるのは分かってるさ……けど、俺や明日菜のせいになっちゃったからさ……だからせめてもの償いさ。けど良かったのか？ 東、シャル、真耶」

「東さんはシー君と一緒にじゃなきゃだ……それに、シー君を一人にはさせないよ」

「翔真は一人にしたらまた無茶するからね。ボク等がちゃんと付いてないと」

「そうですよ翔真君！……それでは、行きましようか♪」

「ああ……一夏……皆……元気だな」

翔真達は一夏達の姿を見届けた後……金色の不死鳥が空へ上がり、そのまま何処かへと去っていった。

『……………は』

「ようやく気付いたか」

『…キャ……ロ……ル』

「かろうじて生きていたな……全く……無茶しやがって」

何処かの医療施設——アレス・ルセデイスは目を覚ました。しかしベッド

の周りには沢山な医療機器があり、それから伸びるケーブル複数に繋がれたアレス……思うように喋ることが出来ず、名前を呼ぶだけで精一杯だった。

『た……か……い……は』

「戦いは終わった……ソレスタルビーイングが勝ったさ」

『ま……け……た……のか……』

「お前は利用されてただけだった……」

『……………』

「あの後、オレはプレシア・テスタロッサについて調べた。奴は……奴は自分の利益の為に前前を利用して……数々の MS を生み出し、純粹種であるお前のが欲しいが為に……」

アレス……いや記憶を失っていた頃のアレスことマルスと関わりがあった女性……キャロル・マールス・ディーンハイム……は怒りに身体を震わせながらそう告げた。アレスは何も言わずただ天井を見上げた。

「キャロル！ま……アレスさんが目覚めたのですね　!？」

「ああ……エルフナイン、そいつは」

「はい……こちらへ」

キャロルを幼くしたような容姿をもつ……エルフナイン……はある客人を招いていた。それは黒のビジネススーツに身を包んだルウエンだった。



『……………調べた……のか』

「ああ。気持ちには分からなくもない……けど、そんなことしてもご家族は喜ばないぞ……」

ルウエンは花束を添えてそのまま部屋を出た——取り残されたアレスはただ一人声を押し殺し泣いた……今までやってきたことが崩れ去り、何もかも分からなくなった少年の心は誰にも知られずやがて闇へと消える。



## PHASE-148 「それぞれの道」

「伝えた……これで良かったのか　？ツバサ・カミヤ」

「ありがとうねルウエン。本来なら僕が行くべきなんだが……」  
「無理はするな。お前とてその身体だろ」

アレスの元を後にしたルウエンはミッドチルダにある病院へと来ていた。バルバトスのリミッターを外して身体を半分犠牲にしたツバサは今、魔法の力を使う治療などで以前のようには身体は元に戻っていたが両脚だけは未だに機能してなかった。車椅子を押すルウエンは近くの花壇に目を向けた。

「ルウエンはこれからどうするんだい？」

「ティアと湊で旅に出ようと思う」

「……湊って……長瀬湊ちゃんかい　　？」

「ああ。レジェンドのパイロットはしばらくの間は俺が面倒を見ることになったんだ」

「……そっか……ルウエン」

「なんだ」

「アレスのことを頼むよ。僕はもう居なくなる……だから頼めるかい？」

「——何故奴をそれまで心配する。奴は……」

「ああいう強い子だからこそ、心配なんだよ……」

ツバサは手元にある集合写真を見た……そこには翔真やマルスだった頃のアレスが写っていた。場所は変わり時空管理局が管理している収容施設——フェイトはある人物達と対面していた。

「こうやって話すのは久しぶりですね……」

「まさか貴女が来るとは思ってたわ……フェイト」

「母さんから話は聞いている……フェイト……私」

「……………」

あの戦いでフェイトによって捕らえられたプレシア・テストロッサとアリシア・テストロッサは次元干渉罪に問われ、収容施設で暮らしていた。アリシアはプレシアのことはそこまで関わってなかったので近日釈放される予定だ……だがプレシアの場合はそうもいかない。

「フェイト……いい人を掴まえたのね」

「……翔真のことですか　？」

「ええ。綾崎翔真……似ていたわ……あの人に」

「あの人……とは」

「死んだお父さんによ」

プレシアから語られたのは彼女の旦那の話……つまりアリシアや直接的な関係はないフェイトからすれば父親になる。

「あの人と同じ強い意思を持った目……久しぶりよ。やはり親は子に似るのでしょうね」

「私は……」

「フェイト……過去に貴女にやった仕打ちは謝って済む問題じゃないのは理解してる……」

「ごめんなさいフェイト！私のせいで……貴女は辛い目に……ごめんね」

プレシアとアリシアはフェイトに対して謝罪の言葉を掛ける……以前の自分ならこの状況に戸惑っていただろう……だが今のフェイトは違う。

「いいや……私は逆に感謝してるよ。じゃないとなのはやはやて達にも会えなかった。もちろん翔真にもね……だから謝ったりはしないで。私は感謝してるから」

「フェイト……」

「……………そう」

フェイトは二人と少々話す。施設を後にした……施設の外では翔真が待っていた。

「話せたか？」

「うん……私、ちゃんと前に進めたかな……」

「進めたと思うぞ？ きつとな……過去を否定しても、それは変えられないんだ。ならばせめてその事実を受け止めて生きないといけない……」

「そうだよね……」

翔真はフェイトに手を差し伸べる……フェイトは手を取りそのまま歩いてゆく。



## PHASE-149 「旅立ち」

「すまないね翔真……」

「構いませんよ……大東さん」

「それで翔真、お前はこれからどうするんだ」

「俺ですか？……ちよつとばかし旅に出ようと思います」

## 喫茶楽園

——そこには翔真と今行方不明であるはずの大東貫一とスタンック・デュノアがいた。大東とニックはあのジェネレーションシステム破壊後に次元の狭間へと飛ばされていた……しかし翔真により救われた二人は、今は誰もいない楽園で二人の看病をしていた。

「自分がやったことは、許されない……それは十分承知の上です。平和の為にも、俺がしばらくいい方がいいですから」

「待ってくれ翔真！お前……それどういう意味だ　！」

「前にある人に言われたんですよ……俺がいると世界がまた可笑しくなるって。今あっちの世界は復興に向けて皆力を合わせて頑張ってる……俺がいるとまた皆を巻き込んでしまう……だから後のこと頼みます大東さん、ニックさん」

「……」

「……翔真……お前は帰って来るのか　？」

「——必ず帰りますよ」

ニックの問いかけに翔真はそう答えた……翔真は二人に後のことを託して外へ。

「あ！翔真パパー！」

「ぼぼ！」

「ヴィヴィオに椿！どうしてここに？」

「東ママに言われたんだ！翔真パパを迎えに行って欲しいって」

「そうか。行こうか二人共」

ザフトとソレスタルビーイングが戦った世界……今そこではザフト壊滅後に平和維持組織『プリベンター』が設立された。時空管理局と地球圏連合の力を借りてプリベンターは平和を存続させる為に努力していた……しかしかつてのザフト最高評議会議長プレシアを支持する反乱部隊が各地で現れテロ活動が始まっていた。

「綾崎達在必死に守った世界だ！無駄にはせん！」

プリベンターMS部隊隊長……織斑千冬はアカツキを駆ってプレシア派の反乱部隊を倒す。千冬のサポートとしてシグナムもまたMS部隊に所属し、インフィニットジャスティスガンダムを駆りながら千冬や隊員達のバックアップに回っていた。

「（これなら私の力は必要ないか……）」

『シグナム、こちらも大方終わった。私も今翔真と合流してそちらに向かっていく！シグナムも来てくれ』

「了解だ」





## PHASE-FINAL 「泪のムコウ」

綾崎翔真はその世界から姿を消した。誰からも感謝されず、誰からも必要とされない翔真は愛する妻達と子供達と共に世界から消えた……月日は流れて 6年経った世界は平和だった。しかし今でもプレシア派の反乱部隊は生存しており、プリベントターも手を焼いていた……そんな中、織斑千冬は休暇届けを出し家へ帰っていた。

「あら、どうしたの千冬？ 帰ってくるなんて珍しいわね」

「しばらくの間休めと言われてな……涼子、あの子はどうした？」

「友達の家へお泊まりに行っただわ。でも早いわね……時が経つのも」

「そうだな……」

千冬は今現在、トレミーで共に戦った仲間御門涼子と一緒に住んでいた……

涼子はあの戦いの最中、アレスの子を身籠っていた。終戦後に子供は生まれ、すくすくと育っていた。

「今でも分からないのよね？……マルスのこと」

「プリベンターでも色々とやっているが……見付からない」

「そう……でも千冬、貴女は一夏君を……」

「……一夏なら安心して暮らしている……翔真からそう聞いている。私は結局アイツに何も話せないまま別れてしまった」

「千冬……」

「でも、一夏が何処かで暮らしているのなら私は気にしないさ」

「何処行くの？」

「たまには外で食ってくる……そういう気分なんだ」

寒さも一段と厳しくなりコートを羽織った千冬は外へ——しばらく適当に歩いているとある一軒の中華料理屋が見えた。

「中華か……たまにはいいか」

店へ入る。客は賑わっており厨房では赤い髪の男性が料理を作っており、席では二人の女性が注文を聞いていた。

「へい、いっらしゃい！お客様……」

「久しぶりだな…… ㄹ五反田ㄹ」

「千冬さん!?!」

「……!?!」

「五反田妹、布仏姉も久しぶりだな」

店が落ち着いた頃、千冬は座敷へと案内されていた。テーブルには餃子や炒飯など中華料理な並んでいた。千冬の前にはアレックスの名を捨てた五反田弾と、妹の蘭、そして布仏虚が座っている。

「阿頼耶識による後遺症は治ったのだな」

「時間は掛かりましたけどね……千冬さん」

「なんだ？」

「一夏と……翔真は？」

「アイツ等は今でも戦っているさ……私達の知らないところでな」

それを聞き、弾は下へ俯く……終戦後に自分が利用されていたことを知り、一時期は生きる希望を無くして自暴自棄になっていたが虚と蘭のサポートで今では店を開くまでになっていた。ミッドチルダから提供された医療技術により弾は阿頼耶識による後遺症は完治していた。

「千冬さん……弾君を……助けて頂きありがとうございます」

「私からも感謝します！ほら、おにいも頭下げて！」

「いでで!?引っ張るなって蘭!？」

「――相変わらずだな」

弾達としばらく話した千冬は店を後に……すると意外な人物達がいた。

「あら、千冬じゃない？」

「ほんまだにゃ〜」

「……!? スクール!? それにお前は……速波か　!?」

千冬の前にはいたのはスクールと、死んだはずの速波隼人がいた。場所を公園へと変えた三人は久々の再会を喜んでいた。

「じゃあ、綾崎が秘密裏に？」

「ああ。翔やんのおかげで洗脳が解けて、スクールと再会したのさ」

「隼人は生きてた……それだけで嬉しかった……」

「それより千冬さん、翔やんと一夏は？」

「……アイツ等は平和を維持する為に今でも戦ってる」

「そうか……俺も力になりてーがもう体はボロボロだから……」

「速波、お前はもう十分に戦ったんだ……しばらくは休め馬鹿者」

二人と別れて、千冬は一人歩く——そして秘かに誓う。必ずこの平和を  
守ると……

一方で大東達は一段落していた。翔真から頼まれたIS世界のサポートと復興に力を貸したG s p i r i t s 隊も当面の間は解散することになった……ちなみにディートリッヒは結局大東の説得により戻って来た。ディアーチェ達やクアットロに泣き付かれたのと言う間でもない。

「オイスバル!? ちょっと待て……ちょ　　!? ナターシャ!?」

「ニックさんはこれからわ・た・し!とデートするんです! 邪魔しないでくれま  
すかナターシャさん!」

「あら、スバルちゃんにはまだデートなんて早いわよ♪」

「なんですとー!?」

「いだだだだ!? 腕もげるもげる!」

ニックは以前から仲良くしていたスバルから猛アタックを受けていたが、ニック  
を追いかけて来たナターシャはニックを諦めきれずに彼女も猛アタックをしてい  
た。場所は変わり高層マンションの一室……そこには和馬とギンガが暮らしてい  
た。

「大丈夫なのかギンガ? 無理なら俺がやるから休んでろって」

「もう、カズったら心配しすぎだよ?」

「そりゃ心配だってするさ……だってお前の中には子供がいるんだから」

二人にとって念願の子供があと少しで生まれる……ギンガは大きいお腹を撫でながら幸せを感じていた……だが和馬は何処か浮かない表情だった。

「どうしたのかズ？」

「いや……アレス・ルセデイス君について考えてた……」

「確かその子って今でも行方不明なんでしょ……あの事件の被害者だったんだよね」

「ああ。それだけが俺の心残りだ……あん時に救ってやれたら、あの子はプレシア・テスタロッサに利用されることはなかったんだ……」

「カズ……」

「必ず探す……必ずな」

和馬がそう言っていた頃——大東はリディと酒を飲んでいた。

「お疲れ様、アナタ……」

「ありがとうリディ……なんだか初めてののような気がするね……君と飲むのは」

「そうよね……色々あったけどお疲れ様」

「ああ……染みるね」

「ふふっ、飲み過ぎはダメよ？」

「分かってるさ……明日も早いからね」

「また搜索に？アレス・ルセディス君を……探す為に」

リディの問いに大東は頷く……事件で何一つとしてトラブルが起きなければアレスという少年は家族を失わずに済んだはずだ。

「……やり遂げねばならぬのさ……今度こそ間違えないさ。確かにあの戦いで数多くのことを学んだ……」

翔真達はもういない……二つの世界は後の世代へと託されてゆく。長きに渡る

戦いはこれからも続くのかもしれない。だが……そうはさせまいと、そんな火種などは駆逐する者達はまた姿を現す。

「綾崎翔真、デスティニーガンダム！目標を駆逐する！」

平和に向けて歩きだす世界を乱さないよう……静かに世界の歪みを正す為に機械天使は舞い降りる。そして青年は誰にも知られないように戦場を駆け抜ける――

完。

長きに渡りありがとうございます。この作品とリンクしている

---

オリ主が再びIS世界で再び頑張る話だけ……side ASTRAY

オリ主が再びIS世界で再び頑張る話だけ……side Gspiritst  
eam

を宜しくお願い致します！



## 番外編 エンドレスナイト

### PHASE 001 「ラグナリン共和国」

ウイングガンダムゼロverka販売&ゲット記念に。全ては翔真とゼロから始まりました。お気に入りユーザーのみの閲覧とさせていただきます。

---

プレシア率いるザフトの壊滅から7年。終戦から新たな1年を迎えた世界はMSなどを含む兵器を全て処分する事が決定した。MSはデータや開発技術を含めて全て失われた……しかし、今でもプレシアを慕うザフトの残党は未だに抵抗していた。

「変わらない……何も……結局人類は戦うことを忘れられない」

仲間達が次々と世界から消える中で、翔真のクローンとして生まれたルウエンは未だに戦いが無くならない世界に失望していた。彼の後ろにはザフトの残党がいた。

「ルウエン上級特佐。貴方しかいません……プリベンターが全てのMSを処分した今なら！」

「そうだな……」

ルウエンは後ろを振り向く。そこにはこの世界にはもう存在しない救世主<sub>MS</sub>ガンダム<sub>MS</sub>……赤と黒のカラーリングが一際目立つMS<sub>MS</sub>ガンダムエピオン<sub>MS</sub>。ルウエンはエピオンに乗り込む。

「(結局……あの戦いで、人は何も学ばなかった。俺達兵士は行き場を失った

……これが平和なのか？」

l s y s t e m E P Y O N 1

あの戦いが終わって確かに世界は平和になった。しかし戦場が居場所である兵士達は行き場を失っていた……ルウエンはそんな彼等と同じ気持ちを抱いており、彼等の意思に賛同し再び戦火を広げようとしていた。

「ここに……ラグナリン共和国を設立するっ　　！……俺達こそが正義だ」

ルウエンの駆るエピオンは背後に複数機立ち並ぶMSミサーペントミ達と共に日本への進行を始める。ルウエンは新たな今の世界に反旗を翻す為新たな国家ミラグナリン共和国ミを設立。廃棄されたはずのMSを武器に日本への進行を始める。

「なに!? MSが!？」

「はい！数は80、内1機はガンダムタイプのMSです！」

「くっ……アカツキは出せるな　!?」

「出せますが、機体には爆薬をセットしたままです」

「なら取り外す！」

プリベントー本部では突然のMS襲撃により混乱していた。今現在、ラグナリン共和国以外にMSを所持している国は日本を含めて、なかった。しかしプリベントーには幸い1機のみMSが残されていた。

「織斑少佐無茶ですよ!? たった1機で挑むなんて！」

「だが、何も出来ないよりかはマシだ！」

プリベントー所属で少佐となった、≪織斑千冬≫はアカツキに乗り込み爆薬をパージ。オオワシ装備で出撃するアカツキ……

「甘く見ていた……まさかまだ、

MSがいたのか！」

海面をスレスレで飛行するアカツキ。やがて前方からエピオンとサーペントの姿を捉える。

「ガンダムエピオンだど!？」

『織斑千冬か』

「誰が乗っている！」

アカツキはサーベルを抜くとエピオンに向かう。だが飛行ユニットに乗ったサーペント達がダブルガトリングガンを発射。

「ちい!？」

『もらった』

エピオンはビームソードを持ち、アカツキに切り掛かる。

『貴様等は正しいのか』

「通信……その声、ルウエンか　！」

『貴様等は正しいのかと聞いているッ！』

「なに！」

エピオンはヒートロッドをアカツキに向けて放つ。動きを封じられたアカツキはヒートロッドに叩き込められ、片腕を破壊される。

「ぐっ……　!？」

『終わりだ』

エピオンのビームソードが振るわれる……しかしその時、海面からローブを羽織ったMSが現れた。ローブを羽織ったMSはビームサーベルでビームソードを受

け止める。

『なに!?!』

「な……」

《……千冬さん、無事ですか　　?》

通信の声。それはかつての教え子で、この世界に平和をもたらした救世主だった。ローブを羽織ったMSは白い翼を広げた……

「ゼロ、最後の仕事だ」



PHASE 002 「左手に剣を、右手に君を」

「ウイングゼロ!?まさか……帰って来たのか　！」

「……」

白い翼を広げたMS。ルウエンは知っている……そのMSを。そのMSこそ綾崎翔真の象徴であるウイングガンダムゼロカスタムだ。ゼロはビームサーベルを抜くとエピオンに斬り掛かる。

《ルウエンだな。エピオンに乗っているのは》

「通信……ならどうする」

《自爆スイッチを押せ!》

「聞く耳持たずだ」

ルウエンの駆るエピオンはビームソードを振り上げてウイングゼロの攻撃を防御するとヒートロッドを振るった。対するウイングゼロはビームサーベルでヒートロッドを瞬く間に斬り裂き、マシンキャノンを連射する。

「ちい……エピオン、奴の反応を超えろ　！」

《ルウエン！》

「黙れ！」

エピオンに内蔵されたsystemEPIONがウイングゼロの攻撃を予測する。だがエピオンの予測よりも遥かにウイングゼロの動きが早く、ルウエンは捉えることが出来ない。

「エピオンの反応が遅い……くっ」

《ルウエン、もう一度言う……自爆スイッチを押せ》

「断る。俺は……探さなければならぬ。兵士達の行き場を」

《……》

「貴様こそ、何故今更戻って来た……」

《……それは……》

「貴様も、戦いを忘れられないか」

《……》

エピオンはウイングゼロのパイロットであり、ルウエンのオリジナルである翔真の過去を見せる。あの戦いの後、翔真もまた戦場を渡り歩いてきた。いくら平和に馴染みたいと思っても、長きに渡り戦場に身を置いてきた翔真は戦いをやめられなかった。

「お前も俺も、戦いを忘れられない存在だ……」

《……言い返すことも、出来ないな》

「……一度引く……もし、次会えば命はないと思え」

エピオンはウイングゼロを後にして撤退する。それに続いてサーペント部隊も撤退してゆく。

「ウイングゼロ……綾崎……綾崎なのか　　!？」

《…お久しぶりですね、千冬さん》

小破したアカツキを抱えたウイングゼロは砂辺へと着地する。翔真と千冬はそれぞれコクピットから降りると顔を見せた。

「綾崎…」

「どうも」

白いコートを羽織り、腰まで伸びた髪を後ろに結わえた青年…あの頃よりも成長した翔真に千冬は思わず抱きつく。

「馬鹿者ッ！」

「…！」

「この馬鹿者……何も言わず突然消えて、現れて……」

「……すいません。でも、そろそろ離れてくれませんか　？」

「何故だ……『シー君は何時からちーちゃんを落とすようになったのかな　？』

『ッ!? た、束……　!』

「お久々! ブイブイ!」

懐かしい声……振り返ると、そこには白いセーターにチェックの入ったロングスカートを着用して頭にウサミミカチューシャを付けた篠ノ之束がいた。

「久しぶりだね、ちーちゃん」

「綾崎……束も……お前達……

！」

「にやははく、ちーちゃんってば涙が流れてるよ？」

「うるさい！か、花粉症だ！」

# PHASE-003 「コードネーム」

「じゃあ、ニックさん達はこの世界にはいないんですね」

「ああ。復興を手助けしてくれたが、時空管理局がこれ以上の介入は不正になるとして……彼等と連絡は取り合いたいがそれが出来なかった」

「ふーん。時空管理局は確か、なーちゃん達がいなくなってより一層取り締まりが強化したって聞いたけどまさかね」

「つまり……あちらとの連絡手段はないか」

地球圏連合や大東達の手助けによりなんとか復興は出来ていたが、時空管理局がこれ以上の介入は違反になると理由をつけて、地球圏連合は時空管理局に従いこの世界との連絡や介入を一切立ち切っていた。

「なるほど……」

「綾崎、束……すまないが……力を貸してくれ。

MSは私のアカツキ以外

残っていない……頼めるか」

「もちろん、そのつもりですよ……大体俺や束が戻って来たのはある物を破壊する為ですから」

「ある物？」

千冬がそれ以上尋ねようとしたが翔真と束は口を閉ざす。しかしルウエン率いるラグナリン共和国を制止する為に協力はすると意思を示す。二人はそれから千冬の計らいでプリベンターに入隊し、それぞれコードネームを与えられる。

綾崎翔真、コードネーム≡スノーホワイト≡

篠ノ之束、コードネーム≡ラビット≡

「コードネーム、スノーホワイトか……まるでヒイロみたいだな」

「ヒイロ？誰それ？」

「……ヒイロ・ユイ。俺が尊敬する人物だよ束さん」

プリベンターの制服に着替えた二人は千冬の直属の部下として配属された。今現在全世界にMSは翔真のウイングゼロ、千冬のアカツキとラグナリン共和国のMSを除いて存在はない。技術やデータも失われ、人類はMSを作ろうにも作くれずという状況だ。

「綾崎、お前に頼ってばかり申し訳ない」

「そんなこと言わないでくださいよ千冬さん。そもそも……俺がこの世界を滅茶苦茶にしてしまった」

「しかし……お前だって、もう戦いは……」

「……」

千冬の言葉に翔真は視線を格納庫へ移す。そこには長年相棒として一緒に戦って来たウイングガンダムゼロカスタムが鎮座している。

「俺は……結局……戦いを捨てきれなかった。平和が一番だと分かってる

……」

「……」

「けど……どうしても」

ミラグナリン共和国……鉄で出来た建物が建ち並ぶ街。そこには今の偽りの平和に不満を持つ兵士達が集う。ラグナリン共和国の事実上のトップであるルウエ

ンは技師達が造ったあるMS2機に興味を持っていた。

「よく部品が揃ったな」

「ええ。これくらいなら容易いものですよ。ルウエン様のご要望通り、機体にはシステムを積んでおります。MDシステムには綾崎翔真の戦闘データを組み込んでおります」

「ふむ…… ♪ウイングガンダムセラフィム♪……」

ウイングガンダムセラフィム。元々ウイングゼロの量産機を目的に開発しようとしていたMS。しかし当時のザフトはコスト面の問題で開発を断念し、ペーパープランで終わっていたはずだった。

「綾崎翔真、貴様に引導を渡すのは俺じゃないかもしれないな……精々苦しむがいい。偽物にな」

ルウエンのその言葉……同時に複数機開発されたウイングガンダムセラフィムは次々と発進してゆく。

## PHASE 004 「双子座と龍」

「貴様か……あのソレスタルビーイングの……綾崎翔真」

「ええ、もちろん。けど……貴女は？」

「キャロル・マルース・デインハイムだ」

千冬との会話の途中にある人物によって呼び出された翔真は格納庫へとやって来た。そこにはくるくると暖やか波立つ金髪が印象的な女性がいた。翔真を呼び出したのはプリベントーで技師を勤めるキャロル・マルース・デインハイムである。

「キャロルさんは何故俺を呼び出したんです？」

「……お前に見てもらいたいものがある」

キャロルはそう言うと言格納庫のライトを付ける。すると、光りに照らされた2機

のMSが姿を見せた。

「エピオンに……ジュミナス　　!?!」

「エピオンは正確にはゞエピオンパイゞだがな……この二機は、ザフトの基地に放置されてあったものだ」

「……まさか、こいつらを使うつもりですか　　?」

「そうだ。現在、我々にはこの二機のMSしかない。いくらお前のウイングゼロでも1機では限界がある。心配するな……戦いが終われば破壊するさ」

かつてザフトが、ソレスタルビーイングに対抗する為に開発したとされる2機のMS。しかしこの2機は開発が中断されたまま基地に取り残されていたところをキャロルに回収された。

「……………」

「エピオンパイやジュミナスは微調整を終わらせればいける……」

キャロルが引き続き話す中、敵接近を知らせる警告音を響く。翔真はすぐにウイングゼロの元へ走り出す。

「キャロルさん、取り敢えず避難を。出ます」

「待て。出撃するならあの装備を持っていけ」

「?.....ッ      !?」

翔真はウイングゼロに乗り込み再び出撃。翔真の駆るウイングガンダムゼロカスタムは新たにシールドとツインバスターライフルにミドライトツバークが装備され強化されていた。

「行くぞゼロ……敵は」

ディスプレイに敵機が映る。その映像にはウイングゼロに似たガンダムタイプの

MSが接近する姿があった。

「こいつは……セラフィムか」

ウイングゼロはツインバスターライフルを発射。ドライツバークを装備したことで破壊力は増して、一瞬にしてセラフィム達を消し炭にする。だが……

「なんだ……この 1機、なかなかやる！」

残り1機のウイングガンダムセラフィムは素早い早さでウイングゼロの攻撃を交わして背後に回る。

「早い！しかもこの動き……俺か」

セラフィムの動きはまるで自分を予測した動きをする。このセラフィムには翔真

の戦闘データが組み込んである為、翔真の攻撃を予測して更にも上へ行く動きを見せる。

「ちよこまかと」

セラフィムはバスターライフルを発射。ウイングゼロはシールドで受け止めて、ツインバスターライフルを発射。セラフィムはそれを交わすとウイングゼロに接近する。

「ちい！」

』

セラフィムはそのまま翔真のウイングゼロに激突する。だが、敵はセラフィムだけではなかった。プリベンターの施設付近にサーペント部隊が接近していた。



## PHASE 005 「悪夢の始まり」

「ちい…機体完成度70%だが行くしかない！」

迫るサーペント部隊。キャロルはジェミナスを見上げて自分が出るしかないと走る。しかしそんなキャロルの前に一人の男が現れる。

「!?…お、お前は！」

『借りるぞ』

「待て！マル——『違う』なに？」

『俺はプリベントウオーター…今はその名前だ』

「ちい……いくらマネしようが！」

ウイングガンダムセラフィムは翔真の動きを読み、すかさず攻撃してゆく。サベルが火花を散らしてウイングゼロはマシンキャノンを連射するが、セラフィムはそれを弾くとウイングゼロに切り掛かる。

「——所詮は！」

「人形相手に負けてて、ガンダムのパイロットが務まるかよ！」

ウイングゼロはセラフィムのサーベルをシールドで防いで、懐に飛び込んでセラフィムを繰り上げる。そしてマシンキャノンをコクピットに撃ち込んでゆく。

「モビルドールといえど、隙は出来るんだよ……」

爆発するセラフイムを見下ろすウイングゼロ……すると見覚えのある赤い機体が海面から姿を現した。

《やはり一筋縄ではいかないな》

「ルウエン……お前」

《俺達の邪魔をするなら、切り札を出すしかあるまい》

「なに？」

《翔真……お前が戻って来た理由は分かっている。お前は ヽレミングを破壊する為に戻って来たんだろ？》

「ご名答だ」

ヽレミング——それは、ザフトが切り札として建造していた巨大MS レミング。そのレミングがプレシアによって隠されていたことが発覚し、翔真と束はそれを確

認すべくこの世界に戻って来たが、レミングは既にルウエンによって強奪されていた。

「ルウエン……知ってるはずだ……レミングには　　！」

《ああ知ってるさ。レミングシステム……扱うにはあまりにも危険を伴う。だが俺は違う。レミングシステムもゼロシステムと同等のもの……》

「ルウエン！」

《悪いが計画は進んでいる。もはやエピオンも用済みだ……レミングの力、思いしるがいい》

ルウエンの通信が切れた途端に前方で浮遊していたエピオンがコントロールを失い海へ落ちそうになるが、翔真がとっさにウイングゼロでエピオンをキャッチする。

「遠隔操作によるものか……レミング……あれを使われたら　　！」

ウイングゼロはエピオンを抱えたままプリベンターの基地へ帰還するが、基地はサーペントの残骸があちらこちらに散らばり、格納庫にあったはずのジェミナス01高機動型ユニットが飛び去っていた。

「ジェミナス!? 一体誰が……」

《シー君シー君!!》

「東さん……どうかしたの？」

《ラグナリン共和国が演説してるよ!》

「……ルウエン」



## PHASE 006 「宣戦布告」

『人類は戦いを捨てきれず、醜い争いを続けている！しかし世界はその現実を目を反らし、兵器や兵士を封印すれば平和だという考えは間違っている！ならば一度、人類を肅正する義務が我々にはある。よってここに、ラグナリン共和国は全世界に宣戦布告する！』

ラグナリン共和国総帥の座に着いたルウエンは全世界に向けて宣戦布告を告げる。そして演説の次に映し出されたのはMSの映像。そこにはサーペントやトーラスはもちろん赤と青のMSメリクリウス・ヴァイエイトと巨大なMSミレミングが映し出された。

「ルウエン正気か！」

「奴はやる気だ……演説までするってことは本気だよ千冬さん」

「くっ……」

ルウエンの演説を千冬や翔真も見ていた。またあの大战のようなことが起こる……翔真はエピオンを整備しながらウイングゼロを見上げた。

「千冬さん。俺と束さんと奴等の戦力を潰します。千冬さんは政府などに連絡を」  
「待て綾崎！お前と束で行くと言うのか!? 考え直せ……ラグナリン共和国に

行けば貴様等は—— 『千冬さん。何も俺と束さんの二人だけだなんて言ってみせよ』何?」

「知ってるでしょ千冬さん。俺には嫁が複数いることを——」

「シー君！そろそろ行くよ〜！」

「分かってるよ束さん……」

翔真はウイングガンダムゼロカスタムに搭乗して、束はガンダムエピオンに搭乗する……二人はラグナリン共和国に向けて発進する。

時刻 P M 17時 ラグナリン共和国

---

「これでよしと……翼、こっちは済んだよ　！」

「すまないシャルロット……私も任務完了だ」

ラグナリン共和国にあるMS施設では翔真と束の他にもシャルロットと風鳴翼も来ていた。二人は翔真から基地を爆破するように頼んでいた。二人はトーラスをそれぞれ強奪する。

「翼！」

「爆破する！」

激しい怒号が響き施設全体が揺れる。翼のトールラスがビームカノンを放ち、格納されてあるサーペントを破壊する。

『侵入者か!?!』

『サーペントで追撃する!』

「甘いよ！」

サーペントがシャルロットの駆るトールラスに近づく。トールラスはビームサーベルを二刀流で構えて、迫るサーペントの武装とメインカメラを破壊する。

「シャルロット！このまま攻撃を続行だ！」

「うん……（でも妙だな……爆破してるはずなのに、追撃に来るMSが少なすぎる）」

シャルロットは追撃に来るMSの数に不信感を抱く。この規模の爆発なら大量な

追撃部隊が来るはずだが、現在の追撃部隊は15にも満たないくらいの数だ。

「防衛にしても、少なすぎる……まさか」

MS コンソールパネルを操作して放送しているニュースをつける……そこには巨大なレミングが日本に現れたとの報道がされていた。

「まずい！翔真や東さんに知らせなきゃ！」

シャルロットは翔真に暗号通信で知らせた後、サーペントを無力化して翼と共にラグナリン共和国から脱出する。一方連絡を受けた翔真と東は機体を日本に向けて加速していた。

《ルー君もなかなか考えたよね。ラグナリン共和国に東さん達が行く事を想定して日本に戦力を送り込んで、共和国を空にして囮にするなんてさ》

「見事にハマったが……だが、任務は遂行させる！」

## PHASE 007 「レミング」

「さあ始めようか……終わらない夜を」

ビルゴが20機、サーペントが20機……更にはメリクリウスとヴァイエイトがいる。レミングは東京に現れ、人々は避難シェルターに逃れるが逃げ遅れる人々が次々と現れる。

「古き人類はいらぬ……せめて、自らの手でその命を終わらせるがいい」

ルウエンはコンソールを操作。そしてレミングシステムが発動して、人々が一瞬止まる。やがて人々は近くにある鉄の棒などを手に争いを始めてしまう。

「そうだ……やはりプレシア・テストロツサは正しかったのかもしれない」

《んなわけないだろ》

「……やはり来たか……綾崎翔真」

人々を操るレミングの前に翔真のウイングガンダムゼロカスタムが現れる。同時

にウイングゼロを捉えたビルゴとサーペントが動き出す。

「シー君の邪魔はさせないよ！いくよエピオン！」

地下から束の操るガンダムエピオンが現れ、ビームソードを展開してビルゴやサーペントを斬る。SYSTEM EPYONの命令をはね除けながら、束は敵機を破壊してゆく。

「ルウェン……確かに人は愚かで、争いをやめない。けど……俺はまだ信じてる。人の可能性を！」

「何を言っている……あの戦いの後、兵器を捨てても人は争いをやめなかった！人が沢山死んだのに、奴等は何も変わらなかった！挙げ句には行き場のない兵士達に何もしなかった世界……ならば一度、肅正するしかない！」

「くっ！」

ラグナリン共和国で改修されたレミングはビームサーベルを展開してウイングゼロに攻撃する。更にメリクリウスとヴァイエイトがウイングゼロに向かう。

「また懐かしい機体を！」

メリクリウスはクラッシュシールドからビームサーベルを展開してヴァイエイトは後方支援に入り射撃。

「終わりだ……」

《やらせはしないぞルウェン！》

「白いエピオン!?……通信の声は織斑千冬か！」

ウイングゼロの前に白いエピオン……ガンダムエピオンパイが現れる。それを操るのは千冬で、ビームトライデントを振り回してヴァイエイトとメリクリウスの間に割って入る。

「やめるんだルウエン……この世界には私の他にも大切な者達がいる……お前  
だっているだろ！ ヽティアーユヽとヽ湊ヽが！」

「……二人の名を……出すな」

「千冬さん！」

レミングがマシンキャノンを放つ。ウイングゼロはウイングバインダーで弾を  
ガードしてツインバスターライフルを放つ。

「計画は進んでゆく！ その為には貴様等が邪魔だ！」

「……ルウエン。お前は優しいんだな……だがな……このままには出来ないんだ！  
」

コンソールパネルを操作。翔真はヽイノベーターヽの能力を解放すると、ゼロシス  
テムを使ってレミングの機器にハッキングする。

「!? ……な、なんだ!? レミングが！」

「悪いがレミングシステムは……解除させてもらった」

「っ！」

「行くぞゼロ。これが最後の戦いだ！」

## PHASE-008 「墜ちる翼」

「バカな…動け！動けレミング！」

「ターゲット…レミング。破壊する」

「くっ！」

「ルウエン…今はそれでいいかもしれない。だが、戦いが続けばまた俺達のような兵士が必要になってくる！」

「っ！」

「教えてくれルウエン。俺は後何人殺したらいい…俺はあと何回明日菜を失えばいいんだ…」

「なに…」

稼働を停止したレミング。そして翔真のウイングガンダムゼロカスタムはツインバスターライフルを放つ。しかし一発目はビルゴがガードして、ビルゴは消滅した

がレミングに傷はない。

「……！」

「くっ！」

二発目のツインバスターライフル。ビルゴの次はメリクリウスを防御に使い再びツインバスターライフルを防御。翔真のウイングゼロは連続発射によるダメージを受けて、装甲や腕などが破損する。

「——次は当てる。もう……悲しく惨めな戦いは繰り返させない！それが俺……いや、俺とウイングゼロに出来ることだ……！」

『もう一発撃てばもたないぞ……分かっているのか』

「その声……まさか！」

破損するウイングゼロを背後から支えるのはジェミナス01……声に聞き覚えはあったが翔真は照準を合わせる。

「ターゲット……レミング！」

再びツインバスターライフルを放つ。それも最大出力で放ち、ウイングゼロは次

第に耐えきれず大破してゆく。

一方でレミングシステムで操られていた人々はレミングとウイングゼロが戦う映像に釘付けだった。しかしこちらに依然として向かって来るサーペントに怯えていた……

「や、やだ！死にたくない！」

「また戦争が始まるってのかよ!？」

「もうおしまいだ……」

「おしまいなんかじゃない!!」

サーペントに怯える人々の中で叫ぶ二人の男女がいた。

「そうやって怯えて……何もしないんですか!!じゃないとまた争いが生まれてしまいます！」

「MSも兵器もない私達がすべきことは立ち向かうことなんです！ラグナリン共和国に弱いところを見せちゃダメなんです！」

≪獅童リオ≫と獅童リス≫は人々にそう言った。二人もまた翔真に自らから協力する形でこの世界で情報収集をしていた。そうした二人に渴を入られた人々は一瞬静まるもののサーペントに向かう。

「そうだ……せっかく平和になったんだ！もう戦争なんて沢山だ！」

「何がラグナリン共和国だ！」

「もう怯まないぞ俺達は！」

《な、なに!?!》

《市民が……》

「そうだよ！戦いなんて誰も求めてない！」

「誰もが平和を求めている……いい加減に気付け！」

シャルロットと翼のトーラスがそれぞれサーペントに体当たりする。サーペント

はそのまま倒れていき、市民から石などを投げられる。

「……俺は……」

大破したウイングゼロを見下げていたルウェンは夜空を見上げて涙を流す。やがて市民とガンダムの進撃により日本は守られた。ラグナリン共和国は全世界から非難され、数週間後に解体された。

PHASE 009 「ゼロが見せる未来」

これは翔真達がプリンベターと接触した日の夜……プリベントアジールにあるオフィスの一室に紺色のジャケットにタイトスカートの格好をした女性♀。唯依♀は仮面の男と向き合う。

『艦長……いや、今は長官か……』

「何故今更現れた……貴様には色々な罪状がある……理解しているのか」

『……状況は理解している……しかし、貴方にとって♀表で死んだ人間♀は何かと都合がいいはずだ』

「なるほど……事情は把握している訳か。貴様には色々聞くことがあるが今はそれどころではない。アレス……いや、今からお前は♀プリベントアジール♀だ。いいな？」

『……………』

「貴様の成すべきことをしろ。話はそれからだ」

『感謝する』

仮面の男<sup>♫</sup>プリベントー・ウオーターは静かに歩きだす。

「まさか生きていたとはな……マルス」

『……………』

戦いから1ヶ月経ったある日——完全修復されたウイングガンダムゼロ  
カスタムの傍らに翔真と仮面の男……かつての敵で仲間だったマルスは向き合う。  
物陰から束と千冬が心配してこちらを伺う。

『この俺の姿を見て笑うか？』

「……お前がそれを望むなら俺は笑ってやるさ」

『……………』

「プレシアに利用された挙げ句に切り捨てられた兵士……逆に同情するね」

『……………』

「マルス。俺は何度も間違っ、道を踏み外した……だがお前はまだやり直せる。戻れ……クリス達の元に」

『——っ……今更どうしろと？……俺は……あんなことをしたばかりに世界を……世界を混乱させてしまった。クリス達の元には……』

マルスは過去に自身が造った兵器が戦後にも使用されたことを知り、後悔していた……復讐に駆られた故の過ち。人の命を沢山奪った自分が今更戻れるはずがないとマルスはそう言った。

「……マルス。ゼロに乗れ」

『……なに？』

「ウイングゼロのкокピットシステム……ゼロならお前の今後の生き方を教えてくれる」

『………ゼロに』

「ああ。もし暴走した時は——俺が、お前を殺す」

翔真の提案にマルスはそれに従いウイングゼロへ乗り込む。翔真はもしもに備えてガンダムエピオンに乗り込む。

《《シー君本気なの!?!》》

「そんなに慌てなくて大丈夫だ束さん……今のアイツには導く必要があるんだ」

やがてマルスはウイングゼロを起動させる。翔真に言われた通りシミュレーターを一通りやっていく。シュミレーション上の相手はザクウォーリア——マルスは

迷うことなく攻撃してゆく。

「(次の相手は——なに……これは)」

ウイングゼロに近づく機影……それはマルスにも見覚えがある。何せ自身の愛機であったエクシエスの姿を忘れるはずもない。エクシエスの背後には翔真の駆るウイングゼロが現れる。

「なんだ……何を意味している……!?……ぐっ!!」

やがてコクピットが光りに包まれる——ウイングゼロとエクシエスの同時攻撃によりマルスの駆るウイングゼロは大破して爆発する。しかし実際にはダメージはないはずなのに、ダメージを受けた感覚をマルスは感じた。

「何が言いたいんだ……何が言いたいんだウイングゼロ!……はっ!!」

『アニキ』

「あゝあゝあゝあああああああ！！！ クリス！クリス！」

突如として現れるクリスの幻影にマルスは現実とシミュレーターの区別がつかなくなっていた。しかしエクシエスと翔真の駆るウイングゼロは消えて辺り一面真っ黒になる。

『アニキ……アタシ達は何時まで待ってる……だから帰って来いよな』

「(クリス……はあ……はあ……)」

—— 戦いばかりが全てじゃない。お前は俺みたいに間違えんな ——

「(綾崎翔真……)」

やがて全てを終了したマルスはコクピットから降りた。下には千冬がいた……

「大丈夫か……マルス」

『俺に構わないで……俺は……』

「言うな何も……人は過ちをしてしまう。やってしまったことは消えない。だが新しい生き方だって出来るんだ……マルス」

『……うう……』

千冬はマルスを抱き締めた。千冬は、まるで我が子をあやす子を宥める母親のような表情をしていた。

「これで……良かったんだよね？」

「ああ……さて、あともう少し頑張りますか」

翔真と束は千冬達を見届けた後、それぞれウイングゼロとエピオンに搭乗して出

撃  
す  
る。  
。

PHASE-「コードネームはホワイトウイング」

西暦——あの大战から数十年後。人々は武器を捨てて、新しい希望を求めて宇宙へと出た。そして宇宙へ移った人々は火星へと渡り、火星に新たな国家を設立した。そして火星圏統一国家初代首相に選ばれたのは……

「皆さん、初めまして。私は高町なのは。この度火星圏統一国家の代表に選ばれたことを誇りに思います」

高町なのは……翔真の妻であった彼女はコールドスリープから目覚め、火星圏統一国家の代表として表舞台にたった。しかし、地球側はいづれ火星圏による反乱が起これると考えて、次第に火星圏統一国家を敵視するようになった。

「翔真君……私を殺しに来てくれたんだね？……嬉しいよ」

「なのは……何故だ。何故君がこんな」

「翔真君。私はね、弱い人の力になりたい……その為には力を振るうの」

青いパイロットスーツに身を包んだ翔真——なのはは悲しい表情を浮かべながら長年の相棒であるレイジングハートを構えた。時は遡りルウェン率いるラグナリン共和国壊滅後、翔真なのは、フェイトと共にコールドスリープに入った。その間束達は世界を建て直し、表舞台から姿を消した……そして翔真はこの火星へとコールドスリープ装置ごと運ばれ、ある人物によって目覚めた。

今火星圏は内部紛争が起きていた。MS——マーズスーツ——という人型機動兵器で戦いが勃発していた。なのはは反乱分子と戦う為にウイングガンダムゼロカスタムに似た機体……ヰ白雪姫ヰへ歩きだす。

「今ここで私を射てば、またあの時みたいになるよ？」

「そうならない道を取ることも出来る。なのは……何を前が変えたかは知らない……けど……」

「私は変わってないよ何も。ただね、1つ分かったことはある」

「……………」

「人は変わらない。戦いを忘れても、いづれ人はまた争う」

「……………」

「だからこそ変えなくちゃいけないの」

「なのは……………」

「なら翔真君は言い切れる？二度とこんな世界にはしないと…………二度と戦いのない世界にはしないと」

「でも…………俺達は戦わない道だって選べる。たとえそんな世界でも、変わらない明日なんて俺はやだね」

「ふふっ…………さすが私の旦那様だね。最高のイノベーター…………翔真君」

「なのは…………愛してる」

「翔真君…………『なのはママ！翔真パパ！』…………久しぶりだね、ヴィヴィオ」

二人の間に割って入る者…………それは翔真となのは達の娘ヴィヴィオだ。すっかり

大人になった彼女は母であるなのはに拳銃を構える。

「なのはママ……どうして？……これじゃあ……東さん達の努力が無駄になっちゃ  
うよ!!」

「ごめんねヴィヴィオ。私はもう、ヴィヴィオが知るなのはママじゃないんだよ？  
」

「ヴィヴィオ、すまない……これ以上お前を悲しませない……だから」  
「来なよ翔真君。さあ始めようか……私達の戦いを……」

翔真はウイングガンダムゼロへ……なのはは白雪姫♡スノーホワイト♡に乗り込  
み、二人は宇宙へと消える。



# オリ主が再び IS 世界でいろいろと頑 張る話だけど・・・「本編完結」

---

著者 どこかのシャルロット党

発行日 2021年1月22日

ハーメルン -SS・小説投稿サイト-

<https://syosetu.org/novel/65060/>

本書の内容を無許可で転載・複写・複製することは、禁じられております。